今中 亘 オーラル・ヒストリー

広島大学文書館　オーラル・ヒストリー叢書　第2集

（広島大学75年史編纂事業成果報告書）

令和5年2月

広島大学文書館・75年史編纂室

は　じ　め　に

米寿の88歳が目前である。年相応に、歩んできた道を振り返ることが多くなった。そんな折、母校・広島大の文書館から聴き書き「オーラル・ヒストリー」の申し入れがあった。自分史らしきものをまとめてみようかと思っていたので、ありがたく応諾した。

終戦による旧満州からの引き揚げ者である。中途編入の狩小川小学校（安佐北区）から高陽中学（同）、皆実高校（南区）、広島大の文学部・仏文学科を経て中国新聞社に就職。ほぼ半世紀を新聞人として生きた。今も特別顧問として、かかわっている。

悪名が高い暴力団の広島拳銃抗争事件に巡り合い、キャンペーン報道で恨みを買って自宅や社長宅が襲われた。広島市政・県政担当の後、東京へ出て総理官邸や省庁を取材。そしてニューヨーク特派員の機会も与えられた。国連の第１回軍縮特別総会、地方自治、教育、マフィア取材も試みた。たぐいまれな米国スリーマイル島での原発事故にも遭遇して現地に駆け付けた。

就職難の中、辛うじて地元の中国新聞に採用されたのに多くの部署を経験し、最後に社長のポストにも就けたのは多分に「運」もあるだろう。そのことをきちんとわきまえ、謙虚なスタンスを心掛けたつもりである。

「編集一筋」というのは、新聞人の生きざまとしては誇らしいものだと思う。しかし総務・労務のほか広告・販売・事業なども経験して良かったと思う。読者の評価基準が日々の紙面に重きが置かれていることは疑いの余地も無いが、トータルとして販売や事業の在り方なども深くかかっていることを思い知らされた。

聞き書きの中で何回も、そして締めくくりでも引用させてもらった「新聞は　ひるまず　おごらず　かたよらず」の標語を座標軸にして、後輩たちがマスコミの王道を歩んで欲しいと切に願っている。多メディア時代の中で新聞が生き残るためにも。

令和４（2022）年10月１日

今　中　　亘

目　　次

はじめに…… i
今中亘略歴…… iv
凡　　例…… v
掲載図版出典一覧…… v

第１回　生い立ち～広島大学卒業 …… 1
・生い立ち～満州での生活
・敗戦、収容所での生活
・帰国、広島への引き揚げ
・狩留家(狩小川村)での生活
・高陽中学校時代
・皆実高校への進学
・狩留家の生活環境
・皆実高校時代
・中国新聞社の採用試験の思い出
・広島大学文学部での学生生活
・酒の思い出(社会部記者時代)

第２回　入社～暴力団抗争の取材 …… 20
・社会部配属、警察回りの日々
・痛恨のベタ記事
・特ダネを取材するまで
・暴力団の第２次広島抗争
・暴力団事務所の取材体験
・第２次広島抗争時の取材
・市民に支持された暴力団取材
・菊池寛賞の受賞

第３回　広島市政担当～報道部デスク …… 39
・映画「仁義なき戦い」を見て
・映画の登場人物との接点
・編集局報道部への異動、広島市政を担当
・大物市会議員、浜井市長、山田市長の思い出
・“ゴロツキ”新聞について
・東京支社の編集部勤務
・編集局報道部での仕事
・取材記録の残し方、記事の作り方
・連載企画「ヒロシマ二十年」について
・広島カープの初優勝、新球場建設たる募金とのかかわり

第４回　ニューヨーク支局 …… 56
・ニューヨーク支局への赴任
・マフィアの取材
・ニューヨーク支局の勤務環境
・地方自治の実態を取材
・在米被爆者健診団の取材
・アキバ・プロジェクトとのかかわり
・第１回国連軍縮特別総会の取材
・スリーマイル島原発事故の取材
・本社とのやりとり
・連載記事「あすの国際人」への反応
・ニューヨークの治安
・文化の違い、交通事故の体験

第５回　報道部長～福山支社長……73
・ニューヨークから帰国、第１整理部長に就任
・整理部の仕事
・ニュースの価値判断
・広告の取り扱い
・報道部長に就任、暴力団追放キャンペーン
・「ヒロシマ40年」の新聞協会賞受賞
・広島県政、広島市政について
・昭和天皇崩御時の報道
・福山支社長へ赴任、中国経済面の創設
・部落解放同盟広島県連との関係について

第６回　編集局長～総務局長……87
・歴史認識の問題と向き合う
・編集局長の業務（１）
・連載記事「BC級戦犯」の改ざん問題
・被爆50年の特別企画について（１）
・新聞協会賞の選考方法
・被爆50年の特別企画について（２）
・編集局長の業務（２）
・総務局長時代～人事への配慮
・社員の待遇改善

第７回　社長時代……102
・社長就任の経緯
・山本会長との役割分担
・「まるごと郷土紙」の推進
・３本社体制の導入
・中国新聞ちゅーピーまつりの開始
・ちゅーピーパークの開設
・苦境に立つ新聞業界
・朝日新聞の受託印刷の開始、販売の正常化

第８回　社長退任～退任後の仕事……117
・報道における社長の役割
・行政と社長の関係
・財界との付き合い
・広島大学経営協議会とのかかわり
・後任社長選任の経緯
・社長退任後の仕事
・新聞の報道、経営で大切なこと

あ と が き……129

今中　亘（いまなか　わたる）略歴

昭和11(1936)年１月	旧満州奉天市にて父俊一、母チエの四男として生まれる。
昭和17年４月	春日小学校（奉天市）入学
昭和21年７月	敗戦で広島へ引き揚げ。狩小川小学校へ４年生として転入。
昭和24年４月	高陽中学校に入学。
昭和27年４月	広島県立皆実高等学校に入学。
昭和30年４月	広島大学文学部文学科フランス文学専攻科に入学。
昭和34年３月	中国新聞社入社
昭和48年２月	中国新聞社編集局報道部次長
昭和51年８月	中国新聞社東京支社編集部次長
昭和52年３月	中国新聞社編集局編集委員ニューヨーク支局長
昭和55年３月	中国新聞社編集局編集委員（部長・総合デスク担当）
昭和57年３月	中国新聞社編集局第一整理部長
昭和59年３月	中国新聞社編集局報道部長
昭和61年３月	中国新聞社編集局次長兼報道部長
平成２(1990)年２月	中国新聞社福山支社長
平成３年１月	中国新聞社編集局長
平成４年３月	中国新聞社取締役
平成９年３月	中国新聞社常務取締役
平成12年３月	中国新聞社代表取締役社長
平成18年３月	代表取締役社長退任、顧問就任
平成18年９月	特別顧問　～現在に至る。

審議会委員等（正副委員長・正副会長職のみ）

放射線影響研究所・被爆二世ゲノム配列解析に関する外部諮問委員会副委員長（平成３～４年）、ヒロシマ平和メディアセンター諮問委員会座長（平成19～21年）、広島市行財政改革懇話会副会長（平成９～16年）、広島市総合計画審議会副会長（平成19～21年）、広島平和記念資料館展示整備等基本計画検討委員会委員長（平成20～26年）、NPOひろしま骨髄バンク副会長・会長（平成11～16年）、広島市立大学運営協議会会長（平成19～25年）、日本女性会議2007ひろしま大会実行委員長（平成17～20年）、中国経済連合会・瀬戸内海委員会副委員長（平成12～19年）、中国経済連合会地域づくり委員会副委員長（平成19～22年）、広島県書美術振興会会長（平成12～18年）、全国都道府県対抗男子駅伝大会組織委員会副会長（平成13～18年）、広島県バスケットボール協会会長（平成16～21年）

凡　　例

1．本報告書は、広島大学文書館（以下、文書館と略）および広島大学75年史編纂室（以下、75年史編纂室と略）が、令和２年11月18日から令和３年８月20日までに共同で合計８回行ったインタビュー記録をもとに作成したものである。

2．本報告書に収録したインタビュー記録の中には、国籍・職業・身体・性別等による差別的表現・記述や、プライバシーを侵害する可能性のある記述がある。しかし、歴史的事実を正確に記録し、かつ科学的な歴史研究を推進することによって、基本的人権の擁護を図ることを目的として収録した。本報告書の利用に当たっては、この趣旨を理解された上で調査・研究に役立てることをお願いしたい。

3．本報告書の作成に至る作業過程は、以下の通りである。

（1）インタビューにあたってはICレコーダーによる録音をおこなった。

（2）上記の録音物をそのまま文章化し、それを75年史編纂室がチェックして原稿（一次テキスト）を作成した。

（3）上記の一次テキストを今中亘氏が校訂した。校訂に当たっては、今中氏本人が、一次テキストのデータをパソコンで直接編集し、公開用原稿（二次テキスト）を作成した。

（4）上記の二次テキストを文書館および75年史編纂室が校訂した。校訂にあたっては、誤字・脱字の訂正、表記のゆらぎの統一、常用漢字への字体の統一を行った。あわせて疑義のある部分は、今中氏に直接確認した上で修正を行った。

（5）こうして完成した二次テキストを本報告書の原稿とした。

（6）原稿の作成および校訂にあたっては、『記者ハンドブック第14版』に準拠した。ただし、歴史的な用語や表記については、証言の史料的価値を尊重し画一的な修正や表記の統一を行わなかった。

4．インタビューと本報告書の作成は石田雅春・平下義記が担当し、原稿の校訂作業は坂田千尋他が担当した。また、録音データの文字起こしはふみ工房がおこなった。

掲載図版出典一覧

No.	出典
1	今中亘氏提供
2	同上
3	同上
4	同上
5	中国新聞社所蔵
6	同上
7	同上
8	同上
9	同上
10	同上

No.	出典
11	中国新聞社所蔵
12	同上
13	同上
14	同上
15	同上
16	今中亘氏提供
17	同上

第１回
生い立ち～広島大学卒業

写真１　小学校入学時の記念家族写真
（昭和17年、旧満州奉天市）
前列左から２人目が今中氏本人

生い立ち～満州での生活

○石田　それでは質問要項に沿ってインタビューを始めさせていただきます。

旧満州国・奉天市の出身と伺っていますが、生い立ちから日本への引き揚げまでの経緯について、差し支えのない範囲でお話しいただければと思います。

○今中　生まれたのは奉天、現在の中国遼寧省・瀋陽（しんよう）市です。父の俊一は安佐北区狩留家町の農家の生まれ。長男ですが、継母との折り合いがつかず、母チエと兄、姉の２人を連れて安佐南区の長束に転居しました。ここで、かつての軍隊仲間に、ひょっこり出会ったということです。お互い、うだつの上がらない日々を愚痴り合う中で「満州へでも渡って一から出直そうや」と意気投合したようです。

結局、相棒は家族の反対もあって断念したのに、父は決行しました。一家４人で渡満したのが昭和７（1932）年、くしくも満州建国の年に当たります。

父は奉天にあった満鉄（南満州鉄道会社）の関連企業に職を得ました。昭和11（1936）年１月20日、奉天市・加茂町で生まれた僕と、次兄（1934年３月生まれ）は中心街にあった春日小学校で学びました。平穏な日々でした。

ところが、昭和20（1945）年８月、４年生の夏に終戦（敗戦）になり、生活は一変しました。日ソ不可侵条約を一方的に破棄して進駐したソ連軍と、それに呼応した八路（パーロ）軍や満人らの略奪に遭いました。

八路とは中国国民革命軍第８路軍の略称だそうです。「満人」というのは現地人のことで、呼称なのか蔑称なのか、よく分かりません。彼らの略奪に遭い、命からがら着の身着のままで収容所へ避難しました。荒っぽい手口は略奪と言うほかありませんが、満人たちからすれば、侵略で奪われていた物を取り返したということになるのでしょうか。

○石田　では、ここで１回切って、平下君から質問があれば。

○平下　春日というと、おそらく奉天の中心部ですよね。

○今中　はい、奉天市のど真ん中です。

○平下　ヤマトホテルとか。

○今中　そうです、ヤマトホテルはすぐそばです。実は昨年（2019年）夏に奉天を訪ねましたが、今もそのままの姿で、市街地のど真ん中にありました。

○平下　ご自宅もこの中心街にあったのですか。

○今中　ええ。幹線道路の、浪速通りの裏筋にありました。ヤマトホテルから徒歩で10分ほどです。やはり満鉄の底力だったのでしょう。こんな市街地に宿舎を建てていたのだから。

○平下　お父さんは、農業をするために行かれたというのではなかったんですね。

○今中　農家の出身ですが、満蒙開拓団とは別行動です。満鉄には、関連会社がいろいろあると聞き及んでいたようです。当時の日本関東軍の糧沫（りょうまつ）部門も担っていたらしく、父は終戦時まで、その糧秣廠に納める穀物の農場長のポストに就いていました。

今でも思い出しますが、夕日に照らされて20数台の馬車が倉庫に戻って来る。地平線の見える大農場で栽培した南京豆（ピーナツ）やジャガイモ、コウリャン（とうもろこしの一種）などを満載して。あの光景は今も脳裏に焼き付いています。

○**平下**　それ自体が、満鉄のグループ企業の１つなのですか。

○**今中**　はい。すそ野の関連企業です。

○**石田**　渡満して数年で結構、高い地位に。

○**今中**　農場長になるまでに曲折はあったが、労を厭（いと）わずに、一生懸命に働いた。満人との人間関係も大切にして。父の得手だったのかなと思います。

○**平下**　言葉は。

○**今中**　満人にも、日本語が通じる時代です。略奪に遭った後、農場で働いていた満人たちが入れ代わり立ち代わり収容所まで訪ねて来て、差し入れをしてくれました。

○**石田**　そうなんですか。お父さんは出世されていて、終戦までは生活は豊かな方だったんですね。

○**今中**　満州は完全に日本の統治下にあったから、満人は別人格みたいなものです。彼らを手足のように使って。それと、今で言う家政婦ですかね。地位の高い人は、満人女性を家政婦として使っていました。日本人が満州生活を“謳歌”していた時代です。戦争があんな形で終わらなかったら、「満州へ渡って生き返った」と思った人は少なくなかったでしょうね。

○**石田**　今中さんのお宅にも、お手伝いさんはいたんですか。

○**今中**　いいえ。わが家には、お手伝いなどいません。父は、満人をそんなふうに扱ってはいけない、と考えていたようです。

○**石田**　では、ご家族だけで社宅に。

○**今中**　はい。終戦まで、おおむね社宅住まいでした。

○**平下**　小学校の状況を教えていただけますか。同級生の親たちも、やはり満鉄関連の会社に。

○**今中**　職種はいろいろのようでした。あの辺りはすべて日本名が付けられていて、春日町、加茂町、浪速通りなど。終戦時には、満州に日本人が80万人近くいたとされています。市街地では、生活も日本様式でしたね。満語が分からないから生活できない、ということは全く無かった。韓国のソウルから引き揚げた方に聞きましたが、あそこにも「日本人社会」みたいなところがあったとか。

○**平下**　食生活はどのような感じでしたか。

○**今中**　普通にお米を食べ、肉も豚や鶏肉などをそれなりに食べて。コウリャンという雑穀を食べたのは、収容所に入ってからです。それまでは普通に日本食を。住まいも、まあまあだったと思います。

○**石田**　小学生として、戦局が逼迫（ひっぱく）しているという実感は無かったですか。

○**今中**　いや、そういうところまで、思いは至らなかった。祖国・日本では戦況が悪化していたけど、満州はソ連（ソビエト連邦）との絡みで、適度な間隔が保たれていました。関東軍が恐れられていたという側面もあったのでしょうか。日常生活で満人を特に意識し、危険を感じたというような覚えは全くありません。

○**平下**　本土だと昭和15（1940）年ぐらいから食糧供給が相当に窮迫して、食べる量がどんどん減っていきますよね。

○**今中**　ええ、日本ではね。長男の家督制だったから、次男以下は本家から出なければならない。満州へ渡った人を見ると、ほとんどが家を継げない次男以下です。しかも昭和18（1943）年頃は戦時恐慌で、生活は困窮していた。広島県内でも吉田（安芸高田市）などから開拓団が出ています。日本にいるより向こうの方がいいと。満州へ行ったら土地もふんだんにあり、働けば働いた分だけ身に付くといった風評を信じて、渡満したのが満蒙開拓団だったのかなと思います。

○**平下**　友だちとは、普段どのようなことをして

いましたか。

○**今中**　学校で、ですか。

○**平下**　はい。

○**今中**　日本人学校だから、ごく普通のクラスメート。その頃、日本で同世代が楽しんでいたようなものは少なかったと思います。「たかあしおどり」は正月の遊びには欠かせませんでした。

○**石田**　どういう字を書くんですか。

○**今中**「高足踊り」です。日本の竹馬に似た遊びでした。つま先を乗せる板が地上から0.5～１メートル。スリル満点だったからでしょう。日本の親類から送られて来たのか、正月に、コマを回したり、たこ揚げをする者もおりましたね。

敗戦、収容所での生活

○**石田**　少し話しにくいことかもしれませんが、昭和20（1945）年８月15日の終戦は、どのタイミングで知られたんですか。

○**今中**　正確ではありませんが、すぐに知ったように思います。

○**石田**　玉音放送は聞いていなかったんですね。

○**今中**　ええ、学校でも。聞いていたら、すぐに下校したと思います。「学校で知らされて、急いで下校したような覚えは無いなあ」と、２つ年上の兄も言っていました。何せ小学生ですから、敗戦=終戦そのものもピンとこない。ソ連軍が戦車で進攻し、まさか略奪するとは思わなかった。満人も手なずけていると思い込んでいたから、彼らまでが、仕えていた元の主人の家を襲うなど夢にも思わなかったでしょう。

　満人たちは時の流れを素早く読み、「侵略」で奪われた物を取り返すのは当然だ、ということではなかったのでしょうか。略奪の後に社宅へ戻ったら、家の中は柱と、ふすまだけ。根こそぎ持ち去られたという感じでした。

○**石田**　では、収容所に入った時は、もう無一文だったんですか。

○**今中**　はい。父も母も兄弟も、みんなリュックサック１つの身になりました。

○**石田**　なるほど。続けて収容所での生活について教えていただけますか。

○**今中**　わが家が入った仮設の収容所は、満鉄関連の倉庫だったと思います。粗末な造りで、ここに、ぎゅうぎゅう詰めになりました。１区画に大体２～３所帯。間仕切りのカーテンのような物も無かったから、隣は丸見えです。

　とにかく、日本へ帰るまでの辛抱ということで、子どもたちが泣くと、「我慢して。もうすぐ引き揚げ船が出るようになるから」と親たちはなだめていました。

○**石田**　今中さん自身は、もうその頃の記憶はかなり薄れているんですか。

○**今中**　70数年も前の事ですからね。収容所に入った後、子どもたちは、することがない。学校も無くなってしまったのだから。満鉄公舎の近くには大病院などがあり、ソ連の進駐軍が取り残していった物を拾い集めたりして、日々を過ごしました。

○**石田**　では収容所内で、子どもたちに教育をするということは無かったんですね。

○**今中**　はい。それはもう、仕方がないですよね。日本に帰還できるまで、何としても生き延びようということだけですから。

○**石田**　収容所に避難したとおっしゃいましたが、ソ連軍や八路軍に指示・命令をされたのではなくて、自主的に移った形なんですか。

○**今中**　いや、それは親にも確かめていませんが、中国側が収容所を用意したとは聞いていません。満鉄は大きな組織だったから、幹部だった人たちが、何かと世話をしたのではないでしょうか。

○**石田**　メモには、食事は１日２食、主食はコウリャンの雑炊（ぞうすい）と書かれています。

○**今中**　はい。本当に、来る日も来る日もでした。

○**石田**　食事が米からコウリャンに変わって、最初は食べれなかったのではないですか。

○**今中**　人間、飢えたら何でも食べるということ

ですが、そうとばかりは言えない。野菜もよく洗わないから青虫が付いていて、汁の中に入っているんですよ。そうするともう、潔癖症の人やお年寄りは食欲を無くして、全く口にしない。食べないと次の配膳の時にもらえないから、こっそり埋めたり、腹がすいた人に食べてもらったり、ということだったようです。

○**平下**　食事の準備自体は、収容所が自主的にやったものだったとすれば、食糧の供給も日本人同士でやっていたんですか。

○**今中**　いや、それは承知していません。コウリャンにせよ何にせよ、それを誰が手配していたかも。親の姿や周りを見ながら、見様見まねで生き延びたという感じです。

帰国、広島への引き揚げ

○**石田**　いよいよ帰還船が出始めて、日本へ帰ることになったと思いますが、まず出航地の葫蘆島（ころとう）へ向かったのですか。

○**今中**　はい。わが家は、終戦１年後だから順番としては早かった方だと思います。父から「乗船の順番が来た。リュックサック１つにまとめて」と言われ、奉天駅に向かいました。駅にたどり着き、石炭輸送の無蓋（むがい）貨物列車に乗り換えました。１昼夜ぐらいかかったのかなあ。渤海湾（ぼっかいわん）に面した葫蘆島に着きました。帰還船の専用港になっていました。船名は覚えていません。興安丸は著名ですが、そうだったかどうかも。日本語の船名が付いていたことは確かです。

○**石田**　メモには「びっしり詰め込められて」と書いてありますが、そういった状況だったのですか。

○**今中**　ええ、ぎゅうぎゅう詰めでした。

○**石田**　赤痢とか疫病は、はやっていませんでしたか。

○**今中**　疫病の患者は、いたかもしれません。途中、船内で亡くなった人もいましたね。そうなると海に“ポイ捨て”です。「デッキへ出るな」と船内にお触れが回る。母が「誰かが死なれて、海に死体を投げ捨てるんじゃろう」と言ったのを覚えています。

○**石田**　家族で、ひとまとまりになって船に乗り込んだんですね。

○**今中**　はい。家族単位、地区単位です。収容所別に葫蘆島まで出て、順番に乗船したのだと思います。

○**石田**　帰国されたのは昭和21（1946）年の７月になるんですか。

○**今中**　７月でした。

○**石田**　暑い時期に船に乗られたんですね。

○**今中**　そうですが、猛暑と言うほどではありません。奉天の冬は厳しく、極寒でしたけど、夏の暑さは、それほどでも無かった。

○**石田**　日本に着いたのは佐世保なんですか。

○**今中**　はい。佐世保港です。

○**石田**　舞鶴ではなかったんですね。

○**今中**　ええ。帰還船は舞鶴か佐世保港に着岸しました。わが家は佐世保港です。国鉄（日本国有鉄道、現在のJR）の列車で博多まで出て、そこで乗り換えて、やっと広島駅にたどり着きました。

○**石田**　広島は、その時が初めてですね。

○**今中**　奉天で生まれ育ったから、もちろんそうです。佐世保に着いた時、兄が「ああ、これが日本か」と大声を上げました。「国破れて山河あり」という句がありますが、眼前に緑の九州山脈がそびえていて感無量でした。あちらは、地平線の見える満州平野だったから。

手配の列車が着くまで半日ほど待ちました。その時、地元の方の厚情なのか、公共のサービスだったのか、のりむすびが配られました。梅干しが入っていて。１年近くもコウリャン飯ばかりだったから、あの時の味覚は忘れません。

○**石田**　日本へ帰ってきた時の、両親の様子はいかがでしたか。

○**今中**　まだ、そんな年でもなかったし。40代の後半でしたかね。意外と、くたびれた様子は無

かったです。気が張り詰めていたのかもしれません。

メモでも触れていますが、幼児が３人もいる家庭では、全員を連れ帰るのは無理ということで、満人に子どもを預けたりしました。金銭の授受をした人もいたから、「子どもを売った」と非難されました。親としては、忍びなかったでしょうね。

「残留孤児」の身となり、ほぼ半世紀後に広島へ一時帰国した婦人に会ったことがあります。あの頃を思い浮かべて、切なかったです。必死に連れ帰ってくれた、亡き両親に思いを馳せました。

○**平下**　広島への原爆投下の情報は、あちらでは伝わっていたのですか。

○**今中**　原爆ではなくて、特殊爆弾と言っていたと思います。特殊爆弾が広島と長崎に投下された、と聞かされた覚えがあります。それが広島市域だったのか、郷里の安佐郡辺りなのかは全く分からなかった。両親は「帰国したら真っ先に、里の狩留家へ」と言っていました。

○**石田**　今、中国残留孤児の話が出ましたが、今中さんの身の回りでも、そういう話はあったんですか。

○**今中**　先ほども申しましたが、幼児が３人いたら、１人を背負い、２人を両手につなぐのが精いっぱいですよね。収容所から奉天駅までも相当な道のりです。幼児３人を連れたら、長時間の歩行はまず無理です。満人に「子どもを譲ってくれないか」と持ち掛けられ、「かわいがって育ててくれるなら」ということで引き渡したのが実情だったのでは。

○**平下**　広島駅で降りた時は、どのような感想を持ちましたか。

○**今中**　幼いながらも、人生の再出発のような思いに駆られました。「市街地へは入らん方がいい」という駅員の忠告もあって、市中へは出ずに、芸備線に乗り換えて狩留家へ直行しました。だからその時は、中心街の原爆廃墟は目にしていません。

あちら（奉天）では結構、生活にゆとりがありました。長兄と姉は終戦時には、奉天の親元から遠く離れて撫順（ぶじゅん）と旅順（りょじゅん）にいました。撫順工業専門学校と旅順高等師範学校で、それぞれ寄宿舎生活をしていました。

終戦と同時に音信不通になりました。生死の確認も取れず、奉天の収容所内では、周りの人たちから「もうあきらめたら」と言われたようです。両親と一緒にいた僕たち兄弟は、「大兄ちゃん、姉ちゃんとは、もう会えなくなった」と、泣きじゃくったそうです。

けれども２～３年後に、２人が引き揚げて来ました。兄はシベリア抑留の身となり、姉は旅順の医療施設の看護助手に。幸運とは言い難いですが、２人とも健康を損ねたため、お払い箱になったのです。兄は結核です。帰国してすぐ、当時の広島赤十字病院に入院しました。極寒のツンドラ（凍原）で強制労働を強いられ、病気で役に立たなくなった。死んだらツンドラに埋められますが、生きているうちは、さすがに殺せなかったのでしょう。厄介払いで送還されたのです。姉も、病気でお払い箱になったとのことでした。

○**石田**　終戦後に、異郷で離れ離れになっていた家族が、全員帰国できたのは珍しいのではないですか。

○**今中**　ええ、奇跡とは言えないまでも、まれな事だと家族は受け止めました。一家はやっと狩留家にたどり着けたものの、父がいったんは実家を飛び出した身だから、「厄介者が帰って来た」という感じです。実家もそれほど大きくはなかった。終戦なのだから仕方がないと、父の継母はひと間を明けてくれました。８畳１部屋に４人。兄と姉が帰って来てからは６人です。食事も寝るのもその１部屋で。

父は、あきらめかけていた長男と娘が帰って来て、元気が出たのでしょう。裏山の国有林の払い下げを受けて材木を切り出し、近隣の大工さんに頼んで家を建てました。実家から１キロメートル近くも離れた谷筋だから、まだ電線も敷かれてい

なかった。着工と同時に中国配電（現：中国電力）に申し込んだようですが、家が早く完成。半年近くも、石油ランプに頼る生活を強いられました。勉強もランプの明かりの下で。次兄は「蛍雪の時代だったな」などと言っていました。

狩留家（狩小川村）での生活

○**石田**　話を先に進めていこうと思います。今、「蛍雪の時代」とおっしゃいましたが、勉強はされた方ですか。

○**今中**　いや、石油ランプの明かりを蛍の光に例えたのでしょう。

○**平下**　帰国して、復学はどうなったのでしょうか。

○**今中**　学業は大切な事なので、両親は地区の世話役に同行してもらい、狩小川小学校を訪ねました。終戦による引き揚げ者だから、受け入れざるを得ない。しかし、満州・奉天での１年間のブランクがあるため、「すんなり進級させるわけにはいかない」ということになりました。確かに１年間、丸ごとブランクです。両親は、終戦のせいなので、兄は中学１年に、僕は小学５年へと、すんなり上げてもらえると思い込んでいたようです。文部省（現：文部科学省）の指針だったのかもしれませんが、何らかの基準はあったのでしょう。結局は１学年のダブりです。大学を卒業するまで、１歳年長で通すことになりました。

○**石田**　内地の小学校は、奉天の頃とは随分違っていた感じですか。

○**今中**　そうですね。奉天の方が教室の設備なども整っていました。

○**石田**　日本の方が粗末な感じだったのですか。

○**今中**　はい。狩小川小では、冬は教室にすきま風が吹き込む。防寒着なども、ろくに無い時代です。着膨れをして、通学したのを覚えています。

○**石田**　１学年下になったということで、同級生に差別を感じたり、わだかまりとかは無かったですか。

○**今中**　ええ、意識したことはありますが、「お

写真２　石田明先生を囲んで狩小川小学校５年クラスメートとの記念写真
（昭和22年、学校裏の三篠川岸辺）
２列目右端が今中氏本人

まえは落第生」などと、からかわれたことはありません。先生が、きちんと説明してくれました。「満州からの引き揚げ者。向こうで１年間勉強ができなかったから」と。この１年遅れのギャップは大学を出るまで続きました。浪人もしていないのに「空白の１年」はずっと繰り越され、大卒も23歳です。通常だと、22歳ですけどね。

○**石田**　でも、日本に帰ってからも、敗戦なので教科書がない、ノートもない、鉛筆もない、といった時代で勉強されたと思います。勉強自体は、格差があって難しかったとかは無かったですか。

○**今中**　事実関係は分かりませんが、僕の感じでは、向こうの方がハイレベルだったように思います。

○**石田**　そうですか。

○**今中**　満鉄は巨大な組織です。岸信介・元首相は、かつて満州国総務庁次長を務めており、何かにつけてレベルは高かったという感じです。

○**石田**　ところで、狩小川小学校とか高陽中学校というと、被爆教師で有名な石田明さんが先生をされていたと思いますが。

○**今中**　はい、そうです。石田明さんは同じ狩留家の出身。実は、僕の妻は石田明の嫁の妹です。

○**石田**　そうですか。

○**今中**　石田先生は終戦で復員して代用教員にな

り、大学で学び直して正規の教員になりました。狩小川小学校の後、高陽中学に赴任。担任ではなかったけど、同じ狩留家なので目をかけてくれました。僕は中国新聞の記者になり、彼が「全国原爆被爆教職員の会」の会長として反核・平和問題にも深くかかわったため、取材などで接触する機会は多かった。石田先生も「わしの教え子じゃ。ああやって中国新聞で頑張っとる」とか言って。後に石田先生の仲介で、妻と結婚しました。

○**石田**　世間って、すごく狭いですね。

○**今中**　そうですね。

○**石田**　個人的な話で恐縮なんですが、私の祖父の妹が狩留家に嫁いでいるんですよ。祖母が娘を連れて、「いとこがいるから」ということでよく遊びに行くんですね。くっついて、三篠川でよく釣りをしました。狩留家は、すごく親近感のある場所なんです。

○**今中**　僕も小さい頃は、学校から帰ったら農作業を手伝い、ノルマみたいなものをちゃんと果たして川へ出掛けました。「そんなに急いでやるんなら、手伝ってくれんでもええ」と、母から叱られていました。とにかく遊びたい一心です。２時間ぐらい手伝ったら川へまっしぐら。

　あの頃は水量も豊富で、ハヤなんかも捕り放題。夕飯のおかずにもなる。ハヤを炭火で焼き、藁（わら）ぶきの屋根に差し込んで天日干しにすると、カルシウムの豊富な食材になる。「おいしい」と、かじったのが懐かしいです。

○**石田**　農作業の手伝いは、どんなことをされていたんですか。

○**今中**　僕は末っ子だから、兄たちとは少し違いました。あの頃は耕運機も稲刈り機も無くて、ほとんど手作業です。僕は、刈り取った稲穂を束ねる役目。あの頃の子どもたちは、当たり前のこととして農作業を手伝っていました。

○**平下**　炭焼きは冬場ですか。

○**今中**　大体冬場の仕事ですね。

○**平下**　どのようにして現金化するのですか。

○**今中**　山の中腹に作った炭窯（すみがま）で焼き、背負って持ち帰り、農事集会所（農協の前身）まで運んで買い取ってもらいます。

○**平下**　では、街まで持って出なくても地元で。

○**今中**　そう、地元でね。街に持って出る手段も無かったから。いい炭だからと遠路、手車を引いて買いに来る人もいました。

○**石田**　狩留家は農村部なので、広島市内から買い出しに来る人も多かったんですか。

○**今中**　どうかなあ。米は配給制で統制下にあったから、やみ米としても流通したようです。

○**石田**　やみ米はどこで売っていたんですか。

○**今中**　覚えています。芸備線で通学していたから。戸坂（へさか）から矢賀駅の中間に、長い中山トンネルがあります。三次や庄原辺りで米を買い付けた担ぎ屋は、汽車で広島駅まで運ぶと鉄道公安官に没収されるので、途中の露見しにくいトンネル内に米袋を投げ落とすんです。示し合わせていた売人が拾い集め、車で広島市内に運び込んで、こっそり売るという手口です。

○**平下**　それは高校の頃もあったんですか。

○**今中**　ええ、その頃までありましたね。

○**石田**　そうなんですか。先ほど、遊びといったら川遊びぐらいというお話でしたが、ほかに何か遊びで覚えていることはありますか。

○**今中**　川遊びのほかは、稲を刈り取った後の、田んぼでの草野球。ゴムボールも手に入らなかったから、母に布をボール状に縫い固めてもらい、竹バットでスイングしました。あの頃、はやった遊びの１つです。お金も掛からなかったし。

○**平下**　話は戻りますが、お父さんが家を建てられ、ご飯を食べるために農作業をすると。メモには開墾地とありますが、これはお父さんが原野を開いたということですか。

○**今中**　そんな感じです。

○**平下**　どれぐらいあったのですか。

○**今中**　近場は、昔からの農家が開墾して、田んぼにしています。切り開いたと言っても、裏山の勾配の緩やかな所を。あの頃は、願い出たらすぐに認められました。田んぼができたら、役場の担

当員に検分してもらいます。

もともと、荒れ果てていた公有地です。こんな所を手作業でよくやったな、という感じです。民放（民間放送）で「ポツンと一軒家」という番組が放映されています。あれを視聴すると、田舎のあの頃を思い出します。谷合いがあれば、傾斜に沿って小さな田んぼや畑を造成していますよね。

○**平下**　石垣を組まないと、いけないですね。

○**今中**　そうなんです。

○**平下**　お父さんが、１人でされていたのですか。

○**今中**　いや、母や兄たちも一緒になって。

○**石田**　引き揚げ後に開墾された土地というのは、少し山手に入った場所になるんですよね。

○**今中**　そうなんです。父が家を建てた時は、集落で４軒目でした。電線が敷かれた後、家は増えました。一番多い時は９軒ありました。だんだん減ってきて、今はまた、昔の４軒に戻っています。

高陽中学校時代

○**石田**　話を先に進めて、今度は中学時代の思い出について伺いたいと思います。中学は義務教育制なので自動的に進学されたと思いますが、中学校生活の思い出はどんなことがありますか。

○**今中**　必死に勉強するような環境でもなかったですね。わが家は貧しかったけど、みんなも、そんなに裕福でもなかった。家から高陽中学まで遠かったので、芸備線の汽車通学が認められました。朝の通勤・通学時間帯はともかく、下校時には２時間に１本程度の便数でした。待ち切れなくて、テクテクと歩いて帰る方が多かったです。

○**石田**　歩いて帰れば、どれぐらいかかるんですか。

○**今中**　中学生の足で、１時間半ぐらいでしたかね。もちろん、通学用の自転車なんかも無い時代です。

○**石田**　中学校に進まれてから、勉強はどうでしたか。英語も始まって、新しい教科もいろいろと。

写真３　高陽中学校の３年生クラスメートどの記念写真（昭和27年早春）
右から４人目が今中氏本人

○**今中**　母が成績表を残してくれていました。セピア色に変色しています。自分で言うのも気が引けますが、勉強をしなかった割には、まずまずだったかなと思います。（当時の成績表を取り出して）「終活」で身辺整理をしていたら出て来ました。

○**石田**　「普通」以下は、ほとんど無いじゃないですか。

○**今中**　「極めて良い」とかも結構あります。先生と両親に、感謝しなければと思います。

○**石田**　（成績表の裏面の記述を見て）６年生で体重は25キロだったんですか。

○**今中**　そうなんですよ。これまでに一番重たかったのは就職試験の時の54キロ。こんなことを言ったら罰（ばち）が当たるかもしれないが、やせぎすな母親似です。母は体重が40キロそこそこでした。よく産めたなと思いますね。「栄養失調みたいな時に産んだから。骨組みも小さくなってしまって…」と申し訳なさそうに言っていました。母のせいではないですよね。幸いにも、これまで大病はしていません。激務だった新聞社も、何とか卒業できましたし。

大学進学については、高校３年時の担任の児玉光子先生が「どうしても大学へ行きなさい」と強く勧めてくれました。家庭の事情を考えて、行くつもりは全く無かったのに、２学期の成績が

クラスで２番になっていたからです。児玉先生は、「この成績なのに、どうして大学へ行かないの」と、おっしゃいましてね。「家庭の事情で」と話したら、「男でしょ。アルバイトでも何でもやって頑張れば」と。両親に伝え、成績表も見せたら、「それじゃあ、先生のおっしゃるとおりに」ということになりました。

けれども、幾つかの条件付きです。「授業料が安くて、自宅通学ができる広島大学（当時は広島市中区千田町）に限る。浪人も駄目。落ちても私立なんかへ行かせる余裕はない」と。

（当時の岡本明・文学部長の推薦書を取り出して）こんな物も残っていました。ろくに勉強をしていなかったのに、就職に際して推薦書を書いていただいたんです。

○**石田**　推薦書とは？

○**今中**　中国新聞社を受けた時に提出しました。取得単位がギリギリだったから、効き目はあったかなと思います。面接の時、人事部長の手元にありました。

○**平下**　大学の成績表もありますが。

○**今中**　はい。バイトに追われた割には、まずまずだったかな。

○**石田**　かなり「優」が多い。勉強していないような成績とは思わないですけどね。謙そんされているのではないですか（笑い）。

○**今中**　いや、そんなことはないです。勉強に充てる時間も少なかったから。

○**平下**　ちょっと話を戻させてもらいます。１つ気になったのが、高校生ぐらいになってからも、白米の弁当はあまり無かったとか。

○**今中**　そうですね。お米は作っていましたが、分相応というか、やはり麦飯が多かったですね。

○**平下**　作っても食べないというのが、ちょっと分かりにくいです。大部分を売ってしまうからということですか。

○**今中**　農協へ供出していました。でも、いつも僕たち親子には「満州・奉天の収容所時代のことを思えば」というのがあったんだろうと思います。「これがまずい、と言ったら罰が当たるよ」というのが、母の口癖でした。

○**石田**　中学時代は通学に時間がかかる、農作業の手伝いもするといったら、勉強する時間なんか無かったんじゃないですか。遊ぶ時間はもっと無かったと思いますが。

○**今中**　勉強時間も遊ぶ時間も少なかった、という思いはあります。だけど、パッとやってしまわないといけない時は集中しました。「君は集中力がすごい」と先生から褒められたことがあります。２、３日はかかると思われていた宿題を、翌日には持参していたから。睡眠時間を削り、無理もしましたけど。

○**石田**　そういう日は、夜何時ぐらいまで起きて勉強されたんですか。

○**今中**　追い詰められた時は、４時間ぐらいしか寝なかったかも。

○**石田**　追い詰められた時ですか（笑い）。

○**今中**　試験が間近に迫っていた時です。

○**石田**　昨今と同様に中間テスト、期末テストという形で試験があったんですね。

○**今中**　そうでした。中間試験の成績が良くなければ、期末で取り返そうということになります。

○**石田**　昭和20年代の半ばなので、新教育ということでディスカッションだとか、体験学習というのが導入されています。そういった授業はありましたか。

○**今中**　あったのかなあ。覚えていません。

○**石田**　昔ながらの方法で。

○**今中**　ええ、昔ながらのやり方だったように思いますけど。

○**石田**　英語はどうでしたか。

○**今中**　英語は中学からでしたよね。初めは選択制だったかな。これも、よく覚えていません。いずれにせよ、英語の勉強については記憶が定かでありません。

○**石田**　後に、広大の仏文学科に進まれたので、中学の頃から英語とか、そういう外国語に興味があったのかと思ったのですが。

○**今中**　外国語には興味があり、国語と社会と同様に、自分なりに得意だと思っていました。
○**石田**　では、中学の頃から、理科系の科目はあまり得意ではなかったということですね。
○**今中**　はい、そのとおりです。
○**石田**　こんなことを聞いて失礼ですが。
○**今中**　いいえ、本当のことですから。

皆実高校への進学

○**平下**　高校では、課外活動とかは一般にありましたか。
○**今中**　部活のようなものは当時もありました。美術、書道、音楽、陸上競技、バスケットボール、柔・剣道など。けれども僕は無縁でした。授業が終わると、家へまっしぐらでしたから。
○**平下**　確か皆実は、戦前は女子校ですよね。
○**今中**　前身は県立広島高等女学校です。
○**平下**　戦後すぐに共学になったのですか。
○**今中**　昭和24年、男女共学の新制高校に生まれ変わりました。学区内には、翠町や東雲、段原中学などハイレベルの学校がありました。特に翠町中なんかは、難易度の高い学校の部類に入っていました。よりにもよって、この皆実高区に、飛び地の安佐郡内の高陽中学が入ったんです。
　後に新聞記者になり、県教委（広島県教育委員会）を受け持った時、事務局の担当者に「その訳」を聞いてみました。「何か記事にされるんですか」と言われるから、「そんなつもりはない。僕の通った“飛び地”の高陽中学が、なぜ皆実高区に入ったのか疑問だったから…」と。どうも、生徒の員数合わせのためだったらしい。安佐郡内には可部高もありましたが、汽車通が便利な皆実の方でよかったと思っています。
○**石田**　高校受験に当たっては、勉強はかなりされたんですか。
○**今中**　それほどでも。していないと言ったらうそになりますが、参考書代にも事欠いていたし。担任の先生は「２年と３年の時の教科書をしっかり読み込むこと。分からん所があったら聞きに来て」と。「これ以上のものが試験に出ることは、まず無いから」とも言われ、教えを忠実に実行しました。そうしたら、運よく合格しました。
○**平下**　素晴らしい。
○**石田**　補習とかは、無かったんですか。受験対策として。
○**今中**　ええ、無かったように思います。
○**石田**　高陽中では、していなかったということですか。
○**今中**　補習授業を受けた覚えが無いので。
○**石田**　市内の中学校で、そういった補習なんかをしていたという話は聞いたことがあるんですよ。
○**今中**　「広島市内に予備校ができたらしい」と、うわさ話に聞いた覚えはあります。補習が行われていたとしても、僕には受ける余裕など無かったし。
○**石田**　なるほど。では完全に独学で高校受験に挑まれたんですね。
○**今中**　独学というか、つまり自習ですよね。とにかく担任の指示どおり、中学２年と３年の教科書を読み込みました。
○**石田**　高陽中から皆実高に行ったのは何人ぐらいでした。
○**今中**　当時は、高校進学がクラスで半数程度。英語の学習は主に高校からなので、中学で学業を終えれば英語を学ばないままに社会へ出ることにもなります。それでいいのかな、という思いはありました。両親も「勉強する気があるんなら行け」と言ってくれました。２つ年上の兄も皆実高に入っていたので、僕もその気になりました。当時、クラスで公立高校に進学するのは半数程度。担任に伝えたら「頑張りなさい」とエールを送ってくれました。
○**石田**　そんなもんなんですね。進学するのが半分で、そのうちの３分の１ほどが皆実高に行ったということですか。
○**今中**　そんな感じです。これは高校進学の話ですが、１人が中・高一貫の私立の修道に受かって

騒ぎになりました。

○**石田**　騒ぎになったんですか。

○**今中**　何せ、高校の段階から入ったのは初めてのことだから。

○**石田**　何か、すごく時代の差を感じます（笑い）。

○**平下**　資料を拝見して気になったのですが、この宇品線というのは市電の宇品線のことですか。

○**石田**　いや、国鉄ですよね。

○**今中**　はい。当時の国鉄です。

○**平下**　どこを走っていたのですか。

○**今中**　広島駅から宇品港までの路線です。軍需物資や出征兵士を輸送するために敷設された路線だと聞いています。

○**平下**　へえ、知らなかった。

○**石田**　ちょっと世代の差を感じる。まだ国鉄があった頃に生まれているから（笑い）。登下校で利用した駅名で言うと「上大河」か「丹那」になるんですかね。

○**今中**　そうです。

○**平下**　丹那とは、どの辺りになりますか。

○**今中**　上大河の次が丹那駅でした。

○**石田**　（メモでは）皆実高の最寄り駅は丹那になっていますね。

○**今中**　丹那としていますが、駅舎の広い上大河駅で乗り降りする方が多かったかも。

○**平下**　高校のすぐ近くですね。

○**今中**　駅から学校まで徒歩で５分ぐらいでした。

狩留家の生活環境

○**石田**　高校のことに入る前に、小・中学校のことでもう１つ聞いておきたいのですが、当時、狩留家の人たちは、どの辺りで買い物をされていたんですか。

○**今中**　買い物と言ったって、米、野菜をはじめ大半は自給自足でしたからね。農協の売店に行けば、日用雑貨品や木炭、練炭なども買えました。

○**石田**　では、何か特別な買い物をするといったら広島駅の辺りに出掛けるんですか。それとも八丁堀まで。

○**今中**　大抵は広島駅周辺でした。

○**石田**　愛友市場のあった「やみ（闇）市」の辺りで。

○**今中**　そうですね。大きな種屋（種苗店）もあり、父のお供をして何回か出掛けました。

○**石田**　種屋に。それ以外では、あまり買い物に行った覚えはないんですね。

○**今中**　ええ。米、野菜、果物、鶏肉、鶏卵など大半は自給自足の時代でしたから。日用雑貨品と言ったって、今のように、便利なビニールやプラスチック製品などがあるわけではないし。

○**石田**　では服などは、反物を買ってきてお母さんが縫われたんですか。

○**今中**　田舎では、どこの家もそうだったのではないですかね。学生服なんかは、学校を通して買う。業者がオート三輪車で校庭までやって来て、売っていました。

○**石田**　それは中学生の頃の話ですね。

○**今中**　そうです。

○**石田**　小学生の頃は。

○**今中**　服装は全く自由だったと思います。

○**石田**　洋服ですか、着物だったんですか。

○**今中**　洋服です。

○**石田**　では、中学生になって学生服を着始めるわけなんですね。

○**今中**　そんな感じでした。

○**石田**　すみません。当時のそういった生活を聞いてみたかったんです。あと、川船などは狩留家の辺りまで来ていましたか。昔は太田川や三篠川の上流まで、船で物資を運んでいたようだけど。

○**今中**　ええ、川船は覚えています。ただ、三篠川は川底が浅くて、船が通れるだけの水量がない場所がありました。狩留家の地名の由来は、お殿様や武将たちが狩りに来て、ここで１泊して帰ったことから「狩留家」という地名が付いたとのことです。

○**石田**　江戸時代まで、やはり狩留家までは川船

が上がっていた。ここが一応拠点になっていたようなので。

○**今中**　そのようですね。

○**石田**　だから、今中さんが子どもの頃までは、たまに川船が上がって来ていたのではないですかね。

○**今中**　はい、そうかもしれません。

○**石田**　当時、川船でどんな物を運んでいたんでしょうか。

○**今中**　やはり、農産物ですかね。時折、高級な杉材など材木なんかも積み込まれていたと聞きました。

○**石田**　では、当時は国鉄の芸備線で運ぶよりも川船の方が多かったんですかね。

○**今中**　時折、貨物列車も走ってはいましたが、狩留家駅での積み下ろしを見た記憶はありません。

○**石田**　ああ、そうなんですか。ちなみに、いつ頃まで川船があったとか、そういうのは覚えていないんですね。

○**今中**　はい、記憶にありません。

○**石田**　さすがに当時は、船に乗って広島市内に出向くということは無いですよね。

○**今中**　芸備線一本だったと思います。路線バスやマイカーなども無かった時代ですから。

皆実高校時代

○**石田**　では少し先に進んで、皆実高校の時代に入っていこうと思います。当時は通学とか、あるいは勉強の時間というのはどんな感じだったんですか。

○**今中**　通学は片道約１時間半。芸備線と宇品線を乗り継ぎました。石炭燃料の蒸気機関車です。通勤・通学の時間帯はいつも満員状態。大人たちから「子どもたちはデッキに」と言われ、乗降口の連結空間に立ったままのことが多かった。矢賀と戸坂駅の間にある、全長350㍍の中山のトンネルへ入ったら、ばい煙で顔は、すすだらけ。汗をかく夏場は大変でした。

○**石田**　それは、大人が子どもたちを押し出していた、ということなんですか。

○**今中**　押し出すとかではなくて、「座席は大人が座るもの」という習慣だったのでしょう。

○**石田**　始発の三次駅から狩留家に到着する時点で既に満席だったとか、そういう話なんですか。

○**今中**　朝・夕の通勤・通学時間帯は、いつも満員状態でした。

○**平下**　狩留家駅からも、だいぶ人が乗っていたということですね。

○**今中**　ええ。でも狩留家駅で乗れなかったことはありません。玖村や矢口駅辺りまで来ると「おしくらまんじゅう」をしても乗れないことがたまにありました。

○**石田**　芸備線は、今と変わらない９番ホームでしたか。

○**今中**　あの頃は、７番ホームでしたかね。レールも今ほど多くなくて、最後が芸備線だったと思います。

○**石田**　通学時間は相当かかりますよね。勉強する時間は、あまり無かったのでは。

○**今中**　「無かった」と言えなくもないけど、汽車通学の友だちとは同じ条件ですから。ただ、家へ帰って手伝ったりすることに関しては個人差がありました。しかし、それをハンディキャップだと思ったことはありません。仕方のないことですから。

○**石田**　汽車の中で勉強するわけにもいかないですよね。連結器の所だったりすれば。

○**今中**　通路に立つか、デッキが多かったけど、僕にとっては貴重な勉強時間でした。毎日決まった時間帯ですから。芸備線と宇品線での約１時間半は大事にしました。往復で３時間もありますから。

○**平下**　列車の中で勉強というと、どのようにするのですか。

○**今中**　通路やデッキに立ったままで、教科書や参考書を読むんです。集中すれば、どこでも学べると思います。

○**石田**　でも言い方は悪いですが、田舎の中学から市内の進学校に通われた。勉強のレベルとか、クラスメートの感じはどうでしたか。

○**今中**　翠町中学の出身者なんかと一緒になったので最初は、しんどかったです。

○**石田**　何がしんどいんですか。

○**今中**　勉強に付いていくのが。授業で先生から当てられるでしょう。翠町中の出身者なんかは、すぐに答えるわけですよ。僕は、分かっていても気後れして手を挙げなかった。学力の差を痛感しました。やはり差がついているんだなあと。

（高校３年１学期末の成績順位表を示して）、よくここまでたどり着けたなと思います。この成績で、担任が「大学に行ったら」と勧めてくれたんだろうと思います。

○**石田**　やはり、最初は授業に付いていくのに必死だったんですか。

○**今中**　必死というほどではないけど、楽ではなかったです。先生から当てられても、すぐに答えられなかったことは多かったし。

皆実の校舎は旧陸軍被服支廠を再活用した建物でした。教室の中に鉄骨の大きな柱があるんです。宿題をやっていない時には、その鉄柱の陰に隠れて、当てられんようにと（笑い）。英語担任の加来先生に「君はいつも柱の陰に座っとる。見つけて、当てるんだから」と言われたことを思い出します（笑い）。

○**石田**　出席番号だと当時もやはり、「あいうえお」順だから、今中は名簿の最初の方。当てやすかったんじゃないですか。

○**今中**　いや名簿順と言うより、柱の陰に隠れていたからでしょう。「隠れていても当てるぞ」と皮肉たっぷりでした（笑い）。

○**平下**　１クラス60人とのことですが、どれぐらいの大きさの教室でしたか。

○**今中**　詰め込まれた感じでした。両隣の通路も、体を斜めにして通るぐらいの狭さです。

○**石田**　席は決まっていなかったという話でしたが、当時は総合制なので、先生のいる教室に生徒が移動するという形だったんですか。

○**今中**　それもありました。

○**石田**　だから、自由に席が選べて隠れられたんですか。

○**今中**　そういうことですかね。

○**石田**　総合制だから今と違って、いわゆる技術系の科目とか、ああいったのもいろいろ受けられたと思うんですが、何か印象に残っている授業とかはありますか。

○**今中**　化学と物理は性に合わなくて。化学なんかは「可」のことが多かった。

○**石田**　それは、覚えるのが難しいということなんですか。

○**今中**　理・数は苦手、という思い込みがあったかもしれません。何か、きっかけはあったと思います。その分、国語や社会で取り戻せると思っていました。

○**石田**　ちなみに通学で、芸備線と宇品線を乗り継いでおられました。多少は待ち時間もあって、広島駅の辺りで遊ばれなかったのですか。

○**今中**　ええ、全く。

○**石田**　その時間は勉強ですか。

○**今中**　気持ちのゆとりも無かったし。

○**石田**　ゆとりが無い、とは。

○**今中**　たまにはのんびりしたい、という思いも無かった。ある意味、追われるような日常生活に慣れてしまって。習性と言うんですかね。

○**石田**　友だちに、遊ぶ人もいたのではないですか。

○**今中**　皆実高では、集中して勉強し大学を目指す者、高校だけでもういいやという者、どっち付かずの中間層の、３層に分かれていたように思います。

○**石田**　そんな感じだったんですか。ただ、後の話に絡んでくると思いますが、「進学は難しいかもしれないけど、もしかしたら」という気持ちは無かったですか。

○**今中**　最初から、もう上（大学）は無理だと思い込んでいました。思い直したのは、２歳年上の

兄が「やっぱり大学に行っとった方がいいよ」と助言してくれたこともあります。兄は家庭の事情を考えて、働きながら学べる広島大の政経学部２部（夜間コース）を選択。５年かけて卒業しました。兄貴の大学生活を見るにつけ、働きながら学ぶことの大変さを知りました。僕にはとても無理、そこまで無理をすることもない、と思いました。

その頃、クラスで広大に現役で受かるのは５～６人ほどだったでしょうか。私立大へ進む人もいましたが、大学へ進学しないことで劣等感を持つような時代でもなかったと思います。何せ、クラスの半数程度は高卒で就職するという時代ですから、何が何でも大学という風潮ではなかった。

そうしたら、３年時の担任の児玉光子先生が１学期末の成績表を手にして、「あなたは苦学しているようだけど、クラスで２番になっている。大学受験をしてくれなくては私も困る」などとおっしゃった。

○**石田**　あ、そうなんですか。

○**今中**　３年生は１から７ホーム（クラス）まであり、僕は７ホームでした。６ホーム制が一般的だったようですが、その時は生徒数が多くて６ホームだと詰め込みになる。特設された７ホームは半端な人数になり、僕はその７ホームに属していました。３学年では、ただ一人女性の担任でした。児玉先生はそれも意識されていたのか「私のためにも頑張って」と言われました。家庭の事情も分かってくれていた、優しい先生でした。

この成績表を両親に見せ、児玉先生の意向も伝えたら、「そうか」と。その後、政経２部で学んでいる兄にも聞いたんでしょう。兄は「勉強が嫌いなら別だけど、先生も勧めてくれているんなら、受けさせてみたら」と両親に言ってくれたようです。

こんな経緯で、「先生のおっしゃるとおりに」ということになりました。ただし、条件付きの受験です。授業料が安くて自宅から通える広島大学。「アルバイトをして、頑張ってみよう」と決心しました。

○**石田**　ちょっと先の方に話が行ったので、進学の経緯をもう少し聞きます。お父さんはどういう意見だったんですか。

○**今中**　父は、学校のことにはあまり口出ししなかった。どちらかというと寡黙で。子どものためなら身を粉にして働くとでもいうような、そんなタイプだったと思います。「母さんがそう言うんなら、そうしろ」と、静かにエールを送ってくれました。

○**石田**　児玉先生というのは、教科は何だったんですか。

○**今中**　英語です。かけがえのない恩師で、優しく厳しく導いてくださいました。

○**石田**　当時の皆実高は、受け持ちの担任は３年間一緒だったんですか、それとも毎年替わるとか。

○**今中**　毎年ではなかった。僕は１、２年が中澤清先生。皆実はバスケットボールの強豪校ですが、その基礎を築いた方です。もう亡くなられました。

○**平下**　１年生と２年生はシャッフルされるけど、たまたま中澤先生が一緒だったのか、それとも持ち上がりだったのですか。

○**今中**　持ち上がりでした。

○**石田**　３年生の１学期末まで、大学進学は考えていなかったということですが、それまでは、高校卒業後はどうしようと思っておられたんですか。

○**今中**　就職を考えていました。親の負担を少しでも減らしたいという思いがありました。

中国新聞社の採用試験の思い出

○**石田**　何か、こういった職に就きたいというのはあったんですか。

○**今中**　特には無かったです。新聞社を選んだのも「事件記者」にあこがれたとか、そんなのでは全くありません。あの頃は不況の真っただ中。文学部生の選択肢は教職員かマスコミ、それに一般

の会社の事務職ぐらいしかなかったように思います。

教職には魅力を感じていました。担任の中澤先生や児玉先生に目をかけていただき、生徒を教え、導くのは素晴らしい職業だと思ったからです。

ところが、中・高など学校現場での実習を含む教職課程の単位を取り損ねて、教職の道は閉ざされました。

残された道はマスコミ関係しかありません。かといって、全国紙の朝日や毎日新聞などに受かるほどの実力はない、と自分で分かっていました。

ということで、地元の中国新聞とラジオ中国（現在のRCC中国放送）に絞りました。二股を掛けたら、なんと両社から内々定をもらったんです。どっちにしようかと迷い、内定通知が早かった中国新聞社を選びました。早く意思表示をしないと落とされるかも、と思ったんです。

○**平下**　中国新聞への就職志望で、仏文先輩の大牟田（稔）さんに相談したと、何かに書かれています。大牟田さんとは、少し年が離れていますよね。

○**今中**　大牟田さんは６歳年上です。

○**平下**　元からの知り合いだったんですか。

○**今中**　いいえ。６つ違いですし、僕が入学した時は、既に卒業されていました。中国新聞の文化部に勤めておられることは、仏文研究室の助手から聞いていました。

○**石田**　就職の話になったので、ついでに聞きます。以前、ある方にインタビューしていたら、当時は指定制というのがあって１社を指定し、そこの採用試験が終わらなければ、次の試験が受けれないと。理系の方から聞いた話です。

○**今中**　少なくとも文系では、それは無かったと思います。

○**石田**　同時に出願して受けられたんですね。

○**今中**　はい。そんな制約みたいなものは、一切無かったから。試験日が重ならなければ、朝日でも中国でも、ラジオ中国でも、という選択肢がありました。

○**平下**　理系が特殊だった、ということなんですかね。

○**石田**　時代によって、就職の仕組みも違うしね。

○**今中**　息子の件で、そう思いました。文系と理・工系では異なるのでしょうね。息子は広島大の理学部卒で、修士課程までお世話になりました。当時は景気もまずまず。在阪の大手電器メーカーから、地方の国公立大学へも推薦依頼があったらしく、学校推薦の枠に入れてもらったようです。

息子は僕の「記者生活」を見ていたから、あえて理系に進んだのかもしれません。

○**石田**　中国新聞の入社試験の時、200人近い方が受けたとメモに書かれています。すごい数ですよね。

○**今中**　試験会場は広島市中区の袋町小学校の講堂でした。木造の古びた講堂に、20人ほどの列が10列ぐらいあったでしょうか。受験者が多いので、ギョッとしました。

余談ですが、後ろを振り向いたら初対面なのにニッコリ。「あんたはどこから」。「山口大から。出身は広島の祇園（安佐南区）じゃけど」。「こんなに多いんじゃあ、無理かもね」と言葉を交わしました。幸運にも２人とも受かりました。共に編集畑を歩みましたが、盟友は２年前に逝ってしまいました。

入社試験には作文もあり、出題は「わが母を語る」となっていました。「満州から裸一貫で引き揚げ、厳しい道のりだったけど、ここまでたどり着けたのは母のおかげ。就職して報いたい…」と書きつづりました。入社式の後の懇談会で、「あんたは作文が良かったんじゃ」と言われました。

○**石田**　作文が良かったというのは、どなたから言われたんですか。

○**今中**　人事部長です。「受かったのが不思議です」と僕が言ったら、「あんたは、作文で（点数を）稼いだということよ」と。

○**石田**　当時の中国新聞の入社試験はまず筆記試験があって、それと作文が１次ですか。
○**今中**　はい、そうです。
○**石田**　それが通ったら２次ですか。
○**今中**　２次以降は各段階の面接です。
○**石田**　面接で通ると内々定がもらえる、という形ですか。
○**今中**　そうなります。
○**石田**　それで面接の時に、先ほど見せてもらった岡本文学部長の推薦書にも話が及んだんですね。
○**今中**　はい。面接の日程通知に、「大学の推薦書があれば、提出するように」と書き添えてありました。「あれば」ということだから、義務付けではなかったと思います。担任の中村義男先生に伝えたら、「君は頑張ったからね」とおっしゃり、持参することができました。
○**石田**　２次面接で聞かれたことを覚えていますか。
○**今中**　そうですね。やせぎすな僕の体格を見て「あんたは体が細いねえ」とか、「新聞記者の仕事は、きついよ」などと言われました。「それは分かっているつもりです。満州からの引き揚げで苦労しているし、大抵の事はやれると思います」などと格好をつけました。「本当かいね」と問いただされ、「頑張ります。私は御社へ入れてもらえなかったら行く所が無いんです」と訴えました。
○**平下**　何分ぐらいだったか、覚えておられますか。
○**今中**　面接は１人が15分ぐらいでしたかね。
○**平下**　幹部の方がいらっしゃって。
○**今中**　はい。１次面接は編集局次長や人事部長らのメンバー。最終面接は社長、人事・労務担当役員、編集局長など６～７人でした。
○**石田**　採用が決まった時は、どんな感想ですか。「やれやれ」ですか、それとも「やった！」ですか。
○**今中**　「やった」というのと「やれやれ」みたいな感情が、ない交ぜになり、果たして新聞記者が務まるだろうかと、内心思いました。とにかく「頑張ります」の一点張りでした。
○**石田**　不安というのは、体力的な面だったんですか。
○**今中**　体力と実力の両面です。
○**石田**　その実力というのは、英語ができないとかということですか。
○**今中**　いいえ。英語は記者活動に必須なものとは思っていなかったけど、学校でしっかり学んだという自信が無かったですから。
○**石田**　つまり、大学で勉強をやり切ったという自信が持てなかったんですか。
○**今中**　そうですね。作文も得意な方ではなかったし。たまたまテーマが「わが母を語る」だったので幸運にも、ぴったり、はまったのかなと思っています。

広島大学文学部での学生生活

○**石田**　分かりました。では、大学の進学のところにもう１回、話を戻します。皆実高での担任の児玉先生の後押しもあり、大学進学のお墨付きをもらった、とのことでした。受験勉強は、どんなふうにされたんですか。
○**今中**　それなら受けてみようと思った時は、受験日まで200日を切っていました。厳しい状況ですが、「あと200日もある」と開き直って頑張りました。必死で勉強した、という思いはあります。
○**石田**　学校で、受験向けの補習は無かったんですか。
○**今中**　あったかのかな。あったとしても、僕は受けておりません。
○**石田**　参考書とかは、何か買われたんですか。
○**今中**　受験対策の参考書は、当時も本屋に出回っていました。僕はほとんど買わなかったけど、友だちが回し読みをしてくれました。
○**石田**　大学では、どうされました。
○**今中**　必要に迫られて、参考本は買いました。卒論はフランスの文豪ヴィクトル・ユゴーをテー

マにしたので、それなりに原書も読まなければならない。原書だと日本に無いのが結構ありました。担任の中村先生は「原書は、なるべく多く読むように」とおっしゃいました。

○**石田**　メモには、アルバイト料をつぎ込んでも足りず、お父さんは飼育していた子牛を売られたとか。

○**今中**　はい。そうなんです。原書をフランスから取り寄せるとなると、郵送料も相当かかります。東京大の仏文学科などへ行けば読ませてもらえそうでしたが、旅費や宿泊費が掛かります。そうしたら父が、子牛を売って本代を用立てしてくれました。

○**石田**　また話が戻るんですが、大学の入学試験の時は思い出とかはありますか。

○**今中**　特にどうかなあ。

○**石田**　東千田町の方で受けられたんですか。

○**今中**　ええ、東千田です。皆実高からもかなり受けました。文学科に英文、仏文、独文、言語、国文の各専攻科がありましたが、第１志望が仏文だったのは僕だけのようでした。

○**石田**　試験自体が難しかったとか、易しかったとか、そんな記憶はないですか。

○**今中**　メモには、「英語なら将来、いつでもどこでも学べると思ったから」などと書いていますが、実は英文志望のクラスメートは、頭のいいやつばっかりだったんです。だから仏文学科を第１志望、言語学科を第２志望にしたということです。

大牟田先輩にも伺ったら、「頑張って勉強したら、３年次に転科する手段もある」とのことでしたが、ともあれ第１志望の仏文科に受かってホッとしました。

○**平下**　今の話ですと、大牟田さんとは高校生の時から連絡を取っておられたのですか。

○**今中**　いいえ、相談させてもらったのは、就職活動の時です。仏文科に入った時、助手さんから「６級上に大牟田さんという先輩がいる。現在は中国新聞の文化部記者として活躍中だ」と聞いていました。

○**石田**　分かりました。入学後ですが、皆実校舎で一般教養を受け、２年次から東千田の方で専門教科を履修したと思います。授業の思い出はどうですか。印象に残った先生は中村先生のほかに、どなたか。この授業はすごかった、というのはありますか。

○**今中**　長崎広次先生も思い出深いです。ユニークなお人柄でした。当時は安芸郡の府中町に住んでおられ、お宅に招かれてごちそうになったことも。「君はやせとるね。妻においしいものを作らせるから」と。だけど、やはり恩師と言えば、就職に至るまで面倒を見てくださった中村義男先生です。

○**石田**　中村先生のご自宅へも伺ったことがあるようですが１人で、ですか。それとも同級生の何人かと。

○**今中**　西千田町の中村先生のお宅へ伺ったのは中国新聞社への採用が決まった時です。１人で訪ねました。先生は開口一番、「よく頑張ったね」と。「中国新聞の競争倍率を聞いたけど、大牟田君もびっくりしていた」とおっしゃり、手を固く握ってくださった。持参した清酒で乾杯し、奥さまの手料理をごちそうになりました。

○**石田**　かつて、工学部があった辺りの官舎に住んでおられたんですね。

○**今中**　そうです。「最高の恩師」と言うほかありません。貧乏学生に、本当に目をかけてくださった。先生の菩提寺は中区の本川町にあり、命日にはお参りをしています。

○**石田**　卒業後も、中村先生とは交流しておられたんですね。

○**今中**　交流というより近況報告を。何とか頑張っていますとか、社会部でこういう仕事をしていますとか。下手な字で、手紙も差し上げました。

○**石田**　学生時代から、ずっと目をかけてもらったということですね。

○**今中**　はい。バイトに追われて研究室へもあま

り顔を出さなかった学生にしては、過分なご教導を賜ったと思っています。

○**石田**　アルバイトを随分されたようですが、どういった伝手（つて）で探されたんですか。

○**今中**　クラスにいた「手配師」に頼んでいました。

○**石田**　クラスというのは。

○**今中**　大学の文学科です。仏文専攻といっても、普段の授業は英文や独文なんかと一緒です。その中にアルバイト事情に精通した英文科の仲間がいて、皆から頼りにされていました。「どこか、いい所ない」、「こんなのなら明日からでも…」といった具合でした。

　僕も彼に「今やっているバイトが明日で打ち切りになる。何かない」と。翌日には「これはどうかな」と紹介してくれます。言葉は悪いけど「手配師」みたいですよね。彼が手配料をもらっていたかどうか聞きもしなかったけど、僕は払っていません。バイト学生にとっては貴重な存在でした。

○**平下**　アルバイトで生計を立てられていたという話ですが。

○**今中**　生計といっても、すべてではありません。一部です。寝食付きの自宅通学でしたから。

○**平下**　時間はあまり取れないですよね。

○**今中**　時間はともかく、自宅通学だから寝食は保証されているようなものです。当時、月謝（授業料）は年額６千円だったかな。これはバイトの手当で賄えました。

○**石田**　大学に保管してある、入学の際の手続き書類を見ると、「将来の進路、大学院進学」というふうに書かれていますが。

○**今中**　格好をつけたんだろうと思います。とてもではないが、大学院など思いも寄らないこと。クラスメートがそう言っていたので、釣られて書いたのかなあ。

○**石田**　一応、コピーを持ってきたんですが。

○**今中**　（学籍簿のコピーを見ながら）まさに虚偽申告ですね。こんな物まで残されているんですか（笑い）。

○**石田**　原本は捨てられませんから。

○**今中**　恐ろしいなあ。

○**石田**　恐ろしいですね（笑い）。

○**今中**　（学籍簿の趣味欄に）「読書、野球」とか書いているけど、野球と言ったって、草野球もいいところ。大学院進学というのも、なぜこんな大それたことを書いたのかなと思います。

○**石田**　書かれた時の気持ちとかは、覚えておられないですか。

○**今中**　やっぱり、格好をつけたんでしょうね。大学もアップアップで卒業にこぎ着けたのに。つい、クラスメートに釣られたのでしょう。

○**平下**　学生時代、お兄さんとは連絡を取り合ったりしていましたか。

○**今中**　はい、時々ですが。兄は安芸区の海田町内に下宿し、自活していました。タクシー会社の経営者の子ども２人の勉強をみるということで、その持ち家の２階に住み込んでいました。時折、「飯を食いに来いや」と誘ってくれ、何かと後押ししてくれました。

○**石田**　家庭教師プラス下宿というパターンですね。

○**今中**　そうです。

○**石田**　なるほど。お兄さんは、そのタクシー会社で働いていたんですか。

○**今中**　いいえ。家庭教師として、住ませてもらっていたということです。

○**石田**　お兄さんは、ほかにも何かバイトを掛け持ちされていたんですか。

○**今中**　掛け持ちというか。商事会社とは名ばかりの、小さな物産店で、事務と外回りのようなことをしていました。

○**石田**　また話を戻しますが、アルバイトをして勉強も頑張るとなると、大学祭とか、運動会などの思い出は無いですかね。

○**今中**　ええ、そんなのとか映画鑑賞なども少なかった。

○**石田**　「遊び」とは無縁のようで。文学部生の

就職先は、意識としてはマスコミや教職ぐらいしかないから、頑張って教職の単位も取っておこうということだったんですね。

○**今中**　ええ。教職員の受け皿はあったし、教育実習の現場へ出向くと、教えることの重みを感じるのでしょうか。実習で教職に引かれて、中学の教師になったクラスメートもいます。「実習で生徒たちと交わり、やりがいのある仕事だと確信した」と言っていました。

○**石田**　話の端々で「勉強する時間が無かった」とおっしゃっておられますが、専攻の仏文では、かなり勉強をされたような印象を受けます。原書もわざわざ取り寄せたりして。

○**今中**　いや、勉強をしたうちに入りますかね。横着をして手抜きをしたという思いはありませんが、ゆとりと時間があれば、原書をもっと読みたかったです。

その頃、地御前（廿日市市）に「聖ミカエルの家」という教会がありました。フランス出身の神父が、特任講師としてラテン語の教科を受け持っていました。ラテン語を学ぶ機会は、めったにありません。この授業には集中しました。単語を覚えないと会話にもならない。いつもズボンの後ろポケットに入れていた単語帳は、擦り切れていました。

○**石田**　ですから、汽車通学の時間などを使って単語も覚えたんですね。

○**今中**　はい。それもあります。

○**石田**　私生活で、大学に入って何か大きく変わったことはありましたか。

○**今中**　生活面では、特には無いですね。大学は義務教育ではない。行ってよかったとは思いますが、中途退学する人だっていますから、後が無いという思いは無かったです。

酒の思い出（社会部記者時代）

○**石田**　酒とか、たばこはどうだったんですか。いつ頃から。

○**今中**　たばこは、今に至るも全く吸っていません。

○**石田**　そうなんですか。

○**今中**　はい。

○**石田**　お酒の方はどうなんですか。

○**今中**　酒も学生時代はほとんど飲んでおりません。酒代も無かったし。新聞社に入って、警察署を回り始めてから飲むようになりました。がぶ飲みもしましたが、これは「やけ酒」なんかではありません。

記者の駆け出しは警察回り。広島東、西、宇品の３署を受け持ちました。当時は刑事部屋も、武道場を兼ねた講堂も畳敷きでした。刑事課や防犯課の捜査班が事件を摘発すると、ここで祝杯を挙げるんです。夕方に、畳敷きの部屋の片隅などで。「おい今さん（今中の愛称）。あんたは大学出の高給取りじゃ。署内で記事ネタを集めて給料をもらっとるんじゃから、１升持って来いや」と言われましてね。喜んで酒盛りに加わりました。

当時は、２級酒と呼ばれた安酒です。合成酒などとも言われていました。一升瓶を持参して「打ち上げ」の輪に入れてもらいます。茶碗（わん）酒で、おつまみはイリコとスルメ。まさに、がぶ飲みです。当時はマイカーなど無くて、お巡りさんは自転車通勤。飲酒運転のおとがめも無かったから。

茶碗の回し飲みですよ。受けなかったら「お、今さん、わしの酒は受けんというんじゃの。あしたから口をきかんで」などと言われます。「分かりました」と、つがれた酒をグイッと飲み干す。途中、トイレに行って吐き出して、また飲む。「あんたはやっぱり、わしらの気持ちが分かっとる」と。

是非はともかく、こうした交流は取材の面でも役に立ちました。署の幹部が箝口令（かんこうれい）を敷いて「これは絶対に『ブン屋』（新聞記者）に漏らすな」と厳命した事でも、すぐに耳打ちしてくれる間柄になります。酒の効用があったのは確かです。30歳を過ぎて、肝臓を傷めていたことを知り、それからは自重しました。

幸いにして、たばこは全く吸わなかった。散々、副流煙は吸わされたけれど。今も体重は46キロ前後の細身ですが、85歳の今日まで何とか持ちこたえたのは、暴飲暴食をしなかったことが大きかったと思いますね。

○**石田**　では、学生時代は酒もたばこも全くやらなかったということに。

○**今中**　いいえ。酒は口を付ける程度に。

○**石田**　結構、周りの人は吸ったり、飲んだりしていたのではないですか。

○**今中**　ええ。たばこも酒もというクラスメートはいましたが、僕には「飲み会」への誘いはあまり掛からなかった。「彼は汽車通学だから」と、かばってくれる者がいました。

○**石田**　ちなみに当時、芸備線って最終は何時ぐらいだったんですか。

○**今中**　最終は広島駅発が午後10時過ぎでしたかね。

○**石田**　それに間に合うように、アルバイトも切り上げていたんですね。

○**今中**　そうです。ほとんど最終便になりました。終列車ですよね。

○**石田**　分かりました。本日はここまで。ありがとうございました。

（終了）

第２回
入社～暴力団抗争の取材

社会部配属、警察回りの日々

○**石田**　それではインタビューを始めさせていただきます。

○**今中**　はい、よろしく。

○**石田**　中国新聞へ入社後、まず社会部に配属されたそうですが、当時の新入社員教育はどういったものだったのでしょうか。また窃盗事件を記事にしたことで、関係者が亡くなるという体験をされたとのことですが、当時はどのような基準や方法で記事掲載の可否や扱いを決めておられたのですか。

○**今中**　文化部志望だったのに、いきなり「あんたは社会部へ」と。文学部卒だから文化部に、と勝手に思い込んでいました。政経学部を出た同輩は校閲部に配属。けげんな表情でしたが、「新人なんだから、与えられた持ち場で頑張ってもらえばいい」と厳しい口調で言われました。まさか、僕が社会部とは。

○**石田**　まさかですか。

○**今中**　まさか、と思いましたね。社会部へは２人が配属されました。同輩の政経学部卒も、政治部だと思い込んでいたようです。これが、新聞社の流儀なのかと思いました。

結果として、警察回りからスタートしたのはよかったのかなあ。一線の警察署は、世間の縮図みたいな面があります。世相が荒れると治安が乱れ、窃盗や強盗、詐欺罪などで捕まる者も相対的に増えますね。世相を映していることを実感しました。犯罪にはそれぞれ動機があり、その動機も千差万別です。犯罪とは直接かかわりの無い親・兄弟や親類もいる。最初に警察回りをさせてもらったのは、その後の取材で大変役に立ちました。

何せ、警察署へ行くのは生まれて初めて。古里

の、狩留家の駐在所へも立ち寄ったことが無かったのに、これから毎日、朝から晩まで警察署に詰めることになるので、やはり気分は重たかったですね。

当時の社会部は、部長以下10人ほどの陣容でした。後に「報道部」に組織替えしましたが、部長の下に次長デスクが２人。前線は遊軍（記者クラブに所属せずに、その時々の話題などを追いかけて取材する記者）を含めて７人でした。

配属された日から早速、先輩記者にくっついて東、西、宇品（現在の南署）の３署回りを始めました。勤務は不規則。事件が発生すると、真夜中でも呼び出しが掛かります。狩留家の実家からの通勤は無理なので、南区・宇品町の姉の嫁ぎ先に住ませてもらいました。

通勤は徒歩と電車です。宇品の海岸通りから電車に乗り、紙屋町で下車して西警察署へ。当時、西署は現在の県民文化センターの場所にありました。署内の巡回コースは決めていました。１階の大部屋の中央奥に次長（現在の呼称は副署長）席。このフロアには、日常の市民生活とかかわりの深い交通や防犯、困り事相談の窓口などが置かれていました。

まず次長の所に行って、「大した事は無かったですか」と前夜からの事件・事故の有無を確かめます。「大した事は無かったよ」とか、「こういうのがあったで」とか。「今ここで、わしの口からは言えない」とも。次いで刑事課長や交通課長の席へ。刑事課長には発生事件や被疑者の逮捕容疑などを、交通課長からは事故の概要を聞き取ります。

当時は夕刊があり、事件・事故や逮捕者があれば大急ぎで取材。１階の大部屋の入り口近くに、たった１台設置してあった公衆電話で本社に原稿を吹き込みます。受け手は編集局機報部の速記係。専門職ですから、すらすらと書き取ってくれます。速記係が、この原稿を社会部のデスクに届ける仕組みです。デスクが目を通した頃を見計らって、公衆電話から「原稿はOKですか」と確認します。

電話連絡は常に現場の記者の側から。記者のたまり場（現在の記者室）にも電話は無かったので、デスクから前線記者に連絡を取る手段はありません。前線記者は、いつもポケットに10円玉を詰め込んでいて、署内の、たった１台の公衆電話で原稿送りや取材の指示を受けていました。携帯電話とパソコンを携行して、いつ、どこからでも原稿や写真が送稿できる昨今とは、隔世の感があります。

○**石田**　公衆電話が１台しかないと、やはり順番待ちになりますよね。

○**今中**　もともと署内の公衆電話は、所用で出向いて来た一般市民の利用に供するものです。利用者が多くて、順番待ちのことが多かった。僕たち記者は、締め切りを気にしながら通話の順番を待つことになります。長電話の人の背中を軽くたたいて「急ぎの原稿なので、代わってくれませんか…」と、せき立てたりすることも再三でした。電話交換手とも仲良くして、外線に空きがある時は、こっそり使わせてもらいました。公務用の機器なのだから、厳密に言えば「乱用」の部類に入りますよね。

○**石田**　逆に、今中さんが電話をしている時に、背中をたたかれたことも。

○**今中**　ええ。後ろで待っている人もイライラしています。４～５人が後ろにいると、気にはなりますよね。機報部の速記担当に「後ろで５人も待っている。いったん切らせてもらう」と伝えて送稿を中断。署の電話交換室をのぞいて、「空いている線はない。急ぎの原稿なんよ」と頼んだりしました。

○**平下**　警察署に、記者が詰めているそれ専用の場所はあったのですか。

○**今中**　今は大抵、記者室があり、県警本部だと広報官なども配置されています。当時も県警本部には記者室があり、新聞・放送各社の記者が常駐していました。しかし、前線の東、西、宇品署などには記者室は無くて、宿直室なんかが日中の記

者の「たまり場」になっていました。夜中の事件に備えて、刑事が当番で宿直勤務をする部屋です。８畳ほどの広さ。「日中は使ってもいいよ」ということでした。隅っこに、ちゃぶ台（折り畳み式のテーブル）が置いてあり、あぐらをかいて原稿を書きました。

たまり場にさせてもらったけど、事件や事故の際に次長や課長らが知らせに来てくれるわけではない。記事を書いたり、くたびれた体をいやす程度の、文字どおり「たまり場」です。全国紙の警察回りは、県警本部と所轄署の掛け持ちが多かったから、ここで、ゆっくり語り合うことも無かったですね。

○**石田**　朝は大体、何時ぐらいに下宿を出られていましたか。

○**今中**　７時には出ていました。

○**石田**　夜は何時ぐらいに終わるんですか。

○**今中**　事件など無ければ、おおむね10時過ぎでしたかね。

○**石田**　夜も３署を回って帰るんですか。

○**今中**　はい。日中もずっと３署回りをしているけど、取材漏れが無かったか最終チェックをするためです。

○**平下**　そうすると１日に２回は署を回ることに。

○**今中**　最低で２回です。事件・事故の発生時には、当時まだ珍しかったラジオカーを回してもらいました。無線機が備えてあります。両手で持つような、大型の電話器でしたけど。

○**石田**　取材車ですね。

○**今中**　乗用車タイプの取材車です。ジープも１台ありましたが、これは写真部員が使うことが多かった。ジープは小回りが利くので、事件や火災の現場で重宝されました。

あの頃は、一般の家屋はほとんど木造です。冬季の暖房も石油や練炭、木炭に頼っていたから、火事はしょっちゅうありました。火事になると、すぐに丸焼けですよね。あの頃の新聞を見ると、大火でも焼け跡の写真が多い。カメラマンの現場到着が間に合わなかったからです。

カメラは貴重品だから、記者には持たされていなかった。会社から支給されるのはボールペンとメモ帳だけ。カメラは高価なので、自前では持てません。事件・事故が起きれば、その都度デスクを通じて写真部員を呼びました。

○**平下**　写真部員と一緒に取材して回ることはあまり無かったのですか。

○**今中**　企画物で同行することはありましたが、普段はありません。写真部は部長以下７人ほどでしたから、事件・事故があった時だけ呼んでいました。別の事件や、文化部の取材などに同行していて、写真部員が現場に来られなかったこともあります。昨今は、火事の写真を撮り損ねても、周辺の人たちがスマホで撮っている場合が多いとか。テレビのニュースには、よく「○○さん提供」というクレジットが付いています。あの頃、火災の記事に添えた写真が、焼け跡のことが多かったのは、こんな事情もあります。

○**石田**　お話を聞いていると、本社に戻る時間はほとんど無かったのでは。

○**今中**　ええ、朝は持ち場の警察署へ直行です。西署から東署、宇品署へと順番に回り、夕方にまた一巡するため、本社へは上がらないことが多かった。きちんとデスクと連絡を取り、原稿を送り届ければいいわけですから。

○**石田**　では、送られた記事のゲラ刷りなんかは、すべてデスクがチェックされるわけですね。

○**今中**　はい、記事を電話で送りますよね。機報部の速記係は、前線の記者から聞き取った記事を社会部のデスクへ手渡します。デスクがチェックし終えた頃を見計らって、公衆電話から「原稿OKですか」と確認を取ります。「○○の要素が足りん」、「もうちょっと早く連絡しろ」とか、指示やお叱りを受けます。指摘された点を再取材して事実関係を確認し、公衆電話で答えるという流れです。

夕刊の締め切りに追われ、いつもあたふたしました。今は夕刊がありませんが、夕刊早版の締め

切りは正午前だったから大変でした。

○**平下**　では早朝に警察へ出向き、前夜の事件・事故などを取材して、11時半頃までに公衆電話で送稿するということに。

○**今中**　そういうことです。犯人が検挙されれば顔写真が要ります。前歴があれば、鑑識係長に頼んで複写させてもらう。初犯の場合は、留置房の出入りとか、検察庁への身柄送致のタイミングをとらえます。写真部員を呼び、待機させなくてはなりません。

強盗事件なんかだったら、容疑者の顔写真が要りますよね。警察や検察庁で撮り損なうと、容疑者の住所の近辺を尋ね歩いて、顔写真を探すことになります。

ある強盗・傷害事件で、近隣の方から「犯人は、うちの子どもと同級生だったから、高校の時の写真ならある」と言われて、卒業式の写真を拝借。修正して使ったことがあります。今どきなら、人権問題だと追及されかねません。先輩にも同様の経験があったらしく、写真を返しに行った時、「修正してあるから、本人の面影は無かった」と皮肉られたそうです。人権・プライバシーが厳しく問われる昨今、未成年時の写真を使うことなど、あり得ませんが。

○**石田**　新人時代から、警察回りで特ダネをつかむこともあったんですか。

○**今中**　ええ、特ダネも、それなりに取りました。でも僕たち地元紙の場合、割り引いて考えないといけないと思うんです。全国紙の広島支局勤務の記者は、県警本部と市内３署、それに地検と地裁を含めて３人前後の配置。その倍以上の記者を配置している中国新聞は、特ダネ・独自ダネを書いて当たり前ですから。

○**石田**　逆に、朝日とか毎日に抜かれたら、すごく怒られたのではないですか。

○**今中**　ええ。それはもう屈辱的な事です。全国紙の支局の記者たちは少人数で、各種の催事まで取材していましたから。中国の記者は各部署に張り付いているので、抜いて当たり前です。

○**平下**　全国紙の記者さんとは普段、どんな付き合いをされていましたか。

○**今中**　取材ではライバルですが、同じ記者の道を歩む同志です。仲良くしました。その頃、朝日の広島支局に東京大卒の女性記者が着任し、話題になりました。刑事たちは、「東大出の女性記者から取材されたのは初めてじゃ。こっちがビビるよな」などと言っていました。駆け出しの頃に付き合った連中は、忘れ難いですね。

NHK出身の柳田邦男さん。知名士ですが、彼の初任地は広島でした。短期間ながら広島西署を受け持ったので、一緒に警察回りをしました。

○**石田**　そうでしたか。確か広島に勤めていたと書かれていましたね。

○**今中**　同い年だけど僕は昭和34（1959）年、彼は35（1960）年の入社だから、僕の方が先輩ということにはなります。大物の片りんというか、新米なのに泰然自若としていました。警察回りは１年ほどで、広島市政クラブに配転。原爆・平和問題に携わり、広島勤務は３年ほどでしたかね。東京社会部に帰任して以降、今日に至るまでの活躍ぶりは周知のとおりです。

○**石田**　今もお付き合いがある、ということではないんですね。

○**今中**　あの頃だけ、と言った方がよさそうです。以後、今日に至るまでの活躍ぶりはすごいですね。講演などで何度か来広していますが、会えないままに今日に至りました。いつぞや、広島市内のホテルでの講演を拝聴。終わった後すぐに控室を訪ねましたが、広島駅へ向かった後でした。

○**石田**　売れっ子ですもんね。話を少し戻しますが、公衆電話でデスクとやりとりをしていたということで、そのやりとりで間違いや行き違いなどは結構あったのではないですか。それとも、ほとんど間違いはなかったんですか。

○**今中**　間違いとは。

○**石田**　誤字・脱字のほか、デスクに内容がうまく伝わらないとか。

○**今中**　夕刊の場合、締め切り時間との戦いで

す。署に着くと真っ先に次長のもとへ。次いで刑事課を回り、黒板にチョークで書かれている留置人名簿をチェック。これは夕刊送りのネタだと判断したら、捜査係長や取り調べ主任らから容疑内容を聞き取ります。すんなり教えてもらえるとは限らない。昨今は、報道メモも用意されているようですが、あの頃はそんなものは無かった。焦っていて被疑者と被害者の名前を取り違え、謝罪と訂正記事で懲戒処分を受けた事例もあります。

○石田　一度失敗したら、もう一生ついて回りますよね。

○今中　ええ。でも当時は、今ほどに人権・プライバシーの侵害が厳しく問われなかった。今なら、すぐに提訴され、相応の賠償金も支払うことになります。あの頃は平身低頭してわび、訂正記事を掲載したら、訴訟に至らなかった事の方が多かった。今はもう、とてもそんなことでは済まされませんね。

痛恨のベタ記事

○平下　さっきの石田氏の質問に関連して、このメモの中に「誤報」めいた記事の事が書かれていますが。

○今中　いえ、誤報というのではありませんが、僕にとっては痛恨の出来事です。

駆け出しの頃。朝、持ち場の西署へ行ったら、自転車を盗んだ疑いで中年の男性が取り調べを受けていました。昨今は放置自転車が多くて、回収のために専従員がパトロールしています。常習犯ならともかく、路上の放置自転車を１台盗んで逮捕されることは、まず無いでしょうね。けれども当時は、１軒に１台あるか無いかの貴重品でした。

容疑は「市内吉島町の、病院の玄関先に止めてあった自転車１台（２千円相当）を盗んだ疑い」です。その頃、「窃盗事件は被害額が２千円以上」と社会部内での、一応の掲載基準がありました。

取材に掛かったら、取り調べ主任が「書くな」と言うんです。「書くなというのは、どういうことなん」と言い返すと、「書くなと言ったら、書くなや」と命令口調。僕はムカッと来て、「書くなと言われたって、書くか書かないかは、こっちの判断」と、けんか腰になりました。

およそ２時間後、取り調べ調書が係長の所に回っていたので、メモ帳に書き取りました。課長は制止しませんでした。出稿したら、翌朝刊の地方版に「自転車泥、捕まる」のベタ記事（１段扱い）で載りました。

午前中に刑事課へ立ち寄ったら、取り調べ主任が「書くな、と言うたよのう」と厳しい口調です。それから３日後、悲しい知らせがありました。男は犯行をすんなり認め、余罪も無かったので翌日には釈放されましたが、３日後に首つり自殺をしたというんです。「書くなよ、とあれほど言ったのに、あんたが書いたからじゃ」と、主任は僕をなじりました。

男は父子家庭で失業中の身。生活に困窮していたようです。小学生の、一人息子の学校給食費が払えず、盗んだ自転車を質に入れて給食費を用意した。新聞に載ったから、息子は学校で、「おまえの父さんドロボー」と、からかわれ、登校拒否をしました。途方に暮れた父親が自殺した、というのが経緯です。

主任が「書くなよ」と、しつこく言ったのは、犯行の動機に情状酌量（しゃくりょう）の余地があったからです。動機を教えてくれていたら、僕も記事にはしなかったでしょうね。主任に思いを伝えたら「取り調べの最中に、あんたに動機まで、いちいち言えるわけは無いじゃろう。後で聞きに来たら言っとるわい」と。僕にも落ち度があったのです。

夕方、会社へ上がって、このことをデスクに伝えました。デスクは「いちいち気にしていたら、犯罪の記事は書けんで…」とクールでしたが、僕は重く受け止めました。誰しも親があり、子どもがあり、兄弟があり、親類縁者もある。どんな犯罪にも、それなりの動機があり、要因があります。遊興費欲しさに、などというのは論外です

が。動機に思いを致すかどうかで、記事の書き方も違ってきます。

署内の「打ち上げ」で、刑事が言った言葉は今も耳に残っています。「あんたらは一生懸命に書いとるけど、警察が世の中の悪（ワル）をみんな捕まえとるわけじゃない。高給取りなのに、業者から賄賂（わいろ）をもらったり、酒食のもてなしを受けたりしている、お役人がいるんよ。わしらが捕まえて立件できんだけじゃ。小さいことに、あまり目くじらを立てんさんなや」と。駆け出しの警察回りは、いい勉強になりました。

○**石田**　今の話は、入社して何年目ぐらいの時ですか。

○**今中**　「自転車泥棒」の、この一件は西署回りの半年目あたりです。

○**平下**　ほぼ新人時代に。

○**今中**　はい。新人時代です。「書くなよ」と言われて、訳も聞かずに「分かりました」で済ませていたら、自殺には至らなかったかもという思いは、なかなかぬぐい切れなかったです。

○**石田**　良心の呵責（かしゃく）で悩まれたこともあったと思いますが、事故や事件で亡くなった被害者宅へ、線香を手向けに行ったりされたんですか。

○**今中**　いや、それはしていません。後になり、そうすべきだったと思いました。３署回りは朝７時にスタート。夜も10過ぎての帰宅だったから、気持ちのゆとりも無かったです。

子どもが被害に遭った事件や事故だと、顔写真は必ず載せることにしていました。顔写真があるのと無いのでは、悲惨さを訴える点でも随分違います。葬式の直前に、仏壇の遺影を借りて複写させてもらったことがあります。後に、死傷事件や交通事故死の取材では、数珠（じゅず）を持って現場に行くよう心掛けました。お参りをさせてもらった後に「顔写真を」とお願いすれば、聞き入れてもらえたように思います。

○**石田**　今の交通事故死の写真の話は、いつ頃の事ですか。

○**今中**　これも、駆け出しの西署回りの頃です。事故現場は中区十日市町の交差点。登校中の小学４年の女子児童がバタンコ（当時の３輪貨物車）にはねられ、即死の状態でした。

○**石田**　オート三輪車で。

○**今中**　はい。信号機の無い交差点でした。「交通信号機があれば、防げた事故」と書き加えました。記事に添えた学童の顔写真と、血の付いたランドセルは訴える力があったと思います。間もなく、この交差点に信号機が設置されました。

○**平下**　自転車泥棒の話とか、交通事故で亡くなった女の子の写真の話とか、いろいろとありました。今中さんたち前線の記者に、記事にするか、載せるか載せないかの裁量はあったのですか。

○**今中**　前線の記者には、裁量は無かったですね。「何かあったら、とにかく取材して送稿しろ」ということです。載せるか載せないかはデスクの判断に委ねられます。前線の僕らが勝手に判断できるようにはなっていません。

○**石田**　では、先ほど窃盗の被害額が２千円以上だと記事にするという基準について話されましたが、基準に当てはまるものはすべて記事にしないとデスクに叱られるんですか。

○**今中**　それほど厳格な基準ではなかったけど、デスクからは詰問されます。当時の２千円といえば、それなりの金額だから、やはり基準は必要だったと思います。

○**石田**　指示の有無にかかわらず、記事はどんどん書いたという感じですね。

○**今中**　はい。そうです。だけど先ほどの自転車盗のような件で、僕が犯行の動機を知らされていたら、デスクには伝えていたと思います。記事は没（ボツ）になったかも。デスクの見識や度量も問われます。

○**石田**　なるほどね。

○**平下**　記事は毎日２～３本ぐらい書かれたと思いますが、ボツになるものも…

○**今中**　載せるか否か。どの程度の扱いにするか

など確たる基準はありません。不祥事や事件・事故は概して“新聞沙汰”になりますよね。大きく取り上げられるか、目立たない扱いなるかは運、不運みたいな面もあります。

昭和60（1985）年８月、群馬県境の御巣鷹山の山麓に日航機が墜落・炎上し、乗員・乗客520人が亡くなる大惨事が起きました。新聞の１面から社会面まで、関連記事で埋まりました。

前夜、広島市内で強盗・傷害事件がありました。普段なら夕刊社会面のトップ記事扱いなのに、飛行機事故報道のために隅っこに２段扱いでした。記事の扱いは相対的な面があるということです。

それを逆手に取るというか、不祥事を抱え込んだ役所や企業が、そうしたタイミングに合わせて記者会見し、発表する。相対的に扱いが小さくなることを承知の上です。

○**石田**　日航機墜落事故は報道部長の頃でしたか。

○**今中**　はい。報道部長のポストに就いていました。

○**石田**　広島市内では、強盗事件はめったに起きないですよね。

○**今中**　いや。当時は頻発していました。強盗まがいの「ひったくり」も後を絶たなかった。「かっぱらい」とも言っていました。つじ強盗の類いは、しょっちゅう起きていた感じです。

特ダネを取材するまで

○**石田**　朝７時から夜の10時過ぎまで、市内をぐるぐる回るのは、体力的にきつかったのではないですか。

○**今中**　きつかったけど、若かったから持ちこたえました。日中、睡魔に襲われて、署内の宿直室で２～３時間も寝入ったことがあります。署内巡視の警務係員に「声を掛けても起きんから、死んどるんじゃないかと思うたで」と言われたことも。やせぎすで、スタミナ不足を痛感する日々でもありました。

○**石田**　警察署に泊まり込むこともあったんですか。

○**今中**　ええ。でも今はもう、それは無いようですね。許されもしないでしょう。あの頃は、署員100人以上を動員しての一斉家宅捜索が珍しくなかった。広島駅や東区弥生町周辺の、暴力団の資金源になっていた売春宿などを急襲する時です。

夜の署回りで、当直主任に「お疲れさまです。異常が無さそうなので失礼します」と言うと、「今さん、もう帰るの」と言うんです。「帰らん方がいいよ」というサインなのですね。

○**一同**　はは（笑い）。

○**石田**　ピンと来るわけですね。

○**今中**　はい。２階の宿直室に行くと、待機中の刑事たちが。裏庭には、ジープが整列してある。雑魚寝（ざこね）の署員たちに紛れ込んで寝ていると午前５時、「あんたも、ここに寝とったんかい。邪魔じゃのう」と。「一緒に起きろ」の合図です。裏庭に出てジープに便乗。隊列を見送る署長ら幹部に見つからぬよう、ジープの床面に腹ばいになりました。

○**平下**　警察の幹部としては、記者と行動まで共にするのはよくないことだと。

○**今中**　信頼できる署回りの記者であっても、越えてはいけない一線があるという認識なんですね。

○**平下**　便乗させてくれた署員とは、仲良しだったのですね。

○**今中**　もちろんです。「これ（ジープに同乗させたこと）がばれたら、わしは首じゃ」と言いながらも乗せてくれました。署回りを“卒業”した時、署内のあちこちでミニ送別会をしてもらいました。「あんたは見かけによらん。かなり荒っぽい取材をしたよのう。食いついたら放さんかった。けんかもしたが、『悪（ワル）は許さん』という志は一緒だった」と。

「これは、記事にせにゃあいけんで」と注文を付けられたこともあります。これが、共通の価値観と言えますかね。共に社会悪と対峙（たいじ）

する、という気概がありました。警察回りも３年近くなると、身内のような感覚になりました。

年の瀬のことでしたが、夜回りに行ったら、当直のはずの巡査部長の姿が見えない。翌朝、上司に聞くと、「奥さんの具合が悪いんじゃ」と。入院できずに自宅療養中で、彼が看護していることが分かりました。僕は駆け出しの記者だけど、給料も、そこそこもらっている。メロンを提げて見舞いに行きました。

○石田　メロンですか。

○今中　恐縮されました。あの頃、メロンといったらホテル料理のオードブルぐらい。取材で世話になり、大事なニュースソースでもあったから、こんな形で謝意を表しました。「これで元気になれるかも…」と奥さんは涙ぐみました。縁ですね。引退して、出身地の三原市の島しょ部へ帰ったこの警官とは、逝かれるまで交流が続きました。

○石田　その巡査部長には、随分目をかけてもらったんですね。

○今中　正義感が強くて、志は一緒でしたから。警察も時に、前線が捜査の手を伸ばそうとしているのに上司が待ったを掛けることがあります。「ほどほどにしておけよ」と。特に、政治家や役人が絡んでいますとね。そんな時、「(上が）止めに掛かっている。あんたら（記者たち）の出番じゃ」と言って、情報をリークしてくれました。いい意味で、「持ちつ持たれつ」の関係だったと思います。

○石田　やはり、現場からのリークもあったんですね。

○今中　忘れもしません。警察署で警務係の主任が、福利厚生のための積立金を使い込んだ事件がありました。罪名で言えば業務上横領です。署内での身内の犯行ですから、大ごとですよね。外部に知れたら警察の権威は失墜。マスコミも大きく取り上げることになります。

署長以下、幹部は大慌て。講堂での朝の訓示式で箝口令（かんこうれい）が敷かれました。式が

写真４　警察回りの夜のミーティング
（昭和37年、流川）
右から２番目が今中氏本人

終わり、署員がぞろぞろと講堂から出てきました。通りすがりに、親しくしている署員が、四つ折りにした小さなメモ用紙を僕に手渡しました。開けると「○○が署内で使い込み」と走り書きしてありました。「これが（外部に）漏れたら、ただでは済まされない」と、口止めをされた直後です。「署内の不祥事だと伏せるのか。それはおかしい」と、正義感の持ち主です。僕は彼の思いに応えて記事にしました。幹部は怒り心頭の様子でした。

○平下　そのメモ情報を基に取材し、記事にされたのですね。

○今中　そうです。次長にコメントを求めたら「伏せるようにと、あれほど厳命したのに。あんたは、どこから情報を取ったんや。訓示の時、講堂の後ろに潜り込んどったのか」と、すごい剣幕でした。

○石田　メモを手渡された直後に、次長の所へ行かれたんですね。

○今中　はい。裏付けが必要ですから。「署内で何か大ごとがあったようですね」と言ったら、次長は一瞬ギョッとしました。「何もありゃあせん」と、白（しら）を切るもんだから、「何もないんですね。本当に何も…」と迫りました。そうしたら「あんた、誰から聞いたんや」と。「ニュースソースは言えない。あったんですか、無かったん

ですか」と詰め寄ると、「あった」と白状。「書きなさんなや。あんたには（記事ネタで）お返しをするから」と言いました。

「そうはいかない」と拒絶しました。次長に頼まれてボツにしたら、リークしてくれた署員を裏切ることになる。そして彼とは、プッツンになります。あの頃は、「内部告発」はまだ珍しかった。きちんと受け止めて記事にする。そうすればリークも増える。教訓になりました。

当時、県内で最大規模の広島西署には署員が300人以上もいました。だから、みんなと交わり、親しくなるのは、まず無理です。後年、警察回りのコツとして後輩に伝授したのは「署員みんなと親しくするのは無理。何かを嗅ぎつけた時、『彼に聞けば、何とか糸口はつかめる』という人を、１つの部署で最低１人は確保しておけ」と。体験談なので、説得力はあったと思います。

○**石田**　現場の警察官と仲良くするには、酒を酌み交わすことも近道なんですか。

○**今中**　そうは思っていません。もともと酒好きでもなく、飲んで近づこうという意図など無かった。打ち上げの時、酒は持参しました。「あんたが焦って書くもんだから、共犯をパクる（逮捕する）のに手間取ったで。よそ（新聞他社）が知らん時は、待たにゃあ…」と苦言も飛び出して“宴席”はいつも盛り上がりました。

僕は文学部卒だから、刑法や刑事訴訟法とは無縁でした。六法全書など手にしたことも無い。社会部に配属された時、デスクは「あんたは文学部出だから、刑法は知らんはずじゃ。知ったか振りをしないで、分からんことは刑事に聞け。礼儀正しく接したら、教えてもらえるよ」と。

そのとおりでしたね。「大学出が、わしらのような中卒に聞くんかい…」と、まんざらでもなさそうでした。うまく人間関係をつくり、教えを請うのは、どこでも通用する処し方だと思い知りました。なまじっか「わしは法学部出だ」などと気取るより、謙虚に教えを請う方が得策ですね。

○**石田**　先ほど「中卒」という言葉が出ましたが、旧制の中学校ですか、それとも新制の。

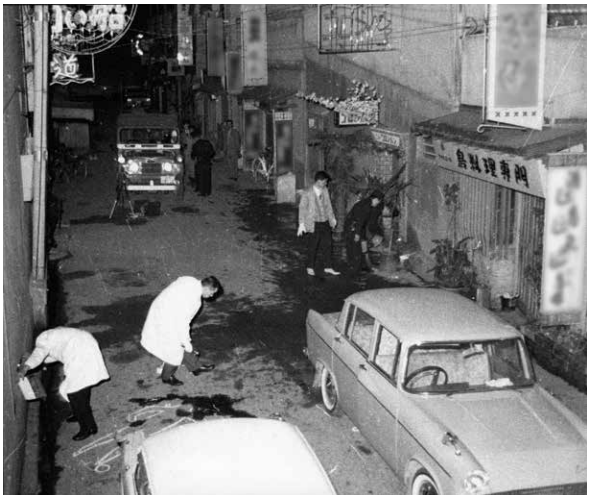

写真５　第二次広島抗争の発端となった暴力団員射殺事件現場（昭和38年４月17日、呉市）
中国新聞社所蔵

○**今中**　昭和34（1959）年だから、もう新制だったのでは。古手には中卒の人もいましたが、試験を経て巡査部長、警部補、警部へと昇進。警視になる道筋はあります。頑張れば、署長や次長のポストにも就けます。警察官の志望者は高卒者がだんだん増えてきて、今は大学卒が多いと聞きました。

○**石田**　ええ、そうなんですか。

○**今中**　昨今の警察学校へは、大学院の修士課程を修了した人も入校しています。

○**石田**　時代が、もう違いますもんね。

暴力団の第２次広島抗争

○**石田**　では、本題に入っていこうと思いますが、そういった中で暴力団の問題が出てきます。取材を進めていくと「接点」が出てきたと思うのですが、暴力団問題に本格的に取り組まれたのは、昭和38（1963）年の「第２次広島抗争」の発生がきっかけなのでしょうか。

○**今中**　はい、そうです。メモにも書いていますが、前線の警察署回りを４年もやったので、そろそろ“卒業”させてもらえるかなと思った矢先でした。同期入社の中には、支局勤務を経験して本

社へ戻って来た者もいました。「行政畑の県政か市政。支局でもいいです」と要望。未熟だから、原爆・平和報道を、とは言えなかった。「希望はどこなのか」とズバリ聞かれたので、「広島市政クラブへ」と言いました。

その直後のことです。昭和38（1963）年４月17日、統一地方選挙の投開票日に当たっていましたが、呉市内で暴力団・美能組の最高幹部の亀井貢が射殺される事件が起きました。神戸の山口組も絡んで、抗争は泥沼化しました。

○**石田**　それまでの警察回りの４年間には、暴力団絡みの事件はあまり無かったということですか。

○**今中**　広島や呉市内には、大勢の組員がいました。暴行や恐喝、覚せい剤の密売・不法所持、飲食代金の踏み倒し、タクシーの無賃乗車など。この種の事犯は散発的に起きていました。抗争事件の様相を呈したのは、この亀井貢射殺事件からです。

「引き続いてサツ（警察）回りを」という成り行きになり、第２次抗争が終結した昭和39（1964）年末まで、県警詰めになりました。明けて昭和40（1965）年、一連の取材は暴力団追放キャンペーンとして評価され、菊池寛賞を受賞しました。これで一区切りがつき、念願の広島市政担当になりました。

○**石田**　だから、さらに２年近くも警察担当として留め置かれたんですね。

○**今中**　そういうことになります。

○**石田**　その時も並行して西、東、宇品の署回りは続けたんですか。

○**今中**　僕は抗争事件の取材に追われ、署回りは後輩たちに委ねました。

○**石田**　社会部に暴力団の専従取材班は置いたんですか。

○**今中**　専従の取材班は置いていません。

○**石田**　立て続けに事件が起きましたね。

○**今中**　ええ。「やられたら、やり返す」という報復の連鎖です。県内での死傷者は29人（死亡者13人、負傷者16人）に及びました。死亡者の中には、巻き添えになった一般市民もいます。

巻き添えで亡くなったのは、広島市西区の飲食店経営者でした。中区の「中の棚商店街」の小料理店で一杯やった後、タクシーで帰ろうと近くの紙屋町タクシーの営業所へ向かいました。知り合いの打越信夫にも会えると思って。紙屋町タクシーの経営者は打越組組長の打越信夫です。営業所は組事務所を兼ねていました。そのため打越組長は、用心棒として組員を事務所にも張り付けていたのです。

「おやじさんは、いるかいの」と言いながら、２階の事務所に通ずる階段をトントンと上がっていったものだから、ガード役の組員は、刺客と勘違いして拳銃を発砲。痛ましい犠牲者が出ました。これを境に、険悪な空気が一気に広がりました。

○**石田**　抗争が始まる前の４年間、警察を回っていて暴力団関係者と知り合ったことは無かったんですか。

○**今中**　知り合っては、おりません。博徒（ばくち打ち）の岡組や、的屋（縁日などで、玩具や雑貨品などを売りつける連中）の村上組、映画館や遊技場を経営して稼ぐ山村組の組員らが、法すれすれのところで、うごめいていることは知っていました。

市民にとって「厄介な存在」でしたが、拳銃を使っての抗争も無いので、警察官や記者、それと一般市民にも危機感は薄かったように思います。終戦後に、広島駅前の闇市（やみいち）や売春地区などを舞台に暴れ回った、岡組対村上組の「第１次抗争事件」と比べますから。

○**石田**　では日々、警察署を回り、刑事たちとも交わりながら、一連の抗争が起きるまでは、特に暴力団をマークしていたわけではないんですね。

○**今中**　はい、そうなんです。この間に、彼らは着々と組織を固め、資金も蓄えていた。拳銃は、当時の金で１丁３万円とも言われましたが、米軍岩国基地から“不良米兵”が持ち出す銃を、ブ

ローカーを通じて買い集めた。着々と武闘態勢を整えていたのです。結果的には警察も、僕たち記者も対応が甘かったことになります。

○**石田**　警察署を回っていても、暴力団の水面下の動きはつかめなかったということですか。

○**今中**　暴行や恐喝容疑などで逮捕したら、組関係者だったという例もありました。飲食代金を踏み倒されたスタンドバーの経営者らの側にも、嫌がらせを受けないための“税金”と受け止めていた節があります。こうなると、事件は表面化しにくいですよね。

○**平下**　ちょっとイメージがわかないのですが、あの辺の飲み屋街では、ほとんどそのようなことになっていたんですか。

○**今中**　ほとんどだったか、どうか。夏場、スタンドバーで組員と鉢合わせすることがありました。七分袖（しちぶそで）に短パン（ショートパンツ）姿。入れ墨をちらつかせるので、一見して組員と分かります。わざと入り口近くに座り、客に視線を向ける。「水割りをくれ」と言い、ママさんが出すと「こりゃあ水じゃ。わしはウイスキーの水割りを頼んだで…」などと、言いがかりをつける。入れ墨は、脅しの手段にもなりますね。

そんな時、僕たちも、もう少し敏感に反応して、彼らの正体を暴くべきだった。抗争は起こさないので、鈍感になっていました。

○**平下**　「けち」を付けるわけですね。

○**今中**　ええ。何にでも。おつまみにピーナツが出ると、「これは中国産かい。わしは千葉のピーナツしか食わんのじゃ」などと。しばらく居座って、「ごちそうになった。付けにしといてくれ」と言い残して店を出る。「明日にでも、事務所まで取りに来てくれ」と、捨てぜりふを吐いて。事務所というのは、組事務所のことです。

請求書を持って事務所を訪ねると、「ほんまに取りに来たんじゃのう。あんたは、ええ度胸をしとる」と。「ほいじゃがのう、わしもひとこと言わせてもらう」と声を荒らげ、「水を売って、こんな請求書は無かろう」と。足を運ぶだけ無駄だった、という結末です。

だから店の側も、“自衛”のために、別の親分筋に「みかじめ料」（用心棒代）を払うんです。そうすれば、「あの店へは顔を出すな」とのお達しがあるという構図です。僕たち記者の側にも、抗争事件が起きてから「さあ大変」と慌てた感があり、反省しています。

みかじめ料は軽視できません。当時、八丁堀や流川周辺には千軒近くも料飲店がありました。そのうち、スタンドバーは半数近かったと思います。暴力団の有力な資金源にメスを入れなかったのは、警察と僕たち報道機関の失態であり、反省しています。

暴力団事務所の取材体験

○**石田**　先日、かつての同僚が制作されたという「目撃　新聞記者」とタイトルの付いたDVDを見せてもらいました。あの中で、現役の北村常務（中国新聞編集・論説担当）が、「今中さんが報道部長の時、１人で組事務所に取材に行かされた。帰社して報告したら『あんたも、やっと一人前になったね』と言われた」というエピソードが入っていました。今中さんが組事務所へ初めて取材に行ったのは、いつ頃だったんですか。

○**今中**　昭和38（1963）年、第２次抗争の時です。写真部員を同行して、組員が逃げ込んだ組事務所に入りました。大写しの組長の写真や、「任侠一代」などと書かれている額などを撮りまくりました。

○**石田**　そういった時に写真を撮るんですね。

○**今中**　事件の現場はもとよりですが、抗争事件の場合、組事務所や組長の居宅、犯人をかくまっていると推測される関係者宅の家宅捜索にも駆け付けます。事務所と言っていますが、実態は「たまり場」ですよね。御用提灯（ちょうちん）みたいなものも、たくさん飾ってある。提灯には「任侠一筋」とか、神戸・山口組の大親分からの激励のメッセージとか。所狭しと飾り立ててありまし

た。いつか、企画記事を書く時に使えそうだと思いました。

○**石田**　では、抗争が起きる前は、組事務所に取材に行くようなことも無かったんですね。

○**今中**　ええ。関係者が事件を起こしたり、逃げ込んだりというのでなければ、簡単には入れません。

○**石田**　簡単ではないですね。

○**今中**　はい。「中国新聞の記者なんかに会いたくない」と言われたら、どうにもならないですよね。だから家宅捜索の時に、見張りのすきをうかがって入り込み、素早く写すんです。

○**石田**　すきをうかがってと言っても、あの時代のカメラは、フラッシュをたくごとに、マグネシウムを交換しないといけなかったのでは。

○**今中**　はい。そばで見ていて、いつもハラハラしました。

○**石田**　すきを突くといっても、大変ですよね(笑い)。

○**今中**　写真部員は場数を踏んでいるから、手際よく撮ってくれました。

○**平下**　写真はカメラマンに任せ、記者は別個に取材されていた感じですね。暴力団抗争の取材では、記者とカメラマンはセットで動かれたのですか。

○**今中**　一緒のことが多かった。暴力団絡みの取材では、写真部員に「１人で行って撮って来て」とは言いにくい。抗争事件では、警察の家宅捜索に同行する場合がほとんどです。捜索に便乗する格好になりますね。

南区の黄金山の中腹にある共政会本部も、絶対に仲間うちしか入れない。記者で奥まで入ったのは、僕ぐらいではないかと思います。捜査員に紛れて入りましたが、出口で見つかりました。

○**石田**　顔が割れていたんですか。

○**今中**　「おまえ、サツ（警察）じゃなかろうが。新聞記者じゃろうがい」と怒鳴られました。帽子をかぶり、マスクで変装したつもりでしたが、「マスクを外してみいや」と毒づかれました。

○**平下**　それで、どうされたんですか。

○**今中**　押し黙って立ち去りました。記者には、捜索令状の効力は及ばないから。

○**石田**　まあ厳密には、不法侵入ですもんね。

○**今中**　そうかも。しかし、内部を見ておいてよかった。それはもう、立派な“御殿”です。当時の金額で、土地・建物の価格は３億円近いと聞きました。２階には100畳敷きくらいの大広間。４階にはサンルームのようなものもありました。

ニューヨーク支局から整理部を経て報道部長のポストに就いた時のことです。県警キャップに、「建てる前に察知できなかったのか」と苦言を呈しました。

○**石田**　ちなみに、見たことは記事にされたんですか。

○**今中**　いいえ。捜査班に紛れて入ったので。警察担当の記者たちへは、こんなふうになっていたよ、と伝えました。

○**石田**　報道部長が、自ら組事務所の豪邸へ入ったことになりますね。

○**今中**　はい。やはり、一度は見ておきたいと思っていました。

○**石田**　警察署回り時代からの人脈が、ずっと生きているんですね。

○**今中**　人脈は大切にしました。組幹部らが、「中国新聞は、えっと書きやがるが、いつか、しごうしちゃる（広島弁で「懲らしめる」の意味)。元を取ったる」などと暴力団担当の刑事につぶやくと、「そんなことをしたら、もっと書かれるで…」と、かばってくれていたようです。「あんたらが脅しをかけても、引き下がるような記者たちじゃない」とも。

これは“記念”に取っておいた物ですが、報道部長の時には、組幹部から年賀状や暑中見舞いが届きました。

○**石田**　誰からですか。

○**今中**　時の共政会幹事長。後に３代目会長になった沖本勲からです。県警の幹部に見せたら「今さん、勝負あったよ。あんたの勝ちじゃ」と

言われました。

○**石田**　ちなみに、その年賀状とか暑中見舞いは社長時代にも…。

○**今中**　いいえ、報道部長時代だけです。

第２次広島抗争時の取材

○**石田**　では話を戻して、先に進みたいと思います。抗争が続発して、中国新聞でも取材体制を整えていったという話でしたが、何人ぐらいのチームで、この暴力団抗争を追われたんですか。

○**今中**　特別にチームを編成して、取材に当たったというのではありません。県警本部と市内３署回りの５人が、抗争事件の取材を兼ねた形です。これに、広島地検と地裁を担当していた浅野温生先輩が加わりました。実は、浅野さんは僕の前任として広島西署を受け持っていました。高校と大学の同窓。気心の知れた先輩であり、何かとサポートしてもらいました。

暴力団取材は記者歴５年の僕の下に、３年生が１人、２年生が３人という布陣でした。

○**石田**　（浅野温生「軟派記者の回想」〈私家版、平成14年〉を見ながら）ここにある寺本泰輔、村上克夫さんたちが今中さんの下に就かれたんですね。

○**今中**　この２人のほかに古志静正、重光隆の両記者がいました。古志記者は３年生、重光記者は２年生でした。

○**石田**　みんな広大なんですか。

○**今中**　いいえ。古志君は上智、寺本君は立命館、重光君は広大、村上君は中央大でしたかね。

○**石田**　今中さん以下、この５人で前線の取材をされたということですね。

○**今中**　はい、そうです。

○**石田**　永田守男さんという方もおられたのでは。

○**今中**　永田さんは、県警本部の記者クラブに詰めていましたが、サブキャップ兼、遊軍記者のような位置付けでした。

○**石田**　体制で言うと、そういったチームを統括した人はどなただったんですか。

○**今中**　統括というか、臆することなくやれと鼓舞してくれたのが兼井亨・報道部長。腹の据わった人でした。「ある勇気の記録」の後書きを書いている、あの大先輩です。

○**石田**　兼井さんは、当時の報道部長。後に編集局次長になられたんですね。

○**今中**　ええ。報道部長から編集局次長に昇格されましたが、しばらくは報道部長兼務でした。

○**石田**　お役所ではないですが、記者もサラリーマンなので、上司の理解がないと、なかなか自由に動けないと思うのですが。

○**今中**　理解はもとよりですが、「いい加減に、この辺で引いておこうや」というのが、前線としては一番困るんです。

○**石田**　困るとは。

○**今中**　前線は「行け行け、どんどん」で張り切っているのに、「待った」が掛かると士気は衰えます。思い切ってやれば、それなりに反動はあります。後に社長宅と、わが家が暴力団に襲われましたが、これは報道に対するリアクション以外の何物でもない。だから、「ほどほどに」という思いは上層部にもあったと思います。けれども、直属上司の兼井さんは泰然としていました。そして「ここは裏付けが足りん。万が一にも訴えられたら、負けるぞ」と原稿も厳しくチェックしてくれました。

「ある勇気の記録」でも取り上げていますが、かつて広島県北の湯来町で、山林の売買契約に暴力団が絡んだ恐喝事件がありました。民事に近い側面がありました。嗅ぎつけて特ダネとして出稿したら、兼井部長から「待った」が掛かりました。「なぜですか」と僕が色をなすと、「これはあんたの特ダネだし、よそ（新聞他社）に抜かれる心配はない。もう少し裏付けを取れ」と。「相手は、絶対に弁護士を立てて来るだろうから」とも。手綱を引き締めてくれました。名将に仕えた、と思っています。一番うれしかったのは、「その辺でやめておけ」と一度も言われなかった

ことです。

○**石田**　ただ、そんなふうに「行け行け、どんどん」で鼓舞されると、前線としては後に引けないから苦労も多かったのではないですか。

○**今中**　それは、やはりあります。でも、読者や市民から投書などで「中国新聞を見直した」「子どもたちにも中国新聞を読ませる」と鼓舞されると、やはり勇気づけられました。

○**石田**　逆に、その筋からの非難めいた投書とかは無かったんですか。

○**今中**　投書ではなくて、脅迫状のような物を送りつけられたことがあります。それでもひるまなかったのは、先ほども申したとおり読者・市民からの、熱いエールがあったからです。わざわざ本社の玄関に立ち寄って、「中国新聞は、絶対に読み続ける」と。会社へ上がった時、そのことを聞いて、それでまた鼓舞されました。

激励の言葉や投書をたくさん頂いたのは、菊池寛賞を受賞した時です。授賞式の後の、民放キー局でのインタビューを見た神戸の方からも。山口組の本拠がある神戸の方の文面には、「ここには、もっとひどい連中が大勢いる。報道機関の尻もたたいてください」と書かれていました。

僕たちは、もう後に引けなくなりました。「あなたたちでなければ…」と持ち上げられると、その気になって調子に乗るんですかね。腹をくくりました。「十字架を背負ったことになるぞ」と後輩たちに檄（げき）を飛ばしました。

○**石田**　その時、「何かあったら命を落とすかもしれない」と覚悟を決められたということですか。

○**今中**　そんな大げさなものでは、ありません。逆に言えば、暴力団の取材に慣れっこになって、恐怖感が次第に薄れたという側面はあります。

報復行為で自宅を襲われた時（昭和60年１月に自宅へ大量のコールタールがまかれた事件）には、県警の機動隊員が長期間、昼夜の警戒に当たってくれました。やはり、子どもたちはおびえました。「これがお父さんの仕事。警察が、しっかりガードしてくれるから」となだめました。

○**石田**　近所の方も、不安に思われたんじゃないですか。

○**今中**　口には出されなかったけど、それはあったかもしれません。隣家の義母は、僕が暴力団を相手にしていることなど詳しくは知らないから、ショックだったようです。

○**石田**　ああ、そうか。当時は記事に署名が無かったから、一般には誰が書いているのか分からなかったんですよね。

○**今中**　深夜にコールタールをまき散らされたものだから、「何をされたんじゃろうね」と、うわさになったようです。

○**石田**　ああ、逆に今中さんが何か悪いことをしたというふうに思われたわけですね。

○**今中**　この一件は紙面に載せなかった。その理由は、「記事にすれば、彼らの思う壺（つぼ）にはまる」と思ったからです。これより少し前、知己の捜査員から、某組幹部が「見せしめのために、いつかあいつ（今中）をやっちゃる」と漏らしている、と聞いていたので。

○**石田**　そういう予告が事前にあったんですね。

○**今中**　ええ、予告と受け止めました。だけど、誰が、いつ、どこで実行に移すか見当もつかない。だから、ガードのしようもない。県警本部の幹部の中には、僕に「（報道を）いい加減にしておかないと、あんたたちもだが、わしらにも累が及ぶ」と漏らした人がいました。記者が襲われたら、「警察は何をしていたのか」と、非難されかねないという訳です。

自宅を襲われた時、記事にしなかった理由は「わしらを怒らせたら、中国新聞の報道部長でも容赦せんぞ」と、脅しの手段に使われると読んだからです。デスクの間でも見解は分かれましたが、僕は「載せるべきでない」というスタンスを固持しました。

家をやられて、引き下がるわけにはいかない。何くそ、と思って取材態勢を立て直しました。手始めに、共政会がもくろんでいた「五日市支部」

の阻止に矛先を向けました。当時、広島市と隣接する五日市町は人口が増え続け、商店街も拡大していました。共政会がこれに目を付け、進出を図ったわけです。前線の記者が住民代表たちに会い、「いま立ち上がって阻止しなければ、大変なことになりますよ…」と説得しました。住民は立ち上がり、進出阻止の街頭行動も行いました。五日市支部長に決まっていた中堅幹部が逆上し、山本社長宅に散弾を撃ち込んだのです。これは記事にしたので、国会でも取り上げられました。

○**平下**　ああ、そういう経緯ですか。

○**今中**　怖くないと言えば、うそになります。けれども、「怖いから」と引くわけにはいきません。「怖くても、やるしかない」というのが、正直なところです。人生、いつ何が起こるか分かりませんしね。

昭和48（1973）年秋のことです。北海道からの観光客グループ十数人が、中区立町の電車通りに沿った歩道を東へ向かっていました。突然、高層ビルの壁面タイルが大量にはげ落ちて、通りかかった一行の中にけが人が出ました。１日に何千人もの市民が行き来する歩道で、たまたま通りかかった、遠来の観光客が被害に遭ったのです。けたたましい救急車のサイレンで、たまたま県庁にいた僕も現場へ駆け付けました。知己の西署の交通課長が、こう言いました。「今さん、人間の運命というのはこういうもんかね」と。うなずいたら「あんたも結構、肩を張って取材しとるが、人生、何が起こるか分からん。観念したら気が楽になるで」と。

けが人の収容先の外科病院から帰ってきた若い記者が、観光客が漏らした言葉を、こんなふうに伝えました。「初めて広島を訪れ、あの時間帯にあの通りを歩いていて、ビルからタイルがはげ落ちて、けがをするなど夢にも思わなかった」と。「これが運命というものなのか」と思った途端、すっかり気分が楽になりました。

○**石田**　これは第２次抗争の、さなかの話ですか。

○**今中**　いいえ。ずっと後のことです。

○**平下**　ところで取材の際、相手の暴力団組員は大勢いたと思うんですが、誰々と特定するために顔写真も要りますよね。どのようにして集めたんですか。

○**今中**　手ごわい取材相手であることは、承知の上です。当時の広島の暴力団は、準構成員も含めると400人を超える組織でした。リストはもとよりですが、顔を知っておけば事件現場の取材で役に立ちます。県警本部や警察署の鑑識係にも食い込んで、顔写真を複写させてもらいました。

○**平下**　組の構成とか、誰がどういう立場の人物なのかは、どのように把握されたんですか。

○**今中**　当たり前のことですが、僕たち新聞記者には、捜索の権限などありません。組事務所といえども、無断で入れば、不法侵入になりかねない。だから構成員の把握も、ほとんど県警本部や警察署の刑事たちを通してです。収集した顔写真は、深夜の、締め切り間際の現場取材では役に立ちました。

当時、中国新聞の本社は、現在の三越百貨店の場所にありました。抗争事件が流川周辺に集中したので、パトカーよりも早く現場に着くことが再三でした。パトカーには県警本部の警ら隊員が乗務しています。日ごろ、暴力団と接する職務ではないので、現場到着が早くても、撃たれた組員の特定は無理です。

ある拳銃発砲事件で、僕が「○○組の○○ではないですかね」とつぶやいたら、乗務員は車載の無線機で「現在地、流川○○番地。殺傷事件の被害者は１人。組関係者で、○○組の○○と思量（思われる）される…」と本部に通報しました。そのとおりでした。被害者の特定が早くできて、深夜の事件なのに顔写真も載せることができたのは、リストと顔写真集めのおかげだろうと思います。

○**石田**　400人余りの顔写真を入手したのは、取材のためですか、それとも自己防衛のためですか。

○**今中**　もちろん取材のためですが、自己防衛にも役立ったかしれませんね。それともう１つ。デスクと意思統一したのは「組員が絡んでいれば、些細な事件でも可能な限り記事にする」ということでした。普段、知名士や公人はともかく、一般人のけんかなど「単純暴行事件」は記事にしません。しかし組員が絡んでいたら、単純暴行でも徹底して書くことにしました。そうすることで、彼らの「反社会性」が浮き彫りになりますから。

当時、外車のベンツは珍しかったけど、組長らはベンツに乗っていました。流川の高級クラブで豪遊する時、店に面した公道を勝手に遮断します。それを厳しく制止しなかった警察にも、問題はあります。抗争は起こさなくても、普段の振る舞いは好き勝手です。記事にしたら、「駐車違反ぐらいで、何で書き立てるんか」とクレームを付けて来ましたが、もっと早く書くべきだったと反省しました。抗争ではないので、警察に緩みがあったと思う半面、僕たち記者の側にも、厳しさが足りなかったと思います。

市民に支持された暴力団取材

○**石田**　どんどん書き始めたら、警察の反応ってどんな感じだったんですか。

○**今中**　「あんたらは、何でも書くんじゃの」、「何でも書けて、ええの」と言いながらも、暴力団担当の刑事たちは「何が起こるか分からんが、警察と記者は市民のボディーガード。記者のボディーガードは、わしらじゃ。ひるまずに行けよ」と励ましてくれました。

○**平下**　先ほど、市民からの投書で励まされたという話がありました。投書は社内でどのように扱われていたんですか。

○**今中**　投書は、新聞社宛てに送られて来る場合が多く、総務部で仕分けされます。

○**平下**　新聞社宛てに来た物を総務部の担当者が該当する部署に振り分けるということですね。

○**今中**　はい。報道部や経済部、文化部など関係の部署へ。編集局長宛ての物も、部長を通じて僕たちに回ってきます。

○**平下**　話は少しずれますが、金井利博さん（元・中国新聞論説主幹）の資料を整理していた時、結構、原爆報道に関する投書を個人でお持ちでした。中国新聞社宛てになっている物を。だから、投書ってどのように扱われているのかと思ったので。

○**今中**　本来、会社宛ての投書は会社が保管すべきだと思うけど、僕たちの場合は、報道部長が「回し読みしたら、あんたらが持っておけ」と言ってくれました。今も手元に残している物が数通あります。

○**石田**　そういった中で、菊池寛賞の授賞理由にもなっていますが、単に抗争事件の後追いでなく、刑事と民事のすれすれのところだとか、資金源の出所とか、従来の枠組みを超えた報道を進められました。何か、きっかけがあったんですか。

○**今中**　抗争事件では、必ずと言ってよいほど拳銃が使われます。第２次抗争の当時でも、１丁が数万円もした高価な武器です。銃器を買い集める資金はどこで調達しているのか。組長の住む家には多くの組員が寝起きしているが、生活費はどうやって賄うのか。結局、資金源の問題に行き着きます。

歌手の美空ひばりが、当時は平和記念公園内にあった中央公会堂で歌ったことがあります。主催者は神戸・山口組の田岡組長がかかわっていた神戸芸能社でした。「美空ひばりショー」ということで入場券は完売です。これを仲介した広島の暴力団に、金が流れたことは明らかです。

調べてみると、県内各地の公共施設で暴力団絡みの興行が盛んに行われていました。資金源封鎖のための集中報道に乗り出し、公共施設から完全に締め出しました。公営ギャンブルの宮島競艇場でも、施設の維持管理を暴力団関係者が引き受けていて、組活動の資金源につながっていました。追及すると、不正・不祥事が明るみに出ました。

暴力団が広島市中区の新天地公園にバッティング・マシンを据え付け、資金稼ぎをしていること

も突き止め、集中報道をして撤去させました。

連鎖反応と言えるでしょうか。刑事と民事のはざまで資金稼ぎをしている悪事が、市民からの通報で相次ぎ明るみに出ました。記事にすると、「あそこでも、こんな事が…」と次々と情報が寄せられるんです。時には相手方の弁護士が間に入り、難渋したこともありましたが、資金源の追及は、県警の取り締まりをバックアップしたと自負しています。

○**石田**　警察だけでなくて、一般市民からの情報でも動かれたんですね。

○**今中**　はい、そうです。先ほどの、新天地公園のバッティング・マシンの件も、住民からの通報です。「こんな振る舞いを、何で警察が見逃すのか」と県警幹部に迫ったら、不動産侵奪罪で立件しにくい事案だというのです。

なぜかと問うと、住民代表の町内会長らも同意し、市議会議員が間に立って土地利用の許可も取得している、と言うんです。調べたら、ほぼそのとおりでした。ただし、条件付きでした。「盆踊りなど町内会の催事の妨げにならぬよう、マシンは移動式にする」。つまり、車輪を取り付けろということです。こうした条件付きで、町内会も同意したのです。警察が「不動産侵奪」の容疑で立件しにくかったのも一理あります。

しかし、いったん許可すれば、あとは暴力団のペースです。案の定というか、移動用の車輪は取り外され、マシンは地面に固定されていました。市役所の公園緑地課へ行き、「移動式のはずのマシンが、固定されているではないか」と課長に詰め寄りました。課長は、しどろもどろ。なんと、夜間の照明電灯代まで、町内会の負担になっていたのです。

○**平下**　町内会が支払っていたということですね。

○**今中**　そうです。何たることか、と憤りを覚えました。たとえ不動産侵奪罪には触れなくても、公園にバッティング・マシンというのは、明らかにおかしい。社会面のトップ記事で追及したら、渋々、撤去しました。警察が動きにくくても、記者は「社会通念」に照らして追及できる。これも記者の役目だと確信しました。

○**平下**　「ある勇気の記録」を読んでいて、ちょっと不思議に思ったのが、脱税の話とか、電気代の不払いのことは、どうやって調べたのですか。

○**今中**　電気代の未払いの件、これは新聞社宛ての投書が端緒です。「『美能屋敷』（呉市内の、美能組長の居宅）の電気代が払われていない。一般市民はきちんと払っているのに、こんなことが許されるのか」という内容でした。

○**平下**　これまた、市民の方からの情報なんですね。

○**今中**　はい。呉市民の方からです。あの頃は中国電力が、地域の人に集金業務を委託していたようです。集金業務に従事していた方の義憤というのでしょうか、このことを聞いた人が、投書で訴えられたわけです。「中国新聞に伝えれば取り上げられるだろう」と。きちんと記事にして、投書をされた方の思いに沿いました。

○**石田**　ちゃんと取材をして記事にすれば、市民もそれを好意的にとらえて、信頼の輪がだんだんと広がっていくんですね。

○**今中**　「中国新聞なら取り上げてくれる」という信頼感だと思います。情報を寄せても、「そうはおっしゃるけど、記事にするとなると、いろいろ難しい面がありまして…」などと弁解すれば、それでプツンと切れますよね。取材の結果、記事にできなかったこともありますが、僕らが取材を始めた途端に、是正されたというケースも何回かありました。

○**石田**　ああ、そうなんですか。

○**今中**　はい、そうです。

○**石田**　そんなふうに、どんどん報道を重ねる中で、ほかの部署の方たちの反応はどうでしたか。

○**今中**　どうですかね。僕たちは意識しなかったけど。ほかの部署の者も、「頑張っているな」と好意的に受け止めてくれていたようです。

○**石田**　気を付けろよとか、やめとけや、という

のは無かったんですか。

○**今中**　「やめとけ…」というのは、全く無かったです。同期入社の仲間たちも「よくやっているね」と、ねぎらってくれました。「怖くないか」と聞かれたこともありますが、「成り行き任せよ」と。

○**石田**　報道部長の時、社長宅に銃弾が撃ち込まれ、会社自体が標的にされたと思うのですが、第２次抗争でキャンペーンをした頃は、そういうのは無かったんですね。

○**今中**　はい、あの頃は取材中の暴言とか、会社への脅しめいた電話ぐらいでした。取材現場で毒づかれるのは、しょっちゅうでしたけどね。

第２次抗争の象徴的な事件として、「ニュー春美・拳銃乱射事件」というのがあります。犯行現場は、中区立町の雑居ビルの前。ビルの１階にニュー春美という小料理店があったので、これが事件の呼称として使われました。対立する組の、合わせて８人が、西部劇さながらにビルの３階と地上で拳銃を撃ち合いました。

住民からの通報で、警察よりも早く現場に駆け付けました。仲間が撃たれて激高する組員が毒づきました。「こらブン屋、おまえらは呼びもせんのに、いつもはよう来る。ええ根性しとるが、腹巻きぐらいしとるんかい。マメは前から来るとは限らんで…」などと。意訳すると「こら、新聞記者。こっちが呼んでもいないのに、いつも現場に早く来る。いい度胸をしているが、防弾チョッキを着けているのか。銃弾は、前から飛んでくるとは限らんぞ」ということになりますかね。

殴り掛からんばかりですが、手を出したら僕らも黙ってはいない。足げにする格好をするが、けられたことは無かったです。脅されれば、脅迫罪で訴えることもできますが、いちいち警察に訴えるようでは足元を見られます。

現場で「おどりゃあ、いちいち来るな」とののしられても、「邪魔をせんでくれ。わしらは、これが仕事じゃけえ。あんたに構っとる暇はない。締め切りが迫っとるんじゃ」と言い返したら、ぽかんとしていました。

写真６　菊池寛賞受賞を受けてモーニングショーへゲスト出演（昭和40年）
右から２番目が今中氏本人
中国新聞社所蔵

○**石田**　直接、手を出されたことは、さすがに無かったんですね。

○**今中**　僕は無かったけど、後輩の記者がけられたことはありました。彼も、駆け付けた警官に訴えてはいません。

菊池寛賞の受賞

○**石田**　昭和40（1965）年に、一連の報道が評価されて菊池寛賞（第13回）を受賞されました。受賞したことで、何か大きく変わったことはありますか。

○**今中**　いいえ、特にはありません。先ほども言いましたように、「新聞の力を知った」とか、「これからも頑張ってください」といった激励の投書はたくさん届きました。「もう後には引けない」と、改めて思いました。

晴れがましくも、都内での授賞式には社長や編集局長らに同行して出席。前後して民間放送のキー局やNHKの広島放送局、RCCなどでインタビューを受けました。表に出過ぎた感もあり、複雑な心境でした。

「暴力団なんか怖くない。矢でも鉄砲でもー」と気負って、やったわけではありません。「法治国家なのに、こんな無法がまかり通ってよいの

か」という、素朴な思いからです。粛々とやり遂げた、とは思っています。山口組の本拠がある神戸などでは、暴力団担当に頑丈な記者を配置していたと聞きましたが、「これが新聞記者の役目。取材の邪魔をしないでくれ…」と正攻法で立ち向かったのが、結果的には良かったのかなと思います。

○**石田**　では、特別にボーナスが出たり、昇進したりとかは無かったんですね。

○**今中**　ええ、そんなのは全くありません。無くてよかった。受け持っていた部署で、たまたま暴力団抗争に遭遇し、取材の渦に巻き込まれた感じですから。

授賞式で、著名な亀井勝一郎さんや大宅壮一さんと同席しました。ご両人は「僕らはいろいろ書いているけど、身に危害が及ぶことはない。あなたは立派だ」と、お褒めの言葉を頂戴して恐縮しました。

○**石田**　賞を取ったことで、例えば流川周辺に行くのは用心したとか、そういうのは無かったですか。

○**今中**　それはありません。普段どおりです。組幹部らと、たまにすれ違っても「ああ、あんたかいの」といった感じでした。僕が「まだバッジ（組の紋章）を着けとるね。いい加減に外したら…」と言うと、「あんたに言われて外すわけにはいかん」と。何ということも無かったです。

○**石田**　受賞したことによって、目の敵にされたとかも無かったということですね。

○**今中**　はい、それは無かったように思います。僕が一応、前線の取材を取り仕切っていたことは、うすうす知っていたと思いますけど。

共政会の山田久（ひさし）３代目会長が新聞社にクレームを付けに来た時、１対１で初めて会いました。「やっぱり、あんただったんか。やせで貧相な男じゃのにのう」と言われたのを、思い出します（笑い）。

○**石田**　３代目会長は、何の用で新聞社に来たんですか。

○**今中**　文句が言いたかったんですよ。「あんたらは、あること無いこと書き放題じゃ。あんまりやると、わしはええが、若いもんが黙っとらんで」と。僕が「それは脅しじゃね」と言ったら、「脅しというんじゃないが、まあ一応言うとかにゃあのう」と言いました。

話の途中で、１階の守衛所から「玄関に外車が３台も止めてあり、来訪者の邪魔になっている」と通報がありました。山田会長に「話はきちんと聞くから、すぐに車を移動してくれ」と注文を付けたら、１階に下りて、そのまま帰ってしまいました。

○**石田**　それは、いつ頃の話なんですか。

○**今中**　黄金山の本部事務所の事を、記事で取り上げた後だったと思います。

○**石田**　では、今中さんが報道部長だった頃の話ですね。

○**今中**　はい。そう記憶しています。

○**石田**　守衛さんもビビったでしょうね。大型の外車３台で乗り付けて、それらしい人たちが降りて来たんだから。

○**今中**　そうでしょうね。

○**平下**　その「あんたじゃったんか」というのは、誰が記事を書いていたのか、あちらには見えていなかったということですか。

○**今中**　「やっぱり」と彼が言ったのは、「案の定」という意味合いだと思います。あの頃、記事に署名は無かったけど、誰が書いているのか、書かせているかは、うすうす知っていたはずです。彼らも、情報網を持っていますから。

○**石田**　もっと、いかついのが記者だと思っていたんでしょうかね。

○**今中**　そうかも（笑い）。余談ですが、一応の礼儀としてコーヒーを出しました。自販機の紙コップ入りです。すると彼は「悪いけど、わしは紙コップのコーヒーは飲まんのじゃ」と口を付けなかった。気位も相当なものでしたね。

○**石田**　本社が胡町から土橋に移った後の話ですね。

○**今中**　そうです。

○**石田**　では、そろそろ時間ですので、「仁義なき戦い」の話は、また次回ということにさせてもらいます。

○**今中**　はい。よろしくお願いします。

（終了）

第３回
広島市政担当～報道部デスク

映画「仁義なき戦い」を見て

○**石田**　では、第３回のインタビューを始めさせていただきます。よろしくお願いします。

○**今中**　こちらこそ。

○**石田**　まず前回の残りからですが、映画「仁義なき戦い」がヒットしますよね。この内容とか社会の反応について、どのように感じられましたか。

○**今中**　これは東映制作のシリーズものです。ノンフィクションという触れ込みもあって大ヒット。観客動員数は延べ約1,500万人、興行収入も30億円と伝えられました。

　しかし、抗争事件を克明に追った僕たち記者はもとより、多くの広島市民は、やはりノンフィクションとは受け取らなかったと思います。当時、週刊誌も盛んに取り上げて、僕にもコメントを求めて来ました。「とてもノンフィクションとは言い難い」と話したのに、その部分はカットされていました。

　中国新聞も適当に利用されたというか、違和感を覚えるシーンが結構ありました。社内で、「これは、東映にひとこと言うべきだ」との声も出ました。

○**平下**　ノンフィクションとは受け止め難いという評価ですが、具体的に、どういう点でそう思われたのですか。

○**今中**　例えば「任侠の世界」の描き方。僕には、「任侠」は見出せなかった。殴り込みを掛けたり、派手に撃ち合ったりするシーンがやたらと多く、この抗争が地域社会にどんな影響を及ぼしたかなどは、ほとんど描かれていません。

　「仁義なき戦い」は作家の飯干晃一氏が、呉市の暴力団幹部の美能幸三の手記を基に、「週刊サンケイ」に長期連載をしました。これが東映の制

作スタッフらの目に留まり、「これは受けるだろう」と確信したようです。最初、美能は渋りましたが、説得の末に応じたようです。

権力へのあこがれとか、金銭に対する執着心をむき出しにして、嫉妬（しっと）、裏切り、権謀術数が渦巻く世界を描いたものだから、大衆娯楽作品としては受けたのだろうと思います。だけど広島市民には、被害者の側面があります。映画の反応を探ってみようかと思いましたが、県警の幹部から「作り話に、いちいち目くじらを立てれば切りがないぞ」と言われてやめました。

○石田　どうして、美能は手記を書いたんですか。

○今中　先だっても話しましたが、昭和38（1963）年春に組幹部の亀井貢が呉市内で射殺される事件が起きました。統一地方選挙の投開票日の夜の事でした。県警記者クラブには深夜まで記者が待機していました。選挙違反を摘発したら、捜査２課長が記者クラブで発表することになっていたからです。２課長が来たので「検挙者が…」と聞いたら、「そうじゃない」と。呉市内で、懸念していた抗争事件が発生したというのです。

ハッとしました。ひと月ほど前に、暴力団の専従捜査員から「抗争が起こるとすれば、火種は呉だ」と聞いていたからです。事件の背景が頭に入っていたので、呉の犯行現場に無線カーで駆け付け、一報と併せて背後関係も、車載電話でデスクへ吹き込みました。

その内容は「神戸・山口組の地方都市進出を巡り、山村組（後の共政会）の幹部頭の地位にあった美能幸三が、ほかの組幹部らの意向を無視して山口組と盃（さかずき＝暴力団同士の縁組）を交わした。怒った山村組長が美能を破門し、険悪な空気になった。美能が、山口組と既に手を組んでいた打越会に助けを求めたため、両派は真っ向から対立。これが射殺事件に発展した」というものです。

○石田　刑に服していた美能が、この解説記事のことを、どうして知ったんですか。

○今中　キャンペーン報道で菊池寛賞を受賞したため、請われて月刊「文藝春秋」に寄稿しました。この記事が網走の刑務所で服役していた美能の目に留まりました。

看守が「おい、おまえのことが雑誌に載っとるぞ」と言ったらしいんです。美能がこれを読み、「事実と違う。こんなふうに一方的に書かれたら任侠の世界でメンツ（面子）が立たん」と。本当のことを書き記すということで、７年間の服役中に700ページに及ぶ手記を書いたのです。

飯干晃一氏がこれを読み、当時の「週刊サンケイ」誌に連載。そしたら、これはドラマチックで映画になるということになったのでしょう。東映が飯干晃一氏らと折衝し、映画化したという経緯です。最初は渋っていた美能も応諾し、５部作の「仁義なき戦い」が制作されました。

推測の域を出ませんが、美能側へは、それなりの謝礼金は支払われたと思います。県警の幹部は、「美能は謝礼を受け取ったに違いない」と言っていました。「任侠の世界をリアルに描いた」ということで大ヒットしましたが、総じて広島市民は冷ややかでした。中国新聞も、第２次抗争を素材にした映画ではあっても、大きく扱ってはいません。

○平下　もう１つ質問をいいですか。先ほどの話で、映画の中での新聞記者、あるいはマスコミの描かれ方に違和感があるとのことでした。しかし記者がヤクザの事務所へ行き、ポーズをとって写真に写るみたいなシーンもありましたが。

○今中　あれは、全くの作り話です。普段、新聞記者は組事務所へは入れません。僕は２回インタビューを申し込みましたが、２回とも断られました。事務所の中の写真も何枚か撮ってはいますが、これは、警察の家宅捜索に便乗して写真部員がさっと入り込み、写したものです。あれほど繰り返された抗争事件ですが、紙面には、事務所内の捜索写真は数少ない。撃ち合った後の、現場写真がほとんどです。

○石田　２つ伺います。１つ目は、映画が公開さ

れて、５部作すべてを見られたんですね。

○**今中**　もちろんです。見たくもないと思いながら、どういう描かれ方をしているかを確かめるために。３作目ぐらいからは、本当に頭にきました。冷静にならなくてはと気を取り直し、完結編まで見ました。

完結編の封切り後、これも週刊誌でしたが、コメントを求められました。「最初もコメントしなかったし、今回もするつもりはない」と、きつい口調で断りました。「なぜですか」と言うから、「ノンフィクションとうたっているけど、フィクションだらけだから」と突き放しました。

○**石田**　映画界の方の話だと、この作品を主導したのが広島出身の岡田茂さんだとか。後に今中さんは社長になられたから、当然、広島出身の著名な方なので、お会いする機会もあったのではないですか。

○**今中**　２回会っています。広島県内のゴルフクラブの理事長なんかも務めておられると聞いていました。後に東映が松山ケンイチ主演の「男たちの大和」を制作しましたが、その時も「よろしく」と言われました。

○**石田**　尾道でもロケをして。

○**今中**　あの時も、後任社長の息子さんから協力依頼の電話がありました。

○**石田**　さすがに、その時に映画「仁義なき戦い」の話はされなかったんですね。

○**今中**　ええ。かなり前の事ですし、蒸し返してもね。

○**石田**　東映の歴史で言うと、岡田さんは中興の祖だとか。最初に大ヒットしたのがこの作品だという話になっているので、どうなのかなと思って。

映画の登場人物との接点

○**石田**　美能組長が出所した後、彼とは結局、１度も会わなかったんですね。

○**今中**　会っておりません。彼は出所して足を洗い（組織からの離脱）、堅気（かたぎ）になりました。お金はためていたのでしょうか。嫁さんも才覚のある人らしく呉市内で事業を手掛け、ホテルも経営しています。ヤクザ社会から完全に身を引けば、大っぴらに活動できます。

ずっと後になって、「中国新聞の今中という記者に一方的に書かれ、ヤクザ渡世の躓き（つまずき）はそこにあったんだ」などと言っていると聞きました。だから僕は、知己の呉の財界人に、「美能氏がそう言っているのなら、いつでも会って直接に言い分は聞く」と仲介の労を頼みました。あの時の解説記事（亀井貢・射殺事件の背後関係）がどうなのかと問われたら、僕としては「当時の暴力団担当の複数の刑事から、きちんと取材して書いた」と言うしかありません。結局、彼が「もう、ええよ。済んだことだから」と言ったとのことで、会わずじまいになりました。

○**石田**　呉の某ホテルへ足を踏み入れるのは怖くなかったですか。

○**今中**　そのホテルに行って、レストランで食事もしました。暴力団の元組員だからといって、何をやってもいけないということはありません。足を洗い、堅気（かたぎ）になって再出発するのなら、とやかく言える筋合いは無いですから。

○**石田**　後日談で言いますと、打越組の組長とか山村組の組長とかに会うようなことはあったんですか。

○**今中**　そうですね。打越組長と直接話したのは１回です。あと２回は電話で。彼は一時期、タクシー会社を経営していました。「ドライバーに乱暴な者がいる。組員を運転手に使っているのではないか」という投書が来たものだから、打越組長に直接会いました。

そうしたら、「わしが組長の顔を持っとるけん、タクシー会社もそんなふうに思うか知らんが、商売と組は区別しとるわい。うちの運転手が客に乱暴したという証拠でもあるんなら、わしも頭を下げる。今までそういうことはない」と。

もう１回は、抗争事件絡みでコメントを取ろうとした時です。「神戸の山口組と縁組をした本当

の動機は何だったのか。共政会に対抗するためだったのか」と聞きました。電話でのやりとりで要領を得ず、物別れに終わりました。

○**石田**　山村組長にも会ったことはあるんですか。

○**今中**　はい、あります。これも２回でしたが、口げんかになり物別れです。１回目は、彼が絡んでいた公営ギャンブルの宮島競艇の件です。公営だから当時の佐伯郡宮島町や大野町など自治体が運営母体になっています。山村は、その施設管理会社・大栄産業の社長に納まっていました。競艇ファンは結構多くて、はやっていたから収益もまずまずのようでした。

それで僕たちが追及。「公営ギャンブルの収益の一部が、暴力団の資金源になっている」と書いたら、「何を根拠に、あんなことを書くんか」と強く抗議して来ました。僕が電話をかけると、「電話じゃ話さん」と。そのため、こちらから出向きました。

彼なりの理屈で「わしらが仕切っているから、ファンが騒いだりせんのじゃ」などと勝手な言い分でした。「それじゃあ、あんたらは用心棒ということか」と言ったら、「そういうことはない」と開きなおり、敵対心をあらわにしました。

○**石田**　あまりいい印象を持っていない相手だと、なかなか疲れるのではないですか。

○**今中**　そうですね。しかしコメントがうまく取れなくても、言い分を聞くために面会を求めたという事実関係は大事です。取材の意図をきちんと伝え、何度も申し入れたのに先方が応じなかったという事実関係は、仮に訴訟になっても有利な論点になります。きわどい取材では、なるべく録音テープを持参するように、と弁護士さんから教わっていました。

○**石田**　テープを持ち込んだのは、キャンペーンの最中なんですか、後なんですか。

○**今中**　最中も、後もです。

○**石田**　当時の録音テープといったら、（30センチぐらいの枠を手で示しながら）確かこんなに大きいやつですよね。

○**今中**　あの頃の物は大きかったですね。だから隠し取りは無理です。やはり、テープに取らせてもらいますよと断らないといけなかった。

○**石田**　一応、断るんですね。

○**今中**　はい。断り無しに録音したら、証拠採用されなかったという判例もありますから。録音を断られたケースは、少なかったですね。しかし、相手の弁明を一言一句、漏らさず録音しても、コメントとして掲載するのは十数行です。要約には、神経を使いました。

○**平下**　録音を始めたのは、弁護士さんのアドバイスがあったからですか。

○**今中**　はい。アドバイスというか。某弁護士から、「中国新聞の今中は、わざわざ会ってやったのに、わしが言っとりもせんことを書いとりやがる」と、組幹部が漏らしていたと聞いたので。

記者の側も、聞いた事をすべて書くわけにはいかない。適当に縮めます。しかし、きちんと要約しておけば、訴訟になっても許容範囲だと認められます。デスクから「きちんとメモを取れ。メモ帳は最低でも５年間は保存しておくように」と言われていました。メモ帳の走り書きが、証拠採用された判例もあるからです。

○**石田**　やはり、かなり神経を使って取材をされたんですね。

○**今中**　はい。暴力団も、時には弁護士を立てて来ます。殺人犯でも、弁護される権利を有していますから。あれほど反社会的な行為を繰り返し、白昼に拳銃をぶっ放して、流れ弾で市民が巻き添え死するような犯行でも。「何で、あんなやつの弁護を」と思うことが、しょっちゅうありました。

広島県北の、過疎地の老夫婦が山林の売買に絡み、債務不履行ということで、家財道具や収穫したばかりのもみ米などを差し押さえられる出来事がありました。買い手は、表向きは商事会社の社長だけど暴力団関係者。「こんな事が…」とありのままを記事にしたら、弁護士から「債務不履行

なので、法律にのっとった措置だ」とクレームが付きました。

組関係者は山林を買い付けた時、「杉の立ち木は○○本ぐらいあるだろうな」と念押ししていました。老夫婦の方も「それぐらいは…」と答えていたようです。後になって、組関係者側は立ち木を数えたらしく、「調べたら本数が少なかった」と主張。違約だとして法的な手段を取りました。

近隣の住民からの投書で、この事を知りました。晩秋に老夫婦を訪ねたら、米俵にも差し押さえの赤札が張ってありました。民事訴訟の手続きを踏んだにせよ、憤りを覚えました。「こんなことが」と、ありのままを記事にしました。そうしたら弁護士から、「記者さんは正義感かもしれないが、これは適法な行為。違約だから、対抗措置を取ったまでだ」と強く抗議されました。

○石田　やはり弁護士さんが付くと、なかなか攻めにくい感じですね。

○今中　ええ。そう思いました。道義的とか、社会通念に照らして、と言ったって、法は優先されます。一時期、ある組には顧問みたいな感じで弁護士が付いていたことがあります。ただし僕たち記者の側にも、弁護士を色眼鏡で見ていた節があります。誰しも弁護を受ける権利を有していますから。

編集局報道部への異動、広島市政を担当

○石田　分かりました。では、次の話に移ります。

その後、組織の変更で社会部が報道部になっていますが、昭和40（1965）年２月に報道部、昭和43（1968）年３月に東京支社編集部、昭和46（1971）年１月に編集局報道部へと異動されています。社会部を離れた後、どういった分野で取材活動をされたのでしょうか。広島市政を担当された時の話から伺います。

○今中　はい。僕は警察担当を駆け出しから５年余り。少し長かったですね。暴力団の第２次抗争事件があったためですが、昭和40（1965）年の菊池寛賞の受賞が一区切りになりました。

「どこが希望か」と聞かれたので、「行政の分野へ」と答えました。広島市政の担当になれば、原爆・平和問題にもかかわれます。だから市政クラブへの配置転換を願い、すんなり聞き入れてもらいました。

警察担当が長かったけど、無駄でなかったと思いました。市政記者室に行ってみると、クラブにべったり張り付いている記者が多い。行政の側が資料を持ち込むので、それで「出席原稿」は書けるわけです。ただし全国紙の場合、クラブ詰めは１カ所に大抵１人。中には商工会議所なども掛け持ちしている人がいました。

効率的な取材という観点からすれば、記者クラブの効用はあります。しかし、役所がそれを逆手に取って、PRしてほしいネタ（素材）は資料を整えて記者クラブで配布する。便利な「広報窓口」なんですね。記者の側も、各部署を小まめに回らなくても記事が書けます。「持ちつ持たれつ」です。警察回りから替わって、直感的にそう思いました。資料で足りない部分は、幹事社が担当課の課長や補佐らをクラブに呼んで、補足させていました。

しかし記者には本来、公権力に対する監視の役割がありますよね。アクティブに攻めていって、配布資料には無いものを書いていくという。

○石田　記者クラブに呼びつけるんですか。

○今中　呼びつけるというか。行政もPRしてほしい面があるから、資料を整えてクラブへ来ます。各社がバラバラに聞くよりも、双方に好都合という側面はありますね。しかし、最初は戸惑いました。

僕は新参者だから、なるべく「市政の現場」へ出るよう努めました。現場に行くと、やはり施策のギャップも見つかる。市長や局長らが「あれをやりました。これもやります」と大見えを切っていても、現場では、そうなってはいなかったり、成果も表れていないことは多いんです。警察回りでは、「記事は足で書け」と口酸っぱく言われた

から、クラブから出るよう心掛けました。

市議会は「エア・ポケット」というか、庁舎が別棟なので、記者はあまり回っていなかった。だから市議会の記事は、定例会や委員会の開催時に載るぐらいでした。

それにつけても、「記者は警察回りから」というのが定着したのは、とてもよかったと思います。今は全国紙も地方紙もしかり。発表物が少ない警察回りからスタートするのは、いい仕組みだと思います。こうして広島市政を３年余り。昭和43（1968）年春、「東京で勉強して来い」と言われました。

○**石田**　市政時代をもう少し聞きたいんですが、平下君はどうですか。

○**平下**　先ほどの話で、警察回りから広島市政担当になった時、取材手法にギャップがあったと。警察で培われた手法で、そのギャップを埋める努力をしたということでした。もう少し具体的に、その手法で取材した結果、どういうことが分かったのでしょうか。つまり行政からのプレス・リリースを受け流しているだけでは、分からないようなものも当然あるわけですよね。

○**今中**　それは、投書欄などにも表れます。「役所が施策を打ち出したのに、成果が見えて来ない」などと。最近の例で言えば、「５年前の風水害を教訓に、ダムを造成して砂防措置を取ると言っていたのに計画どおり進んでいない」などと。紙面では「年次計画で進める」となっているのに、実際はそうなっていないことが多いですね。

役所の立場をおもんぱかれば、予算の制約もあるし、作業員の確保が難しいなど、幾つかの要因を指摘することはできます。しかし被災者の側からすれば、新聞で伝えられた施策はいつ実行に移され、完工はいつなのか、気になるところです。追跡報道をして、そのギャップを埋めるのが記者の役目でもあります。遅れた理由がきちんと伝われば、被災住民も納得しますから。

○**石田**　細かい話ですが、中国新聞の広島市政担当は、当時は何人ぐらいだったんですか。

○**今中**　３人から４人でした。

○**石田**　３、４人で市政全般と議会を担当されたんですね。担当の部署は決めてありましたか。

○**今中**　いいえ、部署は厳密には決めておりません。クラブへの持ち込み資料については、キャップが「これは現場に当たって、肉付けしろ」とか、「財源の見通しが甘いから、そこを確認して」などと振り分けて指示。各自が庁内を回り、問題点も探り当てて「独自ダネ」を書きました。市議会棟へも、努めて顔を出しました。定例会や委員会が無くても、出て来ている議員がいます。在室のランプがついていたら部屋を訪ね、雑談の中から、思いがけないネタを入手したことも。

議員は、選挙の地盤でもある出身地域の実情を熟知しています。役人とも、駆け引きをしていましたね。僕が部屋を出たら所管の部署に電話をかけ、「いま中国新聞の記者に、こんな話をした。聞いて来るはずだから…」といった具合です。

○**石田**　向こうは向こうで、そういうふうにするんですね。

○**今中**　そういうことですね。それで、役人との「貸し借り」みたいな関係もできるのだろうなと思いました。

大物市会議員、浜井市長、山田市長の思い出

○**石田**　当時の広島市議会では、広島市北部の任都栗（司）さん、南部の池永（清真）さんが「２大ボス」と位置付けられていましたが、この２大ボスにも、きちんとインタビューされたんですか。

○**今中**　もちろん、しています。

○**石田**　市政クラブへ配置換えになった時、真っ先に行かれたんですか。

○**今中**　そんなことはしていませんが、池永さんは僕が市政クラブに加入したことは耳にしていたようです。「今度来たのは若造だけど、警察回りが長くて、ヤーさん（ヤクザ=暴力団）とやり合ったやつらしい」と、大げさな情報として。池

永さんは早速、「一席設けたい」と、キャップを通して言って来ました。

○**石田**　池永さんは、強面（こわもて）の方だったようですね。

○**今中**　頭髪は丸刈り。眼光鋭く、見るからに荒っぽい感じでした。時には乱暴な振る舞いもあったりして。議会事務局の秘書課長を通じて会食の申し出がありました。キャップは「初対面のあいさつと言うのなら受けても構わん。飲んでも書くべき事はきちんと書く、とクギを刺しておけ」と。それで、キャップも交えて懇談しました。

もちろん、書くべきことはきちんと書いたつもりです。池永さんは再度の議長就任の際、地元・宇品町の小学校の講堂で祝賀会を開きました。公立小学校の講堂で、議長が就任祝賀会を開くなど、もってのほかだと思いました。

実は１回目の議長就任祝賀会も、ここでやっていましたが、この時は、記事になっていません。僕が書いた２度目の祝賀会は、社会面にドカンと載りました。彼は何も言って来なかったけど、酒を飲んでも記事は別、ということを思い知ったでしょうね。

○**石田**　その後、嫌がらせとかを受けたわけではないんですね。

○**今中**　全くありません。池永さんから酒席のお呼びがかかったのは、これきりです。

○**石田**　任都栗さんの方はどうでしたか。

○**今中**　任都栗さんは、池永さんとは違うタイプのボスでしたね。荒っぽい感じは無かった。しかし、強面（こわもて）と言う点では、池永さんと共通していました。

どちらも議長経験者であり、地区の人たちは最敬礼をしていましたね。「行政への陳情は、先生を介した方が手っ取り早い」と。ご両人とも、選挙対策には抜かりが無かった。手腕は、ほぼ似通っていました。「こんな議会の体質がいつまで続くのか」と思いました。時は流れて有権者も目覚め、今はもう、議会の体質も随分変わっていると思います。

○**石田**　市政クラブへ行かれた頃は、やはり古いタイプの議員が多かったということですね。

○**今中**　そうです。あの頃は一部にせよ、議員が支持者の法令違反の“もみ消し”に動いたりした時代ですから。

○**石田**　そんなことが、まだできた時代なんですかね。

○**今中**　市民・有権者の側にも問題がありますよね。何かあったら「センセイ」に頼む。選挙でお返しする、という構図です。教職員の異動なんかでも、暗躍する議員がいましたから。

○**石田**　そういうのは、普段からよく見聞きされていたんですね。

○**今中**　ええ。ほんの一部にせよ。あの頃は、教職員の側にも問題があったと思います。人事異動の際、遠隔地などへの転勤を嫌がって、地元の選出議員に「センセイ、もうしばらく今の所（学校）で」と陳情する人も。議員は「どうなるか分からんが、動いてみよう」と。それで実際に人事が左右されたかどうかは、確かめようが無かったけど。

○**石田**　そうなんですか、分かりました。今、市議会議長のことを聞いたんですが、市長にも直接インタビューするようなことはあったんですか。

○**今中**　僕は市政クラブの新参者ですが、その時の市長は浜井信三さんでした。たまたまですが、市長の長男・順三氏と僕は皆実高校の同級生。仲良しで今も付き合っている間柄です。市長も僕の事を息子から聞いていました。行政取材の初心者であることを承知の上で、快く応対してくれました。

○**石田**　そうなんですか。市長は、いきなり新参者がパッと会えるような感じではないですからね。

○**今中**　市長インタビューは、若い新参記者には敷居が高かった。キャップは、僕が市長の息子の学友であることを知っていたから、「会って来い」ということになったのだろうと思います。

○**石田**　間もなく市長が代わりましたよね。後任の山田（節男）さんはどうでしたか。

○**今中**　取っ付きにくく、違和感を覚えました。参議院議員を３期務めた方でプライドが高く、市長室の敷居が急に高くなった感じでした。夏でも三つぞろいの背広姿。僕らが夏場、アイロンの掛かっていない半袖のワイシャツ姿で記者会見に出たりすると、不快感をあらわにされました。「君、市長なんかに会う時は、きちんと服装を整えて来なさい」と叱りつけられた者も。他方、施策について具体的に問いただすと「市長は、そんなことまでいちいち承知していない」と、いなされました。

○**石田**　山田さんはオックスフォード大卒。竹下知事にインタビューした時、「非常に見識の高い人だった」と評価されていました。記者の立場としては、少し違和感を覚えたということなんですね。

○**今中**　見識は高かったのでしょうが、立ち振る舞いに違和感を覚えたということです。尊大というのか。「俺は並の市長じゃないんだ」という言動でしたから。記者クラブの連中も、あまり好感は抱いていなかったように思います。

○**石田**　そうなんですか。では、浜井さんと山田さんの政策面の相違について、気になることはありましたか。

○**今中**　浜井さんは、僕が市政クラブに加入してから半年ほどで引かれましたが、原爆の廃墟から「広島復興」を成し遂げた業績は、著書の「原爆市長」に記述されているとおりです。後継の山田さんは執務中に倒れたりして、「志半ば」で引かれた形です。共に「国際平和都市・広島」を標榜して、「ヒロシマの世界化」に努められましたが、市政全般で言えば、浜井さんの方が手堅かったと思います。

その後が荒木（武）さん。４期務められました。県議会議員からの転身。ユニークな方でした。ニューヨーク支局に勤務していた時、国連初の軍縮特別総会に出席されたので、異郷で久しぶりに再会しました。

○**石田**　その話は、またその時に。すみません、脱線してしまって。

○**今中**　はい。そうしましょう。

“ゴロツキ”新聞について

○**石田**　脱線ついでに、もう１つ聞きたいのが、いわゆる正規の記者以外に、「ゴロツキ新聞」などと呼ばれたような人たちもいたと思うんですが、彼らは記者クラブに入れたんですか。

○**今中**　記者クラブの規約に照らして、入会は認められなかったです。広島市内の、どの記者クラブへも。備後辺りでは一時期、記者室に出入りしていた人もいたようです。不定期発行のタブロイド版に「日刊○○」などの題字を付け、“廊下とんび”をしながら、好き勝手に記事を書く。それを幹部らの席に配り、手のひらを重ねて差し出すポーズをしていたのを見ています。

○**石田**　手のひらを重ねて差し出すポーズとは。

○**今中**　集金ということになりますかね。

○**石田**　そういうサインなんですか。

○**今中**　そうだと思いました。議会棟へ主に出入りし、廊下ですれ違ったら、僕にも新聞らしきものを手渡して、同じしぐさをされたことがあります。

○**平下**　なにゆえに、お金をせびるのですか。

○**今中**　購読料のつもりなのでしょうか。ある事ない事をない交ぜにして。時には脅しめいた記事も載っていました。役所の側も「どうせゴロ新（新聞）だから」とあまり目くじらを立てない。とやかく言うと、「もっと書くぞ」と威圧されかねないので。

○**石田**　そういった新聞の記者と交わることは無かったんですか。

○**今中**　はい。正規の記者クラブのメンバーでもありませんから。

○**石田**　やはり中国新聞の記者としては、そういった人たちを見て、どちらかというと苦々しく思っていたんですか。

○**今中**　よそにもあることだし、特に、どうこうという感じは無かったです。僕たちの報道に「いちゃもん」を付けることも無かったし。

○**石田**　どちらかというと、市政の弱みを握るような方向でやっていたんですかね。

○**今中**　はい。そうした面もあったように思います。

東京支社の編集部勤務

○**石田**　分かりました。では先に進めたいと思います。この後、東京支社の編集部に移られていますね。ここでは、主にどういったことをされたんでしょうか。

○**今中**　地方紙だし、ニュースはおおむね共同・時事の両通信社任せです。支社の編集部員が、ほぼ常駐してカバーしたのは総理官邸、自民党本部と一部の野党。省庁では自治省（現・総務省）、防衛庁（現・防衛省）、防衛施設庁などです。なぜ防衛施設庁かというと、中国新聞の発行エリアに米軍岩国基地や呉と江田島に弾薬庫などがあるためです。少数のメンバーだから、これらの省庁も掛け持ちでした。僕は官邸と防衛庁・防衛施設庁、自治省の記者クラブに所属しました。このほかに、手分けをして中国地方選出の国会議員のフォローをしました。

○**平下**　仕事の内容は、広島にいた時とはかなり変わりましたね。

○**今中**　そうですね。日課として必ずフォローしなければならない仕事は無かったので。国政全般は共同と時事の両通信社任せですから。僕自身、東京勤務をさせてもらったので口幅ったいですが、人材育成の狙いもありますかね。東京勤務を経験した者は、それなりのポストに就いています。

○**石田**　出世街道に乗ったというイメージですか。

○**今中**　出世とは、言えないでしょう。いずれにせよ東京勤務は、僕にとって大変役に立ちました。

○**平下**　では具体的に、東京での仕事で得たものは、どういうところなのですか。

○**今中**　得たものは、いろいろあります。防衛庁と施設庁を回ったことで、安保問題も含めて国土防衛の仕組みを詳しく知りました。自治省では、たまたま行政局長が県出身の宮澤弘さん（後に広島県知事や参院議員を歴任）でした。国が地方を統治する「行政指導」とは、こういうことなのだとか。地方紙記者にとって大変勉強になりました。

○**平下**　もう１つ、いいですか。東京にいた時のプライベートは、どんなふうに変わりましたか。家族同伴で赴任されたのですか。

○**今中**　後のニューヨーク勤務もそうですが、家族は同伴しました。東京勤務の昭和45（1970）年は、長女が３歳でした。世田谷区の千歳船橋近くに社宅があり、編集と営業の12所帯が入っていました。田舎者だから、大都市の生活に慣れるまでに、しばらく時間がかかりました。

○**石田**　では細かいことを３つほど伺います。１つ目は、いろんな省庁を回ったという話でしたが、先輩から引き継ぎはあったんですか。

○**今中**　人事異動があると持ち場替えも行われ、前任者からの引き継ぎがあります。

○**石田**　勝手なイメージですが、人脈をたどり、この人は広島出身だから話を聞いてみようとか、そんな感じだったのですか。

○**今中**　当然の事として、引き継ぎはあります。地元選出議員の動向をフォローするのは、東京編集部の大事な役割なので、紹介もしてもらいます。

○**石田**　官僚ですと、例えば粟屋（敏信）さんとか井内（慶次郎）さんなど広島県出身の方はどうでしたか。

○**今中**　地元出身の議員や官僚のマークは大切な役目ですが、僕が赴任した時、粟屋さんは既に引いておられました。大蔵省（現・財務省）の宮澤喜一さん、自治省（現・総務省）の宮澤弘さんたちとは、取材でなくても会うよう心掛けました。

池田勇人さん、岸信介さん、佐藤栄作さん、宮澤喜一さん、竹下登さん、安倍晋三さん、そして現在の岸田文雄さんなど中国地方選出の総理の場合は、「総理番」を決めて特別にフォローしております。

○**石田**　閣僚とか高級官僚レベルの人と接触を持つというのは、たまたまという感じなんですね。

○**今中**　東京支社の編集部は少ない陣容ですが、中国地方の出身者は努めてフォローしています。大事なニュースソースでもありますから。

○**石田**　最初から狙っているわけではないんですね。この方からは積極的に情報を取ろうとか、そういうのはないわけですね。

○**今中**　少人数の駐在記者が、大東京で何もかも追い切れるわけはない。朝・毎・読など全国紙は、東京政治部に数十人の記者を抱えています。地方紙の東京駐在記者がカバーできる範囲は限られています。

○**石田**　やはり東京は取材エリアも広いし、人口も多いから大変ですよね。

○**今中**　でも、広島でなら抜かれる（特オチ）と叱られますが、東京では、仮に中国地方絡みのことであっても、きつくは言われなかった。後追いの指示はありましたけど。

○**石田**　「中国新聞百年史」に、昭和44（1969）年５月に米軍基地視察のため沖縄へ派遣とありますが、どのような経緯だったのですか。

○**今中**　防衛庁と防衛施設庁を担当していた時のことです。在日米軍の司令部は東京都下の横田基地内にありました。広報部長は、港区六本木の防衛記者クラブへもよく顔を出していました。クラブの幹事に「米軍の極東アジア基地を見学しないか」と提案があり、記者クラブもすんなり受けて、異例の基地視察旅行が実現しました。沖縄の嘉手納、韓国の金浦、台湾の金門島、フィリピンのクラークなど７基地を見て回りました。

○**石田**　「百年史」には沖縄と書かれていますが、極東の基地をすべて見て回ったんですね。

○**今中**　すべてではありません。

○**石田**　当時はベトナム戦争の真っ最中です。

○**今中**　１週間の日程でしたが、基地内を丸ごと見学させてくれたわけではありません。

○**石田**　わざわざ「百年史」の年表にも書かれていたので、核配備の問題などで特別に取材したとか、そういう話かと思ったんです。そういうことではなかったのですね。

○**今中**　はい、そうです。

○**石田**　すみません、勝手に深読みしてしまって。

○**今中**　米軍が極東アジアに配置している「戦力」を目の当たりにしたという点では、参考になりました。F-４ファントム新鋭機も、初めて見ました。どの基地も割と市街地に近く、広大な平地を占拠しているという印象でした。特に沖縄では、そんな思いを強くしました。

○**石田**　そうですね。だいぶん返還されましたが、当時は、まだいっぱいあった頃ですからね。ちなみに、こういった形で全国紙の記者と付き合う機会も増えたのではないかと思います。今でも付き合いが続いている方はおられますか。

○**今中**　もう互いに、いい年になりましたが、防衛記者会のメンバーとは視察旅行をしたこともあって、長く付き合いました。編集局長になった時、防衛記者会のOB会に招かれ、六本木周辺のホールで祝ってもらいました。当時の広報課長らも出席して盛り上がりました。

○**石田**　わざわざ招かれて。

○**今中**　はい。防衛庁のクラブ仲間とは、結びつきが強かったので。

○**石田**　招待されるぐらいだから、情報交換もされていたのでしょうね。

○**今中**　防衛庁と施設庁を掛け持ち、僕もそれなりに情報を持っていました。思い出深いのは防衛庁の陸上幕僚監部です。陸上自衛隊の元締めの部署です。大部屋で武官と話していると、幹部が僕を手招きします。「あんた、広島じゃね」と言うわけです。「そうですが、どうして分かったんですか」と聞き返したら、「あんたは広島弁。分か

るわいの」と言われましてね。戦前、広島には陸軍の第５師団司令部がありました。その流れかどうか、陸幕には広島と縁のある高官が結構いました。

○**石田**　幼年学校もありましたからね。

○**今中**　東京勤務の時は、なるべく広島弁を隠そうとしましたが、アクセントで分かるんでしょうか。

○**石田**　やはり恥ずかしいから、広島弁は隠しておられたんですか。

○**今中**　そうでしょうね。ポロッと「ほいじゃがねえ」とか「えっと、いじめんさんなや」と言ったりすると、ニヤッとされることが多かったです(笑い)。だけど、それで防衛庁の陸幕幹部らとも親しくなれたし、記事ネタも何回かもらいました。

○**石田**　在日米軍岩国基地について、何か特ダネを取られたという話を伺いたいんですが。

○**今中**　これは、防衛施設庁の中堅幹部がポロッと漏らしてくれたネタです。「お宅は山口にも新聞を出しているよね」と言われるから、「山口県は広島に次いで発行部数が多いんです」と答えました。「うーん、これは言ってもいいんかな」とつぶやきながら、自衛隊と共用の米軍岩国基地を、丸ごとフェンスで囲む計画があると、ほのめかしてくれました。その頃、岩国基地に新鋭戦闘機を配備して、防空機能を強化するという情報がありました。既存の金網では「目隠し」できないから、フェンスで丸ごと囲むという計画だと受け止めました。記事を送ったらトップの扱いになりました。結果として、計画は実行に移されませんでした。

○**石田**　中国新聞の社会面記事ですね。

○**今中**　はい。特ダネです。中国新聞の友好紙へも送り、扱われました。後追いした全国紙もあり、記者クラブで「あんたは、なかなかやるね」と言われました。

○**石田**　今中さんは「やった」という思いでしょうが、他紙の担当記者は屈辱的だったでしょうね。

○**今中**　そうかもしれません。電話でデスクに叱責されて、「中国新聞は岩国に支局があり、ネタ元はそっちのようです」などと、言い訳をしていた人がいました。

○**石田**　そうなんですか（笑い)。分かりました。

編集局報道部での仕事

○**石田**　次に行こうと思います。昭和46（1971）年に東京支社から編集局報道部へ戻られましたね。

○**今中**　はい。しばらくは県警本部や県政クラブのキャップを務め、次いで報道部のデスクになりました。

○**石田**　キャップは前線にいるわけですよね。

○**平下**　県警本部や県庁の記者クラブなどに。

○**今中**　はい、クラブのキャップですから前線に。

○**石田**　クラブ詰め記者をまとめて、指揮する立場になるんですね。

○**今中**　そういうことです。

○**石田**　この間に、特に思い出に残っているようなことはありますか。県警、県政クラブを通算すると５年ほどで、割と長かったように思いますが。

○**今中**　何か、大きな出来事はあったかなあ。かつては「大判小判事件」のような事がありましたけど。

○**石田**　あれは昭和30年代後半の話ですよね。

○**今中**　僕はあの頃、警察回りでした。刑事事件に発展すれば、取材でかかわることになるかもしれないと思いました。張本人は当時の県議会議長の中津井真さん。知事の大原博夫さんも、巻き添えを食った形で、３期目の半ばで退任しています。

○**石田**　「８者合意」は昭和60（1985）年頃の話になりますね。

○**今中**　８者合意の問題は報道部長の頃でした。行政が、県教組や部落解放同盟県連などと連携し

て「解放教育」に取り組むという、全国でも例のない組織でした。一方で、学力の低下や学校長の自殺など「負の側面」も顕在化したため、国会でも取り上げられました。文部省が「是正指導」の名の下に係員を現地に派遣して調査に乗り出し、後に８者協は解散しました。取材には殊のほか、神経を使いました。

○**石田**　広島市内の本川沿いの原爆スラムを強制撤去したのが、この時期でしたかね。山田市長の下で広島市が広域合併に着手し、荒木市長にかけて政令市になっていきました。こういった点で何か思い出はありますか。

○**今中**　そうですね。原爆スラムの撤去も忘れ難い出来事です。通称「原爆スラム」は、中区基町の本川沿いに密集していたバラック群の通称です。広島市政担当になった時、この地区に潜り込んで６回の連載記事を書きました。バラックは、ざっと900軒。原爆被災者や復員兵士、疎開中に家を失った人々、敗戦の巻き添えになった在日朝鮮人たちが、原爆で焼け残った板切れやトタン板などをかき集めて急造した、文字どおりのバラック群です。

法的に言えば違法建築物であり、治安や風紀、衛生上の問題点が多かった。市が強制撤去するとなると、代わりの住居を提供しなくてはならない。持て余していたという感じです。市の担当部署は、口には出さなかったけれど「火事でパッと焼けてくれれば…」などと思っていた節もあります。

そしたら本当に火事が起きた。２度の大火でバラックは完全消滅したのです。河岸の、車道もない場所だったから、消火活動もままならない。短時間で燃え尽きました。「市役所に“火付け班”が編成され、彼らの仕業ではないか」などといった、悪い冗談が流布されました。

○**石田**　これはオフレコですね（笑い）。

○**平下**　出火原因については、追及されなかったのですか。

○**今中**　警察や消防は一応調べたようですが、原因は分からずじまい。僕たちは、台所の火の不始末による失火と見ました。根拠も無いのに「放火の疑いもある」などとは書けません。

○**石田**　先ほど、「潜り込んだ」と言われましたが、どうやって地区に入ったのですか。

○**今中**　内輪意識が強くて、怖くて近寄り難い雰囲気でした。電線を勝手に引き込んだり、密造酒を作っている者もいました。密造酒の疑いで警察や税務署がガサ入れ（家宅捜索）した時は、裏口から板張りの通路を使って隣の建物に抜け出せる“迷路”が張り巡らしてあり、びっくりしました。住民同士の結びつきはとても強く、口も堅かったですね。

○**石田**　記者として信用されたから、奥まで入れたということなんですか。

○**今中**　どうでしょうか。いったん中に入り込めば、話は聞けました。各戸が“迷路”でつながっている。裏木戸から裏木戸へと。どの家にも施錠が無かったので驚きました。

○**石田**　住民は、結構話してくれたんですね。

○**今中**　はい。「どぶろく」を作っている人が何人もいました。密造なので、便所の横に容器の甕（かめ）を埋め込んでね。勧めてくれたけど飲めなかったです。

○**平下**　原爆スラムが無くなってよかった、と思われましたか。

○**今中**　はい。火災が怖いし、不衛生なので疫病の心配もありますから。地区全体が不衛生な感じなんです。特に問題なのは、トイレですよ。トイレと言えるかどうか。本川に面した家なんかは、ウンチをしたら、ポタンと川に落ちるような造りです。衛生面でも大問題だと思いました。

○**石田**　あと、この時期は全国的な話で言うと「オイル・ショック」がありましたね。日本経済が、がくんと一回り落ちた時期です。不況で困っている業者の取材とかは、されなかったんですか。

○**今中**　第１次オイル・ショックでしたね。県政クラブに詰めていた時です。商工労働部の担当課

長らが１日に２～３回も記者会見をしました。

○**石田**　記者会見とは。

○**今中**　地方経済への波及とか、トイレットペーパーが店頭から消えて県民が動揺しているとか、そういったことで。

○**石田**　今中さん自身、オイル・ショックでトイレットペーパーを買い占めたとか、奥さんに頼まれて買いに行ったとかは。

○**今中**　それは無かったです。内心では、大変なことだと思いましたけど。

取材記録の残し方、記事の作り方

○**石田**　分かりました。そういった形でサブキャップやキャップを歴任し、今度は後輩の指導に当たる側になったと思いますが、苦労もありましたか。

○**今中**　新聞記者の仕事を、難行（なんぎょう）だとは思っていません。長かった警察回りの経験に照らすと、事実関係をしっかり調べ、その裏付けをきちんと取る。批判する時は必ず相手の言い分を聞く。人権とプライバシーには特段の配慮をする。犯罪や非行とかかわりの無い親族のことなどには触れない。こうしたことを、きちんとわきまえれば、記者の仕事は務まります。僕なりに付け加えれば、「書くべき事を、書くべき時に臆すること無く書く」というスタンス。これが保てれば、記者として十分に通用すると思っています。

警察回りで、いつも「人権との接点」に立っていましたが、きわどい記事を書いた割には、ほとんど訴訟沙汰にならなかった。きちんと裏付けをしていたからだろうと思っています。ニュースソースは可能な限り秘匿しますが、いよいよとなれば「○○部署の責任者から取材した。証拠のメモもある」と釈明します。

弁護士から何回か警告は受けましたが、その際には証拠のメモなども提示し、きちんと弁明しました。鉛筆書きだと文字が消えてしまうことがあり、もっぱらボールペンを使いました。「後で（メモに）付け加えたのではないか」と追及されたこともありますが、「それなら鑑定でも、何でもして…」と開き直りました。

○**平下**　証拠を保存するとか、取材の記録を残しておくということですが、メモ帳など関係書類はたまっていきますよね。どのように整理されていましたか。

○**今中**　きちんとメモを取るのは鉄則です。当時の社会部長が、「時効を頭に入れておくように。詐欺事犯なら何年、強盗なら何年など、それぞれ時効がある。その時効を目安にしろ」と。最低限、時効が成立するまではメモ帳を保存しておくようにという教えです。ですから、それは守りました。貴重な証拠物件ですから。

○**平下**　刑事事件の場合は、時効と関係すると思いますが、一般の社会問題とかは時効は無いですよね。

○**今中**　はい。社会問題には時効などありません。

○**平下**　では、いつ終わるか分からないような問題に関して取材されたメモなどは、どのように管理されていたのかなと。ひたすら、ため込んでいくわけですか。

○**今中**　ええ、なるべく残すよう心掛けました。家に持ち帰って年次別に区分けし、箱詰めにしていました。

○**石田**　ちょっと話が変わって、今、1960年代から70年代にかけての話をされているんですが、記事の書き方とか、記事の送信方法も変わってきますよね。今中さんの新人の頃は、警察署内の公衆電話が送稿手段だったと聞きましたが。

○**今中**　これは先だっても話しましたが、公衆電話で本社の機報部に原稿を吹き込み、機報部の速記係がデスクに届けるという手順です。

○**石田**　デスクはそれに赤ペンを入れて、出先の記者に再確認するという流れだったと思うのですが。

○**今中**　そのとおりです。原稿は、署内の公衆電話で機報部の速記係に送る。速記係がデスクへ届ける。一呼吸置いて、「原稿はOKですか」とデ

スクに確認を取る。デスクは「これでいい」、とか「この要素が足りない」とか。

○**石田**　県警記者クラブのサブキャップやキャップをされた頃と今とでは、送稿方法もだいぶ変わっていますか。

○**今中**　はい。僕の警察回りの頃は、もっぱら公衆電話からの送稿でした。しばらくして、県警本部と県政、市政、商工会議所などの主だった記者クラブには直通電話が敷かれました。（腕をぐるぐる回すしぐさをしながら）こうやってハンドルを回すとリーンと鳴って先方が受話器を取る。専用線だから、本社のデスクとしか通じませんが、それでも随分と便利になりました。

急ぎの原稿でなかったり、企画記事などは報道部付の学生のバイトさんが、自転車で記者クラブまで取りに来ました。今は原稿も写真も、携帯しているノート・パソコンで送れます。隔世の感がありますね。

○**石田**　そういった過程を経て、記事の書き方なども指導されていったんですね。

○**今中**　ええ。出先の記者が書いた原稿は、そのままデスクへ送るわけではありません。記者クラブでまずキャップがチェックする。キャップが第１関門です。キャップが手直しした上で、デスクへ送り届けるという手順です。

○**石田**　原稿をチェックしていて、イラっとすることは無かったですか（笑い）。

○**今中**　ありましたね。「どうしてこんな肝心なところが抜けているのか」と声を荒らげたことも何度か。でも、駆け出しの頃は僕自身もそうだったわけだから。先輩の某デスクのように「これは記事になってない」と怒って、原稿をごみ箱に投げ捨てるようなことは、していません。

○**石田**　そうだったんですか。

○**今中**　キャップになった時、あの時の胸の痛みを覚えていたから。「ここを直せ。ここはもっと補足しろ」と、細かく注文は付けましたけど。

○**石田**　余談ですが、東京支社に赴任する前は本社が胡町で、戻ってきたら土橋のピカピカの新社屋ですね。初めて足を踏み入れた時の感想は。

○**今中**　編集局は４階に位置し、一番気持ちが良かったのは、川を隔てて平和公園が見渡せることです。胡町の旧社屋は正面が電車通り、横の流川筋は飲食街。あまりの違いに、戸惑いを覚えました。

○**石田**　飲みに行ったり、食べに行ったりで困ることは無かったですか。

○**今中**　はい。土橋周辺にも飲食店は結構ありますからね。胡町時代だって、クラブや高級料理店に行っていたわけでもない。胡町時代は夜間、流川通りに面して屋台が立ち並び、夜勤の社員は間食にラーメンを食べていました。

○**石田**　旧社屋を離れたことで、寂しさとかは無かったですか。

○**今中**　僕は無かったですね。引っ越しの時は、たまたま東京勤務だったし。

○**石田**　では、次に進みたいと思います。東京支社の編集部次長のポストはニューヨーク特派員絡みの話のようなので、これは後で聞きたいと思います。

連載企画「ヒロシマ二十年」について

○**石田**　昭和40（1965）年秋。連載企画「ヒロシマ二十年」が新聞協会賞を受賞していますね。これは、その後の原爆報道の基礎を築いたと評価されています。中国新聞の「２大特徴」は、原爆とカープ報道だというふうに言われています。その原点となる企画だと思いますが、当時は警察の分野にいて、こうした連載企画が組まれたことを、どんなふうに見ておられましたか。

○**今中**　同じ職場で働く同志です。みんな頑張っているなあと思いました。僕たちは暴力団抗争の取材に明け暮れていたので、こちらにしか頭が回らなかったというのが本当のところです。

○**石田**　今は、新人記者研修の一環として、平和記念式典に出席させるとか、そういった意識付けをされていますよね。当時は、そういうのはまだ無かったんですか。

○**今中**　ええ。無かったです。型どおり入社式はありましたが、簡単な研修の後、持ち場に配属されました。僕は文化部志望だったのに社会部へ。持ち場に指定された西警察署へ行ったら、浅野温生先輩が待ってくれていました。東署には河田茂先輩がいて、それぞれ署長以下の幹部に引き合わせてくれました。しばらくして浅野、河田の両先輩は別のセクションに移られました。バトンタッチみたいな感じでしたね。

○**石田**　個人的に興味があるのは、中国新聞に入ったら必ず、若いうちに一度は原爆問題を担当させるという暗黙のルールがあったのかどうかです。

○**今中**　それは無かったです。僕の同期は編集に９人いて、政経部、社会部、文化部、校閲部にそれぞれ配属されました。だけど、後に原爆・平和の取材にかかわったのは僕を含めて４人です。

○**石田**　今中さん自身、やはり原爆問題にもきちんと取り組んでおかなければ、と思ったきっかけはあるんですか。

○**今中**　暴力団抗争の取材が一区切りついた後、広島市政クラブを希望したのは、市政を担当すれば原爆・平和問題にかかわれると思ったからです。

○**石田**　最初に、どんな勉強をされたのでしょうか。企画物や関連の書物を読むとか。

○**今中**　最初にやったのは、諸先輩が書き継いでいる原爆・平和報道の記事に目を通したことです。本社の資料部には、原爆関係の記事と文献が相当あります。被爆者の体験記なども。読んで学習し、諸先輩にも教えを請いながら原爆・平和報道にかかわらせてもらいました。

○**石田**　資料室は、記事を書く際にかなり役立つんですか。

○**今中**　はい。広島大の文書館などに比べたら、ちゃちなものかもしれないが、原爆文献や新聞の切り抜きは相当あります。

○**平下**　では後輩の記者たちが、特定の問題について勉強し直すというのも可能なわけですね。

○**今中**　資料部へ行けば、原爆関連の大抵の記事は読めます。僕の頃はスクラップ・ブックに張り付けてありましたが、今はすべてマイクロフィルム化されていて、パソコンでも読めます。

○**石田**　そうですね。データベースで引けますもんね。

○**今中**　僕らの時は切り抜きに頼るしかなかった。

○**石田**　でも、きちんと整理されているから、何かあったら、まず資料室へ行って確認できるんですよね。

○**今中**　はい。県警や県政、市政クラブなど各自のセクションでも関連記事はスクラップ帳に張り付けていますが、スペースは限られていますから。

○**石田**　結構な量になりますよね。

○**今中**　古い資料は廃棄処分せざるを得ない。夕方にひと息ついたころ、クラブで切り抜きをするのは新人の役目でした。

○**石田**　資料室で調べる場合、自分で一から調べるんですか。それとも専任の職員がいて、その方に聞いて探されるんですか。

○**今中**　出先から電話で聞いたりする場合は、まず資料部員に「○○年○月の事件だが、切り抜きはあるか」と確かめます。項目ごとに時系列で分類してあるから、すぐに答えてもらえます。ただし、当時はコピー機もファクスも出先の記者クラブには無かったから、資料部まで足を運ばなければならなかった。

○**石田**　ちょっと話は戻るんですが、例えば暴力団取材の場合、そういった切り抜きはかなり役に立ったんですか。

○**今中**　ええ、役に立ったというより、無くてはならない場合の方が多かったですね。

○**石田**　というのは。

○**今中**　時系列で整理されているので、素早く対応できますから。

○**石田**　暴力団抗争の追跡取材をされていた頃、暴力団関連でまとめたスクラップ・ブックはあっ

写真７　新球場建設「たる募金」贈呈式
（平成17年11月23日）
左は秋葉忠利広島市長。
中国新聞社所蔵

たんですよね。

○**今中**　もちろん、資料部にはあります。一線の警察署には記者室も無かった時代だから、スクラップ・ブックの置き場所などありません。本社の資料部へ駆け込むしかなかったです。

○**石田**　今みたいにインターネットなど無い時代だから、昔の事件や事例を調べるのは大変でしたよね。

○**今中**　そうでした。

○**石田**　分かりました。「ヒロシマ二十年」報道に関連しますが、中国新聞100年史によると、この企画を先駆けとして昭和40年代に特別取材班方式が取られ、次々に大きな成果を上げていったと書かれています。「瀬戸内海の公害」とか「大規模開発のひずみ」、「中国山地の動物」とか。そういう形で各部をまたいだチーム編成をし、取材する方式ができ上がって、いろんな成果が出たとされています。特別取材班の方式は、今中さん自身は経験されましたか。

○**今中**　かつての暴力団抗争の取材では、特別取材班を組んでいないので経験はありません。

○**石田**　そうなんですか。先ほどの話ですが、県警や県政のキャップをされた時も、そういった特別取材班は設けられなかったんですか。

○**今中**　そうですね。連載企画などで取材班は幾つか組まれてはいますが、なぜか僕は、特別取材班とは縁が無かった。

広島カープの初優勝、新球場建設たる募金とのかかわり

○**石田**　細かい話ですが、広島の人間として聞きたいのが、昭和50（1975）年のカープ初優勝の思い出について。

○**今中**　初優勝を決めたのは10月15日のことでしたね。ジャイアンツの本拠地・後楽園球場で。この日はたまたま福山に出張していました。携帯ラジオで戦況を聴きながら、快速便で広島に帰りました。優勝決定で興奮し、広島駅に着いて会社へは上がらず、紙屋町周辺で歓喜の渦に身を置きました。

○**石田**　会社へは上がらずに（笑い）。

○**今中**　ええ、上がらなかった。広島駅に着いたら、どこもかしこも、ざわついていました。この光景をまぶたに焼き付けておこうと、会社に上がらなかったんです。

デスクも「社へ上がらなくてもいい」と言い、その代わり「社会面に使えそうな雑感を取って電話で送れ」と。歓喜の渦の中で、周りの人たちにあれこれ聞くものだから、記者だと分かったのでしょう。「あんたは記者さんか。わしの話を記事に入れてくれや」などと。コップ酒をあおっているから、みんないい調子です。まさに、興奮のるつぼでした。

遅くなって編集局へ上がりました。執筆も紙面の整理も一段落していて、運動部や整理の連中が祝杯を挙げていました。

「球心」のタイトルでコラムを書き続けた津田一男先輩は目を赤くしていました。「真っ赤な、真っ赤な、炎と燃える真っ赤な花が、いま、まぎ

れもなく開いた。祝福の万歳が津波のように寄せては、返している…」という名文は、中国新聞のカープ報道史に刻まれています。拡大コピーした原稿が運動部の壁面に、しばらく張り付けてありました。

○**石田**　直筆の原稿が、ですか。

○**今中**　ええ。涙ぐみながら、記事を書かれたと聞いています。僕も根っからのカープファン。駆け出しの市内３署回りの時、西署クラブを本拠にしていました。旧市民球場に近く、カープが逆転したりすると、歓声が聞こえて来るんです。７イニング以降になると、“顔パス”で球場に入れてもらったことも。カープは、とても身近な存在でした。今もですが。

先代の松田耕平オーナー、息子の松田元（はじめ）現オーナーにも親しくしてもらいました。元（はじめ）オーナーは、ぶっきらぼうな感じもしますが、根は優しくて、とても律儀な方です。弱かった頃にも変わらず支援してくれたファンを、とても大事にしています。「市民球団」ということで、市政への貢献も常に念頭に置いておられます。

旧市民球場時代には、ネット裏の小部屋で何度も観戦させてもらいました。秘書さんが差し入れてくれるコーヒーを飲みながら。

○**石田**　親しく付き合われたんですね。

○**今中**　新球場の建設が具体化しそうになった時、旧市民球場の建設の時の「たる募金」の話が出て、「平成のたる募金」をやってはどうか、ということになりました。在広の新聞・テレビの11社が参加して募金委員会が発足。地元紙ということで僕が募金委員会の世話役を務めました。

たる募金で１億円近く集まりました。１円玉も、１千万円近かったというから、老若男女を問わず賛同してくれたのでしょう。デパートなどにも置かれた募金箱には、つり銭や学童たちが投げ入れる１円玉も多かったらしく、担当者は忙しくしたようです。オーナーからも感謝され、球場でのセレモニーで、僕から当時の秋葉忠利市長へ寄付金の目録を手渡しました。

○**石田**　たる募金をしたらどうかというのは、メディアの側からの提案ですか。

○**今中**　メディアの側からだったと思います。社内で報道や運動部長たちと、「財界からの寄付金もだけど、市民球団の生い立ちからして再度たる募金という手法も…」と話した覚えがあります。

○**石田**　今中さんは当時の社長。社内でも一気に盛り上がった感じですね。

○**今中**　そんな経過だったと思います。放送各社は試合の実況中継でも球団と深いかかわりがあり、社長レベルで賛同を得ました。

○**石田**　松田元（はじめ）オーナーとは、いつ頃からの付き合いになるんですか。

○**今中**　そうですね、ご尊父の松田耕平さんが自動車メーカーのマツダにいらした頃からです。耕平さんは、マツダ（当時は東洋工業）から引かれた後、カープ球団と広島エフエム放送の社長になられました。僕が社長に就任した時、わざわざ会社に来て祝意を表してくれました。

○**石田**　今中さんは、耕平さんからも信頼されていたんですね。

○**今中**　信頼と言うのかどうか。何かにつけて、互に世話になっているからでしょう。「カープのことなら中国新聞」などと、新聞のPRもさせてもらっています。

○**石田**　たる募金なんかも、中国新聞だからという思いで見ていましたが、お話を聞いていると人間関係も、かなり濃密だったんですね。

○**今中**　それは、あったかもしれません。

○**石田**　分かりました。切りがいいので、今日はここまでにしておきます。次はニューヨーク支局長時代からということで。

○**今中**　はい。分かりました。

（終了）

第４回
ニューヨーク支局

ニューヨーク支局への赴任

○**石田**　今日は第４回です。よろしくお願いします。まずはニューヨーク支局に行く前、東京支社の編集部次長に赴任された時の話から。

○**今中**　東京支社の編集部次長になったのは、ニューヨーク支局に赴任する準備のためです。愛知県の中日新聞社とは友好・提携関係にあります。中日から「中国地方のブロック紙なのだから、特派員を１人ぐらい出したら」と誘いがありました。トップ同士の話し合いで、ニューヨークへ特派員を出すことになり、僕が２代目の支局長ということです。

２代目は誰だろう、と社内でうわさになりましたが、なんと僕が指名されたのです。うれしいような、戸惑いのような。でも、こんなチャンスはめったに無いので、「お受けします」と。その準備のために、編集委員の肩書のまま、中日新聞東京本社の外報部で研修を受けました。

○**石田**　身分は中国新聞の東京支社員ですが、実際は中日の東京本社へ詰めておられたんですね。

○**今中**　はい。およそ半年間、ニューヨーク支局の経験もある外報部のデスクらから、向こうでの取材対応、家族同伴なので子どもの教育問題などについて、手ほどきを受けました。

支局は中日の特派員と１対１の関係です。局舎はマンハッタンの５番街にあり、相携えて３年間、駐在しました。

○**石田**　国内で記事を書くのと、海外で記事を書くのとでは、当時はどのように違ったのですか。

○**今中**　何しろ赴任したのは昭和53（1978）年のことですから、今のようにパソコンで原稿が送れる時代ではなかった。テレタイプでカシャカシャと印字ボタンを押すと、原稿が紙テープに打ち出されて送稿する仕組みです。長文だと時間がかかるため、企画物などは近くの中央郵便局から速達便で本社へ郵送しました。

○**石田**　原稿の送り方以外で何か違うことはありましたか。校正はどうされたんですか。

○**今中**　テレックスは中日・外報部との専用線になっていたので、中国新聞宛ての僕の原稿も、中日の外報部にしか送れません。原爆・平和関連など中国新聞宛ての急ぎのニュースの場合のみ、テレックスで外報部に送稿。中国の東京支社編集部へ届けてもらいました。

普段の一般ニュースは共同・時事の両通信社が送稿します。本社の編集局デスクからは「中国新聞にふさわしいネタを探して、書いてくれたらいい」と言われていました。当然、反核・平和報道絡みになりますよね。このことは、すごく意識しました。地方紙の記者なのだから、「草の根自治」の原点も見て帰りたいという思いが強く、これにも力点を置いたつもりです。

○**石田**　写真などは、どうされたんですか。

○**今中**　写真が要るような原稿は、すべて本社への郵送です。速達便だと４～５日ぐらいで届きます。幾つか企画をやりましたが、原稿に写真を添えて郵送しました。

○**平下**　写真は今中さんが撮られたのですか。

○**今中**　企画物に添える写真は、ほとんど僕が撮りました。「マフィア」の企画物などでも。

マフィアの取材

○**石田**　マフィアの企画もやられたんですね。

○**今中**　はい。10回の連載企画をやりました。企画に添えた写真も、半分は僕が撮った物です。記事とマッチするような写真が撮れない場合は、支局に近いAP通信社に行って探しました。APは共同通信と提携しています。「共同通信加盟の中国新聞社の特派員だ」と告げると、応じてくれました。「マフィアの取材を試みている。こういう写真はないか」と言うと、写真の保管庫に案内してくれ、「自分で選べ」と。マフィアの項目もあり、その中から選んで複写させてもらいました。

マフィア
米組織暴力の実態
≫1≪
仮面
26のファミリー
実業界にも
世界最大の企業？

写真８　連載記事「マフィア 米組織暴力の実態」
（『中国新聞』昭和53年10月13日）
中国新聞社所蔵

（関連記事のコピーを示しながら）犯行現場などは提供写真ですが、それ以外は、僕が夜の繁華街などへ出掛けて撮った物です。

○**石田**　「今中特派員撮影」とありますね。

○**今中**　はい。このマフィア企画をやろうとした時、本社の局デスクに相談したら「危険を伴うんだろう。やめたら…」と。

ニューヨーク市警の本部を訪ね、組織暴力団対策部長に会いました。「取材は自由だけど、危険も伴うぞ」と。「日本で暴力団の取材にかかわった。マフィアのことも知りたいので」と懇願しました。部長は「マフィア担当を長く務めた退職警官がいる。彼に渡りをつけてやるから、ガードしてもらえ。その代わり日当が要るぞ」と。

局デスクに「やっぱり取材したい。退職警官をボディーガードに付ける。費用は取材経費の枠内でやるから」と主張しました。「やめたら…」と、なお言われましたが、思い立った企画なので、ガード代は自分で負担して、10回の連載を書き上げました。

連載は、後に警察庁の捜査２課長の目に留まったらしく、ニューヨーク支局に手紙をくれました。「特派員で、こんな企画をされたのは初めてではないか。広島で暴力団の取材に当たられたということだが、さすがです」と書いてありました。

○**石田**　中国新聞の記事だけど、警察庁の方も目を通されたんですね。

○**今中**　ええ。広島県警の担当部署が、切り抜きを送ったようです。

○**石田**　お金の話で恐縮ですが、取材費は出せないというのは、円とドルの関係で、すごく費用が掛かるからですか。

○**今中**　費用面ではなくて、危険も伴う取材だからだと思います。ガード役の元警官に支払ったのは日当50ドル。当時の円換算で１ドルは180円くらいだったでしょうか。２週間付き添ってもらったから取材費は結構かかったけど、忘れ難い取材です。

○**石田**　１日50ドルですか。結構ですね。

○**今中**　でも、やはりガードを付けてよかった。単にガード役ではなく、その筋への道案内もしてくれました。ただし、「誰と会っても、ニュースソースは絶対に明かさない」と厳しい条件が付きました。マフィアの元幹部にも会え、名前は聞きましたが、絶対に名前は出すなということで、それは了承しました。暴力団の組織や行動とは、かなり違うことも分かって、いい勉強になりました。

○**石田**　マフィアの本部みたいな所まで、入って行かれたんですね。

○**今中**　いいえ。実はマフィアの本部は、頻繁に居場所を変えているようでした。本拠地は昔ながらのシカゴだと思っていたのですが、ニューヨークのマンハッタンにあることを知りました。本拠地を替えるから、ニューヨーク市警も掌握し切れていない感じでした。

○**石田**　ではトップでなくて、その下の幹部あたりに取材されたんですか。

○**今中**　そうです。ガードしてくれた元刑事が知っている人物たちです。「ニュースソースは秘匿する」と確約。結構、突っ込んだ取材ができました。

○**石田**　マフィアの連中と会って、日本の暴力団と似ていると思われましたか。

○**今中**　いいえ、随分違いますね。

○**石田**　どう違うんですか。

○**今中**　日本の暴力団、例えば共政会の組員なんかは、夏場は、流川通りを七分袖のシャツから入れ墨をちらつかせ、短パン姿が多かった。（肩で風を切るまねをしながら）粋（いき）がっていたというのか、胸に共政会のバッジを付けて、大手を振って歩いていた。しかしマフィアは、マンハッタンの５番街ですれ違っても、とてもマフィアの構成員には見えません。

○**石田**　見た目では分からないですか。

○**今中**　ええ。だからマフィアの方が怖いと思いました。「俺様はマフィアだ」と格好をつけたりせずに、水面下で暗躍する。端的に言えば、そういった感じです。

○**石田**　話をしてみて、彼ら独特の言い回しとか、しゃべり方とかはあるんですか。

○**今中**　なまり（訛り）はあるみたいでしたが、さほど気取った様子も見せず、企業の経営者かと思わせるような人物もいました。マンハッタンの中心街やウォール街周辺に、どういう店があって、どんな商売をしているかを完全に掌握しているようです。金品を巻き上げる時も、ちゃんと相手を見極める。法の網をかいくぐり、悪事を働く者たちを標的にするんです。だから表面化せず、訴訟沙汰にもなりにくいと聞きました。

日本のヤクザは、なりふり構いません。抗争になれば、市街地のど真ん中で拳銃を撃ち合う。流れ弾で、一般市民が被害に遭ったこともありますが、マフィアは違っていますね。「深く、静かに」といった感じでした。

○**平下**　連載企画の中に、「侵食の度合いと土壌の肥沃度」という表現があります。「土壌の肥沃度」というのは、どういうことですか。

○**今中**　ニューヨークのマンハッタンは、マフィアにとっては「金（かね）のなる木」だと思いましたね。５番街には、ブランドショップがずらり。裏通りに入ればピープショー（のぞき部屋のこと）あり、スロットマシンあり、麻薬・覚せい剤の密売所らしきものも。資金源がゴロゴロしている感じでした。

○**石田**　逆に警察の方はどうでしたか。

○**今中**　わずか３年余りの滞在ですから、知ったか振りはできませんが、市警本部も抗争が起きたりすれば動くけど、普段、資金源摘発などに力を入れているようには見えなかった。たやすく征伐できる相手ではないことを、承知しているからでしょう。

○**石田**　日本の警察は、征伐するぐらいの気概で取り組んでいるんですか。

○**今中**　そうだと思います。だけどマフィアは、誰が構成員なのかもつかみにくい。日本だと、組織暴力団の構成員は警察がほぼ掌握しています。マフィアは厄介な存在ですが、地下に潜って、言葉は適切でないかもしれないけど、市民社会と巧みに“共存”しているのではないかと思いました。一般市民は標的にしない。法の網をくぐって、あくどい事をしている連中に狙いを定めます。

○**石田**　ニューヨークへ赴任する前から、マフィアを取材しようと思っていたんですか。

○**今中**　いいえ。そうではありません。記者会の仲間に誘われて郊外の「チャイナタウン」に出掛けたら、チンピラふうの若者が、あちこちにたむろしている。「大丈夫なの」と聞いたら、「マフィアが仕切っている所では、チンピラはおとなしくしている」と言うんです。マフィアに関してあれこれ聞くうちに、取材してみたくなりました。

マフィアが、チンピラたちの上前（うわまえ）をはねている節はあるけど、警察が資金源ということで特にマークしているふうも無い。ほどよく共存しているのかなと。「彼らが標的にするのは、法すれすれのところで巧みに動く連中。だから一般市民にとっては、さほど厄介な存在には映らない」とも聞いて、マフィアの取材に取り掛かりました。

○**石田**　チャイナタウンで、何かきっかけになるような出来事があったのではなくて。
○**今中**　はい。ニューヨークは治安の良くない都市だと言われたりしますが、旅行会社のアンケートでは、海外観光の希望先のトップ３あたりに、いつも入っていました。不思議な大都会です。

ニューヨーク支局の勤務環境

○**石田**　分かりました。ニューヨーク支局時代の話を、もう少し伺いたいと思います。支局は中日新聞と中国新聞の特派員が１人ずつだったということですが、同じオフィスを使っていたんですね。
○**今中**　はい、そうです。
○**石田**　オフィスはどの辺りにあったんですか。
○**今中**　マンハッタンの５番街です。
○**石田**　まさにど真ん中ですね。
○**今中**　メーン通りにはティファニー、ルイヴィトン、グッチ、プラダなどのブランド店が軒を連ね、ミュージカルで有名なブロードウェイもすぐそばです。支局から国連本部までは、徒歩で５分ほどでした。
○**石田**　家族は、どちらにお住まいだったんですか。
○**今中**　マンハッタン区は、子どもたちにとっては少し危ない環境だと聞いたので、クイーンズ区の高層アパートに住みました。
○**平下**　東側ですか。
○**今中**　はい。ニューヨーク市は５つの区から成っています。「安全優先ならクイーンズ区に」と前任の支局長から薦められました。家賃は高くつきましたが、家族５人が何とか無事に３年間過ごせたから、クイーンズ区を選んでよかったと思います。
○**平下**　プライベートでは、家族と観光旅行などもされましたか。
○**今中**　はい。それなりに。当時、ニューヨーク州内には日本人が５万人、もしくはそれ以上いたかと思います。日本の商社や都市銀行なども、支店を構えていました。校長や教職員が日本から派遣されている日本人学校もありました。子どもたちを通じて親しくなり、家族ぐるみの旅行もしました。
○**石田**　ちなみに、給料で十分やっていけたんですか。
○**今中**　ええ、何とか。基本給は本社と同水準ですが、特派員手当が別途に支給されます。中日新聞の特派員と横並びのようで、きちんと処遇してもらったと思っています。ただし、住まいをクイーンズ区にして安全を優先した分、住居費は高くつきました。それは特派員手当で補いました。
○**石田**　マフィアの取材で、警護の人に日当50ドルを支払ったということだから、なかなか苦しかったかなと思ったんですが。あと、食事などはどうでしたか。自分が初めてアメリカに行った時は、料理が大味で、すごく苦労した思い出があります。
○**今中**　家族は、家では炊飯器で米を炊いて、和風なものを結構食べていました。よくしたもので子どもたちは、じきにサンドイッチやピザにも慣れました。飲食店では、ステーキなんかも厚さ２センチ近いのが出てくるんですよ、日本だと何千円かのものが数百円でしたね。肉質は日本の方が良いのでしょうけど。食料品が高い、という印象は無かったです。
○**石田**　食事に関しては、あまり苦労されなかったんですね。
○**今中**　はい。アパートから少し離れていたけど、日本人向けの食材を売っている店もあったので。

地方自治の実態を取材

○**石田**　分かりました。次へ進みます。ニューヨーク支局時代には、広島県医師会の在米被爆者健康診断の実施、国連軍縮特別総会、スリーマイル島の原発事故。それと、先ほどお話のあったマフィアの取材もされています。それぞれの取材について、印象に残ったことを教えていただければ

と思います。

○**今中**　マフィアの取材は、先ほど申したとおりです。地方自治に関しては、「草の根アメリカ」という連載企画をやりました。地方都市を回ってみて、やはり日本との違いを認識しました。20代の市長がいたのには驚きました。今は日本も、かなり若返っていますが、当時は40代の人も珍しかったのでは。

「タウン」と称される地方の町では、審議を傍聴しやすいようにと、夕方の６時以降に議会が開かれていました。アメリカは超大国だけど、末端の住民自治は根付いていることを実感しました。住民と役所の接点が、非常に近いんですね。

○**石田**　赴任する前、広島市政や県政を担当されています。比べてみて、アメリカの方が、「自治」があると思われたのですね。

○**今中**　そうですね。功罪は相半ばしていると思うけど。日米で大きく異なるのは、アメリカには「州法」があるのも、その１つです。日本には、地方自治体に法律なんか無いですよね。条例とか規則どまりです。あちらは州法にのっとって、知事が思い切った施策を進めることができます。その下にある地区単位の自治体も、それなりの自治を有している。自ら治める「自治」という観点では、アメリカの方が中身は濃いと思いました。40数年も前のことであり、今の実態は承知していません。ともあれ、「草の根アメリカ」の企画取材は、地方紙の記者として勉強になりました。

「住民総会」も頻繁に開くから、住民の生（なま）の声が行政に遅滞なく届きます。税金の使途にも、住民は厳しい目を向けていましたね。負担と受益の関係を明確にしようということです。日本では、今もって「お役所任せ」が多い。あちらは、「taxpayer」意識が非常に強い。「税金であなたたちを雇っているのだから、見合った仕事をしてもらいたい」ということです。役所の庁舎も小さかった。日本では田舎にも、大きくて立派な庁舎がお目見えしています。あちらでは、「行政機構はなるべく簡素に」という感じでした。

日本は、国の行政指導（強制？）の下で町村合併が急進行。わが広島県でも町村数は大幅に減りました。県行政にとって効率はいいかもしれないが、あちらは、身近な役所が地域に則した行政をしてくれればよい、ということのようでした。

夜間に議会を開くのも、住民本位の表れです。日本だと午前10時、もしくは午後１時からの開会が多い。「傍聴は自由」となっていても、日中に議会を傍聴できるのは限られた人たちです。自治意識のズレを感じました。

○**石田**　「草の根アメリカ」の連載企画は、本社の指示によるものですか。

○**今中**　いいえ。この企画に限らず、本社からの指示はほとんど無かったです。

○**石田**　では、自分でテーマ設定をして。

○**今中**　はい。勉強のつもりで。全国紙の特派員とは異なり、ルーティンの業務は無かったから。将来、役に立つような取材を心掛けました。百聞は一見に如（し）かず、です。せっかくの機会だから、しっかり見聞しておこうと。見聞したら、やはり記者だから書きたくなりますよね。いろいろ試みて、良かったと思います。

○**石田**　当時、アメリカの民主主義というのは、輝いて見えたんですか。

○**今中**　民主主義の基本理念が「民（たみ）が主役」というのなら、やはりアメリカには「草の根・自治」は根付いていると思いました。しかし、トランプさん（大統領）のような人物を見ると、複雑な心境です。超大国が変容したのか、落ちぶれたのか。少なくとも、僕が40数年前に体験したアメリカと今日では、相当な落差を感じますね。

日本の全国紙や通信社には外信部があります。多い所では特派員を含めて、部員を数十人も抱えています。勤務先の希望を聞くと、かつてはワシントン、ニューヨークなどアメリカが多かったようです。昨今は、やや違うと聞きました。トランプさんの「アメリカ・ファースト」の言動に象徴される自国第一主義と、大国にあるまじき品性が

問われているのかなと思います。

在米被爆者健診団の取材

○**石田**　なるほど。次に広島県医師会の在米被爆者健診の話を伺います。

○**今中**　はい。これはたまたまというか、僕が昭和52（1977）年にニューヨークへ赴任することになった時、出発直前に県医師会の幹部が新聞社を訪れ、「ABCC（原爆傷害調査委員会＝現在の放射線影響研究所）や県・広島市などとタイアップして、在米被爆者の集団健診をすることになった。健診団を派遣するのでよろしく」とあいさつされました。つまり、現地での取材依頼です。

３月末にニューヨーク支局へ赴任。５月に第１回の健診団が、在米被爆者の多い西海岸のロサンゼルスとサンフランシスコを訪れました。帰途、ハワイへも。

支局に赴任して間もなくのことです。ニューヨークの関係先へのあいさつもそこそこに、西海岸に向かいました。２週間、ロサンゼルスとサンフランシスコに滞在し、健診会場に張り付いて取材しました。

健診会場で、医師たちが被爆者に広島弁で話しかけると、抱きついてワッと泣き出す。健診団長は、こう言っていました。「私たちがやって来ても、治療や特別な手当てができるわけじゃない。しかし、残留放射能の恐怖におびえながら異国で生きた人たちに、心の安らぎを与えることはできる」と。原爆投下国である米国人医師へは、訴えにくいことが多かったのだろうと推察しました。

こんな体験があります。中西部へ取材に出掛けた時、レストランで同席した初老の米国人男性に「どこの国から。ジャパニーズなのか」と話しかけられました。「そう、日本人です。ヒロシマという都市から来ている。あの、世界で初めての『Atomic Bomb City』です」と言った途端、彼が血相を変えました。僕としては、ヒロシマと言えば日本での位置関係が分かりやすいだろうと思ったからです。彼は「日本の方が悪い。パールハーバー（ハワイの真珠湾）に奇襲攻撃を掛けたから、その仕返しだ」と、ひどい剣幕でした。帰途の飛行機の中で、在米被爆者たちの心情に思いを馳せました。

派遣医師団の先生方は「どうしとりんさった。これからは、ちょくちょく来るけんね」などと、殊更に「広島弁」を使っていました。在米被爆者協会・副会長の据石和（すえいし・かず）さんは「私たちは、注射や薬よりも、こうやって広島からの先生に聞いてもらう方が、よっぽど体にいい」と打ち明けました。

隔年健診なので、支局滞在中に２回、取材に当たりました。在米被爆者の皆さんともなじみ、「埋もれた被爆者」たちに光を当てました。本社へ帰任する時、ロサンゼルスに招かれて送別会をしてもらいました。

○**石田**　それは広島県人会からですか。

○**今中**　いいえ。県人会ではなくて在米被爆者協会です。

○**石田**　団体があったんですね。

○**今中**　はい。ロサンゼルスに本部、サンフランシスコに支部を置いていました。送別会には100人近い在米被爆者たちが集まってくれました。感謝状も、もらいました。

○**平下**　ちょっと、よろしいですか。個別に被爆者を取材されたと思いますが、どのようにしてアポイントを取られたんですか。つまり、被爆者がどこに住んでいるかを確認するには、どうされたのですか。

○**今中**　それに関しては在米被爆者協会が、ほぼ掌握していました。現住所、被爆したのは広島・長崎市内のどこで。渡米して何年。体の不具合なところ。かかりつけの医師は、といったことまでも。

組織名は「在米被爆者協会」となっていますが、広島での被爆者が大半です。協会の初代会長は、サンフランシスコ在住の倉本寛司さん。在米被爆者協会を設立し、基礎固めをされました。協会が組織としてきちんと対応したため、健診が今

日に至るも続いているのだろうと思います。コロナ禍で健診事業はペンディングになっているようですが、収束すれば再開されるでしょうね。

○**平下**　印象に残ったのが、以前に大牟田稔さん（元・中国新聞論説主幹）の資料を読んだ時、沖縄の被爆者を追跡される中で、情報の収集に相当苦労されていたのですよ。他方アメリカでは、そのようにきちんと把握されている。なぜアメリカの被爆者協会は、そこまできっちり把握できていたのかと。

○**今中**　やはり、空前の災厄に遭った者同士。それに、同郷意識も強かったと思いますね。ロサンゼルスのダウンタウンには、日系人がかなり住んでいます。「リトル・トーキョー」と呼ばれる一角もあります。在米被爆者たちも含めて、結びつきは強いですね。

○**平下**　もともと日本人が集中していたから、把握しやすかったということですか。

○**今中**　ええ。それもあると思います。健診団の受け入れが順調に進んだのも、被爆者協会の適切な現地対応があったためです。

○**石田**　先ほど、レストランで「広島です」と出身地を言ったら、パールハーバーのことを吹っかけられたと話されました。当時はまだ、そういうことも多かったんですか。

○**今中**　地域にもよると思います。あの時は中西部でした。どちらかと言うと、保守的な土地柄です。

○**石田**　中西部に行かれて、そういう論争というか、言いかがりを付けられたことは多かったんですか。

○**今中**　広島と言っただけで、その人はカタカナの「ヒロシマ」を連想したらしい。私は殊更に、原爆投下がどうのこうのと言ったのでもないのに。軽はずみに「ヒロシマ」を持ち出してはいけないのだと、教訓になりました。

○**石田**　用心されたということですか。

○**今中**　用心というか。広島に本社を置く新聞社の特派員ですから、やはり「ヒロシマ」は常に意識せざるを得なかったですね。

○**石田**　当時は、まだ戦後30年ぐらいだから、退役軍人もたくさんいたんですよね。

○**今中**　はい。米国には退役軍人をたたえる「ベテランズ・デー」があり、祝日にもなっています。彼らは隠然たる力を持っていて、ホワイトハウスも一目置く存在だということです。

○**石田**　取材していて、対日戦線に従軍した人も随分いたのではないですか。

○**今中**　支局に赴任して間もない頃、ニューヨークのブルックリン区へ取材に行き、退役軍人会の幹部に会いました。たどたどしい英語で話しかけたら、いきなり「日本は侵略国家だ」と高飛車に言われました。ろくに反論もできなくて。当時は、まだそんな雰囲気でしたね。

○**石田**　貿易摩擦の直前ぐらいですよね。そちらの方の雰囲気は、あまり無かったですか。

○**今中**　僕は経済問題に疎くて、ピンと来ませんでした。

○**石田**　むしろ「リメンバー・パールハーバー」の方が、予期しなかったということですか。

○**今中**　僕自身、「ヒロシマの記者」という意識が強過ぎたのかも。この後、「アキバ・プロジェクト」にも話が及ぶようですが、秋葉忠利氏がこの企画を立ち上げたきっかけも、実はパールハーバー絡みなんです。

アキバ・プロジェクトとのかかわり

○**石田**　そうなんですか。では順番を変えて、アキバ・プロジェクトの話から伺いましょう。

○**今中**　はい。秋葉さんは国会議員や広島市長などを歴任した後、政界から引かれましたが、学生時代に原水禁世界大会の同時通訳を務めたことなどから、反核・平和問題に深くかかわるようになりました。後にアメリカ留学。マサチューセッツ工科大で学位を取得。東部の名門・タフツ大学の准教授をしていた時に、プロジェクトを立ち上げました。この経緯については、月刊誌「世界」（1980年９月号）に一文を寄せておられます。大

写真９　アキバ・プロジェクトで来日したアメリカ人記者（昭和56年８月６日、広島平和記念式典取材時）
中国新聞社所蔵

まか、以下のような内容です。

―その日は、国民の祝日・メモリアルデー（戦没将兵・追悼記念日）だったが、カー・ラジオの視聴者参加番組で耳にしたのは、「広島・長崎への原爆投下は正しかったか」という問いに、10人中８～９人までが「正しかった」と答えていた。（日本の）パールハーバー（真珠湾攻撃）が先だとか、原爆投下で多くの命が救われたという意見の持ち主だった。米国で最もリベラルな都市として知られるボストンで、これほど原爆投下を正当化する人がいるのはショックだった―。

秋葉さんは、米国人の、このような意識を変えるにはどのような方法があるのか、と思案されたようです。そして思い立ったのが、米国ローカル紙記者の広島・長崎招請企画です。記者たちに広島と長崎を訪ねてもらう。被爆から数十年を経ても、被爆者はなお放射能の後遺症に苦しんでいる。このことを米国民に知ってもらう手法として、自国の記者にヒロシマ・ナガサキを「原体験」してもらい、被爆者にも直接に会ってもらう。いかなる理由からも、核兵器は絶対に使ってはならないものだということを認識してもらう。それには、住民との距離が近いローカル紙記者の方がベターではないか、という発想です。

招請記者は８・６と８・９の広島、長崎の平和記念式典への参列、原爆資料館や放影研（放射線影響研究所）の見学、原爆病院や介護施設での被爆者インタビューなどを。そうすれば、「核兵器は絶対に使ってはならない」と自国の読者にアピールしてもらえる、と確信されたようです。

秋葉さんは、学生時代の通訳仲間に、この構想を打ち明けた。それが広島国際文化財団（中国新聞と中国放送が資金を拠出して設立した財団）に伝わりました。

財団が目玉の事業として、バックアップすることになりました。財団の金井宏一郎事務局長からニューヨーク支局に連絡があり、ボストン郊外のタフツ大学に秋葉さんを訪ねました。詳細を聞いて金井事務局長に伝え、記者の募集・選考方法や日程、経費の負担問題などを詰めました。秋葉さんは「記者の選考に関しては、自分が責任を持つ」と確約。メディア関係の専門誌に、公募記事を載せました。

応募者は予想以上に多く、秋葉さんは、ニューヨーク在住の著名な平和学者と一緒に選考してくれました。１年に３～４人程度。約２週間の日程。平和記念式典への参列、原爆資料館の見学、原爆病院ほか被爆者介護施設、放射線影響研究所の訪問、個々の被爆者とのインタビューなどをセットしました。経費は結構掛かります。帰国後、所属する新聞に最低３本の記事掲載を条件にしました。大方の記者は、それ以上に書いてくれました。

第１回は、僕はまだニューヨーク支局にいたので、掲載された記事の反応を確かめるためローカル紙の本社を訪ねました。事前に編集長と連絡を取り、読者の反応も探ってもらいました。プロジェクトは好評で10年間続き、34人の記者が参加しました。

○**平下**　実際に、アメリカの地方紙の記者が、「ヒロシマ・ナガサキ」を取材して帰られたわけですよね。

○**今中**　最低３本の記事執筆という約束は、きちんと守られました。

○**平下**　帰ってきて、記者さんたちの考えがどう

変わったかは、どのように受け止められましたか。

○**今中**　帰国の際、財団はその都度、広島市内で送別会をしていますが、みんな、原爆について認識を新たにしていたようです。「パールハーバー（真珠湾攻撃）はあるけれど、ヒロシマ・ナガサキは、きちんと伝える」と。

保守的な中西部では、「日本は侵略国家。パールハーバーを忘れない」という声は、今なおあります。記事の反応は多様でした。「彼の記事を読んで、核兵器は絶対に使ってはならないということが、よく分かった」との声が、かなりありました。ローカル記者のヒロシマ・ナガサキ報道が点になり、やがて線になり、そして面へと広がっていく。プロジェクトの狙いはそこにありましたが、そうなったのかどうか。後輩たちに、いつか検証してもらいたいと思っています。

その後、財団は「アジア記者招請プロジェクト」を企画。６年間に延べ15カ国・地域から26人の記者・カメラマンを招き、「ヒロシマ・ナガサキ」を体験してもらっています。

○**石田**　アキバ・プロジェクトの立ち上げの時、今中さんが調整役を務められたんですね。

○**今中**　調整役というか、先ほども申したとおり、米国にいたから橋渡しをしたということです。

○**石田**　ちなみに、このアキバ・プロジェクトという名称は、どなたが付けられたんですか。

○**今中**　企画は秋葉さんの発案ですが、「アキバ・プロジェクト」という呼称は国際文化財団の事務局が付けたと思います。事務局長の金井宏一郎さんだったのでは。

○**石田**　今中さん自身は、このプロジェクトの記事は書かれなかったんですか。

○**今中**　１回目の時はまだニューヨーク支局にいました。ローカル紙記者の、帰国後の記事に対する地域読者の反応を探りました。モンタナ州・リビングストンにあるエンタープライズ紙のロジャー・ケース記者（当時26歳）を訪ねました。編集長にも会い、ケース記者の記事に対する読者の反応を確かめました。読者アンケートも頼んでいたので、結果をまとめて本社へ送稿しました。

○**石田**　なるほど。後のフォローの方で取材にかかわられたんですね。

○**今中**　はい、そうです。

○**石田**　秋葉さんとはその後、衆院議員や広島市長になられるまでは、関係は途絶えたんですか。

○**今中**　いいえ。秋葉さんは帰国して、広島大や広島修道大学などでも教壇に立たれ、折節に会っています。衆院議員（３期）の後に広島市長を３期務めました。平和行政の基礎固めは、しっかりやられたと思っています。英語が堪能だから、国際会議に出席しても、通訳を介さずにアピールできます。「平和行政に偏り過ぎている」などと議会でやり玉に上がったこともありますが、広島市は「国際平和文化都市」をスローガンに掲げています。「平和に偏り過ぎている」というのは、的外れの指摘だと僕は思っています。

○**石田**　アメリカの中でも保守的な中西部のローカル紙記者を招いて取材させるというのは、かなり先進的な企画ですよね。

○**今中**　そうですね。小さなローカル紙だから、編集スタッフも十数人。こんな記事を掲載すれば、相当なリアクションがあるかもしれないと思いながら、編集長は自由に記事を書かせたようです。つまり、広島と長崎で見聞したことを、ありのままに書かせたのです。

リビングストン紙の読者の反応として「ロジャーが、こんな記事を書くとは。ここへは帰って来ないで、広島にいればよかった」などの声もありました。何せ米国人の中には、まれな事だけど、広島に原爆を落としたのが自国アメリカであることすら、長い間知らなかった者もいたというのですから。

○**石田**　そうなんですか。

○**今中**　僕にも経験があります。原爆被爆都市ヒロシマの出身だと言ったら、「どこ（の国）が落としたのか」と聞かれて唖然（あぜん）としました。

第１回国連軍縮特別総会の取材

○**石田**　次は国連軍縮特別総会のことについて伺います。これも、たまたまにしてはすごい時期に赴任されたんですよね。

○**今中**　はい。ラッキーでした。国連史上初めての軍縮特別総会で、画期的なことです。巡り合わせが良かった、と言うほかありません。

○**石田**　当時の写真を見ると、大勢のヒッピー風の若者たちも平和行進に参加していますね。

○**今中**　ええ。彼らも含めて世界の各地から多くの活動家が駆け付けました。特別総会は、世界にヒロシマ・ナガサキをアピールする絶好の機会になりました。

もちろん総会の会場には、僕もずっと詰めました。欧米やアジア諸国の外交官の中には、「日本の侵略戦争に照らせば、原爆投下は当然の報いだ」といった考え方が支配的でした。そんな彼らも総会後のインタビューでは、いくらか考えを変えたように思えました。「ヒロシマ・ナガサキを初めて認識した」というコメントも取れました。意義のある総会だったと確信しました。

○**石田**　国連を取材する際、中国新聞の記者も本部へ入れたんですか。取材の権限というか。

○**今中**　ニューヨーク特派員として記者クラブに加入し、国連本部への入門証も交付されています。これを携帯していれば、昼夜の別なく本部ビルへ入れます。

○**石田**　これだけ大きな会議になると、日本の大手新聞社の記者たちとタッグを組んで、取材に当たるんですか。それとも単独で。

○**今中**　支局の相棒の、中日新聞特派員とは連携しました。僕の記事は、中日新聞にも掲載されます。全国紙の場合は、それぞれ単独取材です。全国紙、共同・時事の両通信社、NHK、民放キー局などは、それぞれニューヨーク支局に要員を配置していますから。

○**石田**　国連内で取材をする際は、アポ無しでインタビューされるんですか。

○**今中**　インタビューしようと思えば、本部ビルにあるデレゲート・ラウンジ（加盟国の外交官が懇談する場所）で大抵、意中の人に会えます。いわば情報交換の場所です。国連代表部詰めの外交官たちが、しょっちゅう輪になって情報交換をしていました。

だから、誰かのコメントが欲しい時は、各国の代表部へ出向かなくても大抵、このラウンジで会えます。胸の名札で、国名と氏名は分かります。情報交換のほか、特定の問題で、その国がどういうスタンスなのか、議決の際に賛成するのか反対に回るか、などの情報を収集しておりました。

○**石田**　入門証があれば、そういう所へも自由に出入りして、取材ができるんですね。

○**今中**　はい。だけど恥ずかしながら、僕は英語を流ちょうに話せない。母国なまりのあるアジア諸国の外交官となら気軽に話せますが、欧米の外交官がハイボールを飲みながら、まくし立てると、もう半分以上は聞き取れなかった。

○**石田**　ハイボールは相手が飲んでいるんですか。それとも今中さんが。

○**今中**　いいえ、相手がね。僕は紅茶です。

○**石田**　そうなんですか。では、随分と滑らかに語ってくれたわけですね。

○**今中**　そういうことです。だけど、よく分からないことの方が多かった（笑い）。

○**石田**　ちなみに、分からなかった場合は記事にならないのでは。

○**今中**　はい。だけど記事にする時は、そういうやり方はしていません。顔見知りになることは大切なので、４～５人の論争の輪には、そっと加わりました。やはり、インドはこういう考えなんだ、とかも察知できますから。

○**平下**　何か、特定の論点について取材する場合も、アポを取らずに行くわけですか。

○**今中**　アポを取らなくても、デレゲート・ラウンジに行けばコメントが取れそうな相手は見つかります。しかし、核問題に関しては「ノーコメント」の方が多かった。

○**石田**　日本代表からは聞かれなかったんです

か。

○**今中**　当然の事ながら、日本代表部の国連大使からは必要に応じてコメントを取ります。

第１回軍縮特別総会の時、１階ロビーの通路で、広島・長崎両市主催の原爆写真展が開かれました。被爆の惨状をアピールするためです。背中が焼けただれた残虐な写真もあったため、国連の事務局サイドからクレームが付きました。つまり、撤去させようとしたんです。古参のAP通信記者が「あなたはヒロシマの記者だよね。ロビーに展示してある被爆写真を撤去させようとする動きがある」と教えてくれました。取材して送稿したら、社会面に大きく載りました。日本の国連代表部は終始、ノーコメントでした。コメントしないなら、「コメントしなかった」と書けばよいわけですから。

○**平下**　ここで「横やり」という表現で書かれていますが、事務局はどこからか圧力を受けたのですかね。

○**今中**　どこの、誰が横やりを入れたのか、みんな口が堅くて確認は取れませんでした。

○**石田**　中国新聞に載っただけですか。

○**今中**　後追いで、一部の全国紙にも載りました。

○**石田**　この件に関して、特に日本の外務省あたりが、どうこうしたというのは無いんですか。

○**今中**　事務局を通じて、アメリカ側から日本代表部へ話があったのか、それとも自己規制しようとしたのか、確認は取れませんでした。

○**石田**　ちなみに、こういった取材の過程で、当時は冷戦下ですよね。米ソの対立などを感じるような場面はありましたか。

○**今中**　そうですね。安全保障理事会へも折節に顔を出しましたが、拒否権を乱発する場面では、大国のおごりを痛感しました。拒否権を持つ常任理事国が「ノー」と言ったら、すべてご破算になるのですから。

○**石田**　軍縮特別総会のとき以外も、国連本部へは足を運ばれていたんですか。

○**今中**　はい、出張の時以外は、ほとんど毎日、顔は出していました。定例の事務総長会見もあります。支局から近いので、食堂に昼食を取りに行ったりもして。

○**石田**　イメージとしては、国連の番記者みたいな感じですね。

○**今中**　全国紙の場合、やはりニューヨーク支局は国連本部が主要な取材エリアです。ワシントン支局は政治面、ニューヨーク支局は国連本部と社会情勢といったふうに、すみ分けされていたように思います。スリーマイル島の原発事故の際は、ワシントン支局からも駆け付けていました。

○**石田**　スリーマイル島原発事故の件に入る前に、もう少し伺います。国連本部のほかに、毎日顔を出すような場所はあったんですか。

○**今中**　日課ではありませんが、国連の日本代表部、ニューヨーク総領事館、日本人会事務所などへは、努めて顔を出すようにしていました。

○**石田**　ほかには、定期的に顔を出すような所は無かったということですね。

○**今中**　はい。政治・経済の分野は所管外だったから。

○**石田**　そういえば、署名記事の中に経済に関するものは見当たりませんね。

○**今中**　ええ、全く。ウォール街はよく歩きましたが、取材・執筆は共同や時事通信の担当記者任せです。日経新聞は、ニューヨークを米国の取材拠点にしていました。

○**石田**　ニューヨーク駐在の記者同士の集まりとか交流は、どんなものだったんですか。

○**今中**　日本人記者会がありました。

○**石田**　日本人記者会は、どういったことをするんですか。

○**今中**　記者会が会見を設定するようなこともめったに無く、懇親グループみたいな感じでした。

○**石田**　単なる懇親会ですか。では、情報のやりとりをするような会ではないんですね。

○**今中**　会うと、「これはどうなってるんだ」と

か、「この間、君は○○について書いていたね」とか。一緒に食事をすることはありましたが、取材で連携したり、国連の事務総長に共同で対応するようなことは無かったです。

○**石田**　日本だと、記者クラブには中国新聞のスペースがあり、新聞の切り抜きなども置いてある。過去の記事を調べたり、他紙の報道なども確認するとの事でした。ニューヨークでは、どうされていましたか。

○**今中**　国連本部には、記者室として結構広い部屋が用意されていました。事務局が会議録や決議文書などを持ち込み、要るものは各自が取って帰る。事務総長の定例会見の後、さっさと帰る者もいるし、談笑して帰る者もいる。バラバラです。

○**石田**　過去の記事を参考にするようなことも、あまり無かったんですね。

○**今中**　ええ。広い記者室だったけど、スクラップ・ブックなども置いていなかったし。

○**石田**　では一から取材して、写真が要れば自分で撮るという感じなんですね。

○**今中**　そういうことです。

○**石田**　記事を短時間に書くとなると、やはり語学力や文章力が相当要りますよね。

○**今中**　おっしゃるとおりですが、僕の場合、国連も含めて、日課として送稿しなくてはならないものは無かった。すべて通信社任せでもいいわけだから。国連総会の時期は外して、年間に100日近くはニューヨークを離れていました。

○**石田**　全米の、いろんな所へ出掛けていたということですか。

○**今中**　広大な国だから、とても３年間では全米各地は回れなかった。西海岸へはよく足を運びましたが、これは在米被爆者の取材などのためです。折節に企画を立てて、各地へ出向くようにしました。

スリーマイル島原発事故の取材

○**石田**　では次へ。これまた、ある意味すごい巡り合わせだと思うんですが、スリーマイル島の原発事故が赴任中に起きました。これはどういった形で取材されたんでしょうか。

米国の原発事故
汚染、深刻な事態に
住民、避難始める
「炉心溶融」は一応回避
今週にも
危機脱す
水素抜き取り
放射能漏れも

写真10　スリーマイル原発事故の取材記事
（『中国新聞』昭和54年４月１日朝刊１面）
中国新聞社所蔵

○**今中**　ニューヨークには終日、音楽の合間にニュースを流しているラジオ局があります。ニュースの一報もキャッチできて、とても便利です。昭和54（1979）年３月のあの日、イヤホンを付けてスイッチを入れたら、「イマージェンスイ、メルトダウン」（緊急事態発生、原発・原子炉の炉心溶解）という緊急速報を繰り返していました。ペンシルベニア州都のハリスバーグで原発事故が発生したという速報でした。

慌てて、中国新聞支局と同じビル内にあった時事通信のニューヨーク支局へ駆け込みました。

支局長が「今中さん、大変な事態だよ」と。「現地へ行くんですか」と聞いたら「もちろん」と。交通規制が掛かるはずだから、車では無理かもとおっしゃる。だったら、どんな手段でと聞くと、「中央駅から高速列車に乗り、最寄りの町でレンタカーを借りて」と教えてくれました。

３時間近くかかって現場にたどり着きましたが、案の定というか、交通規制が敷かれていて進

入禁止。警備員が「プレスカードを持っているか」と聞くので、「国連の入門証ならある」と見せたら、「身分証明にはなるけど、放射能の危険があるから現場には近づけない」と。広報担当者が出て来て、全米の各地から駆け付けた記者たちに「１時間ごとに記者会見をする」と告げました。ところが会見では、専門用語がやたら多くて、ちんぷんかんぷんです。メルトダウンであることは確認できました。

APや共同・時事通信などから記事は配信されますが、現場に駆け付けた以上、全く送稿しないわけにはいきませんよね。そこで、とっさに思いついたのが地元のローカル紙です。パトリオット・ニュース社を訪ねたら編集長が出て来て「どうしたのか」と。「ニューヨーク駐在の日本人特派員だけど、現場の会見が聞き取れない。ゲラ刷りが上がったら見せてもらえないか」と、恥を忍んで頼みました。「オーケー」と快諾。地元の有力紙だから原稿も途切れなく入って来ます。ゲラ刷りをコピーしてもらい、辞書と首っ引きで何とか送稿したのが、「ハリスバーグ・今中特派員」とクレジットの付いた、この記事（記事コピーを示しながら）です。

○**石田**　そのローカル紙の方とは面識があったんですか。

○**今中**　いいえ、全く。

○**石田**　飛び込みですね。

○**今中**　そうです。

○**石田**　おおらかですね。そうは言っても、専門用語が並んで、どういうふうにされたんですか。

○**今中**　記事には「今中特派員」とクレジットが付いていますが、本社の整理部が、共同・時事やAP通信などから配信された記事を織り交ぜて扱ってくれました。合作みたいな紙面構成ですよね。

○**石田**　ともかく、原子炉が見える所まで行かれたんですよね。

○**今中**　もちろん、すぐそばまで。

○**石田**　放射能に対する恐怖は無かったですか。

○**今中**　正直に言えば、恐怖感はありました。守衛所の係員は「早くここから立ち去れ」と、しつこく言っておりましたし。間もなく半径５キロ圏内は完全に交通が遮断され、住民は圏外に避難。学校も閉鎖されました。

○**石田**　単独で駆け付けて、取材されたんですね。

○**今中**　はい。そうです。いつもポケットに突っ込んでいた英和辞典を頼りに。僕の記事は荒っぽかったけど、本社の整理部が共同・時事やAPからの配信記事を適当にミックスし、仕上げてくれたというのが本当のところです。

○**石田**　記事はテレックスで送られたんですか。

○**今中**　電話です。

○**石田**　そばに宿を取られて、そこから電話をされたんですね。

○**今中**　ええ、モーテルから。

○**石田**　10年前の３・11（東北大震災）はどのように思われましたか。実際に原発事故の取材をされた身としては。

○**今中**　うーん。やはり原発事故と放射能の怖さを実感しましたね。半径５キロ以内は無人地帯になりましたから。アメリカは核超大国だけど、放射能の怖さを思い知ったのではないでしょうか。

○**石田**　日本に帰ってから、この原発事故に関して講演依頼などはありましたか。

○**今中**　いいえ。講演するほどの知識もありませんし。あたふたと現場に駆け付け、地元の新聞社の力も借りて、何とか書いた記事ですから。

○**石田**　失礼かもしれないですが、今中さんとしては取材に行って、そこで反原発へと思想が変わったということは無かったんですね。

○**今中**　それはありません。しかし、原発がやはり危険な側面を持っていることは実感しました。この事故とチェルノブイリの事故で、原発に対する意識はだいぶん変わったと思うし、日本の電力会社も、これを教訓にしていますよね。

○**石田**　ちなみに、チェルノブイリへは行かれなかったんですか。

○**今中**　チェルノブイリへは行っていません。後に「世界のヒバクシャ」という連載を企画し、担当記者をチェルノブイリに派遣しています。

○**石田**　日本では福島の原発事故が起きてから、もう一度、スリーマイルやチェルノブイリ事故を見直す流れになっています。実際に現場へ行かれたのは、貴重な経験でしたね。

○**今中**　はい。そう思っています。記事を読んで理解するのと、現場で体感するのは随分違います。スリーマイル島での事故取材の時、近くの丘へ上がったら、一帯は無人状態でした。ぞっとしたことを思い出します。

本社とのやりとり

○**平下**　スリーマイル島の記事で、読者から、どのような反響がありましたか。

○**今中**　どんな反響があったのか、それは確かめておりません。

○**平下**　これに限らず、例えば国連関係の記事などを送られても、読者の反応は確かめていないということですか。

○**今中**　ええ、特に反応・反響を知りたいという事例でなければね。

○**石田**　本社時代は、デスクやキャップから「取材が足りんぞ」と注文が付くという話でした。ニューヨークでの取材に関しては、それは無かったですか。

○**今中**　国際電話でのやりとりになるから、事細かなチェックは難しいですね。だから、手直しの要らない完全原稿を心掛けました。在米中に、訂正記事は全く書いていません。

○**平下**　（新聞記事のコピーを指して）これは、どういう形の資料なんですか。

○**今中**　特派員時代に書いた、連載企画も含む記事コピーの一部です。マイクロフィルム化して、本社の資料部にも保存されています。

連載記事「あすの国際人」への反応

○**石田**　特派員時代で、このほかに印象に残っている取材はありますか。

○**今中**　そうですね。（新聞記事のコピーを示して）「あすの国際人」というタイトルの、この企画も思い出深いです。県立教育センターの幹部の方が読んでおられました。

○**石田**　教育センターは東広島市の八本松にありますね。

○**今中**　帰国後、しばらくして講演依頼がありました。「ニューヨーク時代に『あすの国際人』というタイトルの連載記事を書いておられるが、研修で話してもらえないか」という依頼でした。

○**石田**　講演として。

○**今中**　はい。研修の一環だったようです。

○**石田**　この「あすの国際人」という企画記事がきっかけなんですね。

○**今中**　そうだったと思います。

○**石田**　アメリカの教育事情について話されたんですか。

○**今中**　「国際化時代に生きる」という演題で。アメリカで見聞し、体感したままを語らせていただきました。このほかに、広島や呉市内のロータリークラブなどでも、「卓話」の形で聞いてもらいました。

○**石田**　そうなんですね。やはり当時は、まだ海外に行くのが珍しかった時代ですもんね。

○**今中**　これを今読み返すと、実際には、こんなにきれい事ばかりではなかったと思います。教育センターでの講演の後、校長さんと連れ立って広島へ帰る途中、「あんなふうに話したけど、これがそっくり、日本の教育で可能なのか疑念もぬぐえません」と言いました。僕としては、「“がり勉”で、知識を詰め込むだけが学校教育ではない」と訴えたかったのです。こんな話を、広島や呉、廿日市の県立高校などでも聞いてもらいました。

○**石田**　では、帰国されてから一番反響が大きかったのは、この教育企画なんですか。

○**今中**　どうでしょうか。皆さんがこの連載企画を読んでおられたかどうか。教育関係者には、興

味深く読んでいただいたのかなと思いましたけど。

ニューヨークの治安

○**石田**　記事から少し離れて、日常生活の話を伺います。当時、「輝かしいアメリカの時代」は過ぎ去っていて、治安も乱れている時期に差し掛かっていたと思います。ご家族は割と安全な地区に住まれたという話でしたが、今中さん自身は、取材で身の危険を感じたことは無かったですか。

○**今中**　結構ありましたね。僕が滞在したあの時期、アメリカの経済は非常に落ち込んでいました。警察官や消防士にもレイオフ（一時解雇）が掛かったほどですから。治安は極度に悪化して殺人、強盗、追いはぎなどの犯罪が、しょっちゅう起きていました。

身の安全のため、地下鉄は避けてマイカー通勤にしましたが、積雪など天候次第で地下鉄も利用せざるを得ない。地下鉄のプラットホームに入るには「トークン」と呼ばれる自動改札機を通らなくてはなりません。25セント硬貨を入れると、回転ドアが開いて駅構内に入れる構造です。

夜の遅い時間帯、このトークンのそばにチンピラが待ち伏せしていて、「Give me change」（小銭をよこせ）と脅すんです。上着の胸ポケットに、いつも５ドル紙幣を入れておくよう心掛けていました。ホールド・アップの格好をして両手を上げたら、胸ポケットをまさぐって金を取る“追いはぎ”です。ポケットに紙幣を入れ忘れていて、けりつけられたこともあります。

○**石田**　ホールド・アップみたいな姿勢を取るというのは？

○**今中**　財布を取り出そうとして内ポケットに手を入れたりすると、拳銃や刃物を取り出すのではないかと、相手は警戒しますから。

○**石田**　それは日本など外国人だけでなくて、アメリカ人もそうされるんですか。

○**今中**　米国人が脅されたのは見ていません。加害者は黒人の若者が多かったですね。

○**石田**　向こうでは住む地区も違うし、黒人の多い地区は街が荒れている感じじゃないですか。

○**今中**　そんな感じでしたね。こんなこともありました。あの頃、国連総会へは必ず外務大臣、時には総理が出席していました。福田赳夫総理の時、一般演説の大役を果たされた後、ニューヨークでも著名な「ウォルドルフ・アストリア」という高級ホテルで、総理主催の晩さん会が開かれました。ニューヨーク駐在の特派員にも声が掛かりました。夜10時過ぎ、近道をして５番街の支局へ戻る途中、黒人の少年２人にずっと跡をつけられました。幸運にも車が通りかかり、助けを求めて難を逃れました。

○**石田**　気味が悪いですね。

○**今中**　「Give me change」くらいで済んだかもしれないけど、１キロ近くも尾行されると怖いです。

○**石田**　追いはぎは、一度ならずですか。

○**今中**　はい。

○**石田**　それは主にニューヨークですか。それともほかの都市でも。

○**今中**　いずれもニューヨーク市内です。土地勘のないほかの都市では、夜間は出歩かないよう心掛けていました。

○**石田**　そうなんですね。話のついでに伺いますが、総理とか外務大臣が来た時、日本人記者は全員招待されるんですか。

○**今中**　いつもではありません。福田総理の時は、日本からの随行記者と日本人記者会のメンバーが招かれました。ロックフェラー財閥のご夫人とたまたま同席になり、恐縮しました。

○**石田**　そういった場合、夫婦同伴ではなくて男性だけが行くという形なんですか。

○**今中**　米国では同伴の場合が多いけど、記者は例外のようでした。

○**石田**　ちなみに、そういった席で総理大臣を取材するチャンスはあるんですか。

○**今中**　取材は無理です。同じテーブルに座ったりすれば雑談はしますが、取材はできません

軍縮特別総会の時は、荒木武・広島市長が出席しました。地元・広島からの特派員として、できる限りのサポートをしました。帰国の前、日本からの同行記者たちも交えて、日本食レストランに招待されました。

文化の違い、交通事故の体験

○**石田**　ちなみに、向こうはレディ・ファーストや夫婦同伴が常識のようで、男性優位の日本社会とはかなり違ったと思います。戸惑いは無かったですか。

○**今中**　夫婦同伴が当たり前の国だけど、僕たち記者は職業柄、同伴はまず無理ですね。是非とも、と言われても、英語がきちんと話せない妻は応じなかったと思います。

○**石田**　ホーム・パーティーとか、あるいは招かれて、といったことは特に無かったんですね。

○**今中**　ホーム・パーティーへは、子どもを通じて知り合った隣人たちから、よく声が掛かりました。実は、後に国連難民高等弁務官を務めた緒方貞子さんからも、ホーム・パーティーに招かれたことがあります。

○**石田**　あの緒方貞子さんと。

○**今中**　はい。緒方貞子さんは、僕がニューヨーク支局に赴任する前年、上智大学の教授を辞して日本人初の女性国連公使になり、国連代表部に勤めておられました。息子の篤さんは、国連付属の国際学校に在学中でした。先ほども申したとおり「あすの国際人～国連学校の周辺」のタイトルで連載企画をしましたが、その取材で篤さんを取り上げたこともあって、親密にしていただきました。

○**石田**　そうなんですか。分かりました。ニューヨーク支局時代について、何か補足されることはありますか。

○**今中**　特に思い出に残っているのは国連軍縮特別総会、マフィア、スリーマイル島原発事故などですね。

○**石田**　３年間で密度の濃い取材をされているな、というのが率直な感想です。

○**今中**　でも、英語がもう少し堪能だったら、と悔いは残ります。中西部での取材では、ひどいなまり（訛り）があって、ほとんど聞き取れなかったことがありました。僕が出雲弁を聞いてもよく分からないという、あの感じです。

ネバダ州に１週間近く滞在し、かつての核実験場周辺で、放射能の後障害に苦しむ住民を取材したことがあります。なまり（訛り）がひどくて、ちんぷんかんぷんでした。テープレコーダーを持参していたので録音し、持ち帰って、国連代表部に勤めていた日系人の方に“翻訳”を頼みました。あの頃は、（机上に置いてあるICレコーダーを指して）こんな便利な物は無かった。大きなテープレコーダーをバッグに背負って行き、「英語が達者でないから、テープに取らせてもらう」と弁解し、OKをもらいました。

○**石田**　先ほど聞こうと思っていたんですが、マイカー通勤をされていたと。運転免許はいつ取られたんですか。

○**今中**　ニューヨークへ赴任するため取得しました。42歳の時です。

○**石田**　特派員赴任の準備のため、東京支社付になる前ですか。

○**今中**　そうです。アメリカ赴任が決まって急遽、西区の観音町にあった自動車学校へ。ここには知己の県警の元幹部が校長を務めていました。前任の支局長に聞いたら、「運転免許はアメリカだと簡単に取れる。実技試験科目にバックの車庫入れも無い」と言うんです。しかし、身の安全を最優先に考えて、広島で免許を取得しました。ニューヨークに赴任して、免許を取って来てよかったと、しみじみ思いました。

○**石田**　そうでしたか。

○**今中**　ええ。向こうでは荒っぽい運転が目立ちます。横断歩道で「WALK」の青信号が点滅していても、一時停止したり徐行をしない。事故が起きないのが不思議なほどでした。

○**石田**　歩行者の側にも問題があるんですか。

○**今中**　はい、それもありますね。「WALK」の信号が赤点滅になっても渡るわけです。お国柄なのかと、思ったりもしました。やはり、広島で免許を取得したのは正解でした。それなのに、２度も事故を起こしてしまいました。

○**石田**　え、２度もですか。

○**今中**　はい。僕が帰国してから自動車を持たなかったのは、妻が「もう、あなたの車には同乗しない」と宣告したからです。

○**石田**　外国で事故を起こしたら大変じゃないですか。

○**今中**　大変でしたね。１度目は自宅近くでした。公立小学校に編入させた、次女の学期末懇談会からの帰途でした。ハンドルを片手に通信簿を見ると、成績は極めて良くない。英語が話せないのに、いきなり現地校に入れて３カ月足らずだから、教師も評価のしようがなかったのだと思います。「ニューヨークに連れて来なければよかった。かわいそうなことをした」と思い悩んでいて運転がおろそかになったのでしょう。信号機の無い交差点での衝突事故でした。

相手方は、事故現場近くのスーパーのレジ担当の女性でした。商店街だったので、ドカンという衝突音で10人ぐらいの人が通りに出て来ました。事故を目撃したわけでもないのに、「あのジャップ（日本人に対する蔑称）が暴走した」と、口々に言うわけです。

それで僕は、ニューヨーク市警の交番に通報しました。事故の実況検分をしてもらいたいと思ったからです。間もなく警官が来ました。「一方的に当方が悪い、と言われるから実況検分をしてほしい」と頼みました。すると「No problem」と言うんですよ。ポケットに手を突っ込んだままの横柄な態度で。周りの人たちは「このジャップが暴走した」と同じ言葉を繰り返す。相手の車が僕の車の側面にぶつかっているのに。警官は「あなたには目撃・証言者がいない。訴訟をしても勝てないよ」と冷ややかでした。現場検証をするでもなく、意味不明の「No problem」を繰り返し引き上げてしまいました。

僕はすぐに、日系人弁護士と連絡を取りました。弁護士は「あなたには目撃・証言者がいない。先方には10人近くいるということだから、裁判では負けるかも。示談にした方がいい」と。本社の総務担当に打ち明けたら、「保険金で賄えるから、早くケリを付けろ」と。ほろ苦い体験です。

○**石田**　１千万円近い賠償請求額だったとか。たまげますよね。

○**今中**　がく然としました。やはり、日本は住みやすい国だと改めて思いました。だから、帰国後は車を持っていません。通勤に必要なわけでもないし、タクシーの方が安全で安上がりです。とはいえ、自家用車は何かと便利です。家族の反対で持てなかったというのが本当のところかも。

○**石田**　この事故の話は、記録に残しても大丈夫ですか（笑い）。

○**今中**　ええ。本当のことですから。

○**石田**　分かりました。今日はこれで終わりにしたいと思います。

（終了）

第５回
報道部長～福山支社長

ニューヨークから帰国、第１整理部長に就任

○**石田**　ニューヨークから帰国されて編集局編集委員（部長・総合デスク担当）、それから編集局第１整理部長という役職を務めておられます。どういった仕事をされたのでしょうか。

○**今中**　編集委員というのは、新聞・通信社では、おおむね専門記者の呼称です。中国新聞の場合は、部長職だけどラインではなくて、スタッフという位置付けです。

本社へ帰任する時、編集局次長から電話がありました。「希望の部署はどこか」と聞かれたので、「外勤部門ならどこへでも」と答えました。それなのに、なんと届いた内示は、内勤の第１整理部勤務となっていました。ニューヨークでは、それなりに頑張ったつもりだったので、希望は聞き入れてもらえるとばかり思っていました。サラリーマンなのだから仕方がない、と観念しました。

○**石田**　経歴書を拝見すると、肩書は編集局編集委員となっていて、第１整理部長とは違いますね。

○**今中**　辞令は編集委員となっていますが、編集委員は部長と同等職です。編集委員の肩書で帰任し、しばらくして第１整理部長のポストに就いたということです。

○**平下**　外勤を希望したのは、それまでの記者経歴を踏まえて、やはり外勤でと思われたのですね。

○**今中**　はい。そのとおりです。新聞社を志望しながら、整理部というセクションがあるのを知らなかったという者もいるほど、地味な職場です。新聞社と言ったら記者、というイメージで、僕もそれに近かった。僕は外勤一筋だったから内勤のことは頭に無くて、外勤だったら本社でも支社局でも構わない、と言ったわけです。後で聞くと、「編集幹部になるには、整理部門も経験した方がいい」という、局幹部の特段の配慮があったようです。

整理部は、本社の外勤部署や共同・時事通信などから送られてくる大量の記事の中から、明日の朝刊１面トップはこれ、社会面トップはこれ、これは地方版でと、記事の扱いを決める権限を持っています。ニュースの価値判断が厳しく問われる重要なセクションなのに、外勤一筋の僕は、そのことに思いが至りませんでした。

整理部の仕事

○**石田**　具体的には、どういった仕事になるんですか。

○**今中**　中国新聞の本社・支社局と、共同・時事通信社などから送られてくる記事は、１日に数千行に及びますが、紙面には限りがあります。広告にも、一定のスペースを割かなくてはなりません。紙面建ては普段で30ページ前後。掲載できる記事の量は、おのずと限られています。膨大な量の記事の中から、明日の１面と社会面トップはこれ、これは地方版扱いで、とニュースの価値判断をし、紙面にレイアウトするのが整理記者の役割です。重要な部署ですが、僕は外勤一筋だったから、やはり外勤で通したいという思いが強かった。

○**平下**　見出しも付けるのですね。

○**今中**　もちろんです。紙面をレイアウトしたら、記事ごとに字数制限のある主見出し、脇見出し、小見出しと付けていく。締め切りがあるから、短時間に紙面を組み上げなくてはなりません。昨今はすべて電子編集だけど、僕の整理部時代は、ほとんど手作業でした。紙面を組み上げた頃にビッグニュースが飛び込んでくることも、よくあります。紙面構成が、ガラっと変わります。僕とは対照的に整理部一筋の者がいて、紙面構成を短時間でやり替える技量は、まさに職人技という感じでした。

○**石田**　当時はワープロが導入され始めた頃でし

たか。

○**今中**　いいえ、その前の段階です。

○**石田**　では手書きですか。

○**今中**　手書き原稿が、ほとんどでした。

○**石田**　400字詰めの原稿用紙をパラパラと繰りながら判断していくわけですか。

○**今中**　400字詰めではなくて、新聞専用の小さい原稿用紙です。活字の大きさも、時代によって変わって来ています。あの頃は１段が15文字でしたが、高齢化社会に対応して活字を太くしていったため、現在は１段に12字前後ですね。活字を太くすると、その分、記事を縮めなくてはならず、記事を適当に刈り込んで短くする。こういったことも整理記者の裁量に委ねられています。

○**石田**　部長と整理記者の関係がよく分からないのですが、記事が整理の手元に届いて価値判断するのは各面の担当者ですか、それとも部長やデスクですか。

○**今中**　基本的には面担（紙面ごとの担当者）とデスクです。本社の外勤や共同・時事通信などからの原稿はまず整理部デスクのもとへ。（メモに整理部の座席配置を書き示しながら）こんな座席配列です。デスクの下に面担がずらりと並んでいます。デスクは、「これは１面、内政面、経済面、外信面…」といった具合に原稿を振り分けて各面担に手渡します。当時は本版と地方版とに分かれていて、本版は第１整理部、地方版は第２整理部と区分けしていました。僕は整理部の経験が全く無いのに第１整理部付の編集委員に。一呼吸置いて部長になり、いささか慌てました。いきなり部長席に座っても指揮は無理だから、ベテランの部員に付き添ってもらって、実際に１面や社会面などの面担を半年経験しました。

○**石田**　ベテランといっても、部長相手では、やりにくかったのではないですかね。

○**今中**　そうだと思います。

○**石田**　面担がそれぞれに紙面を組むとなると、部長としては、どういった仕事があるんですか。

○**今中**　部長席の向かいにデスク席があります。担当デスクの並びに１面、内政面、外信面、経済面、社会面、スポーツ面などの各面担がずらっと座っています。デスクは振り分けた原稿を面担に手渡しする。面担はトップ、準トップ、３番手などと扱いを決めてレイアウトし、仮り見出しを付けてデスクの所へ持って行く。「トップはこれで行きますよ」「うん、それでいいだろうな」とやりとりして、紙面を組んでいきます。部長の役目は、デスクが判断した紙面構成についてゴーサインを出すということになりますかね。

○**石田**　デスクの２人は、（座席図を示しながら）ここに座っているんですか。

○**今中**　はい。部長席に近い位置です。おおむねデスク判断に委ねますが、判断ミスは部長の責任になります。翌朝、朝日や毎日、読売、隣県の山陽新聞など他紙と読み比べてみて、結果的に価値判断を誤っていたということもありますね。各紙がそろってトップ扱いにしているのに、中国は２～３番手扱いだったとか。シビアな職場だと思い知りました。

○**石田**　デスクが主に指示するとのことですが、デスクは部長からの指示を基にするんですか。

○**今中**　部長が直接、面担に指示することはありません。デスクは部長に「トップはこれでいきますよ」と。部長が了承すれば決まりです。まれに、部長が「そうかな。自分はこう思うんだけど」という場合もありますが、その時は議論をして、「それではトップを差し替えよう」とか。「やはり、今のままで行こう」とか。そんな感じです。

○**平下**　トップと２番手の記事では、分量もかなり違うと思いますが、差し替えると記事も書き替えることになるのですか。

○**今中**　今は電子編集なので、とっさに差し替えたり、手直しも可能です。あの頃は鉛活字の活版印刷だから、記事の中段か終わりの部分をバッサリ削るしかない。翌日の朝刊で他紙と読み比べて、「うちは、あそこを削ったけど、よそは詳し

く報じている」などと力量も問われます。外勤記者は「特オチ」すると読者や取材先で、あざけられますが、整理記者は記事の扱いで厳しく問われますね。

○**石田**　厳しいというのは、どういう時に感じるんですか。

○**今中**　読者から、「お宅はどうしたん。あんな記事をトップ扱いにして。やっぱり田舎新聞じゃね」などと嫌みを言われる時でしょうか。「地域のことも大事だけど、世間の今の関心事は…」などとズバリ指摘されると痛いですね。

○**石田**　それは投書で、ですか。

○**今中**　投書もありますが、大抵は電話でした。今はSNSの時代。スマホなどで結構、苦情・苦言が寄せられているようです。

○**石田**　全国紙の方の回想録を読んでいると「特オチ」という言葉があり、全国紙で１紙だけ載せていなかったら非常に怒られたという話が載っています。中国新聞の場合も「特オチ」なんていうのを気にされるんですか。

○**今中**　特オチは不名誉な事であり、気にします。特オチも２通りあるんですね。自社の記者の特オチと、通信社の配信ニュースの特オチです。中国地方以外のニュースは、おおむね共同・時事など通信社頼みです。だから共同や時事が政府省庁や官邸、政党、警察・警視庁などで抜かれると、地方の加盟紙は特オチということになりますよね。

○**石田**　なるほど。では、そちらの方はある意味、気持ちは軽かったんですか。

○**今中**　「あれは共同から配信が無かった」などと責任転嫁ができますから。加盟社は、発行部数などに応じて分担金を支払っています。それでもって、共同や時事は取材・通信網を張っているわけです。外国へも特派員を送り出しており、加盟社の分担金は相当な額になります。

ニュースの価値判断

○**石田**　他紙の報道が気になるという話でしたが、全国紙も含めて目を通し、判断材料にするという形なんですか。

○**今中**　そうですね。整理部長になった時、出費はかさむけど、朝に自宅で各紙に目を通すために全国紙も定期購読しました。特オチしていたら、出社前に電話で問いただします。「これはどうしたこと」と。「共同が特オチに気付き、深夜遅くに原稿が入ったので朝刊には突っ込めませんでした」などと釈明があります。外勤育ちだから、やはり特オチには過敏でした。

○**平下**　個人で他紙の朝刊も定期購読され、そういう対応をされたということですね。

○**今中**　はい。家では寝起きに、まず新聞を読みました。あまり細かいことは言わなかったけど、ドカンと１面で抜かれていたら、「これは、どうしたことなの」ということになりますよね。

○**石田**　あと、紙面製作で特に苦労されたことはありますか。締め切り間際まで原稿が届かないとか。

○**今中**　書き手（記者）と受け手（整理者）にはギャップがあります。記者の側は「なるべく詳しく伝えたい」と思っています。だけど整理の側は、「こんな記事が、なぜこんなに遅い時間に」と思いますよね。「あと５分以内に出稿しなかったら、遅版に回すぞ」と急かしたりしました。締め切り間際の「せめぎ合い」はしょっちゅうでした。

○**石田**　報道部など出稿部から「この記事は大きく扱ってくれ」とか、そういった注文もあるんですか。

○**今中**　出稿部のデスクは、「これは、うちの特ダネだからね」と念押しします。整理部デスクも「分かった」と。特ダネだと扱いは、うんと大きくしますからね。

○**石田**　価値判断というのは、なかなか難しいようですが、各紙とも大抵、１面トップは同じになるじゃないですか。不思議だなと思って読んでいるんですよ。

○**今中**　１面トップは、特ダネは別として各紙ほ

ぼ共通しています。プロとしての価値判断を問われます。これは他紙もトップで来そうだと、ひらめくわけです。判断を誤れば、力量が問われます。

○**石田**　あるいは逆に、中国新聞だから、これは外せないとか、こういう方針で紙面を組もうというのはあるんですか。

○**今中**　それはありますね。特に反核・平和報道の分野では。しかし、コロナ禍は昨今の最重要な報道課題だから、バランスを取りながら紙面編成をしています。読者の共通理解を得る努力は大切です。

○**石田**　共通理解なんですか。

○**今中**　共通理解、つまりコンセンサスです。

○**石田**　誰がその任に当たっても、そうするだろうということですね。

○**今中**　そうです。他紙は１面で扱っているのに、中国は２面や社会面にも載せていない、というのは問題です。１面扱いにはしていないが、２面で大きく扱っているとか。読者も、中国だからこれを１面に出して、あれは２面に持ってきたのだろうと類推してもらえるような紙面構成を心掛けました。

○**石田**　それは逆に、読者も分かった上で読まないといけないものですかね。

○**今中**　そう願いたいです。だけど気を付けないといけないのは、読者の皆が原爆・平和問題に深い関心を寄せているとは限らないから。福山支社へ赴任した時、地元財界の知名士から「あんたの所は『ヒロシマ新聞』じゃ。何かにつけて原爆・平和問題を大きく扱うけど、備後の者には違和感があるよ」と言われました。

○**平下**　本版と地方版という話ですと、やはり読者の関心は地域によって違うということでしたが、紙面の構成はかなり変えるのですか。

○**今中**　一般論として本版は、地域に限らない国民全般の関心事を扱います。中国新聞は、中ほどに地域版が６ページずらっと並んでいます。備後、呉、東広島、広島都市圏版といった具合に。地方紙は地域ニュースを“売り”にしていますから。

全国ニュースだと、朝日や読売など全国紙に自力では太刀打ちできません。全国ニュースや外信記事は、おおむね通信社頼みです。その代わり地域の事、端的に言うと「広島の事は、中国新聞を読まないとよく分からない」と言ってくれる読者がターゲットです。「わが町で、どうしてこのような事がと思っていたが、中国新聞の地方版を読んでよく分かった」ということなんです。

広島は転勤族の多い中核都市です。支社や支店、出張所も多い。東京や大阪本社などから赴任した方は、地域版が多くて、スポーツ面もカープの記事で埋まっていることに違和感を覚えます。しかし半年ぐらいたつと、「これが地方紙なのか」と分かっていただけるようです。全国紙をまねていたら、飲み込まれるかも。地方紙らしく地域ニュースを充実して、「中国新聞を読まないと、地域の事はよく分からない」と言ってもらえる紙面づくりが基軸です。

○**平下**　なるほど。分かりました。

○**石田**　先ほど、原爆・平和問題の扱いは共通認識だと言われましたが、こうした編集方針や価値の重み付けについて、何か文書とかマニュアルはあるんですか。

○**今中**　そのような物はありません。

○**石田**　その時々のスタッフの方が共通認識を持っていて、そうやって作られる感じなんですね。

○**今中**　反核・平和報道は基軸ですが、いま世界共通の関心事は「コロナ禍」でしょうね。だから、核兵器禁止条約が批准されたとか、そういう問題は別として、やはりコロナ禍は大きく扱い、きちんと伝えなくてはなりません。コロナ禍の影響は地域にも広く及んでいるから、バランスの取れた報道をしなければ読者は離れます。

○**石田**　新聞を読み比べて、いつも思うのですが、それぞれ個性があるじゃないですか。それが社の方針によるものか、会社の雰囲気でにじみ出

るのか、どちらなのかなと思うんですよ。

○**今中**　新聞社の成り立ちと、伝統のような側面もありますね。中国新聞は世界初の原爆被爆都市に本社を置く新聞社として、社是に「世界平和の確立」をうたっています。会社の基本理念であり「反核・平和報道」は社是にかなうものだという共通認識があります。

○**石田**　分かりました。メーンの記事のことばかり聞きましたが、紙面の隅っこにベタ記事がありますよね。昔、柳田邦男さんの本を読んでいたら、「ベタ記事には、後に大きな問題につながる重要な情報もある。そこを注目して読んでいる」と書いておられました。こんな読み方があるんだと感心した覚えがあります。紙面の余白に何を入れるかは、整理記者のセンスなんですか。

○**今中**　柳田さんはそうおっしゃったかもしれないけど、一般的には、やはりニュースバリューのあるものは大きな扱いに。そうでないものはだんだん小さくなり、ベタ記事（１段扱い）は穴埋めとして扱いがちです。短くしても載せておきたい記事だと、整理者が10行程度に縮めて入れますね。ひょっとすれば尾を引くかもしれないと予感したら、ベタ扱いで載せておくという手法です。

広告の取り扱い

○**石田**　紙面編成では、広告との兼ね合いもありますね。

○**今中**　そうなんです。記事はどんどん送られてきても、広告との兼ね合いがあります。通信社と本社の出稿部から入って来るニュースや企画ものは相当な分量になります。その中から選別して紙面編成をしますが、広告にも一定量のスペースを確保しなくてはなりません。広告は収益の２本柱の１つですから。整理部長の時、紙面の“取り合い”で広告幹部とけんか腰になりました。もっと紙面が欲しいと思いましたね。

○**平下**　分量の問題ですか。

○**今中**　不況で景気が落ち込むと、概して広告の出稿量も落ちます。コロナ禍に直撃された今が、まさにそうです。全ページ広告も見てのとおり。単価の安い健康食品や寝具などに偏っています。あの頃は、自動車や電気・通信機器、化粧品、医薬品などの全ページ・カラー広告が競って持ち込まれました。広告局は、収益アップのため紙面を多く取りたい。編集局は、大きなニュースが飛び込んできた時には、増ページするか全ページ広告を飛ばすしかない。紙面の取り合いみたいになります。

○**石田**　バブルの真っ最中ですもんね。

○**今中**　そうなんです。どこかで折り合いをつけなくてはならない。記事を絞り込んで、広告の要望を入れることもありました。だけど、翌朝刊を他紙と比べて見劣りすると、広告局へ出向いて嫌みたっぷりに「よそ（他紙）はきちんとした紙面を作っている。うちはお宅（広告局）に紙面を譲ったから薄っぺらな紙面になった…」などと。

○**石田**　それは整理部長が広告局長に直接言うんですか。

○**今中**　部長対部長、部長対局長のこともありました。他方、広告でしっかり稼いでもらわないと取材面に響き、優秀な人材も確保できませんよね。それでもなお、整理部長の立場としては、もっと紙面が欲しいという思いが強かったです。

○**石田**　そうなんですか。やはり広告の都合で、という話にもなるんですね。

○**今中**　都合と言うか。スポンサーから単価の高い全ページ・カラー広告などを持ち込まれたら、入れたいですよね。かつて、「１週間後なら扱えるかも…」なんていうこともありました。“殿様商売”と言えそうです。こんなのが、いつまで続くかなとは思いました。所管外なのに、広告局の幹部にこんなことを言った覚えがあります。「殿様商売に慣れると、部員の足腰が弱くなるよ」と。

○**石田**　社長の頃は景気が良くなかったから、そういう思いを一層強くされたでしょうね。

○**今中**　はい。そうかもしれません。

写真11　自宅の玄関にまかれたコールタール
（昭和60年１月８日）
中国新聞社所蔵

報道部長に就任、暴力団追放キャンペーン

○**石田**　分かりました。整理部時代はこれぐらいにして、次の話を伺いたいと思います。そういった経験を経て、ある意味、本望だったのではないかと思いますが、昭和59（1984）年から平成２（1990）年まで報道部長（編集局次長兼務時代を含めて）を務められました。いろいろなことがあった時代だと思います。例えば暴力団追放キャンペーンで社長宅に銃弾が撃ち込まれたり、自宅にコールタールをまき散らされたり。原爆報道では新聞協会賞を受賞されています。この間に昭和天皇が崩御され、多事多難な時期です。その頃の思い出などを聞かせてください。

○**今中**　協会賞の受賞は名誉なことですが、忘れ難いのは「暴力団報道」です。昭和60（1985）年代に入り、整理部長を経て報道部長になった矢先に“お礼参り”（報道の仕返し）に遭いました。自宅を標的にされたのです。何くそ!と思って取材攻勢を掛けたら、社長宅に散銃弾が撃ち込まれました。「まさか」と「やっぱり」という思いが交錯して、複雑な心境でした。日本の新聞界の歴史で、会社や記者が暴力団から嫌がらせをされたり、暴行を受けたという事例はあります。しかし、報道部長の家に大量のコールタールがまかれたり、揚げ句に社長宅へ散弾が撃ち込まれたのは前代未聞の出来事です。逆に言えば、それほど突っ込んだ取材をしたのだと改めて思いました。

○**石田**　暴力団抗争の取材に関してはいろいろと伺いましたが、当時は身の危険を感じていたのですか。

○**今中**　よく、そんなふうに聞かれましたが、不思議とそれは無かったですね。「全く怖くなかった」と言えばうそになりますが、いちいち怖がっていたら暴力団の取材なんかできません。

しかし、妻と３人の子どもたちは心穏やかでなかったと思います。県警の機動警ら隊員が警護で自宅周辺に長く張り付き、隣家の義母やご近所さんも気味悪がっていた様子でした。

県警の幹部から「いつまでもガードするわけにはいかない。深夜に帰宅する時は尾行されていないか気を付けてほしい」などと注文が付きました。また「１階の窓は日中も施錠するように」と要請されました。だけど、夏に窓を全部閉め切ったら熱中症になりますよね。玄関のドアや窓を開けるとブザーが鳴る装置を警備会社に頼みましたが、子どもがうっかり窓を開けると警報ブザーが鳴り響きます。家族がピリピリするので、間もなく取り外しました。

「それなら番犬を」と勧められ、飼うことになりました。「柴系の四国犬がお薦め」とのことで、当時の廿日市署の幹部を介して佐伯区・湯来町の方から、生後３カ月の子犬を譲り受けました。確かに、番犬として役に立ちました。

○**平下**　吠えるのですか。

○**今中**　「賢い犬は無駄吠えをしない」と聞いていましたが、まさにそのとおり。家族にも忠実で

した。これで、子どもたちも落ち着きを取り戻しました。次女に懐いて、アメリカへ転居した後も、国際電話で受話器を耳に当ててやると、ちぎれるほどにしっぽを振るんです。「桃太郎」と名付けましたが、大阪に移り住んだ長女が次女の声色をまねて、電話で「桃ちゃん」と呼び掛けても無反応。「桃ちゃんが病気になって、もう長くは生きれない」と知らせたらアメリカから帰って来ました。次女に会って５時間後に、息を引き取りました。

○**石田**　本当に、家族同様にかわいがられたんですね。

○**今中**　そうですね。やはり犬も分かるんですね。

○**石田**　私は犬が苦手です。どうも吠えるのは苦手でしょうがない。

○**今中**　犬好きな者は犬にも分かるらしい。僕は心得ているので、犬に近寄る時はしゃがんで、犬と目線を合わせます。「よしよし」と撫でてやると、大抵の犬はしっぽを振ります。

○**石田**　それは、新聞記者として取材をする時に必要な資質なんですか。

○**今中**　そうだとは思いませんが。

○**石田**　犬がいる所で取材をする時は、犬の扱いに慣れていた方がいいとか、そういう訳ではないんですね。

○**今中**　はい。かわいがったら、番犬の役目もしっかり果たしてくれたという話ですから。

○**石田**　そちらの意味ですね。勝手に深読みして失礼しました。ちなみに報道部長になる時は、どういった形で辞令を受けたんですか。

○**今中**　編集委員の肩書でニューヨーク支局から帰ったら「取りあえず、整理部で勉強しろ」いうことになりました。「分かりました」と。期限は告げられなかったけど、２年足らずで報道部長に異動しました。

○**石田**　昭和59（1984）年だから、編集委員から通算すると４年務めておられますね。

○**今中**　はい。編集委員の肩書で報道と整理担当のデスクを務めました。

写真12　山本朗社長宅に撃ち込まれた銃弾跡
（昭和60年１月27日）
中国新聞社所蔵

○**石田**　そうですね、整理部は２年でしたね。

○**今中**　そして報道部長に。

○**石田**　報道部長になってすぐ、暴力団絡みの集中報道をされたというのは巡り合わせですよね。

○**今中**　巡り合わせというか。報道部長のポストに就いて真っ先にしたことは、出先のキャップを招集しての聞き取りです。「今、何が問題なのか。重点報道課題を、どう展開しようとしているのか」などと。整理部にいて紙面は読み込んでいましたが、キャップに直接確認するためです。

県警のキャップから「南区の黄金山に暴力団・共政会の、こんな豪邸が建てられています」と。写真を見ると、なるほどすごい建物です。「建設に取り掛かる前に察知できなかったのか。記事にして『待った』を掛けにゃあ」と苦言を呈しました。「課税措置は」と聞くと、「それは調べていません」と。土地・建物を合わせると３億円近いといい、カッとなりました。

「無為徒食。恐喝などを常習にしている者たちに、こんなことをさせていいのか。すぐ税務署にも当たれ」と檄を飛ばしました。

所轄の税務署へ行かせたら、副署長は「いや、うちの署員にも女房・子どもがおりますから」と。身に危険が及ぶから、と逃げの姿勢です。僕

が広島国税局に出向いて総務部長に会いました。国税庁派遣のナンバーツーです。総務部長は「そうはおっしゃるけど、一線の査察員の安全面のこともありますから…」などと逃げ口上。共通しているのは「身に危害が及ぶ恐れがあるから」ということなんですね。

「あなた方は公務員ですよ。そんな理由で逃げていいんですか」と迫りました。取りやすい所から徴収し、怖かったら見逃す、ということにほかなりません。「それはおかしいですよ」と言い争いになりました。いずれにせよ、徴収以前の査定すら行っていないのは、納得がいきません。紙面で厳しく追及しました。

○**石田**　それが、この時のキャンペーンの始まりなんですか。

○**今中**　始まりというか。抗争も無いこの時期にわが家と社長宅が狙われた一因だったと思います。書けば税務署も動かざるを得ない。「税務署まで、たきつけやがって…」と怒り狂ったわけです。

「脱税は共政会本部だけじゃないだろう。ほかの幹部宅も当たってみろ」とキャップに指示しました。案の定、副会長たちも大きな家に住んでいました。３階建て、一般の居宅なら２世帯ぐらい住んでいそうな建物です。やはり固定資産税などは納めていなかった。

「それみろ」と言いました。写真を添えて記事にしたら、頭に来たんでしょうね。「ドンパチ（拳銃の撃ち合い）をやっとるのでもないのに、こんな記事まで、いちいち書きやがる」と怒りをあらわにしました。

以前にも申しましたが、自宅が襲われたことは、その時点で記事にしていません。記事にすれば、「それみろ、わしらに突っかかってくれば、報道部長でも容赦せんぞ」と、脅しの手段に使われかねないからです。

○**石田**　中国新聞は記事にしなかったということですが、他紙はどうだったんですか。

○**今中**　知ってか、知らずか。他紙にも載りませんでした。

○**石田**　よその記者たちは、知らなかったのでは。

○**今中**　報道関係者が狙われた特異な事件だし、所轄署の刑事たちが駆け付けて現場検証もしたから、知らないはずはなかろうと思っていますけど。

○**平下**　山本朗社長は、何かコメントされましたか。「気を付けろ」とか。

○**今中**　わが家が襲われた事件は、秘書を通じて聞かれたと思いますが、直接、僕には何も言われなかった。そうしたら、今度は社長宅が襲われました。わが家の事件から３週間後のことです。

早朝の６時過ぎ、報道部の当直から「社長宅に銃弾が撃ち込まれた」との一報が。「けが人は…」と聞くと、「無さそうです」と。安佐南区の自宅から、中区平野町の社長宅へ駆け付けました。警察の実況検分の最中でした。山本社長が孫を抱いて玄関に立っておられました。開口一番、「迷惑を掛けて申し訳ありません」とわびると、「あんたが謝ることはない。悪いのはあれら（暴力団）じゃ。新聞記者は、書くべきことは書けばええ」と言われました。やった!と思いましたね。これからも、やるしかないと奮い立ちました。社長のこのひとことは、その後の新聞人生の指針になりました。

○**石田**　申し訳なく思ったというのは、社長に累が及んだからですか。

○**今中**　そうです。これには伏線があります。これより少し前に社長の側近から「あまりやり過ぎると、どこかでリアクションがある。社長も生身（なまみ）の人間じゃからな」などと言われていました。その時は気に留めなかった。口にはしなかったけど、「僕らは腹をくくって立ち向かっている。やるからには徹底してやる」という思いでした。その時は“雑音”として聞き流しましたが、「ほどほどにしておけよ」という暗示だったかもしれません。社長宅が襲われたことで、「それみろ、言っただろう。突っ走るから、こういう

ことになるんよ」という声を耳にしました。

○**石田**　同じ方が、そういうことをおっしゃっていたんですかね。

○**今中**　さあ、それは分かりません。新聞社にも、いろいろな人がいますから。忠言と雑音は、きっちり区別したつもりです。

○**石田**　やはり、新聞人はこうあるべきと思われたんですね。

○**今中**　はい。そうです。

○**石田**　ちなみに、現場に着いた時は、周りに“やじ馬”は結構いたんですか。

○**今中**　特異事件なので警察が立ち入り禁止のロープを張っており、近所の方は離れた所から見つめていました。普段も交通量が少ない閑静な一角。物々しい雰囲気ではなかったです。

○**石田**　社長から責められたら、今中さんも立場は無かったでしょうね。

○**今中**　そうかも。社長が迷惑そうな顔をして、「ほどほどにしておかないからよ」などと言われたら、僕たちもプツンと切れたかもしれません。真逆だったので、勇気づけられました。

○**石田**　山本社長は立派でしたね。

○**今中**　温容なタイプでしたが、腹は据わっていました。

○**石田**　ほかにも、そんなふうに感じられる場面はあったんですか。

○**今中**　言動は穏やかでしたが時々、皮肉を言われて、ニヤッとされた顔を思い出します。これはオフレコの部分かもしれませんが、僕に論説委員の内示が出かけた時、社長が「なんであれが論説なのか」と言われたと漏れ聞きました。

○**石田**　それを聞いて、うれしかったのではないですか。

○**今中**　そうですね、やはり期待に応えなければいけないと思いました。

○**平下**　論説委員というのは、社内でどのような位置付けになるのですか。

○**今中**　論説委員は社説やコラムを書くのが職務です。「社説」を執筆するのだから重責です。荷が重すぎて、僕には向いていないと思いました。それに、現場をはいずり回って記事ネタをあさる、真相を探り、良いは良い、悪いは悪いと書くのが記者の道だ、という思い込みもあったから。

写真13　「ヒロシマ40年」報道で新聞協会賞受賞
（昭和60年10月15日、静岡市）
中国新聞社所蔵

「ヒロシマ40年」の新聞協会賞受賞

○**石田**　次の話に行こうと思います。報道部長時代に、「ヒロシマ40年」企画で新聞協会賞を受賞されました。思い出が何かありますか。

○**今中**　この時の協会賞は、「アキバ記者」と「段原の700人」の両企画を併せた「ヒロシマ40年」報道として受賞しています。先だっても申し上げたとおり、僕は「アキバ記者」に関しては現地取材などでも直接にかかわっています。

「段原の700人」の素材になった南区の段原町は比治山の陰になっていて、原爆から焼け残った地区があります。ここに中山広実というお医者さんがいて、検診した被爆者700人のカルテを保存していることを聞き込みました。デスクの有田博司君は「カルテの700人を追跡したら、被爆者の実態と医療の現実が見えて来る」と直感。３人の記者で特別取材班を組みました。海外へも足を延ばして転居者も追跡し、93％に当たる648人の消息を確認しました。

連載中に厚生省が、死没者を含めた被爆者全国

実態調査を決定し、企画は援護の在り方にも一石を投じました。「アキバ記者」と併せて協会賞に応募し、受賞したということです。

○**石田**　報道部長は、取材の指揮を執る立場ですよね。暴力団関係では、昔取った杵柄（きねづか）で部員を鼓舞されたと思いますが、このほかに、すごく力を入れた報道というのは。

○**今中**　最初から部長が「あれをやれ」という形は取らなかった。部員がキャップを通してデスクへ素案を提示。「これは行けそうだ」、「特別取材班を組もう」という流れになります。「段原の700人」もそうでした。敏腕のキャップ、デスクがカギを握っています。

「アキバ記者」は、僕がニューヨークから帰ってからも深くかかわった企画なので、力が入りました。続く「アジア記者招請計画」は僕の発案です。

○**石田**　部長になれば記事を書くことは無く、上がってくる報告や企画案を検討して、指示を出すのが仕事の中心になるんですね。

○**今中**　そんな感じです。実務はデスクに委ねますが、記事や連載企画は丹念に読み込んで、「書き味がいまひとつで、企画の意図が伝わって来ない」などと注文は付けます。読者のスタンスで、１歩引いた形で原稿を見ました。

また、編集局内の資料室へは努めて足を運びました。ここには全国紙のほか、交換紙として送られてくる地方紙が十数紙あります。山陽、高知、神戸、京都、西日本（福岡）、南日本（鹿児島）、河北新報（仙台）など。ほかの地方紙が、どんな取り組みをしているかが分かります。このテーマは中国でも取り組めないだろうか、とヒントもつかめます。実務に追われるデスクたちを、こんな形でサポートしました。

○**石田**　やはり、同じ地方紙の企画は参考になるんですか。

○**今中**　ええ。地力のある地方紙は、新聞協会賞を狙って競い合っています。協会賞は新聞社のステータス・シンボルでもあるから、受賞にしのぎを削ります。神戸や京都、名古屋、仙台、北海道など、よそでできることが中国地方でできないはずはない、と意欲を駆り立てます。読者が重なり合っているわけではないから、いいところは積極的に取り入れました。

○**石田**　ちなみに、どこの新聞社が一番参考になりましたか。

○**今中**　順位は付けかねますが、手ごわさは新聞協会賞の受賞回数に比例しているように思います。

広島県政、広島市政について

○**石田**　分かりました。ちなみに当時の広島県政、広島市政の分野で、部長として突っ込んだ取材をした覚えはありますか。

○**今中**　あまり大きな出来事は無かったし、県政絡みでは藤田雄山知事の政治資金規正法違反事件があったけど、あれはいつでしたかね。

○**石田**　あれは、もっと後の話になりますね。

○**今中**　ずっと以前の昭和30年代には「大判・小判事件」が。県議会議長を経て参議院議員も務めた中津井真さんが同僚議員らに大判・小判を配り、天下に恥をさらしました。僕の県政キャップ、報道部長時代には「部落問題」がクローズアップ。「８者協」という組織もできて、報道には神経を使いました。

○**石田**　ちょうど、この昭和59（1984）年とか平成の初め頃といったら、県知事が竹下（虎之助）さん、広島市長が荒木（武）さんで、県と市の仲が悪かった時ですよね。

○**今中**　そうですね。ですが、後の秋葉さんと藤田さんの時代も、仲が良かったとは言えませんね。

○**石田**　そういったところを突くようなことは、されなかったのですか。

○**今中**　いま思うと、双方が肩肘（かたひじ）を張っていた。いい意味で、競り合っていた面もありますね。広島市は政令指定都市なので、それなりの権限を有しています。市は「県の言いなりに

はならんぞ」と。県は「地方自治の仕組みからして、こっちの方が上位だ」と。県が反核・平和問題を手掛けると「これは市の領域だ」と。半面、協調路線だと、「あまり波風を立てずに、なあなあで…」ということになりがちです。

知己の市役所の幹部に言ったんですよ。「平和問題を県に先取りされているね」などと皮肉っぽく。湯﨑知事は「国際平和拠点ひろしま構想」を立ち上げて、提言や緊急アピールなども行っています。仕切りがあるわけではないから、県が平和の分野でも積極的に行動を起こすことは何ら問題ない。むしろ、歓迎すべきことかもしれません。しかし秋葉市政の時はいくらか様相が違い、「こんな施策を県に先取りされて」と、部下がお叱りを受けることもあったとか。知事と市長がいがみ合えば、県民・市民にとって、はた迷惑な事ですが、政策論争や程よい距離感は必要だと思います。

○**石田**　なるほど。分かりました。ちなみに、あの頃は非常に景気が良くて、バブル経済のまさに絶頂期です。暴力団絡みかどうか知りませんが、地上げや土地転がしなどが社会問題になった時期です。これにはあまり関心が無かったんですか。

○**今中**　いいえ、そんなことはありません。暴力団が絡んだ地上げ問題は、連載企画もやって大きく取り上げています。中区立町に大きな娯楽施設がありますが、かつては、あの一帯に病院や飲食店などが建て込んでいました。共政会の前身の岡組の連中が地上げをもくろんだので、集中報道をして阻止しています。

○**石田**　やはりそういうのも、きちんと目配りされたんですね。

○**今中**　暴力団絡みだと、「僕らの前線時代は（不正を）いろいろ嗅ぎつけて、どんどん書いたよ」と部員にハッパをかけました。あの時の「地上げシリーズ」は、読者からも高く評価されました。

○**石田**　以前に頂いたDVDで紹介されていた北村（浩司）さん、今の編集担当常務にハッパをかけたのは、この頃の話なんですか。北村氏が１人で暴力団事務所へ取材に行ったところ、今中さんから「やっと一人前の記者になったな」と、褒められたということでしたが。

○**今中**　自宅を襲われた時、真っ先に駆け付けたのが北村浩司君です。あの時は、入社２年目の警察回りでしたかね。

昭和天皇崩御時の報道

○**石田**　そうですか。次に、これは中国新聞に限らず大きな問題になったと思うのですが、昭和64（1989）年１月に昭和天皇が崩御されました。あの前後の報道は、どういったスタンスで臨まれましたか。

○**今中**　不敬罪などは廃止されていたけど礼を失してはならないから、マスコミも非常に神経を使いましたね。「下血がひどくて、余命いくばくも…」などの情報は間断なく入ってきましたが、逐一伝えてはおりません。

しかし万一の場合に備えて、各メディアが準備していたことは否定できません。崩御の正式発表と同時にNHKや民放は特番を放映。新聞も２～４ページ号外を出したりしたから。

○**石田**　あの２、３カ月の間は、すべて自粛、自粛でしたもんね。

○**今中**　そうなんです。政府や宮内庁の公式発表しか書けない。週刊誌まで、そんな感じでしたから。

○**石田**　ちょっと青臭い質問かもしれませんが、天皇制について、どうお考えですか。

○**今中**　そうですね、天皇制がいつまで続くのだろうという思いは、国民の間にもあるでしょうね。英国では王室がずっと続いており、アジアにも王室国家があるのを見ると、日本でもよほどのことが無ければ続くのではないでしょうか。

○**石田**　社の方針として、あるいは雰囲気として、取り扱いをどうするとか、そういった話は特には無いんですね。

○**今中**　ありません。

○**石田**　それは、朝日新聞なんかもそうなんですかね。

○**今中**　全国紙も紙面を見る限り、特に取り上げてはいませんね。宮内庁を担当した記者が、退職後にフリーの立場で書いているようなふうもありません。僕一個人としては、いわゆる「象徴天皇」として、今のままでいいのかなと思っています。

○**石田**　読売や産経などは、割と擁護ではっきりしている感じですが、左寄りと見られている新聞は、そこまではっきり書かないな、といつも読んでいて思うんですよね。

○**今中**　全国紙も地方紙も、天皇制の在り方について、特には取り上げてはいませんね。昭和天皇は陸・海軍の統帥権を持っていました。「戦争責任」の有無について、議論されたこともあります。今は平時ですし、象徴天皇として国事行為を粛々と務めておられ、それでいいのではないか、というのが一般の国民感情だと思いますけど。

○**石田**　そうですね。分かりました。あと、報道部長時代を通して、何かこれだけは言っておきたいことはありますか。暴力団の話は非常にインパクトが強かったです。

○**今中**　特にはございません。

福山支社長へ赴任、中国経済面の創設

○**石田**　では次に進みます。平成２（1990）年２月から平成３（1991）年１月まで、１年足らずですが、福山支社長を務めておられます。どういった経緯で異動され、どんな仕事をされたのでしょうか。

○**今中**　会社の人事ですし、なぜ福山支社なのかは聞いてはおりません。僕としては、もうそろそろ外へ出る頃かなとは思っていました。福山支社は、中国新聞の備後地域の拠点です。その支社長は重要ポスト。重用してもらった、と受け止めました。後年、福山支社は備後本社に格上げされています。

○**石田**　要職という思いが強かったんですね。

○**今中**　はい。赴任のあいさつで社長室へ行ったら、山本朗社長から「いずれは備後本社にするつもりだ。要職だから頑張って」と言われました。

○**石田**　福山支社のエリアは山陽新聞と接しているので、頑張ってもらいたい、ということなんですかね。

○**今中**　中国と山陽は、共に地方の有力紙として県境を接しています。切磋琢磨（せっさたくま）して頑張ってほしい、というエールだと受け止めました。

広島県は安芸と備後で大きく区分されており、その片方の備後を統括する福山支社長は重責です。編集局では紙面製作に集中すればよかったけど、支社では販売や広告、事業も主要な任務になります。

着任後の半年間、午後は支社を留守にして管轄エリアを回りました。任期は３年程度と思ったので、１年目はエリアの掌握。２年目は行政・経済、文化団体などとの交流促進。３年目は仕上げの年と、自分なりに位置付けました。ところが、１年足らずで本社に復帰することになり、３年計画はついえました。心残りがありますね。

○**石田**　支社長の場合、どういったことが業績として評価されるのでしょうか。

○**今中**　支社長の業績は１が部数増、２が営業収益と言えるでしょうか。もちろん、編集面には力を入れました。紙面の中身で購読してもらえるわけだから。半面、販売部員や販売所の従業員が頑張らないと、紙数はなかなか伸びません。備後の地でも「中国新聞を読まないと、備後の事はよく分かりませんよ」というのを“売り”にして、部数の拡張に力を入れました。

○**石田**　ちなみに、広告を出してもらえるよう、どんなふうに口説かれたんですか。

○**今中**　前任の支社長から引き継ぎを受け、大口のスポンサーの所へは真っ先にあいさつに行きました。「前任者と同様、引き続いてよろしく」の紋切り型ではなく、新聞協会の事務局から取り寄せたデータなども示しながら、広告掲載の費用対

効果を説明したりしました。他方、小口のスポンサーも大切です。小口ながら、コンスタントに広告を出してくれるスポンサーは結構います。とにかく、支社長室から外へ出るよう心掛けました。

○**平下**　部数を伸ばしたい、広告をもっと取りたいということに関して、備後特有の難しさみたいなものは、ありましたか。

○**今中**　部数増に関して松本（卓臣）福山商工会議所・会頭から指摘されたのは、「備後の側からすると、あんたの所は『広島新聞』よ。だから備後で紙（紙数）が伸びんのじゃ」と。「どういうことですか」と聞き返したら、「被爆地に本社を構える新聞だから、分からんでもないが、備後の読者に『ノーモア・ヒロシマ』一辺倒では通用せんぞ」と、ピシャリ言われました。「だから備後には、山陽新聞の読者がそれなりに、おるんよ」とも。備後の側からすると、そういうことなのかと思い知りました。この言葉は重く受け止め、本社に帰ってから、この「忠言」は紙面製作に生かしたつもりです。

福山支社長の経験は貴重でした。読者は多様だし、地域性が大いにあります。製作する側の論理や理屈だけで紙面編成をし、「被爆地・ヒロシマの新聞」を錦の御旗にするだけでは、トータルとして紙数は伸びないことを思い知りました。

○**石田**　でも、そんなに正面を切って“嫌み”を言われると気分的には…。

○**今中**　でも僕は、これはありがたいことだと受け止めました。直言・苦言ですから。内心はそんなふうに思っていても、相手はマスコミだからと一目置いたり、何かあった時は忖度（そんたく）してほしいみたいな心情もありますよね。「至らぬ新聞ですが」と言うと、大抵「いや、そんなことはない。お宅は立派な大新聞ですよ」と言ってもらいますけど。松本さんのように直言してくれる人が、本当のサポーターだと思っています。

80歳を超えて、社長を務めている方がおられますよね。お会いすると「わしは辞めとうてかなわんのじゃが、辞めさせてくれんのよ」とおっしゃる。「辞めてもらったら困る」と言うから引けんのよと。僕は、こう直言しています。「『辞めよう思うんじゃが』と言われて、『いつでもどうぞ』と言える部下はめったにいませんよ。それは自身で決断されることじゃないですか」と。

直言してくれる人がそばにいた方がいい、と思います。松本さんは備後での貴重な存在でした。煙たがっている人は多かったけど。

○**石田**　やはり、上に立つと引き際が難しいですからね。

○**今中**　そうですね。だから、「お宅にはいろいろ世話になっているけど、あれは良くない」とか、「部数を伸ばそう思うんなら、こうすれば」と直言してくれる人は貴重な存在です。

○**石田**　ちなみに、松本さんのほかに恩義を感じた方はおられますか。

○**今中**　松本さんは別格として、特に営業面では多くの方々に支えてもらいました。

○**石田**　福山支社長時代に限らず、ほかの地域ではどうでしたか。これまでお会いした中で、この人の言葉は胸に響いたというのは。

○**今中**　概して転勤族の支店長さん方は、スバリ言ってくれますね。「地方紙だから、地域ニュースを“売り”にされているのは分かるけど、私たちはまず日経を読んで、朝日、読売を読んで。中国新聞の地域ニュースで、営業に関連がありそうなものは、担当が切り抜いて持ってきてくれます」と。こうした経験を踏まえて、後に「中国経済面」を設けました。「広島経済面」との見開きワイド構成にしたら、地場企業はもとより、転勤族の支店長さんたちからも好評で、それなりに部数も伸びました。

○**石田**　「中国経済面」を設けたのは、社長の時ですか。

○**今中**　編集局長時代です。

○**石田**　発案者は、どなただったんですか。

○**今中**　発案者というか。現場にも「経済面をもっと強化したい」という共通の思いがあったから、期せずして。

○**石田**　そうなんですか。

○**今中**　いち早く、実行に移したのは正解でした。経済面をワイド構成にし、右面に中国ブロックの記事、左の面に県内の記事を載せました。

○**石田**　ワイドとはどういう意味なんですか。

○**今中**　「見開き構成」という意味です。中国新聞の場合、（新聞を繰りながら）１面、２・３面に内政・総合、４面に全面広告、５面にオピニオン、６面に国際・総合、７面に経済と続いて８～９面が「ローカル経済」といった紙面編成のことが多い。一般的に、見開きで読める紙面を「ワイド面」と称しています。

○**石田**　分かりました。それにしても福山支社勤務はわずか１年でしたね。密度の濃い１年だったようで。

○**今中**　まさかの11カ月間でしたが、いい勉強をさせてもらいました。

部落解放同盟広島県連との関係について

○**石田**　次の話に行きましょうか。編集局長に就任する前の事として、少し重たい話を伺おうと思います。昭和50（1975）年代前半から県東部を中心に、部落解放同盟の広島県連は大きな影響力を持つようになったと言われています。報道部長、編集局次長、福山支社長を経て編集局長になり、いろんな局面でかかわりがあったのではないかと思います。報道面で、どのような影響があったのでしょうか。

○**今中**　そうですね。影響の度合いはともかく、編集局や支社局員にとって、相当に意識しなくてはならない存在でした。

リーダーの小森龍邦さんはカリスマ性があり、舌鋒（ぜっぽう）も鋭かった。行政が教組や部落解放同盟と連携して解放教育に取り組むという「８者合意」を成立させたのも、小森さんの力です。同和団体の教育介入に反抗する校長や教員らは糾弾され、精神的に追い詰められた高校長が自殺したと言われています。報道部員や福山支社の編集部員、府中支局長らが書いた記事についても、「部落差別」の観点からクレームが付きました。問題点をその都度指摘されるのではなく、年に２回、３月と８月頃に部下を４～５人引き連れて会社にやって来られました。

○**石田**　会社というのは。

○**今中**　土橋町の本社です。８階の会議室で、僕以下編集局次長、報道部長たちで応対しました。糾弾調ではなかったけど、「部落差別の問題から逃げとる」とおっしゃる。「記事に問題点があれば、その都度指摘してください」と言うと、「そんなことを言ったって、あんたらは性根が入っとらんから、わしが局長の所まで出向いて、ちゃんと話さにゃならんのよ」と。

「この記事について、どう思うか」と問われるので、「こういうことです」と釈明すると、「それでええんね。あんたらは、その程度の認識で記事を書いとるんか」と追及されます。具体的に指摘された事について「はい、分かりました」と答えると、「どう分かったんね。きちんと説明してみんさい」とおっしゃる。僕なりに答えると「分かっちゃおらんじゃないか。勉強が足りんのよ」と。大抵３時間近い話し合いになりました。

○**石田**　年に２回あったんですね。

○**今中**　はい、年に２回は会っておりました。終わりに「大体分かりました」とあいさつすると「大体かい。今日はこのぐらいにしておこう。また来るわ」と言い残して帰られました。

福山支社の編集幹部や府中支局長たちへも「編集局長以下が、突き上げられたらしい」などと憶測交じりに伝わるので、経過はきちんと伝えるようにしました。本社での応対からして、現地の支局長らが「引き気味」になるのは無理からぬことと思いました。書くべきことを書かない。リアクションを危惧して避けて通る。高校長の自殺の件でも、出稿しないケースがありました。

○**石田**　福山支社の記者や支局長は身の危険を感じていたんですか。

○**今中**　身の危険など全くありませんが、何かにつけてプレッシャーを感じていたようです。ただ

し僕たちメディアの側にも、部落問題について学ぶべきことが多いことを思い知らされました。いわれのない差別。士・農・工・商以下の階層として「穢多・非人（えた・ひにん）」に位置付けられたのが被差別部落ですから。国民全体が真に理解すべき事柄なのですが、時に「糾弾」と見なされる行動が伴うので、解放同盟は「怖い存在」に映ったのではないかと思っています。

○**石田**　本社での話し合いの時、小森さん以外、どなたもしゃべらないんですか。

○**今中**　はい。ほとんど小森さん１人でしたね。

○**石田**　ちなみにこの頃、部落解放同盟と共産党などが激しくやり合っていますよね。

○**今中**　小森さんは全国部落解放同盟の書記長も務めた実力者です。それもあってか、広島では共産党がいくらか引き気味だったように思えました。

○**石田**　ちなみに、そのころ県教組の執行委員長を務めた石田明さんは、今中さんと縁戚関係にありますよね。教職員組合は解放同盟と近い関係だったと思いますが、そういったことは個人的に何か影響がありましたか。

○**今中**　いいえ、個人的に影響を受けたとは全く思っていません。義兄の石田とは時折会っていましたが、「いい調子でやっとるね」と皮肉っぽく言うと、「わしも立場があるけんのう」などと笑っておりました。

○**石田**　何か困ったことがあって、石田さんに仲介を頼むようなことは無かったですか。

○**今中**　ありません。厚かましかったけど、肝心な時にビビったりして。高校長が自殺した時、「きちんと対応すべきだ」と注文を付けたら、「うーん」と言ったきり。「しゃんとせにゃあ」と嫌みを言ったのを覚えています。

○**石田**　言いにくいことを聞いてしまい申し訳ないです。今日はこのあたりで。

（終了）

第６回
編集局長～総務局長

歴史認識の問題と向き合う

○**石田**　今日もよろしくお願いいたします。

○**今中**　こちらこそ。

○**石田**　平成３（1991）年１月から平成８（1996）年１月までの５年間、編集局長を務めておられます。この間は平成３年に日米開戦50年、平成７年に原爆投下50年ということで、植民地支配、侵略戦争あるいは原爆投下の是非など、評価の難しい歴史認識の問題に注目が集まった時期になります。こうした諸問題について、どのような姿勢で臨まれたのでしょうか。

○**今中**　中国新聞は原爆被爆地に本社を置く報道機関ですから、反核・平和報道は歴史的使命という共通認識があります。金井利博論説主幹をはじめとして多くの先輩・同輩が記事や社説で、あるいは連載企画などで、それなりに存在感を示して来ました。

その系譜の下で日米開戦50年、続いて原爆投下50年という節目の時期に編集局長を務め、責任の重さを痛感しました。駆け出しから長く警察・司法の分野を担当。反核・平和報道に携わるのが遅かったためもあって、負い目みたいなものが胸の片隅にありました。ばん回のチャンスでもあり、力量不足ですが「節目にふさわしい企画を」と、肩に力が入ったかなと思っています。

特に意識したのは原爆投下と、かつての侵略戦争や植民地支配との因果関係です。平成４（1992）年の秋に、広島市の国際会議場で「ヒロシマを語る」というテーマでシンポジウムを開きました。パネリストとして出席したアジア７カ国・地域（台湾）の新聞・通信社の記者たちから「原爆投下によって、日本の侵略戦争に終止符が打たれた」、「アジアの人々の命が救われた」という厳しい指摘が相次ぎました。半世紀を経ても、

写真14　日・韓地方新聞編集局長会議
（平成７年５月15日）
写真中央の司会者が今中氏本人。
中国新聞社所蔵

なお残る侵略・植民地支配に対する抜き難い感情はショックでした。このような声や批判にどう答えるか。このことを踏まえて展開したのが「50年報道」でもあったと思います。

２年後に、広島で第12回アジア競技大会が開かれることになっていました。アスリートをはじめ観客として、アジアの人たちが被爆地に足を踏み入れます。どのような態度で迎え、どう接すればいいのか。その切り口として、「亜細亜からアジア～共生への道」というタイトルの企画を走らせました。亜細亜は「侵略したアジア」を意味しています。

この企画は、本当にやってよかったと思っています。侵略し、植民地化した８カ国・地域に３人の中堅記者を長期間派遣しました。「きちんと歴史認識をして、あの痛みを共有することなくして真の友好はない」という締めくくりの論調は、読者の共感を呼びました。投書欄にも「いい企画だった」という声が寄せられました。

また平成７（1995）年５月、中国新聞と友好関係にある地方紙の編集局長に呼び掛けて、「日韓地方新聞編集局長会議」を広島で開きました。「戦後50年・新時代への提言」というテーマで、中国新聞と新潟日報、河北新報など地方紙５紙。韓国からは光州日報、江原日報、釜山日報など有力地方紙５紙の局長が参加しました。

シンポジウムでは「過去の清算」、「草の根交流」、「地方の視点」の３つを軸に討論し、集約しました。各自が地域に持ち帰って読者に伝えました。後日、紙面が送られて来ましたが、韓国側の新聞も大きく扱っていました。広島市のほか自治体の関係者も傍聴し、地方紙レベルでの初めての交流として注目されました。

被爆50年の節目に取り組んだこの企画は、僕たちが「ノーモア・ヒロシマ」一辺倒ではないのだというスタンスを示すことができました。反核・平和報道の、新たな切り口になったと自負しています。

○**平下**　「ヒロシマを語る」の企画で、アジアからの参加者が、原爆投下は正当だったという評価をされたというお話ですよね。それが今中さんにはショックだったということでしたが、逆に言うと、語ってもらおうと思っていた事と、少しズレがあったというお話ですか。

○**今中**　ズレはいくらかありましたけど、僕としては、「アジアの人たちは、今もそんなふうに思っている」と日本人記者が伝えるよりも、彼らの口から直接語ってもらったことで説得力が増したと思いました。オープンな場での討論ですから。聴衆にも彼らの真意がストレートに伝わったと思います。

○**平下**　では、そういうリアクションが出ることは予測していたと。

○**今中**　はい。むしろ期待していました。批判されるのを「期待していた」というのはおかしいかもしれないが、「加害者は忘れても、被害者は決して忘れない」ということを、彼らの口から直接語ってもらい、書いてもらう方がベターだと確信しました。

○**石田**　このシンポのことは確か、平岡（敬）さんの岩波新書「希望のヒロシマ」にも書かれていましたよね。パネリストで広島市長として参加され、非常に厳しい意見を突き付けられたと書いておられたと思います。やはり、予想した以上の厳しい意見だったんですか。それとも想定の範囲内だったのですか。

○**今中**　韓国側の記者ですか。

○**石田**　はい。

○**今中**　どうでしょうか。僕は、やはり彼らは、ずっとそんなふうに思っていたのだと受け止めました。被害者の痛みですよね、なかなか消えることは無いと。彼らは50歳前後だから、戦争のことは覚えている世代です。だから、議論はかみ合いました。同年代で、同じローカル紙記者。地域住民と向き合っています。彼らを通じて韓国の地域読者に「ヒロシマの思い」は伝わったと思います。記事はきちんと書いてくれました。被爆地広島での開催だったから、総じて扱いも大きかったのだと思います。後日送られてきた各紙を見ても扱いは大きく、社説・論説で取り上げた所もありました。

○**石田**　ちなみに今中さんには「満州体験」があり、ある意味、植民地を経験しておられますよね。

○**今中**　そうですね。

○**石田**　その体験が、こういった企画・報道をするのに何らかの影響があったんでしょうか。

○**今中**　うーん、それはどうでしょうか。僕の場合も、言ってみれば侵略サイドです。父は軍人ではなかったけれど。座長を務めたので発言は控えめにしましたが、総括のとき「生まれは旧満州の奉天（現・瀋陽市）。父親は軍人ではなかったが、満鉄（南満州鉄道）関連の機関で働いていた」と打ち明けました。「たまたま原爆被爆地の広島に本社を置く中国新聞の記者になり、編集局長のポストに就いた。いつか、このような企画ができればと考えていた」と。「実のある議論だったから、それぞれの新聞紙面できちんと伝えてほしい」と締めくくりました。

○**石田**　では、このシンポも中国新聞が主催して。

○**今中**　いいえ、先ほど挙げた有力地方紙５社の共催です。僕が呼び掛けたので広島で開き、会場の設営は地元紙として引き受けました。広島で開いたのは、もちろん原爆被爆地だからです。韓国側の編集局長は、広島を開催地に選んだ理由を事前に聞いてきました。「呼び掛け人の私が、被爆地に本社を置く新聞社の局長だから」と答えたら、「それなら積極的に参加する」と明言しました。

○**石田**　原爆・平和報道を続ける中で、市民が「戦争の加害責任」というのを、あまり意識していないと思われていたんですか。

○**今中**　うーん、そうですね。もう少し被害者の痛みを知るべきだ、という思いは常々ありました。加害者意識の方は薄れつつあるのかなと。マスコミがそのことを指摘すると、右の論調の方たちは、「いつも、そうやって自虐的になる」と反発されますけどね。

○**石田**　挙げられた事例は、いずれもアジアを向いての話ですよね。逆にアメリカの方はどうですか。リメンバー・パールハーバーとか、あるいは被爆50周年の時はスミソニアン博物館での原爆展が中止になって問題になりましたよね。こういったことについて、記憶や思い出はありますか。

○**今中**　スミソニアン博物館の時は、先輩の大牟田（稔）さんが広島平和文化センターの理事長を務めていました。あの時期は編集の中枢にいて、現地の動向なども詳しく報道したつもりです。平岡さんは国際司法裁判所まで出向いて意見陳述をされ、これも、きちんとフォローしています。

○**石田**　アジアの方は強く印象に残っているけれども、原爆を投下したアメリカ側について、もう少し掘り下げるようなことはされなかったのですか。

○**今中**　いいえ。原爆投下国の米国に対しても厳しい目を向けたつもりです。十分だったかどうかは、読者の判断に委ねるほかありません。

編集局長の業務（１）

○**石田**　ちなみに、編集局長というのはどういったのが普段の仕事なのですか。

○**今中**　簡潔に申し上げれば、紙面製作を統括す

るということでしょうか。

○**石田**　報道の方針について指示を出すとか、そういうのは無いんですか。

○**今中**　年頭に「今年はこれで行こう」と指針を示します。重点報道はこれ、メーンの企画はこれ、と具体的に。編集局の各部署や支社局から上がった素案を吟味して、絞り込みます。厳しいけど、とにかくやろうと決断し、ゴーサインを出すのが局長の役割だと認識しています。

○**石田**　その年ごとに、メーン企画の方向付けをするんですね。

○**今中**　はい。局長の権限ですが、担当の役員に了解を取り付けて。メーンの企画でも、社長は直接タッチしません。

○**石田**　タッチしないんですか。

○**今中**　何もかも、社長や主筆らが首を縦に振らないと前へ進めないという社もあるようですが、わが社では、すんなり通ることが、ほとんどでした。

報道部長から編集局長時代を通して、トップから企画案に「待った」が掛かったことはありません。社主制を敷いているので、「鶴の一声」と勘繰る向きもありますが、そんな事は全くありません。山本朗社主は、そんなことをすれば「新聞の自殺行為」につながり、読者からも見放されるということを承知していたと思います。

その象徴と言えるでしょうか。暴力団追放キャンペーンの余波で居宅が襲撃された時、駆け付けた僕が「迷惑を掛けました」とわびたのに対して、「あんたが、わしに謝ることはない。記者は、書くべきことを、きちんと書けばいい」と。いわゆる圧力で、記事をゆがめられたことは皆無だったと言い切れます。

○**石田**　やはり上司が揺らがないと、仕事はやりやすいでしょうね。

○**今中**　はい。一方で、部下たちも僕を見ています。当たり障りなく適当にやれば、「一生懸命やっても、上の方で丸められてしまう」といったことになると、士気はそがれます。「社長がなかなか、うんと言ってくれない」などと口実に使う向きもありますが、そうしたことが無かったのは本当に幸いでした。だからトップの言葉は重いし、判断を誤れば自滅にもつながりかねません。「社主制なんて古くさい」という指摘はありますが、内実は、そんなものではなかったです。

○**石田**　編集局長時代、企画をしようと思った時、局長の下に関係部署の幹部が集まって会議をされたんですね。

○**今中**　はい。合議をし、よほどのことが無い限り、その場で決定します。

○**石田**　なるほど。そこへは他局の幹部らは参加しないんですね。

○**今中**　加わりません。ただし編集担当の役員にはきちんと説明し、了解を取ります。編集担当が社長に「来年は、これで行こうと思います」と伝え、「そうね」と言われたら決定です。

○**石田**　信頼して任された、ということなんですね。

○**今中**　そう思っています。「これで、どうでしょうか」などと、いちいち伺いを立てていたら、なかなか前へ進みません。どこかで、ぶつかる部分もあるし、経営面でマイナスになることもあり得ますが、トップには、覚悟と度量が必要だと思っています。

○**石田**　逆に責任は重たくなかったですか。

○**今中**　いちいち指示される方が、楽な面もあります。責任転嫁ができますから。任されると、「公共のメディアとして、被爆地の新聞として恥ずかしくない報道」を強く意識します。サラリーマンはおしなべて、言われたとおりにやるのが一番楽ですよね。

○**石田**　全く、おっしゃるとおりです。

○**今中**　指示した人が責任も取ってくれるのなら、これほど楽なことはない。「任せる。うまくいかなかったら自分が責任を取る」と言われれば、「この上司に迷惑を掛けてはいけない。恥をかかせまい」ということになりますよね。メーンの反核・平和企画でも、編集担当が「これで行き

ます」と社長に報告。社長が「あ、そうね」といった感じでした。

○**平下**　例えば、編集局長時代に企画された「ヒロシマを語る」の成果などについては、社長から何かコメントはありましたか。

○**今中**　直接には無かったです。自信作だと思ったら協会賞に積極的に応募してほしい、という思いは常々持っておられました。山本朗、治朗さん父子は、新聞協会の副会長など要職を歴任し、新聞業界でも一目置かれていました。協会賞の重みを知っています。「ヒロシマ40年報道」で協会賞を受賞した時、壇上に上がったら、小林與三次・協会長（読売新聞社長）の隣に座っていた、副会長の朗社長がニッコリされました。表彰式の後、「よくやってくれた。わしも鼻高々じゃ」と、ねぎらってくれました。

連載記事「BC級戦犯」の改ざん問題

○**石田**　では、次の話に行こうと思います。少し重たい話になりますが、平成３（1991）年10月16日、御田重宝さん執筆の「BC級戦犯」連載について中国新聞が改ざんを認め、調査結果とおわびが紙面に大きく掲載されました。どのように対処されたのでしょうか。

○**今中**　御田さん執筆の「BC級戦犯」が大変な事態を引き起こしました。創刊100年を超える社史の中で痛恨の出来事です。これが発覚して、社内調査に掛かる直前に福山支社長から編集局長に転任になり、まさに出鼻をくじかれた思いでした。

御田さんは定年退職後も業務委託契約の下で執筆していました。「シベリア抑留」の連載で新聞協会賞を受賞したベテランですが、「BC級戦犯」企画（245回連載）の中に、改ざんも含めて要削除・訂正部分が延べ約1,000カ所もあったのです。

原稿は一応、編集局デスクがチェックする仕組みでしたが、事実関係については御田さんに任せるほかありません。ここに盲点がありました。

広島にも郷土部隊という組織があり、御田さんは長年の取材活動を通じて、戦友会の方たちと親密な関係にあったようです。だから多くの戦記物が執筆できたとも言えますが、「BC級戦犯」の記述の中で問題が発覚しました。広島の陸軍第５師団歩兵第11連隊が、マレー半島で中国系住民を虐殺した事実を掘り起こしていた林博史・関東学院大学助教授たちに対して「華僑虐殺の事実発掘を自虐的に強調」などと決めつけたものだから、怒りを買いました。共同研究者の高嶋伸欣・筑波大付属高校教諭と共に、「事実誤認や誤記、無断引用が多数ある」と編集局長宛てに内容証明郵便を送って来られました。

これは大変な事だと直感したので翌日に上京し、林先生に会いました。口頭で謝罪しましたが、とてもそれで済まされるような事柄ではありません。林先生は「きちんと対処してもらえますね」と念を押されました。

帰社して編集担当に報告。広島市政記者クラブのキャップなども務めた中堅の清水文裕君を本社に引き上げて、「BC級戦犯」の総点検に着手しました。３カ月近くかかったと思います。彼は午後９時頃まで編集局の別室にこもって点検を続けました。結果的には、それがよかったと思います。林先生たちも、おおむね納得してくれました。過ちを正すのは当然のことであり、いい記者を点検要員に充てたと思います。

10月16日付の１ページ特集で「総点検BC級戦犯」を掲載。読者にわびるとともに、再発防止を誓いました。後に「週刊金曜日」に、高嶋先生が「知られざる『中国新聞の訂正と謝罪報道』～改ざんを認めた勇気と事後報道の軌跡を辿る」という一文を寄せています。

「調査の特命を受けた担当者はＡ４判164ページに及ぶ正誤一覧表を作成。訂正を徹底するため、県内および全国の主要図書館に中国新聞の購入と保存期間について問い合わせをした。中国新聞を長期保存している図書館には『BC級戦犯』を掲載していた90年８月から91年５月までの閲覧申し出があった場合には、調査委員作成の正誤

一覧表を添えて書庫から出すように依頼した…。ここまで社会的責任を果たしている新聞社の例を私は知らない」と。被害に遭った側が、こんな一文を寄せたのです。きちんと対処してよかったと思うし、教訓にもなりました。

御田さんは当時、定年退職後の業務委託という身分でした。「太平洋戦争」を素材にした戦記ものを得意としていました。古書店にはノモンハン戦、レイテ・ミンダナオ戦、ガダルカナル戦、マレー戦など徳間文庫から刊行した御田さんの戦記物がずらっと並んでいました。

彼が社内で一目置かれたのは、中国新聞社の原爆被災史とも言える「もうひとつのヒロシマ～ドキュメント・中国新聞社被爆」を執筆していたからです。輪転機の疎開と復活印刷、新聞再発行の経緯などを克明に記述しています。御田さんならではと評価され、それが重用につながりました。「あの御田氏が執筆しているのだから」、ということだったと思います。１ページ全面の訂正・謝罪記事は痛恨の極みですが、誤りをきちんと正す姿勢を読者に示せたし、得難い体験だったとポジティブに受け止めています。

○平下　このトラブルそのものではないのですが、御田さんの事例のように、業務委託という形で記事を書いてもらうというのは一般的にあったことなのですか。

○今中　今は一般的だけど、当時は少なかったですね。彼は戦記物が得意で、単行本もたくさん出している。書くのも速かった。戦記物については“実績”があったから、それがチェックの甘さにもつながったのでしょうか。戦史はあくまで史実です。時折、編集局の別室で執筆しているところを見掛けましたが、そばに文献を置いているふうもない。だから自分の頭に入っているものが多かったと思うけど、やはり戦史は歴史そのものなので、これで大丈夫なのかなと、ふと思いました。

○石田　林先生から第１報を受けた時点で、これは大事だと直感されたということですが、指摘された事柄は、誰が見ても明らかにおかしいと思うことだったんですか。

○今中　いや、それはどうでしょうか。僕自身、戦史については詳しくありません。抗議して来たのは戦史研究のエキスパートです。僕が最初に電話で、なまはんかな受け答えをしたら、「それじゃあ、私の方から出向きましょうか」とおっしゃいました。「資料も持参して」と。「とんでもない、こちらから伺います」と申しました。

翌日上京し、大学の林先生の部屋でお会いしました。昼過ぎから夕方にかけて。聞けば聞くほど、やはり林先生の方がはるかに綿密なんです。チェックされていた一覧表を見て、「これは大事になりそうだ」と直感しました。帰途、東京駅から編集担当に電話を掛けました。「これは大事です。きちんと対処しなければ大変なことになります」と。

○石田　電話をした編集担当というのは。

○今中　尾形（幸雄）常務です。

○石田　ところで、そういうのが見逃されるぐらい、御田さんは社内でもエース級の扱いだったんですか。

○今中　エース級というか、戦史ものをあれだけ書いているし、国内でも戦史家の一人に挙げられていました。アジアの戦史に関しては第一人者という風評もあり、それで本人も詰めが甘くなったのでしょうか。

雑誌などで書く分には、かつての戦争にかかわりのある人とかは「ああ、そうだったのか」と読むし、一般の方は戦記物はあまり読みませんよね。徳間書店から出版されたシリーズだって、誰かが林先生たちのように綿密にチェックすれば、「史実と違う」という指摘が出たかもしれません。引用しても、出所を明記しなければ剽窃（ひょうせつ）になりますよね。慌てて御田さんの一連の戦記物を読んでみましたが、一緒に従軍していたのではないかと錯覚するような記述が随所にありました。

○石田　ちなみに、こういった訂正・おわび記事

を出したことに対して、他紙の方から何か言われましたか。

○**今中**　朝日新聞は取り上げました。

○**石田**　紙面で、ですよね。

○**今中**　はい。そうです。

○**石田**　大変だったねとか、よくチェックできたねとか、そういった話はなかったですか。

○**今中**　「大変だったでしょう」と、知友や後輩たちは慰めてくれました。

御田さんは、いわゆる現役ではなかった。主に自宅で書いた原稿を担当の編集局デスクに提出。局デスクも文脈がおかしい所とか、「てにをは」くらいしか直せませんよね。こうしたことが、あのような結果を招いたと思います。

○**平下**　御田さんは、処分されたことを承服されなかったのではないですか。確か反論記事みたいなものを、どこかに出されていました。

○**今中**　処分といっても、正社員ではないから難しいですよね。開き直っている、という印象は僕も持ちました。「迷惑を掛けた」など謝罪の言葉は、僕は最後まで聞けませんでした。

○**石田**　なるほど。今中さんも、かなり悩まれたんですね。

○**今中**　もともと僕は原稿の流れの埒外（らちがい）にあったから、釈然としなかった。連載は読んでおりましたが、基礎知識のあまり無い戦記物だから、「ここは違うんじゃないの」と指摘できるはずもありません。「長々と続くね」というのが、編集局の大方の受け止めだったように思います。

○**石田**　言い方は悪いですが、思わぬ形で尻ぬぐいをさせられたことになりますよね。

○**今中**　そう言えるかもしれません。新聞協会賞も受賞している先輩だけに、「あんな大事をやらかして…」という思いはぬぐえませんでした。協会賞の受賞は、新聞人にとって大変名誉なことです。その受賞者がやった行為だけに、残念でした。

○**石田**　分かりました。なかなか言いにくいことを聞いてすみません。

○**今中**　いいえ。

被爆50年の特別企画について（１）

○**石田**　では、次に移っていこうと思います。平成７（1995）年に被爆50年報道として「検証ヒロシマ1945-1995」、連載「核と人間」、インタビューシリーズ「核時代　昨日　今日　明日」を手掛け、新聞協会賞を受賞しています。編集局長としてどのようにかかわられましたか。

○**今中**　わが社は、「20年報道」と「40年報道」でも協会賞を受賞しています。40年報道の時は報道部長でした。「段原の700人」と「アキバ記者」の両企画を統括したということで、僕が代表者として協会賞を受賞しました。

率直に申しますと、「50年報道でも協会賞を」と気負いました。局次長や部長、担当のデスク・キャップ、前線記者たちと構想を練り、絞り込んだのが、これら３つの企画です。海外取材が多くなるので取材経費はかさみますが、編集担当の尾形常務は認めてくれました。３つの企画の“合わせ技”で協会賞が取れたというのが本当のところです。

「検証ヒロシマ1945-1995」は、年表作成の担当記者が、年表だけでは満たされないものを感じて、「この人は今どうしているだろうか」、「あの出来事の底流に何があったのか」などを改めて追跡した企画です。

「核と人間」は、核時代とは何であったのかを被爆者と同じ目線で問い直した試みです。取材は、米・ソ（旧ソ連）両国の放射線人体実験と核被害、原爆傷害調査委員会（ABCC）の活動などに焦点を当てました。「核開発の暗部」にも迫ることができたと自負しています。

インタビューシリーズ「核時代　昨日　今日　明日」は、核超大国アメリカの側から見た核時代の50年です。英語が堪能で、海外取材の経験豊富な田城明記者のワンマン企画です。「マンハッタン計画」をはじめ、米ソ冷戦下で核政策を立

案・実行した政治家、放射線専門の化学・保健物理学者、原爆投下や冷戦時代の歴史検証を試みた歴史家、平和運動に取り組む文学者ら、アメリカの有識者18人にインタビュー。核時代をどう評価し、ヒロシマ・ナガサキをどう見ているかなどを問うたものです。アポを取るだけで、数カ月かかりました。よく会ってもらえたなと感心しました。

ちなみに田城記者は、既に退職していて現在は客員特別編集委員の肩書です。非常勤講師として、広島大や広島市立大などで教壇に立っています。

ユニークなキャリアの持ち主です。兵庫県・淡路島の洲本実業高校卒。思うところがあって21歳の時に広島に移り住みました。

中区千田町の中国新聞・鷹の橋販売所で働く傍ら、ヒロシマ学習をしました。勤勉で努力家。独学ながら英会話も堪能です。販売所長は「新聞配達ではもったいない」と本社に推薦。販売局発送部員になり、９年後に報道部へ移りました。地味なタイプだが粘り強い。発送部は夜間の仕事です。日中は勉学に励んだのでしょう。独学で英検１級や会議通訳士の資格も取得しています。

この英語力を生かしたいと、国際ロータリー奨学生に応募。米東部の名門で、国際関係専門のタフツ大学・大学院で学び、学位を取得しました。この力量を生かすべく重用し、反核・平和報道の中軸に加えました。

「核時代　昨日　今日　明日」シリーズでボーン・上田記念国際記者賞を受賞。地方紙記者ではまれなことです。新聞協会賞も３つの受賞作にかかわっています。また「21世紀　核時代　負の遺産」企画で石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞。「知られざるヒバクシャ　劣化ウラン弾の実態」企画で日本ジャーナリスト会議大賞。だから、彼は「４冠」の持ち主です。

中国新聞の反核・平和報道の担い手は金井利博、平岡敬、大牟田稔、浅野温生、島津邦弘、田城明、西本雅実たち。そしてヒロシマ平和メディアセンター長の金崎由美、桑島美帆、報道部の水川恭輔、明知隼二記者たちの現役へと着実に引き継がれています。僕は枠外ですが、その周辺にいて、それなりにかかわれたのはラッキーでした。

○**石田**　やはり協会賞は狙っておられたんですね。

○**今中**　そうですね。山本朗会長から「新聞社のステータスは何じゃと思う」と聞かれたことがあります。

○**石田**　それは、いつ頃の話なんですか。

○**今中**　「ヒロシマ40年」報道の協会賞は静岡での新聞大会で受賞しましたが、その日の夜、会食の席で朗会長が、僕にこう言われました。「新聞協会の役員を長く務めているが、新聞社のステータス・シンボルは発行部数と協会賞の数じゃと思う。これがわしなりの評価基準よ」と。

○**石田**　40年報道の時も、上からハッパをかけられたんですか、それとも無言の圧力みたいなものが。

○**今中**　圧力なんかは、無かったです。しかし朗会長は常日ごろ、「協会賞には積極的に応募してくれよ」と言っておられました。応募の締め切りは７月半ばですが、その頃になると会長から「今年は何を出すんかいね」とさりげなく聞かれました。受賞が決まると、ねぎらってもらいました。

○**石田**　山本朗会長にですか。

○**今中**　はい。そうです。

○**石田**　そんな感じだったら、部下たちも「被爆50周年は大きな節目だから、是が非でも協会賞を」ということになりますね。

○**今中**　担当記者たち以上に、上層部が“やきもき”していたかもしれません。

○**石田**　それは編集の幹部の方々ということですね。

○**今中**　編集幹部は、もとよりです。

○**石田**　やはり、被爆の周年サイクルはずっと巡って来るわけだから、その度にみんな同じ思いをするんでしょうね。

新聞協会賞の選考方法

○**今中**　余談ですが、協会賞の審査はユニークです。一般的には外部の方が審査に当たりますよね。新聞協会賞は内輪の審査なんです。常任審査員として朝日、毎日、読売など全国紙と民間放送のキー局。これに地方紙の数社が加わって全体で十数人になるのかな。局長クラスで１次審査に当たります。

地方紙の場合は常任ではなく、何年かに１回、審査員の当番が回ってきます。共同通信加盟社の中で、おおむね発行部数を目安にグループ分けがしてあり、「火曜会」や「土曜会」などと呼ばれています。わが社は山陽や京都、神戸、河北などと同じ火曜会（12社）に属しています。火曜会と土曜会から、各２社の編集局長が輪番で審査に加わる仕組みです。編集局長時代、たまたま審査の当番に当たりました。

内部審査だと審査員の中に、応募している社の局長もいますよね。採決の時は席を外します。外部審査だと、審査員に「先生、よろしく」といった働き掛けもありがちだとか。内部審査の協会賞の場合、それは通用しません。つまり中身次第。優れた企画なら、「敵ながら天晴れ」と推さざるを得ませんよね。

○**平下**　選ぶ時は、どのように絞っていくのですか。

○**今中**　どこの社もそうだと思いますが、「これなら協会賞が取れるかも」という自信作を応募します。編集にはスクープ（特ダネ）、連載企画、映像・写真の部門があり、第１次選考で絞り込まれます。それを協会長が取り仕切る最終選考会に上げて審査をし、受賞作品が決まるという手順です。

企画部門への応募だと、各自が作品を冊子にして協会事務局へ送ります。それを事務局が、審査の当番社に届けます。長期連載だと、結構なボリュームです。編集局次長や報道部長らが分担して下読みし、局長へ上げる。それを参考にして、局長が協会での審査会に臨むという形です。

○**石田**　編集局次長らは大変な作業になりますね。

○**今中**　大変です。僕が局次長の時も、別室にこもって下読みをしました。

○**石田**　そんなにかかるんですか。

○**今中**　長編の企画だと、冊子（指で２～３㎝の幅を示して）は相当なボリュームです。優劣の評価をするのだから、丹念に読みますよね。別添の申請書に付記されている、狙いどおりの展開になっているか、報道の成果はどうだったのか、がポイントになります。下読みに１週間近くかかりました。

○**石田**　局長は、局次長たちの評価を参考にして、協会の審査会に臨むんですね。

○**今中**　はい。下読みの局次長の間でも、評価は分かれます。微調整をして評価案をまとめ、局長が協会での審査に当たるということです。

○**石田**　審査員として参加された経験では、評価は大体、似たようなものになるんですか。

○**今中**　ライバルではあっても、やはり、いいものはいいと認めざるを得ない。厳正・公平な審査が行われていると思っています。それだけに、協会賞を受賞した御田さんの「BC級戦犯」があのような結末になり、残念です。

○**石田**　お話にあった、火曜会と土曜会は地方紙のどんな集まりなんですか。

○**今中**　ひと口に新聞と言っても全国紙、地方紙、経済紙、業界紙、スポーツ紙、政党の機関紙と多様です。新聞協会に加盟している地方紙は80社前後。この中で共同通信に加盟している、発行部数が30万～50数万程度の社で「火曜会」を組織しています。僕の局長時代は11社でした。発行部数がそれより少ない10万～20万ぐらいまでが土曜会です。どちらも親睦機関で、協会の組織ではありません。

○**石田**　そうなんですか。火曜とか土曜日に集まって何をされるんですか。

○**今中**　編集局長が、毎週火曜日や土曜日に集まっているのではありません。共同通信の定例会

合日に合わせて２カ月に１回程度、開いておりました。情報交換をして、夜は懇親会。地域社会で、それぞれ問題を抱えているから、話題は豊富でした。震災の被災地同士で、共通キャンペーンをやろうと、この場で決まったりしました。

○**石田**　なるほど。共同通信のつながりで、こういう会をつくっているんですね。

○**今中**　はい。そうです。

○**石田**　ちなみに火曜会、土曜会へは共同通信の方も参加されるんですか。

○**今中**　はい。会のまとめ役になってくれていますから。

被爆50年の特別企画について（２）

○**石田**　分かりました。ところで、随分と密度の濃い企画を３つやっておられますね。私もいろいろ調べ物をする時には、まず「検証ヒロシマ」を開いています。あと「年表ヒロシマ」も一緒に作られていますよね。これを見て、事実関係を押さえてから資料を当たっているので、非常に助かっています。

○**今中**　暮れに、担当者が編集局の別室に詰めて、元日から大みそかまでの反核・平和絡みの事象をピックアップし、年表を作成しているのを見ています。年表を見れば、どこで何があったか一目瞭然。貴重な文献だと思いましたね。

○**石田**　そうですよね。

○**今中**　担当者は大変な作業だったと思います。

○**石田**　島津さん、西本さんたちも担当されたと思いますが。

○**今中**　はい。反核・平和報道の中枢にいた記者たちですから。

○**石田**　田城さんもすごいですね、「４冠」を取られているんですね。

○**今中**　そうなんです。

○**石田**　業界内で「４冠」という言い方をするんですか。

○**今中**　いいえ。ある時、全国紙の幹部の方から「御社には『４冠記者』がいるから、すごい」と言われて、ハッとしました。ちなみに４冠は、先ほども申したとおり「新聞協会賞」「ボーン・上田記念国際記者賞」「石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞」「日本ジャーナリスト会議大賞」です。僕なんか編集畑にあれほど長くいたのに、協会賞の受賞が１回きりです。

○**石田**　なるほど。業界内で「２冠」とか「３冠」とか、そんな言い方があるわけではないんですね。

○**今中**　はい、それはありません。

○**石田**　田城さんが編集記者として採用された時、お世話をしたのが今中さんということですか。

○**今中**　彼が発送部門から報道部へ異動した時、僕は報道部のデスクでしたが、異動には関与していません。彼が報道の職場になじむまで、助言程度はしました。彼が僕に恩義を感じてくれているとすれば、後にアメリカ留学（東部の名門・タフツ大学）のチャンスを与え、反核・平和報道の中軸として彼の力を生かしたということでしょうか。彼も感謝してくれ、退職後の今日に至るも親しくしています。

○**石田**　そうなんですか。ところで被爆50周年とはいえ、これだけ密度の濃い企画を３つもやれば、普段の紙面に影響は出なかったんですか。

○**今中**　影響が無かったとは言い切れません。協会賞狙いの企画は１面で扱うから、紙面編成では整理部にも無理を言いました。けれども大抵は聞き入れてくれ、「中国新聞だから当然」という対応に鼓舞されました。

○**平下**　紙面編成は整理部の役割だと思いますが、特集記事の扱いもですよね。

○**今中**　紙面編成の権限は整理部が持っています。報道部長が整理部長に「これは今年のメーン企画だから、１面で扱ってほしい」と申し入れると、大抵はOKです。ただし、震災とかコロナ禍のような大きな災厄があれば、反核・平和絡みの企画であっても初回だけ１面に出し、２回目以降は２面や社会面で扱うなど臨機応変に対処しま

す。

○**石田**　企画に手を取られるので、一般の取材に支障を来すようなことはなかったんですか。

○**今中**　影響はありますが、支障とは受け止めていません。反核・平和報道は基軸だという共通認識がありますから。

○**石田**　そこのところで、不満とか不平が上がってくることは、まず無いということなんですね。

○**今中**　はい、そうです。大きなニュースが飛び込めば、「増ページ」という奥の手もありますから。

○**石田**　増ページができるんですか。

○**今中**　技術的には、40ページまで刷れる高速輪転機を備えています。昨今はコロナ禍の影響もあって広告が落ち込み、全ページ広告は減っていますけど。僕の整理部長時代は全ページ広告の持ち込みが多くて、広告局の幹部と「紙面取り」で、しょっちゅう、やり合っていました。

○**石田**　平成７（1995）年頃はバブルが崩壊して、景気があまりいい時期ではなかったと思いますが、それでも紙面の取り合いに。

○**今中**　バブルが崩壊して、様相はすっかり変わりました。昨今のように、コロナ禍でにっちもさっちもいかなくなったら別ですが、企業サイドには、不況を乗り切るために広告宣伝に力を入れるという側面もあります。

○**平下**　逆に増える？

○**今中**　はい、逆に増えたことも。

○**石田**　意外でした。

○**今中**　そうなんです。コロナ禍の真っただ中の今は、まさに「にっちもさっちも」ですが、PR戦術を駆使して、購買意欲をそそろうということなのでしょうね。

○**石田**　平成７年頃は、バブル崩壊で不景気な話しか記憶が無いので、広告が減らないという一面は意外でした。

編集局長の業務（２）

○**石田**　なるほど。では、先に行こうと思います。編集局長時代で、ほかに何か、これだけは言っておきたいということはありませんか。

○**今中**　特には無いです。何もかも自分でやったわけではなく、総力戦ですから。

○**石田**　お話をずっと聞いていると、厄介な事とか大きな問題が起きた時、ちょうど関係する職務に就いていることが多い感じです。編集局長の時も「被爆50周年」の節目に当たっておられます。

○**今中**　そうですね。編集局長を５年近くやり、激務でしたけど、やりがいはありました。この時期、このポストに就けたのは本当にラッキーでした。

○**石田**　激務というのは、どういった点なんですか。

○**今中**　編集紙面の全責任を負っていて、拘束時間も長かった。大げさな言い方になりますが、「常在戦場」でした。湾岸戦争の時は、未明に号外を３回も出しました。号外は平日、休日、昼夜を問いません。携帯電話なんかも無い時代だから、常に居場所を明らかにしておかねばならなかった。

○**石田**　やがてポケットベルの時代が来ましたよね。

○**今中**　ポケベルの普及で部長やデスクと連絡が取りやすくなり、本当に助かりました。警察回りの頃は、しょっちゅう公衆電話からデスクに電話をかけて、居場所を伝えておかなければならなかったから。

○**石田**　拘束時間が長いって、編集局長は朝何時から夜の何時頃まで社に詰めていないといけないんですか。

○**今中**　何時から何時までと、義務付けはありません。僕の場合、朝の８時過ぎに家を出て、帰宅は夜の10時前後でしたかね。

○**石田**　では、寝る間はあまり無いですね。

○**今中**　帰宅して風呂に入り、夜食をかき込んでバタンキューが多かった。だから胃の調子が悪くて、胃薬を常用していました。

○**石田**　それに、何かあったら夜中に電話で起こ

されるんですよね。

○**今中**　丈夫な方でもないし、５年間がいいところだったかなと思います。

○**石田**　あまりお酒を飲まない今中さんですら、そういうふうにしんどかったんですね。飲む人は、夜の10時に仕事が終わった後に飲むんですよね。

○**今中**　酒は嫌いではなかったけど、やはり健康のことを考えると控えざるを得ません。途中でダウンしたりすれば、周囲に迷惑を掛けますから。

総務局長時代～人事への配慮

○**石田**　分かりました。では、次の質問に移ります。編集局長の後に、平成８（1996）年から11（1999）年まで、一部の期間は常務の肩書で総務局長を務めておられます。どういった仕事をされたのでしょうか。

○**今中**　総務局の所管は人事・労務、秘書・広報、施設の維持・管理などです。それと印刷、広告、新聞輸送、折り込みチラシなどの関連会社が11社あったから結構、管轄は広かったです。僕の場合、編集畑が37年。福山支社長も１年足らずだったから、総務・労務関係は素人（しろうと）みたいなものです。早速、先輩に教えを請い、労務の手引書なども買い込んで、にわか勉強です。

当時は、おしなべて組合運動が活発でした。中国新聞労組も新聞労連（日本新聞労働組合連合）の傘下にあります。労連の統一行動のほか、独自に闘争体制を組んで活動し、賃上げや労働条件の改善などを要求してストライキもやった時代です。地域社会へもアピールするんだとゼッケンを付け、プラカードを掲げて本社の周辺をデモ行進しました。団体交渉は、深夜に及ぶこともあります。

しかし、組合員は苦楽を共にする仲間であり、まして敵対関係ではありません。労使協調を心掛けました。職場環境を改善し、仕事に見合った賃金は保障したいというスタンスで臨みました。山本朗社長に「要求には前向きに対応し、勤労意欲を高めた方が得策です」と直言しました。社長は「あんたがそう言うんなら」と、おおむね聞き入れてもらいました。

人事面で特に心掛けたのは、信賞必罰です。「えこひいき」をしない。転勤を伴う異動では、僕自身も単身赴任の経験があるので、なるべく家庭の事情にも配慮しました。異動の苦情申し立ての窓口を設けました。

さかのぼって編集局長時代のことになりますが、信賞必罰は「言うは易く、行うは難し」であることを思い知りました。「必罰」は誤報をしたとか人権・名誉を傷付けたとか、新聞人にあるまじき行為をしたとか、割と判別は容易です。一方、「信賞」は基準があいまいなんですね。賞をたくさん出せばいいというものでもない。もらえなかった者は、「あんなのに賞を出して」と、かえって全体の士気をそぐようなことがあります。特ダネでも、「たなぼた」（棚からぼたもち）なのか、地道な努力の積み重ねなのかを見極めました。

○**石田**　施策面では、どんな取り組みをされたのですか。

○**今中**　結構、多岐にわたります。災害や震災時の緊急対応策として中国・九州・京阪の一部地方紙同士で新聞製作・輸送援助協定を締結しました。阪神・淡路大震災の時、友好紙の神戸新聞は編集・制作部門で大きなダメージを受け、販売網もズタズタになったので、その教訓を生かしました。

神戸や京都新聞など友好紙４社で「制作ワークステーション」の共同開発を手掛けました。紙面製作を鉛活版から電子組版に移行するのに、多額の開発経費を要します。目指すところは各社に共通しているので、共同開発して経費を削減しようという試みです。これで新聞協会賞の技術部門賞を受賞しています。

総務局は社外との接点の役割も担っており、社会貢献活動にも積極的に参画しました。ひろしま

骨髄バンク支援連絡会の会長を引き受け、全国大会を広島で開きました。

この頃、郵政省（現・総務省）が所管する「国際ボランティア貯金普及協議会」という組織がありました。海外で活躍する日本のNPOに活動資金を援助しており、基金が海外できちんと生かされているかをチェックするため調査団を派遣しましたが、団長としてフィリピンを訪問しました。首都マニラ近郊のスラム街のほか、ネグロス島などへも足を延ばし、支援の在り方について郵政省に意見具申しました。

○**石田**　総務局長の最も大事な仕事は、人事になるんですか。

○**今中**　人事・労務は主たる任務ですが、人事が大変だとは思わなかったですね。会社の将来を見据え、私情を交えず、いいはいい、悪いは悪いと厳正・公平に評価すればいいわけだから。人事で、そんなに苦労したとは思っていません。「あいつを偉くしたけど、何で彼が」といったうわさが発令の日に出たら、おしまいだと思っていました。「彼の抜てきは当然だろうね。大仕事をやり遂げたから」、「部下の信望が厚く、職場が活性化している」などと、大方が納得するような人事を心掛けました。降格や配置換えをしても「あんな大ポカをしたんだから、仕方がないよね」と周囲が受け止めれば、組織の活性化にもつながると思います。

○**石田**　イメージとしては、総務局長ではなくて人事部長がそういうのを決めるのではないんですか。

○**今中**　一線の部員に関してまで、細かく言っておりません。ただ、異動対象者の多い編集部門に長くいたので、ずっと見て来ている者が多いんですよ。上がってきた原案を見て、「これはちょっと違うんじゃないか」、「この辺に、もっと光を当てたら」などと注文を付けました。

編集に関しては、日々の紙面を見れば誰が、どこで、どんな仕事をしているか、おおよその見当は付きます。総務局へ移ってからも、紙面はしっかり読み込んでいました。あの頃は署名が無かったけど、特ダネなんかだったら、誰が書いたのか推測は付きます。基本的には、所属長が上げて来た原案を尊重しましたけど。

○**石田**　派閥みたいなものもあるんですか。

○**今中**　いいえ、そんなものはありません。

○**石田**　では、仲良しグループがあると、そんな感じなんですね。

○**今中**　編集外勤部門の中核である報道部の場合で言うと、前線は県政、県警、市政、運輸・労働グループなどに分かれています。仕事では競い合っていますが、足を引っ張るようなことは無かったですね。職場を離れれば、声を掛け合って、居酒屋などで談笑していましたから。

社員の待遇改善

○**平下**　総務局長の時、労使協調を基軸にしたということでしたが、福利厚生とかで何か改善された面はありますか。

○**今中**　福利厚生にも目配りしたつもりです。総じて新聞社の編集部門は激務です。健康保険組合の理事長を兼務していたから、「人間ドック」健診や単身赴任手当の制度拡充など、それなりに力を入れました。労働組合から、「諸要求」の形でいろいろ要求が出てきます。すべてに応じるのは無理ですが、できる限り前向きに対応しました。

社長から「要求どおりに応えるのは大変だよな」とクギを刺されたこともありました。「これが勤労意欲にはね返って、紙面も良くなり、部数増にもつながりますから…」と言うと「あんたは、いつもそう言うが、そうかのう」とおっしゃりながら、大抵は聞き入れてくれました。

○**石田**　やはりお金が掛かるから、社長も二の足を踏まれたということですか。

○**今中**　それなりの原資は要りますから、何もかも要求どおりには行きませんよね。「今回は応じられないが、前向きに検討する」と先送りすることも。社主家が蓄財して、社員の賃金や福祉面がおろそかになっていると思わせたら士気に影響し

ます。だから、出すべきものは出す。同業他社の回答をにらみながら、勤労意欲をそがないよう心掛けました。

○**石田**　ちなみに若い頃、今中さんは労働組合で活動をされなかったんですか。

○**今中**　労使交渉（団交）の委員が職場単位で選出されます。順番みたいな感じで、交渉委員を１度だけ務めました。出先の記者クラブ詰めだと、取材と重なったりします。団交で社へ上がっている時に限って、大事件があったりしましてね。

だから前線時代、組合活動にはあまりかかわらなかった。団体交渉の場で、会社側に激しく迫ったという記憶もありません。受け手の労務担当になって、「あんたたちは、よく言うよ。僕らの時は、そんなむちゃな要求はしなかったけど」などと言うと、「時代が違いますから」と、いなされました。

○**石田**　中国新聞社の組合加入率は結構高いんですか。

○**今中**　高いですね。ユニオンの形態なので、社員になれば即、組合員です。

○**石田**　上がってくる要求も、一部の人たちでなくて全社的な要求だから、常識的に対応されたということですか。

○**今中**　社員が、いつも労働条件に不満を抱いていたら、いい仕事はしませんよね。応えてくれるんなら頑張ろう、という気にさせる方が得策だと思いました。

○**石田**　なるほど。

○**今中**　同業他社の労務担当の中には、「賃金を抑え込んだ」といつも自慢そうに言う人がいたけど、それには違和感を覚えました。抑え込むのが役目ではなくて、出すものは出して、意欲的に働いてもらう方が、よほど効果的だと思います。

○**石田**　分かりました。労務管理でいろんな取り組みをされたということですが、これは局長の発案なのか、それとも下から上がってくるものですか。

○**今中**　労務部長を通して上がってきます。新聞協会には、各社の労務担当で構成する労務委員会があります。定期的に集まって情報交換をしていました。この場で「お宅は、この問題にどう対処しているの」とか、「こんな問題が起きたけど、お宅も、いずれ組合が要求して来るよ」などと。他社よりも遅れを取っていると思ったら、社長に「これはうちが遅れているから、早急に対応させてもらいます」と率直に言いました。

○**石田**　なるほど。同業他社の動向も見ながら、中国新聞の立ち位置を決めるんですね。

○**今中**　はい。組合の側も「神戸や京都新聞は対応しているのに、どうしてわが社は…」と攻めて来ます。労使双方が「同業他社」を引き合いに出しながら、落としどころを探って妥結するという流れでした。駆け引きです。

○**石田**　駆け引きね（笑い）。

○**今中**　文字どおり駆け引きです。

○**石田**　なるほど。

○**平下**　ちょっと技術的なことを伺います。輪転機の話の中で、ワークステーションの開発にも触れられました。ワークステーションを運用すれば、製作経費は下がるのですか。

○**今中**　新聞の製作形態は、どこの社もおおむね一緒です。かつては、手書き原稿を鉛活字で組み上げて鉛版を作り、輪転機にはめ込んで印刷しておりました。昨今は、電子編集です。仕組みはほぼ同じなので、共同開発すれば経費の大幅削減につながります。４社で組めば、４分の１の出費で済むわけだから。

○**石田**　やはり友好紙同士が声を掛け合うんですね。

○**今中**　はい。発行部数も似通っていて、仲良しの所とね。

○**平下**　中日新聞は、入らなかったのですか。

○**今中**　中日は友好紙ですが、中部地方の代表的なブロック紙であり、うんと格上です。全国紙の範ちゅうには入っていませんが、東京新聞や北陸中日などを傘下に置き、総発行部数は約260万部と言われています。

○**石田**　そうですか、産経なんかよりも多いんですかね。

○**平下**　あと、もう１つ。細かい点ですが、例えば「10ページカラー」というのはどういうことなのですか。

○**今中**　朝刊紙面の中に、カラーのページが10ページあるということです。４ページしかカラー印刷ができない時期が長かった。技術の進歩で６ページ、８ページへと増え、技術的には現在、10ページ以上のカラー化も可能なようです。

○**平下**　新聞のカラー印刷技術は、どんどん進んでいるということですね。

○**今中**　「新聞は記事の中身次第。色のある無しで読むもんじゃない」という向きがあります。僕も内心そう思ってはいますが、やはり読者はカラー紙面にすっかりなじんで、カラー面が無くなると違和感を覚えるでしょうね。カラーインクは高くつき、印刷経費は膨らみますが、時代の要請なので対応せざるを得ません。

○**石田**　ちなみに、今中さんは編集でカラー時代を経験されているんですよね。

○**今中**　はい、短期間でしたけど。カラー広告は単価が高いので、紙面編成に際しては広告局にも配慮しました。

○**石田**　カラー化が進んで、紙面の製作工程も変わったのは、経営陣になった頃ですか。

○**今中**　はい。ちょうど、輪転機の性能が格段にアップした頃でもありました。しかしカラー印刷に踏み切った当初は、原稿の締め切り時間を繰り上げて、ムラ刷りなど不測の事態に備えました。

○**石田**　カラー紙面だと、締め切りはどのくらい早めるんですか。

○**今中**　その日の紙面建てにもよりますが、カラー面が入ると、締め切りを１時間以上も繰り上げるような時代でした。

○**石田**　なるほど。締め切りが早いと、整理部の人たちも焦りますよね。

○**今中**　はい。そんな感じでした。

○**石田**　短い期間だったけれど、いろんな仕事に取り組まれたんですね。

○**今中**　仕事をしたと言うより、追い立てられたという感じです。

○**石田**　畑違いだと、なかなかね。

○**今中**　ええ、一から学ぶことが多かったから。

○**石田**　総務局長のまま、平成９（1997）年３月から平成12（2000）年３月まで常務を務めておられますが。

○**今中**　常務取締役・総務局長という身分ですから、職務の内容は全く同じです。

○**石田**　常務になったことで、仕事の内容や権限が変わったというのではないんですね。

○**今中**　ええ。特には変わっていません。

○**石田**　編集局長の段階で取締役になっているので、そんなに変わらないんですかね。

○**今中**　はい。取締役総務局長になり、任期途中で常務の肩書が付いたということです。

○**石田**　身も蓋（ふた）も無い言い方ですが、給料は上がって仕事の内容は変わらない、と。

○**今中**　そんな感じですね。ただし、役員としての、責任の度合いは高くなります。

○**石田**　分かりました。今日はここまでにして、次回は社長就任から話を伺いたいと思います。

（終了）

第７回
社長時代

社長就任の経緯

○**石田**　今日は第７回ということで、よろしくお願いいたします。

○**今中**　はい。よろしく。

○**石田**　平成12（2000）年３月に、代表取締役社長に就任されました。山本實一さんの公職追放で戦後一時期、社長を退いたことがありますが、実質上は今中さんが初めて、創業家以外からの社長就任となりました。このことについて、特別な反響とか、あるいは生活等で大きく変わったことはありましたか。

○**今中**　社の内外で反響はありました。山本治朗会長は訓示式で、「山本家以外からの社長は初めてであり、頑張ればトップを目指せるということで、社内の活性化につながることを期待している」と述べています。

社長就任については、前年の暮れに山本会長から打診がありました。常務定年が間近に迫っていて、そのまま引くものとばかり思っていたので驚きました。会長へは「正月休みの間に、ひょっとして考えが変わるかもしれない。僕には荷が重いので再考してください」と話し、保留させてもらいました。

年が明けて、４日の新年の仕事始めの朝、会長室に呼ばれ、「私の考えは変わらない。受けてくれますね」と強い調子で言われました。「それなら」ということで受諾しました。ローカル経済誌のトップ記事の見出しは、「中国新聞社に何が起こったのか。寝耳に擂り粉木（すりこぎ）の社長交代劇。メガトン級の激震走る」と、大げさでした。

○**石田**　確かに大げさですが、世間の受け止め方を代弁したのかもしれませんね。

○**今中**　中国新聞は明治25（1892）年の創業以来オーナー（社主）経営が続いています。８代目の治朗社主・会長が、兼務の社長ポストを僕に委ねることになった時、まだ51歳の若さです。世間では「社内で何かあったのではないか」と、うわさになりました。

いったんは固辞し、説得されて社長就任となりました。固辞した主な理由は、社歴こそ41年間に及んでいたものの、営業部門の経験が乏しかったからです。編集畑が長く、「営業音痴（おんち）」を自認していました。ためらった末に、受けるしかないと腹をくくりました。

○**平下**　社の内外で驚きを持って迎えられたということですが、同業他社の反応はどうでしたか。

○**今中**　老舗（しにせ）の新聞社ですし、父親の朗さんも新聞協会の副会長を４期務めるなど業界の重鎮でしたから、憶測が流れました。「いつまでも創業家とか、そういう時代ではない。中国新聞社もターニング・ポイントに差し掛かった」といった声も。

○**平下**　おおむね好意的な受け止め方だったということですか。

○**今中**　好意的と言えるかどうか。読者の皆さんが、どのように受け止めたかは承知していません。

○**平下**　分かりました。

○**石田**　社長就任に際して、治朗会長から条件と言いますか、これは頼むとか、そういうのはあったのですか。

○**今中**　いや、特にはありません。僕が営業の経験不足で、ためらったことは会長もよく分かっていて、「営業面はしっかりサポートするから」と言ってくれました。

○**石田**　当時、今中さんは常務ですよね。先輩の上役なんかもいたのに社長に就任されました。気兼ねとか、気後れは無かったですか。

○**今中**　「無かった」とは言い切れません。

○**石田**　社長就任に際して、家族の反応は。年末に話があったということでしたが、正月休みの間に、奥さんや子どもさんにも相談されましたか。

○**今中**　はい。もちろんです。重責ですから。オーナー会社でもあり、「大丈夫ですか」と妻から念を押されました。子どもたちは、よく分からないままに「もっと仕事が忙しくなるんだね」などと言っていました。

○**石田**　おとそ（屠蘇）がおいしいとか、そういうことではなかったんですね（笑い）。

○**今中**　ええ、全く。平素、社内のことは家であまり話しておりません。妻も、聞きもしない。生活は不規則で、いつも夜遅くに帰宅。いくらか危険を伴う仕事であることは、自宅にコールタールをまき散らされたことで知ったようです。

○**平下**　警察回り、ヤクザの取材をされていた時も、仕事のことは家であまり話されなかったのですか。

○**今中**　第２次抗争事件の時は、まだ独身でした。抗争がほぼ終息した昭和40（1965）年春に結婚。１男・２女を授かりましたが、いつも夜遅くに帰宅。休日にも会社に出たりする姿を見て、忙しい仕事なんだろうとは思っていたようです。どんな仕事なのかは、家を襲われた時に、はっきり知ったと思います。

○**石田**　家に仕事を持ち込まないというのはよくある話だと思うんですが、いろいろと仕事の上で面白くないことも起きるじゃないですか。そういった場合、今中さんは、どうやって気分転換をしたんですか。飲んで帰る人も多い、と聞きますが。

○**今中**　飲むといっても、やけ酒なんかではありません。前線キャップや記者たちに疲れがたまっているなと思ったら「１杯やろうか」と声を掛けるんです。ストレスをためるのは、よくないですからね。

○**石田**　そんなふうにして、時に部下たちと憂さ晴らしもされたんですね。

○**今中**　はい、そんな感じでした。

○**石田**　あまり酒を飲まないと言われていたので、どんなふうにして気持ちを切り替えたのかと。私なんかは、なかなかうまい具合に気持ちの切り替えができないものだから。

○**今中**　酒が飲めないといっても、肝臓を傷めるまでは、それなりにやっていました。疲れがたまったと思ったら、キャップや前線記者たちに「ちょっと行くか」と声を掛けます。ほろ酔い加減で、つい説教調になるものだから、彼らのストレス解消にはならなかったかも。

○**石田**　そうなんですか。

○**今中**　飲むと、互いに本音が出ますしね。

○**石田**　行きつけの店が、何軒かあったんですか。

○**今中**　はい。土橋町周辺には、付けで半年払いの店もありました。独身を通された先輩デスクには、前線時代に大散財をさせた覚えがあります。

○**石田**　ははあ。ボーナスの時は支払いが大変だったでしょうね。

○**今中**　でも、連れ出して１杯やると、いいはいい、悪いは悪いと直言してくれます。貴重な場だと思っていました。

山本会長との役割分担

○**石田**　分かりました。では、次に移ります。ああいった形で社長になられましたが、山本治朗会長と今中さんの間で、どのように役割分担をされたのでしょうか。

○**今中**　役割分担は、最初からはっきりさせました。端的に言うと、社主の山本会長が経営全般の責任者、僕が執行責任者という形です。共に代表権を持ち、僕は業務の執行に専念しました。

治朗さんは45歳で社長に就任しています。父親の朗社主・会長の下で経営・執行の全般を担いました。若いけど、実力は備えていたと思います。新聞協会の副会長のポストにも就き、広島県・市の審議会委員なども務めております。ほかに充て職みたいなものも結構あり、きつい日程でした。

僕の社長就任の際、７階ホールに全社員を集めて訓示をしました。「山本家以外から社長が誕生するのは初めてであり、若い諸君もトップが目指

せるということで、社内の活性化につながることを期待している」と。「未来永劫（えいごう）、山本家の者しかトップに就けないのでは、社業の発展の妨げにもなる」と言い切りました。組織を活性化したいという思いが、にじみ出ていたように思います。

治朗会長が新聞協会や共同通信社の役員とか、地元経済界の役職の一部を引き続いて担いました。オーバーワーク気味で会社を留守にすることも多かったから、役割分担ができるならと思ったことも、社長を引き受けた理由の１つです。

僕は社歴の大半が編集畑です。総務・労務は経験しましたが、営業は福山支社時代の１年間だけ。会長へは「営業面は、しっかりバックアップしてください」と率直に言いました。社長在任は６年間でしたが、担務を区分けして、何とか務めを果たせたと思っています。

やはり僕には、編集への強い思い入れがあります。社長在任中、反核・平和報道ではなくて、暴走族追放キャンペーンで新聞協会賞を受賞しています。労組への対応は、総務・労務の経験があるので、それほど苦労はしなかった。

○**平下**　団交（団体交渉）などは、社長就任以前と比べて、どうでしたか。

○**今中**　「社主家のために」という思いは無かったし、是々非々のスタンスで臨みました。労使関係が正常なら、社主にとってもプラスです。形の上では、かつての朝日新聞と同様に社主・オーナーという形です。ただし朝日は、３代目社主の村山美知子さんが亡くなられて、社主制度を廃止したとのことです。

わが社の場合は社主制が引き継がれ、仙台市に本社を置く河北新報も「一力（いちりき）家」が社主制を敷いています。

○**石田**　社主制度の是非については。

○**今中**　是非については、とやかく言えません。僕自身、それを知っていて就職したわけだから。社主だからと言って、紙面編成や末端の人事に至るまで細かく口出しされると、ぎくしゃくしますよね。わが社の場合、それはほとんど無かった。一番ありがたかったですね。だから、とやかく言われないためにも、実績で示さなければと自覚。協会賞にも、こだわりました。「ヒロシマ50年」企画でも協会賞を受賞し、面目を施しました。

○**石田**　「ヒロシマ50年」というのは、被爆50周年のことですね。

○**今中**　はい、そうです。いつの授賞式の後だったか、朗会長と雑談していて、「新聞界に長く身を置いているけど、わしの新聞社の評価基準は販売部数と協会賞の数じゃ」と言われたのを覚えています。また「書いていることと、やっていることが違っちゃあ、いけんよね」というのが口癖でした。外部では、社主の意向は絶対的と思われがちですが、編集にはあまり口出しされなかった。

時折、会長と付き合いのある経営者が「お手柔らかに…」と頼み事をしたようですが、「ああ、そうなの」と軽くいなされていたことを、秘書部長らから聞きました。会長は、僕や編集幹部らへ話を下ろさなかったということです。「よきに計らえ」だと、編集局長が、いくら社会正義のためになんて言ったって、部下は白けてしまいますよね。

○**石田**　朗会長の時ですね。

○**今中**　はい、そうです。それは息子の治朗さんも、そばで見ていたはずです。外部の方から、こんなふうに言われたことがあります。「社長になって、何かと頼まれ事もあるのでは…」と。「いや、僕はこういう人間だから、直接に言って来る人は、ほとんどいない」と言いました。会長親子へは、時にそんな話や“雑音”が届いていたようですが、僕の所へは、ほとんど下りて来なかった。「この間、会長の所へ、あんな話が持ち込まれたようだけど」と側聞し、「えっ、そんな事があったんですか」と、驚いたことも。

○**石田**　それは、外部の方からですか。

○**今中**　はい。社外のお偉いさんです。

○**石田**　なかなか、自分の胸の内にとどめるのは難しいような話ですよね。

○**今中**　僕が朗会長を敬愛したのは、言動がぶれなかったからです。常日ごろ、「毅然たる態度で」と言っておきながら、「あそこには、営業面で世話になっている」などと言われると、白けてしまいます。広告スポンサーなどがトップに話を持ち込むと、現場は忖度しがちです。広告局の幹部から「会長から話が下りて来ると思うが…」と言われたことがありますが、下りては来なかった。

○**石田**　聞いてもいないのに（笑い）。

○**今中**　朗会長は、自分がそんなことをすれば、現場に直接、話が持ち込まれた時、「その段階でよきに計らうかもしれない」と危惧されたのかも。

編集局長時代、他紙の局長から「社長が時々、しょうがない事を言ってくる。『それで新聞の経営者と言えるのか』と、ケツをまくってやろうかと思うことがある」と聞かされていました。だから、「えっ、お宅はオーナー会社なのに」と驚かれました。忖度は、少なくとも編集・製作の面では、あってはならない事だと思っています。是々非々のスタンスを貫かなければ、読者を裏切ることになります。

○**石田**　何かあった場合、今中さんは率直に治朗さんに話をされていたんですね。

○**今中**　はい。一線が取材したけど記事にならなかったようなケースでも、このことは伝えておいた方がいいと思ったら、報告しておきました。政・財界の集まりなどで、ひょっとして話が出た時、初耳では困るだろうと思ったからです。

○**石田**　ともあれ、尊敬できる上司に巡り会えてよかったですね。

○**今中**　はい。そう思っています。

○**平下**　今中さんが社長になり、山本治朗さんは社主・会長という立場ですが、定期的に意見交換をされていたんですね。

○**今中**　「月曜会」と称する定例の役員会が毎週開かれます。役員や局長が懸案事項などを報告し、意見交換をします。お開きの後に、会長へは、「今日の報告事項のほかに、実はこういうのがあって、ペンディング扱いにしている」と。知り得た情報は、なるべく伝えておくようにしました。

○**石田**　「家（け）のために」と何回かおっしゃったが、家というのは「社主家」のことですよね。

○**今中**　はい。そうです。

○**石田**　あと、今中さんが社長になる前は、社長兼務の治朗会長は、かなり忙しかったという話でしたが、新聞社の社長は分刻みでスケジュールを組まれるものなんですか。首相だと、分単位でスケジュールがびっしり。秘書官が管理をされているようですが。

○**今中**　あんなにきついスケジュールではありません。それに、僕たちは役割分担をしていましたから。会長は渉外部門も担ったので、社外へ出ることが多かったですね。20近い役職があったので。

○**石田**　そんなに、ですか。

○**今中**　はい。メディア関係者ということもあるのでしょう。商工、行政、文化、スポーツなど多方面に及んでいますが、名目だけのものも結構ありました。

○**石田**　それでも年に１～２回、引っ張り出されたら、20近くもあればすごい数ですよね。

○**今中**　しかし、すべての会合に必ず出席するわけではありません。欠席したり、代理出席をするなど臨機応変に対処していました。

これらは社外関係ですが、社内にも広告、販売、印刷、システム開発、文化事業、トラベル、FM放送などの関連会社が20近くあります。会長はこれらの役員にも名を連ねていたので、超多忙でした。

○**石田**　今中さんとしては、そういった社外関係の業務にはあまりかかわらず、本社の業務に集中されたということなんですね。

○**今中**　そう心掛けました。ただし教育関係とはかかわりが多く、母校・広島大の経営協議会委員のほか、広島市立大と広島女学院の理事や運営協議会委員などを務めました。「毎回の出席は無理

かも…」と断った上で引き受けました。

○**石田**　役割分担をされて、仕事はしやすかったんですね。社主制の会社だと、いろいろ難しい面もあるのかなと思いましたが。

○**今中**　社主制を敷いている会社だから難しかった、という思いはありません。

○**石田**　それは良かったですね。朝日新聞の場合、いろいろと言ってこられて、やはり歴代の社長さんは苦労をされたみたいです。

○**今中**　僕の気性にもよりますが、例えば不祥事を起こした会社のトップが会長の所へ来て頼み事をしたとする。会長が「何とかならないか」と、じかに編集へ下ろしたりすれば、黙ってはいません。部下にも示しがつかないから。

○**石田**　理不尽なことを強いられれば、引こうと思っていたんですね。

○**今中**　ポストにしがみ付くと、不本意でも妥協することになりかねませんよね。

○**石田**　それは、社長を引き受けた時から決めておられたんですか。

○**今中**　決めていたというか、新聞人として当たり前のことだと思っています。40年近くも編集にいて、いいはいい、悪いは悪いと報道してきたわけだから。書くことと、やることが違ったら読者を欺くことになります。

○**石田**　でも、なかなかその初歩が守れない人がいるから。

○**今中**　編集局長時代に同業他社で、不本意な引き方をした人がいました。なぜ、最初から筋を通さなかったのかと思いましたね。

「まるごと郷土紙」の推進

○**石田**　分かりました。では次の話に移ります。社長就任後にいろいろ取り組まれたことを伺います。就任直後、「まるごと郷土紙」をコンセプトに、地域版の拡充を図る方針を打ち出されました。どういった狙いだったのか。読者からは、どんな反響がありましたか。

○**今中**　「まるごと郷土紙」は社長就任２年目。

写真15　福山制作センターの試運転式
（平成17年７月13日）
右から２番目が山本治朗会長、３番目が今中氏本人。
中国新聞社所蔵

治朗会長が平成13（2001）年の年頭あいさつで掲げたスローガンです。バブルがはじけた後、新聞経営も困難な局面に入りました。景気は一進一退というより、後退の方が目立ちました。時代の流れに適応できない企業は落後します。新聞界にも、再編の波が押し寄せて来た感じでした。

この頃から、電子メディアの活況と反比例して、活字と新聞離れが目立ち始めました。加えて少子高齢化の進行。かつては、お年寄りが「安定購読者」だったのに、高齢者も新聞離れをするといった現象が現れました。何とか、活路を開かなければなりません。全国紙との差別化を図り、地域紙に徹しよう、というのが「まるごと郷土紙」の概念です。

福山制作センターの完成で印刷能力が格段にアップしたのを梃子（てこ）に、広島県の西部、東部、山口県東部の３圏域ごとに地域版を細分化し、地域ニュースを充実した新聞を作ることにしました。試作品を配って読者の反応を探ったら、おおむね好評でした。実際に紙数も伸びました。「紙面改革の参考にしたい」と、友好紙の幹部が訪ねて来たりしました。

○**平下**　背景の１つとして指摘された、購読者層の変化ですよね。例えば、高齢者が新聞を読まなくなったというのは、客観的なデータとして社内や販売所で共有されるものなのですか。

○**今中**　はい。購読者の増減には本社も販売所も敏感です。減った時には、理由をきちんとただします。購読中止の理由はさまざまです。過疎集落のお年寄り夫婦が、視力が落ちて新聞が読めなくなったとか、同居の子どもたちが都会に出たのでやめることにしたとか。こうした情報は逐一、販売所からも上がってきます。昨今は、スマホの普及が新聞離れにも影響しており、難題は増える一方です。

○**平下**　このような状況下で、紙数を伸ばすのは大変なことですね。

○**今中**　ええ。新聞離れ、定期購読部数の右肩下がりのすう勢の中で、「まるごと郷土紙」の試みは、まずまずだったかなと思っています。

○**石田**　特にどの地域で伸びたとか、そういうのはありましたか。

○**今中**　いえ、特定の地域で増えたということは無かったように思います。全般的に好評でした。購読中止を再考してもらった、という報告もありました。部数減に、いくらか歯止めをかけることができたと思います。

○**平下**　解約数が減ったということですか。

○**今中**　はい。一時的にせよ、解約にブレーキがかかった感じでしたね。

○**石田**　「まるごと郷土紙」の推進のため、本社や支社局の取材体制とかも変えられたんですか。

○**今中**　そのために、本社や支社局の要員を特別に増やしてはいません。前線の記者たちへは、「地域版のグラウンドを広くしたのだから、しっかり書いてくれ」と。一線も、これで労働強化になるとは受け取らず、書けばどんどん載るので、プラス面が多かったと思います。地域の話題を細かく拾い上げれば、「中国新聞を読まないと、地域のことはよく分からん」となりますからね。

全国紙の支局や民放のローカル局は、記者やリポーターの人数は限られています。フォローし切れなくて、中国新聞の「後追い」も結構ありますね。生ニュース以外は一呼吸置いて載せる、放送する。それはそれで、いいのかなと思います。中国新聞を購読していない人も、いるわけだから。

○**石田**　そうですね。どこの社とは言わないけど、後追いでやっていますからね。

○**今中**　友人から、「民放のローカル番組で面白い話題を取り上げていたよ」と言われ、「とんでもない。中国新聞はだいぶん前に載せているよ」というのが、ちょくちょくありました。

○**石田**　記者の側も、スペースの関係でボツになるものが載るようになったので、やりがいが出たんですかね。

○**今中**　それは言えます。かつてはスペースの制約もあって、細かい記事はボツになりがちでした。ボツ原稿が少なくなり、書けば大抵載るようになった。記事の良し悪しは読者の判断に委ねるという側面もあるので、それでいいのかも。気に入らなければ、中国をやめて朝日や読売など全国紙に替えるという選択肢もあるわけだから。

○**石田**　地域面を増やした分、政治・経済面や社会面などが減ることになるんですか。

○**今中**　地域面を増やせば、相対的に全国ニュースは減ります。全国紙の場合、内政面が３ページぐらい続いていることもありますが、中国はそうはいかない。どちらがいいのか。これはもう、読者のニーズや好みに任せるしかありません。

３本社体制の導入

○**石田**　なるほど、分かりました。では、次の項目に行きたいと思います。

同じ平成13（2001）年ですが、土橋町の本社に加えて備後本社と防長本社を立ち上げ、３本社体制に移行しています。こうした体制を導入した経緯と、その成果について伺います。

○**今中**　この３本社体制は、地域読者をはじめ行政、業界などに対して、この地に本社を構えて地域報道に力を入れることを示す狙いがありました。福山支社というより、備後本社とした方が地域の受けはいい。以前に福山商工会議所の松本卓臣・会頭の話をしましたが、備後本社にすれば、やはり備後にも力を入れているという意思表示に

なりますよね。山口もかつては山口支社でしたが、今は防長本社としています。

○**平下**　「印刷体制が整ったタイミングで」ということですが、具体的にどういうことでしょうか。

○**今中**　印刷体制が整ったというのは、福山市の郊外に制作センターを新設。高速輪転機２セットを据えて、受託印刷も可能な体制を構築したことです。

○**平下**　山口版はどちらで刷るんですか。防長本社に印刷機能はあるんですか。

○**今中**　いいえ。防長本社に印刷機能はありません。山口版は広島工場で刷っています。県の規模もさほど大きくないから、中国新聞の配布部数も多くはない。それに山口県の中・西部へは、全国紙が九州の西部本社から新聞を送り込んでいます。

○**石田**　確か毎日とか読売、朝日新聞などが強いんですよね。

○**今中**　そうなんです。山口新聞というローカル紙もありますが、発行部数はそれほど多くない。「中国新聞」と題字に掲げているので、圏域の山口は重視していますが、部数はあまり伸びませんね。しかし徳山以東には力を注ぎ、岩国周辺は購読者が多いので、岩国には総局を置いています。

○**石田**　備後本社、防長本社と名前を変えられ、機能面でどのように違ってくるんですか。

○**今中**　本社体制にすれば、編集や営業部署もきちんと区分けし、要員もいくらか増えます。

○**石田**　では、スタッフも充実させたということなんですね。

○**今中**　はい。そうです。

○**石田**　福山の場合、支社ではなくて本社にしないと、地元の受けが良くないと聞いたことがありますが。

○**今中**　「福山支社」より、「備後本社」の方が格好も付きますよね。昔ふうに言えば、広島は「安芸」と「備後」に二分されます。備後の人たちは、「備後本社」にしたことを歓迎してくれました。

○**石田**　防長本社ですが、これはなぜ山口市ではなく周南に置かれていたんですか。

○**今中**　中国新聞の読者は、ほとんど岩国から徳山辺りまでだったからです。県都の山口市内の配布部数は５千部程度です。

○**石田**　意外と少ないですね。

○**今中**　広島本社からの、距離的な問題もあります。山口県内に輪転機を置くほどの配布部数でもありません。九州から、全国紙が配送されて来ますから。このような状況の下で、中国が攻勢をかけても紙数が大きく伸びる余地はない。ですから、既に読者の多い岩国・徳山中心の布陣にした方が得策です。

○**石田**　山口には有力な地元紙が無いから、どちらかというと、攻めやすいのかなと思いましたが。

○**今中**　どうでしょうか。徳山からもっと西へ下って、果たして紙数が伸びるのか。販売所も増やさなければなりません。配送面でも、西へ行くほど時間と輸送費がかかり、編集の締め切りも早めることになります。

○**石田**　福山は、本社体制にすることによって、倉敷辺りへの購読部数増を狙っていたんですか。

○**今中**　いいえ、それはありません。隣県の山陽新聞は有力な地方紙です。お互い、購読部数増には力を入れていますが、わが社が支社を備後本社に格上げしたのを機に、倉敷へも攻勢をかけるという考えは全く無かったです。

○**石田**　向こうの方に、部数を取られたわけでもなかったんですね。

○**今中**　はい。中国が攻め込めば、反撃に出られるでしょうね。共食いになりかねません。隣県のライバル紙ではありますが、共存共栄路線です。現在、山陽新聞の広島支局は土橋町の中国新聞ビル内にあり、中国の岡山支局は山陽新聞の本社内に置いています。隔世の感があります。

○**石田**　それは、いつ頃からですか。

○**今中**　平成23（2011）年の事だから、もう10

年になりますね。

○**石田**　今中さんの社長時代ですか。

○**今中**　いいえ、その後のことです。

○**石田**　そうなんですか。共に天を戴かずみたいな感じだと思っていましたので。

○**今中**　本社へ立ち寄った時、編集局のフロアに山陽新聞広島支局の表札がありびっくりしました。聞けば、中国の岡山支局も山陽の本社内にあるとのこと。まさに共存共栄。こういう時代なんですね。全国紙とは競っていますが、隣接の地方紙と部数を奪い合うようなことはしません。

○**石田**　そこまで状況が厳しいんですね。

○**今中**　そう受け止めています。

○**石田**　ちなみにこれは、今中さんの後の川本社長の時の話なんですか。

○**今中**　はい。川本一之社長の時です。

○**石田**　そうなんですね。ちょっと、びっくりしました。山陽新聞は、積年のライバルみたいなイメージがあったので。

○**今中**　ライバルだけど、共存共栄路線です。

中国新聞ちゅーピーまつりの開始

○**石田**　では、次の話に移ります。平成15（2003）年から「中国新聞ちゅーピーまつり」を開始されています。読者サービスと言えるのでしょうか。この行事を開始した狙いを聞かせてください。

○**今中**　端的に言いますと、新聞に親しみを持ってもらい、読者離れをいかにして防ぐかにあります。「ちゅーピー」という愛称ですが、これは中国新聞の「ちゅー」と平和の「ピース」をもじっています。愛称を募集したら、1,431通もの応募がありました。その中から選んだマスコット・キャラクターです。これを印象づけたいということで、その年の10月に「ちゅーピーまつり」を土橋町の本社で開きました。

初めてとあって、力みました。販売所はじめ関連会社の人たちも参加し、大小合わせて50ものイベントを展開しました。なんと５千人近くが訪れました。普段は、外部の人を入れない編集局や地階の印刷フロアも公開。マイ新聞作り、ちゅーピーまつり号外の発行、７階フロアでの報道写真展などを催し、家族連れも多くて好評でした。新聞社が身近な存在になったかなと思いました。

高速輪転機を初めて見る人も多く、短時間に数万部が刷り上がるのを見て驚いていました。刷り上がった新聞はベルトコンベアで配送センターに送り込まれ、配布先ごとに自動梱包（こんぽう）されてトラックに積み込まれます。見学後の子どもたちの感想文には、「新聞が最新のニュースを入れて、早朝に配られる理由が分かった」と書かれていました。新聞離れを少しでも食い止めたい、という狙いは功を奏したと受け止めました。

以後、まつりの会場を大野の制作センターに移したり、基町の市民球場跡地の広場などで開いています。コロナ禍の余波で中断していますが、終息すれば再開されるでしょう。「ちゅーピー」はマスコット・キャラクターとして、すっかり定着しました。ちゅーピー・プール、文化教室のちゅーピー・カレッジ、FM放送のちゅーピーFMというふうに。

この後、友好紙の河北新報もウサギをモチーフにし、河北の「かほ」と、「ピョン」と跳ねるウサギを組み合わせて「かほピョン」と呼ぶマスコット・キャラクターを作っています。

○**石田**　なるほど。読者離れというのを強く意識されているんですね。

○**今中**　はい。すごく意識しています。

○**石田**　それは、今中さんが社長になる前からですか、それとも社長になってからですか。

○**今中**　社長になる前からです。今はスマホでもニュースを読むことができて、多くの人がミニ・コンピューターを持ち歩いているような時世です。中学生でもスマホを使いこなし、ニュースもスマホで見ているそうだから、やはり若年層の新聞離れは加速するのではないでしょうか。社会人になれば、スマホのニュースだけでは対処し切れないことを知るのでしょうが。教育に新聞を活

用してもらうNIE（Newspaper in Education、教育に新聞を）の試みは続いていますが、スマホに足を引っ張られているのではないかと心配しています。

○**石田**　やはり、抵抗し切れないという思いなんですか。

○**今中**　そういう感じも、いくらかありますね。

○**石田**　こういった読者離れを防ぐための方策は、どこか同業他社で参考になるような事例はありましたか。

○**今中**　考えることは、大抵どこも同じですね。わが社が手掛けようと思っていたことを、先取りされたこともあります。

○**石田**　では、先ほどの河北新報の話も。

○**今中**　マスコット・キャラクターは中国新聞が先んじています。主義・主張に違いがありますが、新聞は似たり寄ったりの商品です。全国ダネは共通しているものが多く、地方版で特色を打ち出しています。先行する他社を、じっくり見て、「うまくいったら、うちもやってみよう」というのが結構あります。

○**石田**　「まるごと郷土紙」や「ちゅーピーまつり」など、読者離れを防ぐための方策はトップが考えるんですか。それとも下から上がって来るものなんですか。

○**今中**　両方ですね。わが社の場合、治朗会長の独特のセンスで、先行することが多かったように思います。

○**平下**　どういう意味ですか。

○**今中**　例えばFM放送なんかも、新聞社がFMを取り込んだのは、地方紙では中国新聞が早かったと思います。治朗会長が「いずれFMの時代が来る」と予言し、「先手必勝」でいろいろと試みております。

○**石田**　では、まるごと郷土紙とか、ちゅーピーまつりも、治朗会長のアイデアという側面が強いんですか。

○**今中**　新聞協会の要職に就いていたから、情報交換をする中で、アイデアが次々に浮かんだのでしょう。情報をキャッチしたら、すぐに組み立ててみる。早業は、さすがでした。

○**石田**　それを今中さん以下が「実行に移す」という手順になるんですね。

○**今中**　はい。会長が「こんなことを考えているが、どう思うか」と。僕が付け足すことはあまり無かった。「いいと思うけど、実施はワンテンポずらした方がよいのでは」などとは言いました。その間に情勢が変わり、「一呼吸置いて、よかったね」というようなことが何回かありました。

○**石田**　アイデアを形にして、着実に推し進めるのが今中さんの役割だったんですね。

○**今中**　はい。そんな感じです。治朗会長は20代から、すぐそばで父親・朗さんの新聞経営を目の当たりにして来た。協会でも多くの情報を入手しているので、かなわないなと思いました。

○**石田**　今のお話で、２つ目の質問の「役割分担」の話が、すとんと腑（ふ）に落ちました。

○**平下**　今中さんが執行責任者という意味も理解できました。

○**今中**　いくらいいアイデアがあっても、実行に移されなければ何もならない。職場の体制を整えたり、要員の再配置といったことが付随してきます。業務がきつくなる場合も多い。こうした点は、僕が中心になって対処しました。

○**石田**　出されたアイデアを実行に移せなくて、残念だったことはありますか。

○**今中**　時期をずらしたことはあるけど、おおむね実行に移せたので心残りはありません。

ちゅーピーパークの開設

○**石田**　平成16（2004）年11月、廿日市市の大野に「ちゅーピーパーク」が完成しています。チチヤス・ハイパークを取得した経緯、単なる印刷工場ではなくて体験型のレジャー施設として整備した狙いについて聞かせてください。

○**今中**　このチチヤス・ハイパークは、もともと「チチヤス」の商品名で知られるチチヤス乳業が運営していた、小高い丘にある遊園地です。対岸

の宮島・厳島神社が眺望できる人気のスポットです。地下水を利用した天然プールは「ダイヤモンド・プール」と呼ばれ、行楽シーズンや学校の夏休みには、多くの観光客でにぎわってきました。

チチヤス乳業は宮内庁の御用達ということで、知名度は高かったようです。牛乳普及の宣伝も兼ねて、昭和の初期に観光業にも乗り出し「チチヤス・ハイパーク」を開園しました。しかし、バブル経済がはじけてレジャー事業も低迷し、経営が行き詰まってハイパークも手放したようです。

中国新聞は、その頃既にパークの一角を譲り受けて、印刷工場を建てていました。パークの敷地面積は約４万７千平方メートルに及びます。この中に体験型のメディアプラザもつくりました。ドーム形式で、マイ新聞作りや紙すき体験コーナーと、展示会にも活用できる多目的スペースで構成しています。夏季に遊泳プールも運営。地域の振興にもつながると、大野町など地元自治体は歓迎してくれました。

○**平下**　チチヤスが、昭和の初期に観光業にも乗り出していったというのは、そのとおりなんですか。

○**今中**　はい。僕が調べた限りでは。

○**石田**　観光梅園があり、私も小さい頃に連れられて、梅を見に行ったことがあります。乳牛に触れたりとかも。

○**平下**　そうなんですか。既に戦前から、そんなことをやっていたのですね。

○**今中**　牛舎があり、乳搾（しぼ）りなんかも見られるようになっていたということです。

○**石田**　世代の差を感じるね。チチヤスは行ったことないの？

○**平下**　ちゅーピーパークという名前からしか、記憶にないです。

○**石田**　私はチチヤスの頃のプールにも行っているので、チチヤスが倒産した時はびっくりしました。地元の名門企業だったので。

○**今中**　パークへは、山口の方からも客が来ています。米軍岩国基地から、貸し切りバスで軍人や家族が大勢で来ていたのを見たことがあります。

○**石田**　今中さんも家族サービスで行かれたんですね。

○**今中**　はい。子どもが幼かった頃に。

○**石田**　ところで中国新聞社は、チチヤスが倒産する前に土地の一部を譲り受け、印刷工場を先に建てていたんですか。

○**今中**　はい。パークのエリアの一角にね。このとき既に、治朗会長の頭の中には、「ちゅーピーパーク構想」のようなものがあったように思います。

○**石田**　では、チチヤス側から「買ってほしい」という依頼があったんですか。

○**今中**　「手放したい」、「それならうち（中国新聞）で」という流れだったと思います。これは会長マターだったので、詳細は承知していません。

○**石田**　治朗会長が前面に立たれたんですね。

○**今中**　そのとおりです。会長に委ねました。恥ずかしながら、このような交渉事は、編集育ちの僕にはとても無理ですから。

○**石田**　このレジャー施設も治朗会長のコンセプトがあって、それを軸に進められたと。

○**今中**　はい。そのとおりです。

○**石田**　社内の反応は、どんなものでしたか。

○**今中**　役員会でも異論は出ませんでした。定期購読部数が右肩下がり。メディアも多様化する中で、新聞社も新聞発行だけでは立ち行かなくなったという共通認識があります。地方・地域紙の中には「報道機関なのに、何でも有りか」とやゆ（揶揄）された所もあります。関連会社での事業や催事、トラベル、保険、不動産経営、折り込みチラシ業務などは、ほぼ全国共通です。新聞販売所も副業として清掃（エアコンから墓掃除に至るまで）、植木の剪定（せんてい）、特産品の取次販売などを手掛けています。新聞販売一筋で、やっていける時代ではなくなった、と言えるでしょうか。

苦境に立つ新聞業界

○**石田**　今中さんは、こんなふうに新聞が新聞発行以外の面でどんどん多角化していくことについて、どのように考えておられますか。

○**今中**　僕は編集育ちということもあって、こうした流れには違和感を覚えました。だけど、本業の新聞発行・販売だけで立ち行かなくなれば、会社は潰れますよね。それに、やはりいい新聞を作ろうと思ったら、きちんと設備を整え、いい記者を採らなくてはなりません。それなりの投資が必要です。だけど本元の新聞購読部数が減れば、そうは行かなくなる。いろいろと試みており、折り込みチラシや広告・旅行代理店などは、全国紙、地方紙を問わず、大方の社が手掛けています。

○**石田**　人材派遣もされていますよね。

○**今中**　はい、多くの社が人材派遣業務も。不動産経営・運営も目立ちます。大阪・朝日などはすごいですよね。

○**石田**　中国新聞は、ビルなどの不動産を持っているんですか。

○**今中**　自社ビルは土橋の本社ビルのほか、備後、防長本社、呉支社、東広島や岩国総局、それに単独支局などですが、いわゆる賃貸営業的な物件は少ししかありません。

○**石田**　朝日なんかは、すごいですよね。あのおかげで経営が持っているとも言われるから。

○**今中**　そうですね。

○**石田**　そういった危機意識は、現場の記者たちも共有しているんですか。

○**今中**　現場はまだ、ちょっと薄いかもしれませんね。

○**石田**　新聞経営がどんどん多角化していくことに、労働組合などはどう反応するんですか。

○**今中**　度が過ぎると、いかがなものかと労使交渉の場などで追及されます。「今度、会社はあのような事業にも取り組むようだけど、新聞社としてはいかがなものか」と。僕も組合の執行委員をしていた時、会社側を追及した覚えがあります。

社長の立場になり、こんなふうに言いました。「経営が安定していて、びくともしないというのなら別だけど、実際には、主な収入源である販売部数が右肩下がりに減っている。広告もしかり。代わる手立てが要るのは、当たり前のことだ」と。他方、新聞社が何でもやれば、民業圧迫にもなりかねません。そのことも考慮しながら、許容範囲でやらざるを得ない、というのが実情です。

○**石田**　なるほど。バブル崩壊後には、どこの社も一気にそんな方向に行ったという感じなんですか。バブル崩壊前から、経営を多角化していたのではないかと思ったので。

○**今中**　ええ。バブル崩壊の前から、「新聞一本では…」という危惧はあったと思うけど、バブル崩壊が拍車をかけたことは間違いないです。今は、もっと大変だと思いますね。コロナ禍の余波で、広告収益なんかも激減しているようだから。

○**石田**　それは、中国新聞社だけの話なんですか。

○**今中**　いいえ。中国新聞に限らないと思います。多くの社で役員報酬をはじめ、給与・ボーナスのカット、人員削減なども行っていると聞いています。

○**石田**　表にはあまり出ない話だと思いますが。

○**今中**　表に出すような話じゃないけど、どこも同じようですね。

○**石田**　朝日のことは、いろいろ話題になっていますから。ここまで来たかなという感じはしましたけど。

○**平下**　以前に話を伺った時、不景気の時の方が広告収入が増えることもある、とおっしゃっていましたが。

○**今中**　それは、あくまで一時的な現象です。今はもう、景気が落ち込むと広告も減るという状況のようです。

○**石田**　そんなに落ちているんですか。

○**今中**　新型コロナのまん延防止対策として、「３密」の回避が広く呼び掛けられています。「不要・不急の外出は控えるように」とのお達しがありますが、特に経営面への影響は大きいですね。

客足も落ち込みますから。地場の百貨店は、閲読率の高い終面テレビ欄の下５段カラー広告を頻繁に出しておられたが、客足を制限されれば、PR効果も薄れてしまいます。

○**平下**　催事をしても、人が呼べないですからね。

○**今中**　そうなんです。

○**石田**　確かに折り込みチラシなんかも、かなり減っているなと思っていたんですよ。きついんですね。

○**今中**　新聞販売所は打撃を受けます。チラシの配布手数料は販売所の収入にもなりますから。

○**石田**　バブル崩壊の時、チラシが１枚も入っていない日があって、びっくりした覚えがあります。

○**今中**　だけど、折り込みチラシが増えると別の影響も出て来ます。

○**石田**　そうなんですか。

○**今中**　相対的に、新聞本紙への地域広告がチラシに流れるという側面もありますから。

○**石田**　やっぱり、折り込みチラシの方が安いんですか。

○**今中**　チラシの方が、広告単価は安くつきます。それに、チラシだと地域限定のPRができますから。

○**平下**　新聞販売所で区分けできるのですね。

○**今中**　ええ。依頼者の側も好都合なわけです。

○**石田**　そうですね。

○**今中**　新聞紙面だと地域版であっても、チラシのような、ご近所向けのPRは難しいですから。

○**石田**　それにつけても、コロナ禍は早く終息してほしいですね。

○**今中**　終息した頃には、社会のつくりも変わっているんじゃないですかね。

○**石田**　反動で、みんな遊びに行ったりとか、飲みに行くと思うんですよね。いい方に変わればいいんですけど。

○**今中**　そうですね。

○**石田**　結構、今の社会システムは不合理なものが多いので、そういうのが一掃されて、合理的になっていけばいいですがね。

○**今中**　それは、ありますね。この際、不合理なものは改廃した方がよいと思います。

朝日新聞の受託印刷の開始、販売の正常化

○**石田**　では、次の質問に移ります。平成17（2005）年に福山制作センターで、朝日新聞の受託印刷を開始されました。「競争でしのぎを削る、ライバル紙の印刷を引き受けることはあり得ないことだった」と述べておられます。従来の慣習を打破するような業務を開始したことについて伺います。併せて、受託印刷の狙いとされた「販売正常化」とは、どういうものだったかについても。

○**今中**　福山での朝日新聞の受託印刷は、業界でも話題になりました。朝日とは水面下で、その前年から交渉に入っていて、福山制作センターが完成したらやりましょう、という話になっていました。

　朝日が委託印刷を持ち掛けてきたのは、運輸省が高速道路での事故防止対策として、省令改正で、大型トラックのスピード制限を強化したことが理由の１つです。大阪本社で印刷し、トラックで広島の新聞販売店へ送り届けるわけだから、スピード制限が厳しくなると新聞の店着が遅れます。

○**平下**　その分、朝刊の宅配が遅れるということですね。

○**今中**　そうなんです。

○**石田**　運輸省令というのは、運輸省の「運輸」に省令の「令」ですね。

○**今中**　はい。現在は国土交通省ですが、高速道路での重大事故が増えているため、スピード制限を強化したわけです。それまで深夜の輸送トラック便は、時速120キロ以上で飛ばしていたようです。ぶっ飛ばせば、それだけ事故の確率は高くなります。このため、厳しいスピード規制に踏み切りました。そうなると、紙面の締め切り時間も早めざるを得ない。締め切りを早めれば、鮮度の高

いニュースを盛り込めないことになります。

わが社にも、「もし受託印刷を断ったら、朝日は四国への配送分も見越して、広島県内に印刷工場を建てるかもしれない」という読みがありました。それなら新設の輪転機をフル稼働し、刷り賃も入ることだから受託しよう、ということになりました。それに副次的な効果として、販売正常化の問題についても、朝日と話しやすくなることがあります。

会長と一緒に、朝日の大阪本社へも足を運びました。朝日側も、土橋の本社と備後本社を訪れています。じっくり話し合い、無駄な競争はやめようと申し合わせました。

治朗会長は、新聞協会の役員を長く務めたこともあり、朝日の幹部にも知己が多かった。本音で話し合って、共存共栄路線で行こうという共通認識で一致しました。

社内では、「紙面で勝負。地域版をさらに拡充し、『中国新聞を読まないと地域のことはよく分からない』というのを基軸にする」ことを再確認しました。

○**石田**　そうなんですか。

○**今中**　これを機に地方紙の中で、全国紙を受託印刷するところが出始めました。中国新聞は昭和53（1978）年８月から聖教新聞と公明新聞、６年後の昭和59（1984）年春から日経新聞を既に受託印刷しています。主義主張は別。受託印刷はあくまで商業上の取引、という位置付けです。

少子高齢化やインターネットの普及などで、新聞の購読部数は右肩下がりが続いています。余剰の印刷設備を有効活用し、共存共栄を図ろうというのは時宜にかなっていると思います。これが、ひいては販売正常化につながれば、なお結構なことだと考えました。

○**石田**　今も、朝日と中国は友好関係にあるんですね。

○**今中**　そう受け止めています。少なくとも、敵対関係にはありませんね。

○**石田**　その始まりは、この時からなんですか。

○**今中**　これが、友好ムードを醸したことは間違いありません。新聞は中身で勝負。無駄な競争は避けて共存共栄を図ろうと。これは地方紙と全国紙の在り方にも、一石を投じたと思います。

○**石田**　無駄な競争はすまいということで、何か紳士協定のようなものを結ばれたんですか。

○**今中**　受託印刷ですから協定は締結しました。紳士協定とは違います。販売面では、あくまでライバル関係にあります。前線の新聞販売所は拡張のために、しのぎを削っています。しかし法外な景品まで付けて、購読を勧誘するような時代ではない、という共通認識は必要です。

ちょうどこの頃、新聞業界では販売正常化が最重要の課題になっていました。「販売正常化が最重要の課題」ということ自体、おかしな話です。逆に言えば、それほど普段書いていることと、やっていることが違うような新聞の売り方が、まかり通っていたということになりますね。

新聞拡張に関して「６・８ルール」というのがあります。これは、協会が決めた正規の規約です。拡張の手段として６カ月分の購読料の８％、２千円ちょっとは景品として認めるというものです。逆に言えば、この規約ができるまでは「やりたい放題」の感もあったということです。「鍋・釜（なべ・かま）戦術」と酷評されました。定期購読の勧誘に際して、鍋や釜を景品として持参するという意味です。これが次第にエスカレート。トースターや電気がま、電気掃除機などが、拡張の景品に使われた時期がありました。

「３年縛り」という拘束もありました。購読者に「最低３年間は定期購読する」と確約させた上で、高額な電器製品などを提供するといった事案なども明るみに出ました。強引な手法にたまりかねた人から、消費生活センターに苦情が寄せられました。景品表示法違反と認定され、改善の措置命令が出ました。

えげつない拡張競争が続いた頃、週刊誌のコラム欄で「新聞はインテリが作って、ヤクザが売る」などと皮肉られました。

○**石田**　押し売りまがいのことをしたんですよね。

○**今中**　はい、そうです。拡張団とも呼ばれた、ヤクザまがいの男たちが、いきなり民家の玄関に入り込んで来て、「どこの新聞を取っとるんや。それはやめて、これを取れ」と、わめくのです。僕にも、似たような経験があります。休日に、ヤクザまがいの２人連れがやって来て、応対した家人に「中国新聞を読んどるんか。ろくな新聞じゃないけえ、こっちの新聞を取れ」と。２階の居室から降りて、「私は中国新聞に勤めているから、そうはいかんのよ」と追い返しましたが、妻はおびえていましたね。110番通報の例もあったようです。

週刊誌に「社説や論説で格調高く論陣を張り、不正・不祥事を追及する新聞社が、こんな売り方をするのは、いかがなものか」と書かれました。僕自身、新聞社に長く身を置いた人間として、忸怩（じくじ）たる思いです。新聞協会には新聞公正取引協議会という組織があり、販売正常化に努めています。日ごろ正論を振りかざしている新聞社が、こういった協議会を立ち上げること自体、極めて不名誉なことだと思いました。

新聞は再販制度により、どこでも同じ価格で売らなければならない、と決められています。消費税の面でも特段の配慮を受けています。特殊指定で、定価の割引も禁止されております。

朝刊だと、月決め定価は１カ月3,400円。１部売りは150円です。配達経費のほとんどかからない廿日市市大野の印刷工場の隣家でも、遠く離れた県北の過疎集落の一軒家でも、同じ値段です。新聞が公共財として認められ、特殊指定の商品になっているからです。

消費税は、通常は10％ですが、新聞は食料品と同様に８％です。公共財として認められ、それなりの恩典を受けるからには、それにふさわしい新聞販売に努めなければならないと思っています。

○**石田**　今中さんのメモには、販売正常化を前提とした朝日新聞の受託印刷というふうに書かれています。これは販売の正常化と、朝日新聞の受託印刷が話としてはつながっていない、別の話のように受け止めましたが。

○**今中**　そうですか。つまり要望に応えて受託印刷をし、緩やかな友好関係を構築することで販売正常化の糸口にしましょうと。いびつな「鍋・釜戦術」とかでなくて、紙面の中身で競い合おうと確約した上での受託印刷と、受け止めてください。

○**平下**　受託印刷することにより、いびつな購読者獲得合戦にも歯止めをかけようということですね。

○**今中**　受託印刷に至るまでに、いろんな話をしていますが、核心は、まさにそういうことです。

○**平下**　これより前の時期は結構、派手にやり合っていたということですか。

○**今中**　ええ。それは否めません。販売の正常化に関しては、中央の協会レベルで話し合われてはいますが、なかなか末端には浸透しません。受託印刷をきっかけに歩み寄り、販売の正常化に努めることを確認したのは、一歩前進だったと思っています。

○**平下**　販売促進のための手法は、そもそも個別の販売所の裁量でやっていたんですか。

○**今中**　もちろん現場の裁量もありますが、拡材経費というのは、おおむね発行本社が持つわけですから。

○**石田**　これを使って部数を増やせ、ということに。

○**今中**　拡張の手法は多様です。「拡材（拡張材料）をぶち込んで、部数を増やせ」などと発行本社が檄を飛ばしたりすれば、なかなか正常化はできませんよね。

○**平下**　５年ぐらい前に、今の家に引っ越した時、中国新聞を取ろうと思って販売店に申し込みました。景品に何かくれるのかなと思ったら、カープの選手のクリアファイル１つでした。ああ、こんなものかと思いましたが（笑い）。

○**今中**　購読者の側にも、新規購読をしたら（景品として）何かもらえるんじゃないかと思っている節はあります。

○**平下**　その気は、ちょっとありますよね。

○**今中**　「よそ（他紙）の勧誘では、こんな物が配られている」と販売所長から本社へ報告が上がってくると、ほっておけと突き放すわけにもいかない面があります。しかし拡材で対抗しようとすれば、次第にエスカレートします。悩ましいところです。

○**石田**　ところで、朝日の受託印刷を開始するまでに２年もかかったということでした。やはり交渉が難しかったからなのか、それとも中国新聞社内で反対や異論があったためなのですか。

○**今中**　受託印刷をしなければ、福山工場が立ち行かなくなるということでもないから、ゆったりした交渉になりました。この間に新聞業界では、販売正常化のムードが高まっていました。このような状況の下で、トップ同士がざっくばらんに話し合ったから、スムーズに結論が導き出されたと思っています。

○**石田**　ただ、これを販売所長たちが初めて知った時には、かなりショックだと思いますけど。

○**今中**　それは、いくらかあったかもしれません。でも結果的には賛同してくれました。

○**石田**　朝日との交渉では、相手は主にどなたが応対されたんですか。

○**今中**　先ほども申したように、トップ交渉ですから大阪本社の代表や印刷担当が多かったです。

○**石田**　トップ交渉だったんですね。

○**今中**　はい。

○**石田**　下から積み上げるのではなくて。

○**今中**　ええ、そうではなかったです。こういうのは、トップが決断するかどうかですから。山本会長と僕は大阪へも足を運びましたが、事前に製作局長や販売局長らの考えも聞いております。先方はこう主張するだろうけど、その場合はどう対応するか、などを詰めた上で交渉に臨みました。

○**石田**　なるほど。なかなか下では決断できない局面もあるでしょうからね。

○**今中**　前線では火花を散らしているのに、上層部が「きれい事」で解決しようとしたら反発しますよね。「わしらに泥をかぶらせて、自分たちはいい顔をしている」と。率直に申しますと、販売正常化は難題です。

○**石田**　朝日との交渉過程で、社内には異論もあったでしょうから、説得するのに苦労されたのではないですか。

○**今中**　会長と僕は足並みをそろえていたし、トップダウンで有無を言わせず、みたいな面もありました。

○**石田**　有無を言わせず、ですか（笑い）。

○**今中**　わが社と、新聞界の将来も見据えた対応だと力説しましてね。

○**石田**　そうですか。

○**今中**　やるべきことを先送りしない。販売店にむちゃを言っているわけでもない。むしろ販売を正常化するための方策でもあるから、ということで押し切りました。

○**石田**　なるほど。口先だけの正論ではなくて、きちんと実行したところにポイントがあったんですね。

○**今中**　もう、こうした事を実行に移して行かざるを得ない時期に立ち至っていたと思います。

○**石田**　お話を聞いていると、端々に厳しさを感じます。それぞれの出来事の裏側には、いろんな過程があったんですね。

○**今中**　今、コロナ禍の影響はあらゆる分野に及んでいます。新聞業界もしかり。購読者の増減は読者には分かりかねると思いますが、広告の落ち込みぶりは、日々の紙面から一目瞭然です。全ページ広告も、ほとんどモノクロ（白黒）です。それも寝具だとか、強壮剤、通販ものなどが目立ち、不動産、自動車、電器製品、酒類など、かつての大口スポンサーは影をひそめています。全ページのカラー広告は、めったにお目にかかりません。

購読部数が減り、広告出稿も減る。「３密回避」

のためにフラワー・フェスティバルや都道府県対抗男子駅伝、音楽会など主催・後援事業も軒並み中止になりました。経営面のダメージは大きく、全国紙・地方紙ともに給与やボーナス・カットのほか、中・高年層の退職勧奨を始めた社もあると聞いています。

余談になりますが、定期購読中止の理由を探ると、若年層には「新聞代が高過ぎる。スマホでもニュースは読めるから」という声もあるとか。新聞の月決め購読料は3,400円。スマホには多様な用途があり、月々１万円以上も支払っているとかですが、これで新聞代が高過ぎると言われると戸惑いますね。

○**石田**　若い人は、そういう感覚ですよね。

○**今中**　新聞を読まないから、定期購読するはずもない。景品を添えて、やっと定期購読の契約にこぎ着けても、１年でやめる例は少なからずあると聞きます。新聞協会はNIE（教育に新聞を）活動に力を入れていますが、なかなか思惑どおりにはいかないようです。

○**石田**　分かりました。今日はどうもありがとうございました。

（終了）

第８回
社長退任～退任後の仕事

報道における社長の役割

○**石田**　第８回のインタビューを始めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○**今中**　はい。こちらこそ。

○**石田**　では最初の質問ですが、前回は主に経営的な事柄について伺いました。その一方で、報道面で社長としてはどういった役割を果たされたのでしょうか。山本治朗会長との役割分担、あるいは今中さんが特に力を入れたことがあれば教えてください。

○**今中**　会長と社長の役割分担は、会長が経営全般の責任者、社長の僕が執行責任者という位置付けでした。これは先だっても申したとおりです。営業面はおおむね会長が主導し、報道面と日々の紙面製作は僕が仕切りました。紙面改革や地域版の再編、専門記者制度の運用などについて素案をまとめ、会長の合意を得て、タイムリーに実行に移しました。期待どおりの成果が得られなかったこともありましたが、経験は次の機会に生かせました。

変化の激しい時代で、そのスピードも速かった。少子・高齢化の進行と老若を問わない新聞離れ。これに対処するための紙面編成。加えて、多メディア時代へ向けての社員の意識改革など課題は多かったけれど、社員も販売所員たちも頑張ってくれました。特に、500カ所に上る販売所が呼応してくれたことは大きかったと思います。

○**石田**　今中さんが編集局長だった時、山本治朗氏は社長だったじゃないですか。その時の話だと、社長は紙面製作にあまり口を出さず、現場に任せていたということでしたね。今中さんが社長になった時、局長とか部長との関係はどうだったんですか。

○**今中**　僕と編集局長の関係ですね。

○**石田**　はい、そうです。

○**今中**　新聞社は紙面を製作して購読してもらうという業態だから、やはり編集の役割は大きい。どこの社も編集が前面に出ている感じです。僕は編集育ちで、それなりのキャリアもあったから、おおむね任せてもらったと受け止めています。

○**石田**　では、紙面などは最終的に自身がチェックされたんですか。

○**今中**　日々の紙面製作では、細かく口出ししません。ただし、紙面改革をする時は素案を出させ、僕の見解を添えて会長へ上げる。会長も、いろいろと注文を付けます。「これは違うんじゃないの」といった指摘もあり、練り直して成案をまとめ、実行に移すという手順です。

○**石田**　紙面製作を取り仕切ったというのは、毎日の紙面についてどうこうするのではなくて。

○**今中**　はい。日々の紙面製作は編集局長らに委ねます。僕も編集局長の経験があり、あまり上から「こうしろ」「ああしろ」と細かく指図するのはよくないと思うんです。ただ編集上がりの習性というか、「これはどうなの？」と問いただす頻度は高かったように思います。

○**石田**　分かりました。いちいち日々の紙面ではなくて、紙面改革をする際に社長の立場で指示されたということなんですね。

○**今中**　そうです。新聞社によっては、会長や社長が主筆などを兼務している所もあります。僕は、これは、いかがなものかと思いますね。時の政権や首長らにおもねることなく、是々非々のスタンスで臆せずに書く。総理や知事・市長へも物申す。毅然たる態度ですよね。余談ですが、官邸筋がメディアの論調をチェックしていると聞いたことがあります。

○**石田**　官邸筋ですか。

○**今中**　これは、定かではありません。検閲などとは違うでしょうが、内閣官房あたりで各メディアの論調はチェックされているような気がします。だけど個々の論調に関して、とやかく言われる筋合いはない。言われると、忖度する新聞経営者はいるかもしれないけど。

広島財界にも、「中国新聞の論調は気に入らん」とおっしゃる方がいました。その訳を聞くと「朝日なんかと同様に、政府や行政の揚げ足取りをすることが多いから」と。しかし僕は、そういった指摘があるぐらいが、ちょうどいいのかなと思います。

何も新聞が、時の政権や首長らに忖度して、おもねる必要は無い。是々非々のスタンスを貫くことこそ、大切だと思っています。是非は読者の判断に委ねればいいわけです。論調が気に入らなければ、購読紙を他紙に切り替えられるかもしれません。それは仕方が無いことです。

○**石田**　分かりました。編集局長時代、社長に外部から“雑音”が入るという話があったと思います。自身が社長になられてからは、どうでしたか。

○**今中**　雑音はありましたが、あまり気にしなかった。自分で言うのもおかしいけど、「彼（今中）に言っても聞かないだろうよ」といった感じでしたから。従って僕でなくて、直接に会長の所へ。後日、「治朗会長へは話しておいたんですがね」と告げられ、えっと驚いたことが何回かあります。会長が、僕に話を下ろさなかったわけです。

理不尽なことを聞き入れたりすれば、「会長に頼んで、抑えてもらった」と“手柄話”にもなりかねません。こんな話は、すぐに広がります。１度、理不尽なことを聞き入れたら、「またよろしく」「うちもよろしく」となりがちです。最初が肝心ですね。まれに、僕に直接話が持ち込まれたこともありましたが、言下に断りました。新聞業界にも「鶴の一声」はあるようですが、中国新聞社では通用しなかった。

○**平下**　専門記者制度を導入されたとのことでしたが、これはどういうもので、なぜ導入されたのか背景について聞かせください。

○**今中**　新聞社の場合、外勤の新米記者は大抵、前線の記者クラブに配置されます。段階を経て

キャップ、デスク、部長、部長同等職の専門記者などになります。選ばれた少数の者が局次長、局長へと昇格します。

しかし、管理職にするより、ライターとして生かした方がよい人材は結構います。処遇したつもりで敏腕記者をキャップやデスクに上げると、相対的に前線の取材力は低下します。だから、敏腕記者はデスクから部長へといったコースとは切り離して、「書き手」として生かすというのが専門記者制度の仕組みです。

前線の記者クラブに詰めて、ようやく知事・市長や企業のトップらとも対等に話せるようになった頃にデスクへ引き上げれば、相対的に前線の取材力は低下します。専門記者として行政、経済、学術・教育、医学・医療、災害担当などで専門性を持たせれば、解説や評論も書きます。専門知識が豊富だと、取材先でも一目置かれますよね。これはもう中国新聞に限らず、大方の社が早くから導入しています。わが社が先駆けた、というのではありません。

○**平下**　では前線の記者は、専門記者になる人と、そうではない人と、いつから区分けされるんですか。

○**今中**　前線の仕組みで言うと県政・市政クラブ、商工会議所クラブ、県警・司法クラブ、合同庁舎クラブなど。それと警察関係では広島中央、広島東、西、南署などの記者クラブにも担当記者が配置されています。

豪雨災害などがあった時、県警や所轄の警察担当が取材に当たりますが、専門記者だと「あの地域には３年前に防災ダムが完成している。２次災害の恐れは低いが、今後の降水量次第では…」などと解説記事がすぐに書けますよね。それぞれが、専門記者にふさわしい記事や解説を書いています。

○**平下**　この仕組みを導入したのは、今中さんの編集局長時代ですか。

○**今中**　いいえ、ずっと以前からです。全国紙やNHKなどは、もっと早くから導入しています。事件・事故や震災などがあると、専門記者が的確な解説や論評をしていますよね。

○**石田**　今中さんの局長時代、専門記者は何名ぐらいいたんですか。

○**今中**　私が編集にいた頃は、まだそんなに多くはなかったです。

○**石田**　10人以内、それとも５人以内ですか。

○**今中**　外勤部門で編集委員の肩書を持つ記者は５人前後でしたかね。行政、教育、医療・福祉などの分野です。災害や気象担当などは、まだ置いていませんでした。

○**石田**　原爆や平和関連では。

○**今中**　中国新聞の場合、広島市政担当が反核・平和報道も担って来ました。例えば、被爆何周年といった節目に企画を立てる時、報道部を中心に取材班を編成し、その中に市政担当も加わる。おおむね、そういう形態ですね。

○**石田**　別に専門記者とうたわなくても、対応できる記者は多かったということなんですね。

○**今中**　そうですね。でも、昨今は大体、固定しているようです。ヒロシマ平和メディアセンターと報道部の特定の記者たちが中心です。やはり専門性を持たせれば、きちんと企画も立てて精力的に報道しますから。

行政と社長の関係

○**石田**　分かりました。では次に移りたいと思います。前回の話では、山本治朗会長が主に対外的な役職を引き受けられたと伺いました。とはいえ、社長として行政の藤田知事や秋葉広島市長、あるいは財界関連の中国経済連合会、広島商工会議所、広島経済同友会などとのお付き合いも必要だったと思われます。こうした政・官・財界の要人との関係は、社長就任によって変わりましたか。常務時代とあまり変わらなかったのでしょうか。

○**今中**　特に変わってはおりません。政・財界の要人と会う機会は増えましたが、もともと報道部門が長くて編集局長も務めたので、政・官・財界

の要人との付き合いは、それなりにありましたから。

編集局幹部の頃は、藤田雄山知事と秋葉忠利市長の時代です。ご両人とは知事、市長就任のだいぶん前から知り合っていたので、電話でも意思疎通ができる間柄でした。藤田さんは参院議員時代から。秋葉さんは「アキバ・プロジェクト」以来ずっとです。気安さのせいか、時折、ご両人から電話がありました。「今日の地方版の記事はいかがなものか」とクレームめいた話も。行政に対する批判記事だと癇（かん）に障るんでしょうね。「一方的に批判している」とか、「私がコメントしたことの半面しか書いてない」とか。こちらは是々非々のスタンスなので、誤報でなければわびることもありません。しかし「言い分」に一理あれば編集幹部に伝え、フォローするよう指示しました。しこりを残さないよう心掛けました。

知事や市長と片意地を張ってやり合うのはよくないし、まさに是々非々です。いい施策ならきちんと評価し、駄目なら駄目で、どこに問題点があるかを的確に指摘する。行政トップの公約が、現場できちんと果たされているのか検証するのは、メディアの重要な役割ですから。

○**平下**　知事や市長は毎朝、新聞を読まれ、その日のうちに何か、これはどうなのかとか言って来るのですか。

○**今中**　人によりけりですね。竹下知事は、ある意味ですごかった。新聞を丹念に読み、県政絡みの記事はご自身で細かくチェックされる。知事室の片隅に大きなファイルケースがあり、自治、政治・経済、商工・労働、農政・林務などに分類された各紙の切り抜きが、びっしり詰め込んでありました。本社へ上がって資料室で探すより、知事室へ行く方が手っ取り早い、という感じでした。

○**石田**　ご存じかどうか。私は竹下知事のインタビューに加わって、回顧録をまとめる仕事をさせてもらいました。その際にも、周りからそういう話を聞きましたし、後に広大文書館へ資料をご寄贈いただきましたが、やはり新聞記事の切り抜きはすごかった。赤ペンで傍線やメモがしっかり入っているんですね。

○**今中**　時代が変わり、今はマイクロフィルムに収録できます。現在、県政絡みの記事は、庁内でどんなふうに保存されているのか気になっています。

○**石田**　あれは、ほんと竹下さん流のやり方だと思うんですよね。まねができない気がします。

○**今中**　実務型の人だと評されたのは、こんな一面からも伺えます。県行政の末端に至るまで、精通しておられましたからね。部・課長らが知事室へ説明に出向いても、「それぐらいのことは聞かんでも分かってる、といった感じで怖かった」と述懐する幹部がいました。後継の藤田雄山さんとは対照的です。

僕も県政キャップを務めましたが、担当の部・課長の説明が要領を得なかった時、竹下さんに直接聞いたことが何回かあります。何を聞いても「立て板に水」といった感じでした。

○**石田**　そうなんですか。担当課長は立場がないですよね。

○**今中**　そうだったと思います。これが、良いことかどうか。部下は「どうせ知事さんは何もかもご存じで、ご自身の思いどおりに進められるんだろう」と思っていたかもしれませんね。組織としては、下からきちんと案が上がり、その可否についてトップが最終判断を下すというのが好ましい形態だと僕は思っています。上が最初から裁断を下せば、部下は指示待ちになりがちですから。

○**石田**　そこら辺は難しいですよね。

○**今中**　そう思います。

○**石田**　話が脇にそれましたが、藤田知事や秋葉市長からの電話は結構あったんですか。

○**今中**　さほど多くはなかったです。年に数回でしたかね。出先の県政・市政クラブには、キャップがいますから。キャップに伝えても無反応だったり、らちが明かないと思ったら、報道部長や局長の所へということになりがちです。秘書さんが電話で「来庁の機会があったら知事室の方へも」

と。「何事ですか」と聞き返すと、「特段のことではありません」と言っていたのに、立ち寄ると「この間、あんなふうに書かれたけれど、実際はこうなんだ」という話に。こんなことが、何回かありました。

○**石田**　クラブのキャップと知事、市長との関係があまり良くなかったんですかね。話したけど通じないというのは。

○**今中**　いがみ合ったり、足を引っ張るのはよくないけど、べったり、というのもよくないですね。付かず離れずのスタンスが大事です。

○**石田**　やはり、緊張感はあった方がいいということですか。

○**今中**　はい。そう思っています。県政のキャップ時代、知事から「部屋に来てもらえればありがたい。自分から出向くわけにもいかんので」ということもありました。「仰せの趣旨は分かりました。次回にこの問題を取り上げる時、その点は十分に配慮します」といった形で、大抵のことは決着しました。

もちろん、誤報でなければ訂正は致しません。しかし、「せっかく係や担当者が張り切っているのに、出鼻をくじいて、士気をそぐような書き方はやめてほしい」といった指摘は、謙虚に受け止めました。

○**石田**　なるほど。やはり社長としてはそういう苦労もあるんですね。

○**今中**　いえ、これは編集局長時代の話です。社長になってからは、こういった話は持ち込まれなかったです。

○**石田**　そうなんですか。大きな問題の時にしかないということですね。

○**今中**　はい。社長は社業の全般にかかわる立場ですから、こんな話が持ち込まれることは、まずありません。「編集局長に言ったが全然、聞き入れてもらえない」とか、そういうのは時たまありました。「これからも是々非々で」と言うのが、僕の決まり文句です。

財界との付き合い

○**石田**　そうなんですね。分かりました。では、財界との付き合いはどうだったんでしょうか。

○**今中**　どちらかといえば、会長が前面に出ていました。２人そろって出向くことも無かろうと思っていたので。会長は社外の役職が多過ぎて、「これは今中さんに任せる。先方にも伝えて名義変更をしたから」と、事後承諾で引き受けた役職も幾つかあります。適当に振り分けて、役割分担をしたということです。

○**石田**　今中さんとしては、それほど社外の役職は増えなかったということですか。

○**今中**　そうですね。うまく役割分担ができたと思っています。財界には、会長に言った方が話が通りやすいと思っていた節があります。会長もそこは心得ていて、難しそうな案件は自分で処理していました。不慣れな僕に、いちいち下ろしていたら時間のロスになる、と思ったからかもしれません。

○**石田**　なるほど。そういう点では、何かと気苦労もあったんですね。

○**今中**　これを気苦労というのか。当たり前のことですよね。社長になって、会長と親しい方からの頼まれ事も増えました。不祥事絡みで、忖度してほしいというケースもありましたが、これは、きっぱり断りました。頼まれて記事をゆがめたり、ボツにしたりすれば、読者を欺くことになります。無防備で批判にさらされる人は少なくないですから。厳正・公平は僕の信条です。

○**平下**　財界人との付き合いで、教えられることも多かったという話でしたが、どなたか特に印象に残っている方はおられますか。

○**今中**　濃淡はありますが、広島銀行の頭取・会長で広島商工会議所の会頭も務めた宇田誠さんと、中国電力の社長・会長を歴任し中経連（中国経済連合会）の会長を務めた福田督さん。ご両人とも既に鬼籍に入られましたが、人柄が素晴らしく、教えられる事が多かったです。

○**平下**　どういうところがですか。

○**今中**　宇田さんは、仕事は部下に任せて責任は自分が取るという、僕の理想とするタイプでした。任せたら、口出しをしない。そうすれば部下も、それなりの成果を上げようと頑張りますよね。いちいち細かく指示すれば、指示された事はきちんとやるけど、それ以外は手を抜く。そういった面は多分にあると思うんですね。居酒屋での、忌憚（きたん）の無いマスコミ批判は刺激になりました。

福田さんは堂々たる体躯で豪快でした。経理課長などの経験があり、ち密な面もうかがえました。事が起きたら因果関係をはっきりさせるために、図式にして根っこからたどる。お知恵拝借で部屋を訪ねると、Ａ４ペーパーに図式で説き起こしてくれて、なるほどと思ったことが再三でした。すごいと思ったのは、部長やトップになれたら何をする、中経連の会長ポストに就いたら何をと、将来を見据え、その任に就いたら着実に実行に移されたという点です。

○**石田**　そうなんですか。やはり印象に残りますよね。

○**今中**　傑物だと聞き及んでいたから、僕の方から積極的にアプローチしたんです。会長を引かれてからも相談役室に電話をかけ「今日は時間が取れますか」と。「午後３時以降なら、どうぞ」ということで部屋を訪ね、何かと教示を賜りました。退庁後、居酒屋に場所を移して語り合った日々が、懐かしく思い起こされます。

○**石田**　社長退任後のお付き合いとなると、人間的な結びつきということですね。

○**今中**　そうなんです。

○**石田**　福田さんは退任後も、いろんな方と交流し世話もされていたんですね。

○**今中**　世話好きで、目配りをされる方でした。将来、広島や中国地方を背負って立つ人材だと見込んだら、自分から近寄って語りかけ、後押しをしたり。折節にそんな姿を目にしました。

一緒にカープの新球場建設をサポートしたこともあり、連れ立って何回もカープ戦を観戦しました。福田さんが球場に来ていることを知った松田元（はじめ）オーナーや、オーナー代行の松田一宏さんがスイートルームに福田さんを訪ね、あいさつをしていました。「頑張っているね」と福田さんがねぎらうと、一宏さんは深々と頭を下げていました。

○**石田**　中国電力の立場を超えて、広島財界や中国地方の発展のために、いろいろと動いておられたんですね。

○**今中**　はい。そのとおりです。

○**石田**　こういった方が何人かおられると、地域は活性化しますよね。

○**今中**　そう思います。

広島大学経営協議会とのかかわり

○**石田**　分かりました。では３番目に移りたいと思います。

平成16（2004）年４月から19（2007）年５月まで広島大学経営協議会の委員を務めておられます。選任の経緯や印象に残った出来事があれば教えください。

○**今中**　協議会は元文部事務次官の井内慶次郎さんはじめ、そうそうたるメンバーでした。教育や財界の大御所が名を連ねていました。僕は昭和34（1959）年の文学部卒業生ですが、不勉強だったので「任にあらず」と断りました。しかし、「地元の新聞社の社長でもあるから、是非とも」ということで、結局は引き受けました。

広大にペスタロッチー教育賞という名の顕彰制度がありますね。大学院教育学研究科が創設したとのことですが、一時期中断していたのを、教育学部の小笠原道雄先生らが中心になって復活しました。学長が選考委員長を務め、選考委員には小笠原先生のほか私も加わりました。中国新聞社からも、副賞のブロンズ像を贈ることになりました。こんな経緯もあって経営協議会の委員に名を連ねました。

メンバーは井内さんのほか、元立命館大学総長で大学基準協会の会長も務めた大南正瑛さん、後

写真16　第１回ペスタロッチー教育賞受賞風景（平成４年）受賞者の宮城まり子氏（ねむの木学園創立者）へ中国新聞社からも記念の盾を贈呈。

に県の教育委員長も務めた小笠原道雄先生、中国電力社長や中経連の会長などを歴任した高須司登さん、ニューヨーク州立大学前総長のブルース・ジョンストンさんたちです。引き受けたからには、と会議にはきちんと出席しました。会合では広大の近況報告をはじめ、国・公立大学が抱えている問題や課題、中期計画などについて議論しました。高等教育問題の奥の深さを認識し、勉強になりました。

席次が井内さんの隣だったので、何かと教えていただきました。僕は「教育」の門外漢です。的外れな受け答えをすると、井内さんが「今中さんの意見を補足すると」と助け船を出してくれました。上京した折、都内に構えておられた教育コンサルタント事務所へ伺ったこともあり、忘れ得ぬお方です。

○**石田**　先ほどのペスタロッチー賞の話は経営協議会の委員になる前の話ですか。

○**今中**　はい、そうです。

○**石田**　これはどういう経緯から話が来たんですか。

○**今中**　小笠原先生はずっと、この賞を復活させたいと考えておられたようです。選考委員会が必要になります。これにマスコミ関係者も加えた方がいいと思われたのでしょうか。僕が卒業生だったので好都合だったのかも。

そんな経過で選考委員会が設けられ、多方面に推薦依頼をして候補者を絞り込み、毎年１人が選ばれていますね。初回の、ねむの木学園創立者の宮城まり子さんはじめ、映画監督の山田洋次さん、女優・司会者の黒柳徹子さん、日本ユネスコ協会大使のアグネス・チャンさんなど著名な方が選ばれています。

○**石田**　そうなんですか。やはり広大卒ということで、声をかけられることが多かったんですね。

○**今中**　学生時代はバイトに追われて欠席も多く、卒業後も、多忙を理由に不義理をしておりました。校友会の制度などについても認識不足でした。恥ずかしながら最近になって、校友会が施設整備や、コロナ禍で困窮する学生支援のために寄付金を募っていることを知り、遅まきながら寄付をさせてもらいました。

○**平下**　文学部だと、OB会の「尚志会」というのがあります。それとはかかわりが無かったんですか。

○**今中**　卒業後しばらくは、会報が届いていました。しかし、ただの一度も会合に出席しておらず、会費の請求書も届かなくなったので縁切れになった感じです。恩義のある母校なのに、忸怩（じくじ）たる思いです。

○**平下**　会員なのですかね。

○**今中**　どうでしょうか。会員名簿に名前が載っているかどうかも承知していません。名前が載っていないとすれば、不徳の致すところです。

○**石田**　話は戻りますが、井内さんはすごい方だった、と皆さん口をそろえておっしゃいます。今中さんにも、このように、すぐに助け船を出してくださったんですね。

○**今中**　余談になりますが、経営協議会の休憩時間に、井内さんの姿が見えなくなることがありました。会議の再開間際に席に戻られ、冒頭に「私からひとこと」とおっしゃるんです。事務局の電話で、文部省に電話をかけておられたのだと思います。

実力者なんですね。「今しがた、文部省の担当

課長に聞いてみたんだが」と言われ、その概略を説明されるわけです。的確な情報というほかなく、OBの実力を目の当たりにしました。井内さんを、協議会のメンバーに加えた訳がよく分かりました。

○**石田**　議事要録には残らない話ですね。

○**今中**　そうですか。会議での発言も的確でした。面と向かって学長へ、「そのやり方は、まずいんじゃないの」とズバリ言われ、お目付け役のような存在にも映りました。

○**石田**　逆に言うと、いま広大には、そういった文科省とのパイプが細くなっているのかなと思うんですよ。

○**今中**　現在、文科省に広大出身者や県人がどのぐらいおられるかは承知していませんが、パイプ役になってくれるような人材が待たれますね。昔は灘尾（弘吉）さんなど県出身の重鎮がいました。文科省のキャリア官僚が３代続いて広島県の教育長に就いた時期もありましたが、この方たちも既に引かれていて、パイプは細くなっているように思います。

後任社長選任の経緯

○**石田**　では次の質問に移ります。平成18（2006）年に今中さんは社長を退任。川本一之さんが後任に選ばれました。その経緯を教えてください。

○**今中**　中国新聞の社長定年は70歳です。社長任期はおおむね６年。僕は常務定年の64歳で社長に就任し、６年間務めて70歳で引きました。

後任の川本一之氏は、入社年次で言えば僕の８期後輩です。本社報道部、ニューヨーク支局長、東京支社編集部長、取締役総務局長、専務取締役・備後代表などを歴任しています。備後代表の時、景気が低迷する中で、営業面でそれなりの実績を上げました。会長のお眼鏡（めがね）にかない、社長に登用されました。

僕と川本氏の間には、専務を務めた有田博司氏など優秀な人材はいましたが、有田氏は僕の３期後輩なので、僕の社長定年時には67歳になるため、専務職で引きました。人事というのは運・不運や、巡り合わせみたいな面が多分にありますね。僕の社長就任だって、運と巡り合わせだったように思います。

○**石田**　川本さんの経歴を見ると、今中さんとかなり似通っていますね。ニューヨーク支局や備後本社、東京支社などへも赴任しておられます。

○**今中**　いずれ会社を背負って立つ人材の一人だとは思っていました。

○**石田**　やはりこういう経歴だったら、社内でもそんなふうに見られるんですね。

○**今中**　社員の見る目はおおよそ一緒です。経歴と年齢から推し量り、「次は彼かな…」と、何となく想像はつきます。社長任期はおおむね６年。70歳定年だから、次期社長候補は絞られます。やはり実力プラス運、巡り合わせということになりますかね。

○**石田**　なるほど。社長の交代に際しては、どういった引き継ぎをされるんですか。

○**今中**　もともと新聞社は、社長の交代で論調や経営方針がガラッと変わるような性質の企業ではありません。中国新聞は社主・会長が不動のポストなので、新社長も会長と意思統一して、地域読者の期待に応える新聞を製作するということに尽きます。

○**石田**　今中さんの目から見て、実務型というのはどういうタイプなのでしょうか。私は、今中さんもかなり実務型だと思いますが。

○**今中**　いいえ。僕はもともと文系で数字にも弱い。総務・労務担当がよく務まったなと思っています。

入社以後、ほぼ編集一筋。編集局次長から福山支社長になり、ここで初めて営業（販売・広告・事業）を経験しました。とはいえ福山勤務は１年足らずですから、営業を習熟したことにはなりません。社長になった時、これが僕のウィークポイントであることは自覚しました。会長はそれを承知の上で、サポートしてくれました。知ったか振

りをして繕わずに会長の裁断を仰ぎ、実行面の責任者として力を尽くしたつもりです。

○**石田**　なるほど。だから実務というのは編集畑以外の面で。川本さんは、営業にも精通していたということになるんですか。

○**今中**　彼は、営業本部長の経験もあります。

○**石田**　なるほど。先ほども川本さんは備後代表の時に営業面で業績を上げたと言われました。具体的には、どんなことをされたんですか。

○**今中**　以前にも申しましたが、治朗会長が僕を社長に登用する際、「未来永劫（えいごう）、山本家の者でなければ社長になれないというのでは、社員の士気にも影響する」と社員に告げました。有能な社員は「自分にもチャンスがある…」と受け止めますよね。川本君も、そのことは意識したのでしょう。備後代表として頑張り、営業面で実績を上げました。編集紙面とは異なり、営業成績は数字に表れますから、アピール度は高い。社長になりたいと願っても、実績を上げなくては叶いません。

○**平下**　次の社長を誰にするか。会長から相談がありましたか。

○**今中**　僕が引く時期は決まっているから、後任についての相談はありました。複数の名前が挙がり、その中に川本君も入っていました。僕より８期後輩だから、かなり若返ります。

○**平下**　分かりました。

○**石田**　社長を引いた時の感想はいかがですか。やれやれという感じですか。もう少し、という思いは無かったですか。

○**今中**　いいえ。70歳に達していたから、やっと解放されるという感じでした。

○**石田**　社長を辞めたら、奥さんは喜ばれましたか。オフレコですが（笑い）。

○**今中**　いいえ、そんなでもなかったですね。朝早く出掛けて、帰宅は大体夜の９時以降。恥ずかしながら、大みそかも会社へ顔を出していました。「亭主元気で留守がいい」という流行語もありましたよね。

○**石田**　社長時代も、ですか。

○**今中**　ええ。大みそかには営業の実績報告があったから。その年次の、広告と販売実績の最終報告です。慣例でした。大みそかに、こんな儀式めいた事はしなくてもよかったのではないかと、今にして思います。

○**石田**　年度末の３月末でなくて、12月末なんですか。

○**今中**　はい、12月31日です。夕方から出て行くので、社長時代も年越しそばを家族と一緒に食べていません。正月休みは３日まで。若い頃は、年間で７～８日くらいしか休んでおりません。これには家族も慣れっこで、子どもたちは「父親は家に、いない者」と思っていたようです。昨今の「働き方改革」は、夢のような話です。

社長退任後の仕事

○**石田**　分かりました。では次に進みます。社長退任後、いろいろと名誉職的なものもされたと思います。その中で特に印象深いものがあったら教えてください。

○**今中**　頼まれて、いろいろ引き受けてしまった感じです。広島市立大と広島女学院の理事、広島平和記念資料館の整備検討委員会委員、ヒロシマ平和創造基金評議員、裁判官指名諮問委員会地域委員、放射線影響研究所・諮問委員、熊平奨学文化財団理事・選考委員、広島赤十字・原爆病院倫理委員会委員、広島日仏協会理事などを務めました。

　この中の幾つかは今もかかわっています。広島平和記念資料館（原爆資料館）の展示整備検討委員長を８年間務めました。被爆者が高齢化して証言者も減っていく中で、この資料館こそが「ヒロシマの永遠の語り部」と位置付けて議論を尽くしました。中国新聞社の対岸にある施設なので、折節に立ち寄っています。外国人も結構訪れており、「ヒロシマの世界化」にいくらか貢献できたかなと思っています。

○**石田**　熊平奨学金は広島大の留学生も恩恵にあ

ずかっているようですが。

○**今中**　熊平奨学会の選考委員は編集局次長時代に引き受けたから、もう30年以上になります。受給者は広大生を中心に延べ２千人に及び、給付額は総額14億円に上ります。オリエンテーションで会う留学生たちは、「いつの日か恩返しをしたい」と語っています。母国に帰って、政府機関の要職に就いている者もいると聞いています。

月額５万円の給付額（１年間継続）だから、学生にとっては、ありがたいですよね。「５万円あればアルバイトをしなくても何とかやっていける」と話す学生もいます。広島市内のホテルでの支給・激励会に顔を出していますが、「ご恩は決して忘れません。しっかり勉強して帰り、友好・親善の架け橋になりたい」と話しています。

各大学の留学生係が、生活状況や親からの仕送り、バイト収入、他所から奨学金を受給していないかなどをチェックし、学長や担任教諭の推薦書を添えて応募します。50人枠に200人前後の応募ですから、競争率は４～５倍です。やはり月額５万円の支給額は魅力的なのでしよう。

○**石田**　県内で学ぶ外国人留学生を対象にした、歴史の古い奨学金ですからね。

○**今中**　恩恵を受けた留学生は、「クマヒラ」の名前は決して忘れないだろうと思います。コロナ禍の中、アルバイトができなくなった学生も多いとか。この奨学金は、勉学の大きな支えになっていると思います。留学生たちの生活は質素です。閉店間際にスーパーへ行って、翌日に持ち越せない食品をもらっているという者も。３食ラーメンと話す学生もいました。

○**石田**　多くの役職に就いておられますが、これは新聞社の社長を務めていたからですか。それとも個人的な関係で。

○**今中**　中国新聞社にいたから、という面は多分にあると思います。退職後も、あれこれ役職を引き受けていることは知られていました。「年に３～４回程度の会合だから、是非とも」と持ち込まれ、「それなら」ということに。日課のようなものではないので、「お役に立てるなら…」と引き受けたケースがほとんどです。

ただ、もう80代の半ばですから「老害」にならぬよう心掛けています。役職も順次返上し、広島市立大の理事も今春、引きました。今も務めているのは、ヒロシマ平和創造基金の評議員と放影研の諮問委員です。

○**石田**　先ほどおっしゃっていた熊平奨学文化財団の役職は。

○**今中**　ああ。熊平奨学文化財団の理事・選考委員は今も務めており、合わせて３つになりますね。

○**石田**　これだけ役職があると、社長退任後「のんびり」とはいかなかったでしょうね。それぞれ年に３～４回の会合があれば。

○**今中**　年相応にボケ症状が出てきた感じですが、同期の仲間から「おまえはまだ、しゃきっとしている方よ」と慰められています。ボケ防止のためには、なにがしか世間とかかわっていた方がいいのかなと思ったりして。

○**平下**　平和記念資料館を「ヒロシマの永遠の語り部」と位置付けられました。このコンセプトは、検討会議の中で今中さんが提唱されたのですか。

○**今中**　僕が検討委員長として提唱した、というのではありません。ヒロシマの永遠の語り部にしたいという思いは折節に伝えていましたけど。８年余りの任期中に館長は３人交代しました。理念や指針がぶれないよう心掛けました。

新聞の報道、経営で大切なこと

○**石田**　では、最後の質問に移ります。今中さんのジャーナリストとしての生き方や考え方を伺ってきました。終わりに、新聞社の社長を務めて、新聞経営と報道を行う上で何が大切だと感じたかを聞かせてください。

○**今中**　かつて、報道機関と言えば新聞社を指し、読者の側も「新聞に書いてあるから本当だろう」と、おおむね信用してくれていたように思い

写真17　講演風景（編集局長時代）
退職後に特別顧問になってからも、県立教育センターや公・私立高校、公民館などで講演。メディアの自省も込めて語らせていただいた。

ます。けれども価値観が多様化し、メディアもまた多様化。ニュースがインターネットでも読めるようになった今、「新聞はあんなふうに書いているけど、少し違うのではないか」と疑ってかかる読者は増えています。一方で「週刊誌にまた先を越されている」「週刊誌を読んで、やっと真相が分かった」などの声も聞きます。そんな時、「週刊誌は書き飛ばせるから」などと言い訳をしがちですが、新聞購読者には、それは通用しないと思っています。

地方紙と全国紙の立ち位置は少し違いますが、地方紙が読者の信頼を得るためには、平和で健全な地域の暮らしを脅かす動きに対して、毅然と立ち向かう心構えと姿勢が大切です。襟（えり）を正し、人権感覚を磨き、倫理の確立に努めることが何より求められると思っています。

僕は在職中、「新聞は　ひるまず　おごらず　かたよらず」を座右の銘にしました。これはもう30年以上も前の、昭和63（1988）年度の新聞週間・代表標語です。１万件近い応募作品の中から選ばれました。この時、編集局次長のポストに就いていました。ハッと胸を打たれました。

応募者は北海道の、地域の教育委員を長く務めた方です。新聞協会の事務局で住所を確かめ、ご当人に電話をかけました。「いかなる権力にもたじろがない勇気と公正さを保ち、自由と責任の下に真実を貫いてこそ、初めて読者の信頼を得ることができるのではないでしょうか。『ひるまず』には勇気を、『おごらず』には弱者へのいたわりを、『かたよらず』には公正さを、との思いを込めた」とのことでした。新聞への熱いエールです。

コロナ禍は終息の見通しが立たず、新聞業界を取り巻く環境も激変しています。広告と部数の減少は経営にダメージを与えています。逆風が強まる中、組織も意識も変革を迫られています。けれどもコロナ禍などを言い訳にせず、「ひるまず　おごらず　かたよらず」のスタンスを貫けば、信頼されるメディアとして、生き残れると確信しています。何せ、わが社は原爆の廃墟から再興した新聞社です。後輩たちの奮闘・努力と、地域読者の皆さんの叱咤（しった）・激励を切に願っています。

○**石田**　今お話を聞いてびっくりしたのですが、代表標語の応募者に直接電話をかけられたんですね。

○**今中**　はい。標語は核心を突いていて、感動したものですから。記者は、ペンの力を過信しがちです。県警本部の記者クラブに詰めていた頃の話です。広島支局に赴任して間もない全国紙の新人記者が、机の上に足を投げ出して受話器を顎（あご）の下に挟み、「正直に話してよ。うそだったらタダでは済まさんから」とか、「（記者を）怒らせたら、何を書かれるか分からんよ」とか。「ペンの力を振りかざしている」と言うほかありません。暴力団の取材ではビビったくせに、と憤りを覚えました。真の勇気は弱者に優しく、権力や暴力には毅然として立ち向かうスタンスです。標語の作者に「中国新聞に一文を寄せてほしい」とお願いしましたが、「自分の思いは、この標語に尽きている」とのことでした。新聞がこれを座標軸にすれば、読者の信頼は揺るがないと確信しています。

○**石田**　ずっとインタビューをしてきて、今中さんが繰り返しおっしゃったことが、この標語に凝

縮していますよね。

○**今中**　前線記者時代、「暴力団が暴れ回るのはマスコミにも責任がある」と言われたことは無かった。けれども、この標語に照らせば「ひるまず」は報道の鉄則です。「おごらず」は「ペンの暴力」への戒めです。「かたよらず」は、書かれる側の弁明もきちんと載せろ、ということだと受け止めました。

会長や社長を介して「お手柔らかに」と頼み込んできたら手心を加え、そんなパイプも無い弱い立場の人は厳しく追及する。これは偏った報道です。後輩たちが、この標語を新聞製作の「規範」と受け止めてくれるよう願っています。記者研修や寄稿文の中で、この標語を何回か引用させてもらいました。

○**平下**　もう１つお尋ねしたいのですが、今、メディアの多様化が大きな問題になっています。新聞と、ほかのメディアとの「すみ分け」はどのようになると思われますか。

○**今中**　新聞を読み、テレビ・ラジオ・ネットニュースを視聴していただければ、きちんとすみ分けされていると思ってもらえるのではないでしょうか。一覧性、速報性、解説性などで、それぞれに強みを発揮しています。新聞各社もデジタル部門を拡充し、ネットでも記事を読める仕組みを構築しています。

活字の新聞が無くなるとは思いません。ネットニュースの素材の多くは新聞記事です。繰り返しになりますが、新聞の断然の強みは一覧性です。１面から終面まで、ニュースバリューに応じて記事がちりばめてあります。政治、経済、国際、内政、地域のニュースがきちんと仕分けされています。これらの長所は、ネットは足元にも及びません。新聞が生き残れると確信する所以（ゆえん）です。

○**平下**　同じ活字メディアというと、雑誌や週刊誌もありますね。

○**今中**　雑誌や週刊誌は、ホットなニュースをくまなく盛り込めるメディアとは言い難いですね。１週間、１カ月のタイムラグもあります。飛びつきそうな話題を特集していますが、真偽の疑わしい、誇張した表現も目に付きます。それが「売り」かもしれませんけど。

新聞は、そうはいかない。全国紙、地方紙、地域紙で作りも、論調にも違いはありますが、おおむね厳正・公平、是々非々のスタンスは貫いていると思っています。でなければ、読者は離反しますから。いくらネットが普及しても、活字メディアの代表である新聞が消えることはないと僕は信じています。

他方、ぼやぼやしていたら、ネットに取って代わられるかもという緊張感・危機感が必要だということです。この代表標語を座標軸にして、マスコミの王道を歩んでほしいと願うばかりです。

○**石田**　では、これで終わりにしたいと思います。長い間、ありがとうございました。

○**今中**　こちらこそ、本当にありがとうございました。

（終了）

あ　と　が　き

広島大学文書館オーラル・ヒストリー叢書第２集として、広島大学文学部の卒業生である今中亘氏のオーラル・ヒストリーを刊行させていただきます。本シリーズは広島大学文書館（75年史編纂室）が行ったインタビューの記録を体系的に残してゆくために創設したものです。

さて、今中氏は文学部を卒業後、中国新聞社に入社され、主に報道畑で新聞記者としてのキャリアを積まれた方です。周知のように中国新聞社は被爆地広島の地元紙として原爆や平和問題に力を入れて報道しています。そのようななか、今中氏を中心とする取材グループは広島の暴力団抗争事件の追跡報道を行い、その成果（『ある勇気の記録 凶器の下の取材ノート』）が菊池寛賞を受賞しました。私も戦後史を研究する立場から、今中氏のお名前や業績について仄聞する機会も多く、ご縁があればインタビューをしたり、関連する資料を拝見したいと思っていました。

そうしたところ、令和２（2020）年７月と10月に中国新聞社の関係者より今中氏がお手許で保存されている資料の寄贈について、広島大学文書館への打診がありました。これに対して、①今中氏は本学の著名な卒業生であるため、文書館の資料受け入れの条件を満たしている、②受け入れに向け事前に調査したいとお返事したのですが、行き違いがあり、すでに資料が廃棄されていたことが判明しました。しかし、今中氏のご経験は余人をもって代えがたいものであるため、この機にぜひインタビューをしたいとお伝えしたところ、ご快諾いただきました。

こうして始まったインタビューでは、暴力団抗争の取材経験だけにとどまらず、広島の政財界の状況、スリーマイル島原発事故の取材経験、報道記者としての心構え、あるいは地方新聞社の経営の実態など、メディア史や広島の戦後史にとって貴重なご証言を数多くいただきました。

ただ、残念ながらプライバシー保護等の観点から、現時点では公開できない情報も多く、こうした部分については、本報告書に収録しませんでした。しかし、将来の歴史研究に役立てるため今中氏と契約を結び、インタビューの元データは文書館で保存し、秘密保持期間が満了した後に公開することになっています。真摯な姿勢でインタビューに向き合い、話しにくいことも含めて率直にご証言をいただいた今中様にお礼を申し上げたいと思います。

なお、末筆ながら一緒にインタビューをした広島経済大学の平下様、録音の文字起こしを担当されたふみ工房様、原稿の編集に協力してくださったスタッフの坂田様他にこの場を借りてお礼を申し上げます。

令和５年２月

石田　雅春

本研究はJSPS科研費 JP19H04422の助成を受けたものです。

広島大学文書館オーラル・ヒストリー叢書 第２集
『今中亘オーラル・ヒストリー』

編　集　石田雅春・平下義記
発行日　令和5(2023)年２月28日
発　行　広島大学文書館・75年史編纂室
〒739-8524　広島県東広島市鏡山1-1-1
Tel 082-424-6050　Fax 082-424-6049
印　刷　株式会社 ユニバーサルポスト
〒733-0833　広島市西区商工センター7丁目5-52
Tel 082-277-5588(代)

(禁無断転載)

広島大学